【抔飲】 掌にてすくひのむ。禮記に「汙尊而抔飲、蕢桴而土鼓」

【投】

㊀トウ、ヅ。徒侯切。尤。

㊁大透切。宥。

㊂すつ（棄）㊃いる（納）㊄おくる（贈）㊅よる（託）㊆ゆく（適）㊇おほふ（掩）㊈ほらふ（振）㊉一とどまる（逗に同じ、止）㊊ふたたびかもす（再釀）㊋讀に通ず。

【投石】 一いしをなぐ。史記に「方投石超距」二いしになげつく。漢書に「以槊詐投石」

【投合】 相あふ。よりあふ。

【投身】 身を水中になげ入る。

【投金】 金をなぐ。吳越春秋に「乃投金水中而去」

【投命】 いのちをなげだす。（授命）。晉書に「誓念投命以報所受」

【投書】 文書をなげこむ。魏志に「太祖時有投書誹謗者、太祖疾之」

【投竿】 さををなぐ。嵇康「放櫂投竿、優游卒歲」

【投刺】 一名札をさし出す。轉じて、面謁を求むることにいふ。梁書に「未嘗投刺邦宰、曳裾府等」二名札をなげすつ。轉じて、面會を止むる義。又、世の關係を絶つ義。梁武帝「投刺解職、以遵歸路」

【投袂】 たもとをふるふ。奮起する形容。（奮袂）。左傳に「楚子聞之投袂而起、履及於窒皇」

【投函】 郵便函に信書を入る。

【投宿】 とまる。（止宿）。張籍「行客欲投宿、主人猶未歸」

【投票】 選擧又は事の採決などにて、多數の人人が、我選擧せんとする人の氏名又は意見を記して、一定の所に提出すること。いれふだ。

【投寄】 おくりやる。おくる。よす。元稹「律詩以相投寄」

【投壺】 古昔、宴飲の際、才藝を講論する禮にして、矢を執り壺中に投ず。禮記に「投壺之禮、主人奉矢、司射奉中、使人執壺、主人請曰、某有枉矢哨壺、請以樂賓」

【投筆】 ふでをなげすつ。魏徵「中原還逐鹿、投筆事戎軒」

【投棄】 なげすつ。沈佺期「予投棄南裔、承恩北歸」

【投稿】 新聞雜誌などに原稿を送りやる。（寄稿）。

【投綸】 つりいとを下す。列子に「投綸沈鈎、手無輕重」

【投翰】 筆をなげおく。劉植「投翰長歎息、綺麗不可忘」

【投轄】 客を抑留するの切なるをいふ。漢書、陳遵傳に「遵嗜酒、每大飲、賓客滿堂、轄關門取客車轄投井中、雖有急、終不得去」

【投擲】 なげうつ。（拭擲、拋擲）。韓愈「投擲傾脯漿」

【投服】 なやみを與ふ。書經に「投艱于朕身」

【投錨】 いかりを下しふなどまります。

【投羅】 あみの中に入る。曹植「不見羅網閒雀、見鷂自投羅」

【投櫟】 つぶてをなぐ。蘇軾「須防投櫟童子、投櫟犯清冷」

【投瓜得瓊】 少しの物を贈りて、厚き返禮を得たるをいふ。詩經に「投我以木瓜、報之以瓊瑤」

【投杼之疑】 謹慎の人も讒にあふことたびたびなれば、他の疑を招くに至る喩。史記、甘茂傳に「昔曾參之處費、魯人有與曾參同姓名者、殺人、人告其母曰、曾參殺人、其母織自若也、頃之、一人又告之曰、魯參殺人、其母尙織自若也、頃又一人告之曰、曾參殺人、其母投杼下機、踰墻而走、夫以曾參之賢與其母信之也、三人疑之、其母懼焉、今臣之賢、不若曾參、王之信臣、又不如曾參之母信曾參也、疑臣者非特三人」

【投鼠忌器】 鼠に投げんとして、傍に在る器を損ぜんを恐るるをいふ。近習の奸を除かんとして君を傷はんを恐るるに喩ふ。漢書、賈誼傳に「里諺曰、欲投鼠而忌器、此善論也、鼠近於器、尙憚不投、恐傷其器、況於貴臣之近主乎」

【投鞭斷流】 川を渡る兵多くして、爲に流をせき止むるをいふ。晉書、符堅載記に「石越曰、晉國有長江之險、朝無晉貳之釁、未宜動師、堅曰、以吾之衆旅投鞭於江、足斷其流」

【抖】

トウ、ッ。當口切。有。

あぐ。

【抖擻】 一はらひさる。王炎「抖擻胸中三斗塵、强欲哦吟無好語」二頭陀。行脚。王維「抖擻辭貧里」

【抗】

カウ。口浪切。漾。

一ふせぐ（扞）二あがる（擧）三ふるふ（振）四いたる（抵）五あたる（敵）。

【抗吻】 議論することにいふ。何遜「竝抗吻以除煩」

【抗言】 はりあひいふ。北史に「抗言酬答守節不撓」

【抗告】 〔法〕裁判所の判決を不當として、更に上訴すること。

【抗直】 屈せずして正し。北史、柳慶傳に「慶天性抗直、無所迴避」

【抗首】 くびをあぐ。漢書に「登堂抗首而請」

【抗節】 操をまもりて屈せず。隋書に「弘守泉州、賊知其飢餓、欲降之、弘抗節彌厲」

【抗策】 むちをあぐ。馬をやる。洛神賦に「攬騑轡以抗策」

【抗論】 はりあひてあげつらふ。晉書、孫盛傳に「與抗論者惟盛而已」

【抗弊】 つかれやぶる。史記に「百姓抗弊而巧法」

【抗敵】 はりあふ。近異錄に「則六臂齊擧、奮擊莫能抗敵」

【抗憤】 はりあひいきどほる。潘岳「樊抗憤以厄酒、咀雙肩以激揚」

【抗邁】 すぐれてあがる。晉書に「湛兄子濟、才氣抗邁」

【抗禦】 はりあひふせぐ。晉書に「招集義勇抗禦仇讎」

【抗聲】 こゑをはりあぐ。柳宗元「奇謀高議、左右抗聲」

【抗議】 反對の意見をいひ張る。後漢書に「大臣方忠直任公正、色在上、樂何之徒、抗議在下」

【折】

㊀セツ、セチ。之列切。屑。

㊁テイ、タイ。杜奚切。齊。

㊂くじく（挫）㊃たつ（斷）㊄さだむ（定）㊅わかつ（折中）㊆まぐ（曲）㊇かがむ（屈）㊈とどむ（止）㊉やぶる（毀）㊊草木枯れそこなふ㊋土地を封り上げたる祭場㊌木を方形に連れて牀の如く作りたる葬具、壙に横たへ亙して上に席を加ふるもの㊍のびやかなり（安舒）。

圖解 一なり（機會）二なり（厨）。

【折右】 みぎの肱をなる。轉じて、志を得ざることにいふ。崔駰「豐其折右、而鼎覆其餗」

【折半】 半分づつにわかつ。太眞外傳に「折其半授使者」

【折北】 やぶれてにぐ。史記に「折北不救、遂走宛葉之閒」

【折肱】 經驗を重ぬること。三たび肱を折りて遂に良醫となれる故事より出づ。左傳に「齊高彊曰、三折肱知爲良醫」

【折角】 一頭巾のつのをなる。漢書に「郭泰嘗遇雨、巾一角墊、時人乃故折巾一角、以爲林宗巾」二傲慢をくじく。漢書に「五鹿嶽嶽、朱雲折其角」

【折枝】 えだをなる。一說に、あんまするをいふと。孟子に「爲長者折枝」

【折券】 券は金錢貸借の證文なり、券を折るは債權を放棄する意。史記、高祖紀に「兩家折券棄責」

【折柳】 一樂曲の名。李白「誰家玉笛暗飛聲、散入春風滿洛城、此夜曲中聞折柳、何人不起故園情」二旅立つ人を見送るにいふ。三輔黃圖に「灞橋在長安東、跨水作橋、漢人送客、至此橋、折柳贈別」

【折衷】 衷は中なり、事を折斷してその中を取る。史記に「孔子布衣、傳十

餘世、學者示レ之、自二天子王侯一、中國言二六藝一者、折二衷於夫子一、可レ謂二至聖一矣」

【折挫】セツザ くじく。(摧挫、抑挫)。後漢書に「外則折二挫羌胡一」

【折骨】セツコツ 骨をなりて身體を勞す。荀子に「折レ骨絶レ筋」

【折辱】セツジョク くじけ屈す。くじきはづかしむ。史記、項羽紀に「折二辱秦吏卒一」

【折桂】セツケイ 科第に登るをいふ。溫庭筠「猶喜故人先折レ桂、自憐羈客尙飄蓬」

【折訟】セツショウ うったへを判決す。北史、楊椿傳に「爲二中部法曹一、折訟公正」

【折戟】セツゲキ 沙鐵牛鎗」 をれたるほこ。杜牧「折戟沈レ

【折節】セツセツ 己の守るところの意見を屈して人に從ふ。戰國策に「以二秦之强一、折レ節而下二興國一、臣恐二其害一於東周一」

【折腰】セツヨウ こしをかがむ。人に下るにいふ。晉書に「吾不レ能レ爲二五斗米一折レ腰」

【折損】セツソン くじき損ず。徐璣「橫斜直似安排得、古怪多因二折損一來」

【折辭】セツジ 人のことばをくじく。大戴禮に「不レ唱二流言一、不レ折レ辭」

【折衝】セツショウ 敵をくじく。晏子春秋に「不レ出二樽俎之間一、而折二衝千里之外一」

【折銳】セツエイ 銳をくじく。劉向「折レ銳摧レ矜、凝氾濫兮」

【折橫】セツオウ 木を方形につらねて牀の如くに作りたる葬具。儀禮に「折橫覆レ之」

【折膠】セツカウ 膠堅くなり、折れば折らるる時期。卽ち、秋の末頃。晉書に「候二滿月一而窺レ兵、乘二折膠一而縱レ鏑」

【折盤】セツバン ひらひらと舞ふ貌。南都賦に「怨二西京之折盤一」注に「折盤、舞貌」

【折閱】セツエツ 折は損、閱は賣なり、損なして賣る。荀子に「良農不レ爲二水旱一不レ耕、良賈不レ爲二折閱一不レ市」

【折頓】セツヨウ おとがひをさく。戰國策に「刳レ腹折レ頤」

【折還】セツクワン おそれめぐる。禮記に「周還中レ矩」

【折簡】セツカン 短き手紙。全紙を二つ切りにして認めたるもの。簡は竹の札なり、古は竹の札を用ゐたり、故にいふ。晉書、宣帝紀に「王淩面縛迎帝曰、淩若有レ罪、公當二折簡召一レ淩、何苦自來耶」

【折檻】セツカン 一強く諫むるをいふ。漢書、朱雲傳に「願賜二尙方斬馬劍一、斷二佞臣一人一、上問誰、對曰張禹、上怒、御史將レ雲下、雲攀二殿檻一、檻折、呼曰、得レ從二龍逢比干一遊乎地下一足矣」二我國にて、强く叱責するにいふ。

【折折爾】セツセツジ やすらかにのびのびしたる貌。禮記に「吉事欲二其折折爾一」

【折脚鐺】セツキャクタウ 脚をなりたるかなへ。

【折足覆餗】セツソクフクシ 鼎の足を折ると きは、その實なくつがへす。小人用ゐらるれば、國家覆敗するに喩ふ。易經に「鼎折レ足覆二公餗一」

【折槁振レ落】セツカウシンラク 枯木をくだき、落葉をはらふ。事の甚だ容易なるに喩ふ。淮南子に「劉項興二義兵一、隨而定、若二折レ槁振レ落」

【折】セツ 蘇軾「折脚鐺邊煨淡粥」

五畫

【抐】ヘイ、ヒャウ。補永切。柄。

柄、又は揉に作る。もつ、とる(秉に通ず)。

【抿】ビ。掌氏切。紙。ろキ。遣爾切。紙。はサイ、セ。仄蟹切。蟹。

はろひらく(開)はうつ(擊)。

【抨】ハウ、ヒャウ。披耕切。庚。

ろヘイ、ビャウ。蒲兵切。庚。

はひく(彈)二しむ、せしむ(俾、使に同じ)三したがふ(隨)ろしむ、せしむ。

【抨劾】ハウガイ 罪をしらべあぐ。劉克莊「其抨劾也、霜威之凌厲、其吹噓也、春意之發生」

【拵】ヘイ。ヒャウ。補永切。柄。

はホ、フ。普胡切。庚。ろ博孤切。庚。

はひ一ひれりもつ(捫持)二しく、ちる三うつろのぶ(舒)。

【披】ヒ。敷羈切。支。ろヒ、ビ。平義切。寘。はプ。普弭切。紙。はハ、ヘ。普駕切。禡。はひ一ひらく(開)二わかつ、わかる(分)三さく(析裂)四きる(被)五なびく(靡)ろ一びつきなは二

ちる、ちらす(散)はなびく(披靡)はひらく(開)。

【披抉】ヒケツ ひらきあばく。蘇軾「披二抉泥沙一、敗二細碎一」

【披肝】ヒカン かんの臟を開く。心をうちあく。魏志に「感二知己一、而披二肝膽一、狥二聲名一、而立レ節」

【披披】ヒヒ ながくなびく貌。梁元帝「衣披披而屢舞」

【披拂】ヒフツ ひらきはらふ。博異志に「歇曰、鮮衣披拂露盈盈」

【披卷】ヒクワン 書物をひらき見る。唐太宗「披レ卷覽二前蹤一、撫レ躬尋二既往一」

【披展】ヒテン ひらきのぶ。魏徵「早挹二芳猷一、未レ諧二披展一」

【披廂】ヒマ 繪畫の技法の名。石の皴を畫くに、麻の葉を披きたる如きをいふ。

【披荒】ヒクワウ あれ地をひらく。太平廣記に「披荒立レ舍、便聞二絃管之聲一」

【披猖】ヒシャウ 縱に裂くろ貌。北史に「萬一披猖、求レ退無レ地」

【披款】ヒクワン まことをうちあく。晉書に「主辱臣憂、故重繭披レ款」

【披閱】ヒエツ ひらきけみす。唐書に「祕閣書籍、披閱皆遍」

【披瀝】ヒレキ 腹藏なくうちあく。上官儀「披二瀝丹愚一、諒非二矯飾一」

【披離】ヒリ ひらきはなる。吳均「華暉實掩映、細葉能披離」

【披膽】ヒタン まごころをつくす。韋應物「披膽謂二至尊一」

【披靡】ヒビ ひらきなびく。漢書に「羽大呼馳下、漢軍皆披靡」

【披簿】ヒボ ちゃうめんをひらく。北史に「或忘二其年名一者、披簿以審レ之」

【披襟】ヒキン えりをひらく。心を打ちあくと高僧傳に「王逢披レ襟解レ帶」

【披懷】ヒクワイ 胸襟をひらく。まごころをあらはす。辯亡論に「披レ懷虛レ己」

【披露】ヒロ ひらきあらはす。司馬光「臣之寸心無レ由二披露一」

【披讀】ヒドク ひらきよむ。南史に「晝夜披讀、殆不レ輟レ手」

【披覽】ヒラン ひらき見る。北史に「披二覽聖賢餘論一」

【披腹心】フクシン まごころをつくす。史記、淮陰侯傳に「臣願披二腹心一、輸二肝膽一、效二愚計一、恐二足下不レ能レ用也」

【抬】タイ チ。超之切。支。笞に同じ。

はうつ(擊)。

【抗】コウ エウ。以沼切。篠。ろイウ、ユ。以周切。尤。はユ。容朱切。虞。

はタウ、トウ。他刀切。豪。挑に同じ。

【抗】ケン はキツ、キチ。于筆切。質。

はろケツ、ゲツ。胡決切。屑。はウ

ツ、チチ。王勿切。物。

【抄】ショウ はろ一うつ(擊)二なぐ(投)はなげうつ。

【抻】シン。止忍切。軫。ろケン、ゲン。呼典切。銑。はテン、デン。徒典切。銑。

はろ一ひきもどす二つく、持ち著くろはそむく(倩)。

【抻抱】シンハウ いだく。淮南子に「雖二天地覆育一、亦不二與レ之抻抱一」

【抉】ケツ ウ。古華切。麻。

【孤】コ ろワ、エ。烏瓜切。麻。

【抱】ハウ はハウ、ボウ。薄皓切。皓。

ろ蒲報切。號。はハウ、ヘウ。披交切。肴。はプ。捨、浮に同じ。

はろ一いだく(懷)二かかふ三さしはさむ(挾)四もつ(持)五ひきとる(引取)六むね(胸襟)七雲氣の日に向ふこと八一なげうつ(拋に通ず)二すつ(棄)。

【抱月】ハウゲツ 月かげをもつ。源乾曜「虛懷同二於抱月一、懸鏡不レ疲、利器比二於成風一、剡鐘無レ滯」

【抱玉】ハウギョク たまをかかへもつ。智德を有す。後漢書に「抱二玉乘レ龍」

【抱乘】ハウライ すきをもつ。陸游「抱來新湖荻、燒畚古廟壖」

【抱志】 すぐれたる志をいだく。晉書に「抱レ志未申之傑」

【抱負】 いだくとおふと。又、かんがへ。計畫。後漢書に「四方學士、莫レ不レ抱ニ負墳策一、雲會京師」

【抱素】 飾らざるきぢを保つ。漢書に「兆民反レ本、抱レ素懷レ樸」

【抱痾】 病氣にかかりてゐる。(懷痾)。

朱熹「抱痾守ニ窮廬一」

【抱膝】 ひざをかかふ。白居易「邯鄲驛裏逢ニ冬至一、抱レ膝燈前影伴レ身」

【抱玉哭】 冤罪にかかりて悲しむ。楚の卞和の故事に基づく。劉向「荊玉立、和抱ニ其玉一、晝夜哭」

【抱炭希レ涼】 行ふ所と望む所と相反するたとふ。魏志、注に「孫盛曰、信不レ足焉、而所ニ物之必附一猶生ニ於我一、而望ニ彼之必懷一、何異ニ挾レ冰求レ溫、抱レ炭希レ涼者乎哉」

【抱レ薪救レ火】 害をのぞかんとして除く能はざるのみならず、卻つてその害をして大ならしむる義。史記に「以レ地事レ秦、譬猶ニ抱レ薪救レ火」

【抱關擊柝】 門の開閉を掌る者と拍子木を打つ者と。共に位ひくき役。荀子に「抱關擊柝、而不ニ以爲レ寡」

【抈】

㊀カ。虎何切。歌。

ろダ、ナ。女加切。麻。

㊀タ、ダ。待可切。

【抳】

㊀ぎる(捉)ろからむ

㊀さしまれく(搦)ろからむ

㊀ザ、ニ。女履切。紙。ろディ、ナイ。乃禮切。薺。㊀ヂッ、ニチ。尼質切。質。㊀ヂ、ニ。女夷切。支。

㊀ゆびさす(指)㊁とどむ㊀とどむ、とどまる(止)㊀みがく(研)。

㊀エイ。以制切。霽。ろエッ、エチ。羊列切。屑。㊀揲に同じ。

【抵】

㊀テイ、タイ。典禮切。薺。

ろタイ、テ。直皆切。佳。

㊀一おす(推)。諸氏切。紙。

㊀ふる(觸)㊁さかふ(忤)㊂あつ(當)㊄おくる(歸)七なげうつ

傳に「起抵ニ破書案一」

【抵禁】 いましめをおかす。漢書に「民隔レ法抵レ禁」

【抵罪】 つみにあつ。史記に「傷レ人及盜抵レ罪」

【抵當】 ひきあて。

【抵觸】 さしさはる。周禮、注に「楯衝所レ以令レ不レ得レ抵ニ觸人一」

【抵掌談】 掌をうちて盛んに談ず。戰國策に「蘇秦見、說ニ趙王于華屋之下一、抵レ掌而談」

【抶】

㊀チッ、チチ。敕栗切。質。

むちうつ(笞擊)。

ヒ、ピ。匹眉切。支。

ひらく(披)。

【抸】

サフ、ソフ。作荅切。合。

一たづさふ(挈)二はさむ(挾)。

パツ、マチ。莫曷切。曷。

【抹】

一なづ、よる(摩)二ぬる(塗抹)

三けす、はらふ。

ぬりけす。釋名に「摩挲猶ニ抹殺一」又、漢書に「抹ニ殺災異一」

すりけす。

すりつく。

けす。はらふ。韓愈「惟其大獷ニ於辭一、而與ニ世抹殺一」

【抽】

チウ、チュ。丑鳩切。尤。

一ひく(引)二ぬく(拔)三のぞく(除)四よむ(讀)五なさむ(收)。

【抽矢】 やなぬきとる。唐書に「抽矢回ニ射佛寺浮圖一」

【抽拔】 ひきぬく。吳志に「乞ニ普加ニ

覆載抽拔之恩一」

【抽筍】 たけのこを發生す。歐陽修「新篁抽レ筍添ニ夏影一」

【抽奬】 ぬきあぐ。呂溫「未レ踰レ年、忽蒙ニ抽奬一」

【抽象】 〔哲〕 *Abstract.* 個個別別の具象的觀念より共通の點をぬき出し、これを總合して精神界の現象とする心作用。

【抽劍】 つるぎをぬく。(拔劍、挺劍)。左傳に「抽レ劍斷レ軔」

【抽擢】 衆中よりぬき用ゐる。(拔擢)。急就篇に「抽擢推舉黑白分」

【抽籤】 くじびき。幸蜀記に「抽籤得ニ逆レ天者殃四字一」

【抽レ黃對レ白】 種種の色をとり合はす。字句を並べて作文するにいふ。柳宗元「眩耀爲レ文、瑣碎排遇、抽レ黃對レ白、喻哢飛走」

【抸】

㊀キョ、コ。丘於切。魚。

ろケフ、ゴフ。乞業切。葉。

㊀一さる(去)

二ささぐ(捧)ろ一もつ(持)三くむ(抱)

四おびやかす(劫)㊀もろでにて抱む。

【抸摸】 持ち去る。揚雄「抸摸去也、齊趙之總語也」

【抵】

㊀ピン、ミン。眉貧切。眞。

ろブン、モン。武粉切。吻。

㊀搢の省文ろぬぐふ(拭に同じ)。

【抹】

パイ、マイ。莫貝切。隊。

うつす、さぐる(摸)。

【抻】

㊀シン。試刃切。震。ろ伸に同じ。

㊀のぶ(展)。

【押】

㊀アフ、エフ。烏甲切。洽。

ろカフ、ケフ。古狎切。洽。

㊀一かきはん(署)二おす三おさふ(按)四あづかる㊄一たすく(輔)二しまる(檢束)三のり(規律)四よる(因)。

【押敢】 官にてさしおさふ。

【押宴】 うちとけたるさかもり。宋史、歐陽修傳に「修選ニ翰林學士一、使ニ契丹一、其主、命ニ貴臣四人一押宴曰、此非ニ常制一、以ニ卿名重一故耳」

【押韻】 韻をふむ。詩作にいふ。宋史に「張孟押韻十卷」

【押後兵】 おさへの兵。紀効新書に「押後兵二十五名、各用ニ長短器一」

【拂】

㊀フツ、ホチ。敷勿切。物。

ろヒツ、ビチ。蒲密切。質。

㊀一はらふ

二たつ(絕)六たむ(矯)七はらひ八さかふ(逆)九たがふ(違)十もとる(戾)ろ一たすく(弼)に同じ、輔)二かぜそよぐ貌

㊀一さもにたり(髣)に同じ)二うつ(擣)に同じ、擊)。

【拂几】 つくゑをはらふ。儀禮に「主人拂ニ几授校、拜送賓」

【拂士】 輔弼の賢士。孟子に「入則無ニ法家拂士一、出則無ニ敵國外患一者國恆亡」

【拂子】 はぐまの毛を束ねて、柄を附けたる佛具。佛在世の時、諸の比丘蚊虻にかまれて痒を患ふ、佛これを拂ふ具を許さる、よりて拂子を作る云云。祖庭事苑に見ゆ。

【拂衣】 ふるひたつさま。國語に「拂レ衣從レ之、人救レ之」

【拂旦】 よのあけがた。沈佺期「拂旦雞鳴仙衛陳」

【拂地】 地をはらふ。跡方もなきことにいふ。戴叔倫「風吹ニ楊柳一漸拂レ地、日映ニ樓臺一欲レ下レ山」

【拂拭】 けがれを去る。(掃拭)。南史に「景仁便拂ニ拭衣冠一」

【拂拂】 風うごく貌。李賀「曉風何拂拂、北斗光闌干」

【拂面】 かほをはらふ。楚辭に「長袂拂レ面、善留レ客只」

【拂撤】 はらひすつ。南都賦に「蘇蓑紫蓋、拂ニ撤羶腥一」

【拂曙】 よのあけがた。張說「拂曙攜ニ清賞一、披レ雲觀ニ緣岑一」

【拂曉】 前に同じ。(初曉)。

【拂鬚】 こびへつらふ義。宋史、寇準傳に「寇萊公爲ニ宰相一、丁謂參知政事、嘗會ニ食都堂一、羹染ニ公鬚一、謂起拂レ之、公正レ色曰、身爲ニ執政一、何自爲ニ宰相一拂レ

鬚耶、謂慙」リウ、ル。力九切。有。

【抑】ひれる(捫)。(ヤ)サン、セン。側板切。潸。(ろ)拶の俗字。

【拵】(ヤ)さぐる(摸)。(ヤ)シュ。臘庚切。襲。(ろ)チュ。知庚切。襲。(は)チュウ。慣用音。一ささふ、ささへ(支)二そしる(刺)三あたる(距)四ゆびさす(五)柱に通ず。

【拄頰】ほほづゑをつく。韓愈「人悉方拄頰」

【担】(ヤ)タン。多旱切。旱。(ろ)ケツ、ケチ。丘傑切。屑。(ヤ)一はらふ(拂)二うつ(擊)(ろ)一かかぐ(揭に通ず)二あぐ(擧)。

【担撟】あぐ。あがる。楚辭に「意恣睢以担撟」

【捉】アク、ヤク。乙革切。陌。或は、扼に作る。又、搤に同じ。一とる(把)二おさふ(抑)。

【捉撃】おさへうつ。漢書に「燕齊之間、方士瞋目捉撃」

【拆】(ヤ)タク、チャク。恥格切。陌。(ろ)セキ、シャク。昌石切。陌。(ヤ)一さく(裂)二ひらく(開)三こぼつ(毀)四とく(解)(ろ)うつ(擊)。

【拆裂】さく。張融「鼓怒則九紐拆裂」

【拆裂】かひこのすなわかつ。陸游「戶戶吳蠶拆蔟時」

【拇】(ヤ)ボウ、モ。莫厚切。有。(ろ)ボ、モ。莫補切。襲。

【拈】(ヤ)サン、セン。側板切。潸。(ろ)拶の俗字。(ヤ)さぐる(摸)。(ヤ)シュ。臘庚切。襲。(ろ)チュ。知庚切。襲。(は)チュウ。慣用音。一ささふ、ささへ(支)二そしる(刺)三あたる(距)四ゆびさす(五)柱に通ず。

【拈頰】ほほづゑをつく。韓愈「人悉方拄頰」

【拈】(ヤ)タン。多旱切。旱。(ろ)ケツ、ケチ。丘傑切。屑。(ヤ)一はらふ(拂)二うつ(擊)(ろ)一かかぐ(揭に通ず)二あぐ(擧)。

【担撟】あぐ。あがる。楚辭に「意恣睢以担撟」

【抔】アク、ヤク。乙革切。陌。或は、扼に作る。又、搤に同じ。一とる(把)二おさふ(抑)。

【抔撃】おさへうつ。漢書に「燕齊之間、方士瞋目抔撃」

【拈】(ヤ)一なづ(撫)二うつ(擊、拍)三にぎり(握)四つか、つまみ(五)樂器(韋を表とし中に糠を入る、形鼓の如し)(ろ)つく(ゆ)うつ(衣上より扑つ)。

【拈紵】琴の類をしらぶ。琴賦に「拈紵安歌、新聲代起」

【拈循】なぐさめやすんず。漢書に「郡國諸侯、各務自拈循其民」

【拈斡】ももをうつ。後漢書、陽球傳に「球嘗拈斡發憤曰、若陽球作司隸、此曹子安得容乎」

【抛】ハウ、ヘウ。匹交切。肴。一なげうつ(擲)二すつ(棄)。

【抛棄】なげすつ。

【抛擲】なげうつ。(拭擲、投擲)。白居易「抛擲功名還史冊」

【抛物線】(數)圓錐曲線の一、定點と定直線とより等距離にある諸點の曲線の稱。

【拌】(ヤ)ハン。普寒切。寒。(ろ)バン。部滿切。旱。(は)ハン。普半切。翰。謂卓曰、將軍之舉武昌、若摧枯拉朽、何所顧慮乎」

【拉枯】枯木ををる。晉書に「鼓行而前、猶拉枯耳」

【拉脅】わきばらをひしぐ。漢書に「范曄拉脅折齒於魏」

【拊】(ヤ)フ、ホ。斐父切。襲。(ろ)方遇切。遇。(は)ホウ、フ。彼口切。有。(ヤ)一なづ(撫)二うつ(擊、拍)三にぎり(握)四つか、つまみ(五)樂器(韋を表とし中に糠を入る、形鼓の如し)(ろ)つく(ゆ)うつ(衣上より扑つ)。

(ヤ)ろ今つ、なげうつ(擲棄)(は)一わかつ(分)二わる(割)。

【拚蚌】はまぐりをさきわる。史記に「鐫石拚蚌、傳賣三于市」聖人得之、乃爲三大寶二」

【拳】(ヤ)シ。疾智切。寘。(ろ)キ。奇寄切。寘。一つむ(積)二頻づゑをつく。

【拍】一うつ(搏)二たたく(三)ひやうし(音調)四膊に同じ。

說文に「本、掐に作る、掐なり」

【拍手】てをうつ。晉書に「我昨夢舍中馬舞、數十人向レ馬拍レ手、此何祥也」

【拍拍】ばたばたとたたく貌。韓愈「青泥掩二兩趾一、拍拍不レ得レ離」

【拍板】拍子を取る爲に打ち鳴す板。

【拍浮】水をおよぐ。樂善錄に「少年恃二其善拍浮一、解レ衣赴レ水」

【拍掌】てのひらをうちならす。葛長庚「凭レ欄拍レ掌呼」

【拏】(ヤ)ダ、ナ。奴加切。麻。(ろ)ゲ、ニョ。女居切。魚。(ヤ)一つかむ(攫)二ひく(牽)三とらふ(捕)(ろ)一ひく(連引)二もむ(揉)。

【拏捕】とらふ。

【拐】カイ、ゲ。求蟹切。蟹。一て(手)二あし(足)三えだ(枝)四かたり(揚騙)。

【拐人】かどわかし。

【拐去】かどわかす。

【拐杖】つゑ。

【拐帶】かどわかす。

【拐騙】かたるか。たり。

【拑】(ヤ)ケン、ゴン。巨淹切。鹽。(ろ)カン、ゴン。扱范切。豏。

【拑口】一はさむ二つぐむ(緘束)。口をつぐむ。漢書に「天下之士拑口、不二敢復言一矣」

【拒】(ヤ)キョ、ゴ。其呂切。語。(ろ)ク、コ。果羽切。襲。一ふせぎ、ふせぐ(捍、禦)二こばむ三いたる(抵)四たがふ(違)(ろ)一方形二方陳、方形の隊列。ふせぐ。ふせぎ。(禦扞、防扞)。

【拒扞】蜀志に「率二精兵一、拒二扞先王于涪一」こばみてしたがはず。易林に「任劣力薄、屠篤恐怯、如二蜻見レ鵲、不二敢拒格一」

【拒格】ふせぎこばむ。

【拒絶】いさめをふせぐ。後漢書に「專レ己者孤、拒レ諫者塞」

【拒諫】セキ、シャク。之石切。陌。(ヤ)タク、ヂャク。他各切。藥。

【拓】(ヤ)一ひろふ(拾)二をる(折)(ろ)一うく(承)二おす(推)三ひらく(斥開)四ひろし(廣)。

【拓本】いしずり。法帖譜系に「往年拓本、猶有二典刑一」

【拓地】土地をひらく。唐書に「明皇有二逸德一、而拓レ地太大」

【拓提】寺をいふ。後世誤りて、拓を招に作る。杜甫「更宿拓提境、園若秋風晩」

【拓殖】開墾と殖民と。

【拓落】一ふしあはせ。揚雄「何爲官之拓落也」二廣大なる貌。魏都賦に「或蹟期而拓落兮」

【拔】(ヤ)ハツ、バチ。蒲八切。點。(ろ)蒲撥切。曷。(は)バイ、バイ。蒲蓋切。泰。(ヤ)ハイ、ベ。蒲昧切。隊。(は)ハツ、ボチ。房越切。月。(ヤ)一ぬきんづ(擢)二ぬく(抽)(ろ)一めぐる(回)二ばやし(疾)三ひとりだつ(特立)四やはす(矢末)(五)のぞく(除)(六)やどる(茇に通ず、舍止)(七)柯、葉を生ず(八)とる、はらふ(九)やぶからし(草の名)(十)はらふ。

【拔本】れもとをぬく。晉書、李充傳に「拔レ本塞レ源」

【拔刺】弓をひく。思玄賦に「彎二威弧之拔刺一兮」

【拔舍】のじゅく。野宿。左傳に「秦獲二晉侯一以歸、晉大夫反首拔舍從レ之」注に「反首、亂髮下垂也、拔草也舍止也」

【拔俗】凡俗の上にぬき出づ。後漢書

に「至人能變、達士拔ㇾ俗」

【拔授】 ひきあげてさづく。曹植「觀ㇾ陛下之所ニ拔授一」

【拔進】 ぬきすすむ。漢書に「閉ニ絶私路一、拔ニ進英雋一」

【拔萃】 聚まれる中よりぬきんづ。秀づ。(出羣)。孟子に「出ニ於其類一、拔ニ萃其羣一」

【拔羣】 仲間よりぬき出でまさる。(冠羣、超羣)。梁書に「聰明特逸、出ㇾ類拔ㇾ羣」

【拔狼】 わかれちる。洞簫賦に「或拔狼以奮棄」

【拔選】 ぬきえらぶ。唐書、陸贄傳に「勢ニ神于拔選一、端ニ拱于委任一」

【拔劍】 つるぎをぬく。(抽劍、挺劍)。呂氏春秋に「王子慶忌、與ニ要離一俱涉ニ于江一、要離中江拔ㇾ劍、以刺ニ慶忌一」

【拔錨】 いかりをあげて船出す。

【拔擢】 衆中よりぬき用ゐる。漢書、孔光傳に「今復拔擢、備ニ内朝臣一」

【拔山蓋世】 勇壯なる氣象を形容していふ。史記に「項王悲歌慷慨、自爲ㇾ歌曰、力拔ㇾ山兮氣蓋ㇾ世、時不ㇾ利兮騅不ㇾ逝、騅不ㇾ逝兮、可ニ奈何一、虞兮虞兮奈ㇾ若何」

【拔ㇾ地倚ㇾ天】 詩文の雄大なるを評していふ。錦字箋に「孫撫云、玉川月餘詩、退之進學解、莫ㇾ不ニ拔ㇾ地倚ㇾ天、句句欲ㇾ活」

【拕】

(音)タ。湯何切。歌。(訓)タ、ダ。徒可切。哿。

【拕進】 ひくく(曳)。

【拕舟】 ふねをひく。漢書に「輿ㇾ轎而踰ㇾ嶺、拕ㇾ舟而入ㇾ水」

【拖】

タ、ダ。拕に同じ。

【拖曳】 ひく。魏志、注に「犬不ㇾ能ㇾ行、復令ニ步人拖曳一」

【拖紳】 おほおびをひく。論語に「加ニ朝服一拖ㇾ紳」

【拖紫】 むらさきの印綬をひく。高位に登るにいふ。晉書に「紆ㇾ青拖ㇾ紫、服ㇾ冕乘ㇾ軒」

【拗】

(音)アウ、エウ。於絞切。巧。(訓)於教切。教。(俗)キク、チク。乙六切。屋。(俗)イウ、ユ。於糾切。有。

【拗矢】 くじく(拗戾)(俗)おさふ(抑)。

【拗音】 やをなる。(折矢)。尉繚子に「拗ㇾ矢折ㇾ矛」 語學上の語。ちゃ、しゅ、きょ、くわの如く假名二字にて書き取るべき音の稱。

【拗怒】 いかりをおさふ。班固「謀ニ躡其十二三、乃拗ㇾ怒而少息」

【拗强】 ねぢれもとる。朱熹「王臨川天資亦有ニ拗强處一」

【拘】

(音)ク、コ。舉朱切。虞。(訓)コウ、ク。居侯切。尤。(俗)キョ、コ。求於切。魚。(俗)ク、コ。俱遇切。遇。(俗)掲に通ず。(音)一とどむ(止)二とる(執)三まがりさはる(曲礙)、かかはる四とらはれる一かかふ(擁)二かがむ(曲)三とる(取)四ひきあつむ(攫聚)(俗)とどむ(俗)かがまる。

【拘囚】 とらふ。とらはる。又、とらはれ。韓愈「早知皆是自拘囚」

【拘束】 とらへつかぬ。制して自由ならしめず。北史に「上知ニ其不ㇾ願ニ拘束一、以ㇾ禮發遣」

【拘泥】 かたよりなづむ。 程史に「剪剪拘泥、不ㇾ得ニ卽決一」

【拘殺】 とらへころす。元史、廉希賢傳に「初北部王拘ニ殺使者一、世祖選ㇾ使往諭ㇾ之」

【拘留】 とらへてとめおく。漢書に「單于亦趣拘ニ留漢使一、以相報復」

【拘執】 めしとらふ。後漢書、包咸傳に「于ニ東海界一、爲ニ赤眉賊所ㇾ得、逢見ニ拘執一、十餘日」

【拘絆】 とらへほだす。きづな。王禹偁「應知驥足暫拘絆」

【拘牽】 制す。制せらる。かかりあひ。朱熹「煩慮絆ニ拘牽一」

【拘致】 とらへきたる。後漢書、虞詡傳に「外以勸厲答ニ其功勤一、内以拘致防ニ其邪計一」

【拘拘】 かかはる貌。吳澄「俗士拘拘守ニ一途一」

【拘禮】 禮儀にかかはりて融通きかず。劉向「拘禮之人、不ㇾ足ニ與言ㇾ事」

【拘縻】 かかはりつながる。釋德洪「夢幻相拘縻」

【拘繫】 とらへつなぐ。書經、疏に「主ㇾ拘繫當ニ刑殺一者ㇾ」

【拘攣】 てすり。今古註に「悉爲ニ扶老拘攣一」

【拘擊】 かかはりひく。杜甫「胡星一彗字、點首逢拘擊」

【拗】

(音)ヘツ、ベチ。蒲結切。屑。(訓)ヒ、ビ。吡至切。寘。(俗)ヒツ、ヒチ。餓吉切。質。

(音)一ねづ(捩)二うちたふす(擊仆)(訓)一うつ二批に通ず(俗)一さす(刺)二うつ。

【拙】

セツ、セチ。失劣切。屑。(音)一つたなし二かがむ(屈)。

【拙工】 つたなき職人。孟子に「大匠不ㇾ爲ニ拙工一改ㇾ廢繩墨一」

【拙手】 へた。古詞に「微物雖ㇾ輕、拙手所ㇾ作」

【拙劣】 つたなくしておとる。白居易「拙劣才何用」

【拙吟】 つたなき詩歌。

【拙作】 前に同じ。

【拙妻】 己の妻の卑稱。(山妻、瘦妻)。李白「拙妻好ㇾ乘ㇾ鸞」

【拙味】 心つたなくおろかなり。暢當「拙味難ㇾ容ㇾ世」

【拙計】 つたなきはかりごと。晁補之「拙計安足ㇾ爲」

【拙速】 つたなけれどもはやし。孫子に「拙速未ㇾ覩ニ巧之久一也」

【拙策】 つたなきはかりごと。

【拙誠】 つたなくしてまごころあり。韓非子に「巧詐不ㇾ如ニ拙誠一」

【拙筆】 (音)一つたなき書畫。尹程「托ニ微言一繁ㇾ末」 二粗末なるふで。白孔六帖「言于拙筆一」

【拙謀】 つたなきはかりごと。書經に「予亦拙謀、作ニ乃逸一」

【拙騃】 つたなくおろかなり。抱朴子「拙騃之至言、爲ニ拙騃一」

【拙滯】 つたなく志弱し。何遜「拙滯終難ㇾ化」

【拚】

(音)ヘン、ベン。皮變切。霰。(訓)ヘン、ホン。孚袁切。元。

(俗)フン、ボン。方問切。問。

(音)一てなうつ(拊手)二まふ(手舞貌)(訓)一ひるがへす(飜に同じ)(俗)ひるがへる、ひるがへす(飜に同じ)(俗)ばらふ。

【招】

(音)セウ。之遙切。蕭。(訓)一まねく(手召)二もとむ(求)三ほだす(羈)四あづち(埠)五まと(的)六かさねうごく(招搖)(訓)一あぐ(擧)二かかぐ(揭)。

【招引】 まねく。北齊書に「韓軌字晉明有ニ俠氣一、好ㇾ酒誕縱、招ニ引賓客一、一席之費、動至ニ萬錢一」

【招召】 前に同じ。楚辭に「招者召也、以ㇾ手曰ㇾ招、以ㇾ口曰ㇾ召」

【招呼】 まねきよぶ。蘇軾「招ニ呼明月一、到ニ芳樽一」

【招告】 わざはひをまねく。張說「虐則招ㇾ告、寬則納ㇾ慶」

【招來】 人をまねきて來らしむ。史記に「大夏之屬、皆可招來而爲ニ外臣一」

【招延】 まねきいる。漢書に「招ニ延四方豪傑一」

【招招】 手にてよぶ貌。謝朓「招招搖ニ輕槳一、行行趨ニ巖趾一」

【招刺】 えらびとる。宋史、高宗紀に「命招ニ刺三千人一、賜ニ名必勝軍一」

【招待】 まねきてもてなす。

【招致】 よびよす。史記、孟嘗君傳に「招ニ致任俠姦人一」

【招辱】 はづかしめをまねく。大戴禮に「言有ㇾ招ㇾ禍、行有ㇾ招ㇾ辱」

【招涼】 (音)一すずしさをひく。拾遺記に「號ニ消ㇾ暑招ㇾ涼之珠一」 二扇の異名。

【招梗】 めでたきを迎へあしきを禦ぐ。周禮に「掌ニ以ㇾ時招梗禳禱之事一、以除ニ疾禜一」

【招尋】 まねく。又、おとづる。駱賓王「返照下ニ層尋一、柳外狎ニ招尋一」

【招喚】セウクワン よぶ。 册府元龜に「令二招喚不一レ得二輒傷害一」

【招提】セウダイ 寺ないふ。(拓提)。釋書に「招提菩薩、皆古佛號、故寺稱二招提一」

【招集】セウシフ まねきあつむ。後漢書に「招二集豪傑一、曉二誘羌戎一」

【招搖】セウエウ さまよふ貌。漢書に「飾二玉棺一、以舞歌、體招搖若二永望一」

【招魂】セウコン 死者を弔ひ祭る。死者のたましひをまねきかへす。史記、屈原傳贊に「余讀二離騷天問招魂哀郢一、悲二其志一」

【招募】セウボ つのる。又、つのられたる兵士。後漢書に「選二練武衛一、招二募猛士一」

【招會】セウクワイ よびあつむ。論衡に「待レ士下レ客、招二會四方一」

【招辟】セウヘキ まねきめす。蔡邕「前後招辟使二人曉諭一」

【招牌】セウハイ かんばん。看板。莊子に「自レ虞氏招二仁義一、以撓二天下一也、天下莫レ不奔二命於仁義一」注に「招猶二今人言一招牌一」

【招聘】セウヘイ 禮を以てまねく。梁書、武帝紀に「上以レ時招聘」

【招誘】セウイウ まねきいざなふ。晉書に「或招誘安撫、以爲二己用一」

【招慰】セウヰ まねきやすんず。後漢書に「今可二遣レ使招慰、與共合レ力」

【招攬】セウラン よびとる。陸機「招二攬遺老、與レ之遊レ業」

【招撫】セウブ 來りしたがはしむ。後漢書に「屯二伊吾一、以招二撫之一」

【招隱】セウキ 世間より歡迎せらるる隱殷民懷」

【招邀】セウエウ まねきむかふ。李白「灑二掃黃金臺一、招二邀青雲客一」

【招世士】セウセイシ 世間より歡迎せらるる士。莊子に「招世之士興レ朝、中民之士榮レ官」

【招討使】セウトウシ 從ふ者を招き敵する者を討つ。一方面の總督の稱。宋史に「招討使掌レ敢二招討一、殺盜賊一之事」

【招諫匭】セウカン 臣下より諫言せしめん爲、設け置く投書箱。宋史、高錫傳に「錫徒步詣二招諫匭一上書」

【拜】

ハイ、ヘ。博怪切。卦。

一かがむ(屈)二ながむ、ふし。

三官を授く。

くす三官をさづけあたふ。漢書、翟方進傳に「即二軍中一拜授」

【拜手】シユ 手の邊まで頭を下ぐ。公羊傳に「趙盾逡巡北面、再拜稽首」注に「頭至レ地曰二稽首一、頭至レ手、曰二拜手一」

【拜伏】ハイフク ながみふす。北史に「帝唯唯泣拜伏、竟無二所レ言一」

【拜年】ネンハイ 年始の禮。

【拜位】ハイヰ 官吏となる。易林に「邀二於嘉國一、拜レ位逢レ時」

【拜見】ハイケン みることの敬稱。神仙傳に「詣レ門叩頭、求乞二拜見一」

【拜受】ハイジユ たまものをいただく。禮記に「大夫親賜レ士、士拜受」

【拜官】ハイクワン 官職をうく。夢溪筆談に「唐制、丞郎拜レ官、卽二龍門一謝、今三司副使已上拜官、則拜二舞于階上一、百官拜二于階下一、而不二舞蹟一、此亦龍門故事也」

【拜命】ハイメイ おほせをうけたまはる。又、官職をうく。岑參「拜レ命宣二皇猷一」

【拜迎】ハイゲイ 禮拜してむかふ。禮記に「不二敢拜迎一、而拜送一」

【拜春】ハイシユン 年始の禮。清嘉錄に「立春日爲二春朝一、士庶交相慶賀、謂二之拜春一」

【拜首】ハイシユ つつしみて首をさぐ。書經に「皋陶拜首稽首颺言」

【拜恩】ハイオン めぐみをうく。北史に「受二爵天朝一、拜二恩私室一」

【拜除】ハイヂヨ 官に拜す。後漢書に「刺史太守以下、拜二除京師一」

【拜納】ハイナフ つつしみてをさむ。戰國策に「願拜納二之於王一」

【拜授】ハイジユ 官をさづけあたふ。漢書、翟方進傳に「即二軍中一拜授」

【拜揖】ハイイフ 兩手を上下し。又、兩手を推して胸につくる禮。唐書、王績傳に「性簡放、不レ喜二拜揖一」

【拜詔】ハイセウ みことのりをうく。北齊書に「除二清河太守一、聲問甚高、齊天祿中、大赦、郡先無二囚一、羣吏拜レ詔而已」

【拜跪】ハイキ ながみてひざまづく。十六國春秋に「爾拜爾跪、而不レ敢レ命、斯小臣之罪矣」

【拜答】ハイタフ つつしみてこたふ。唐書に「諫者拜答不レ暇」

【拜賀】ハイガ よろこびを申しあぐ。漢書、韓信傳に「信曰、大王自料勇悍仁强、孰二與項王一、漢王默然良久曰、弗レ知也、信再拜賀、曰、唯」

【拜領】ハイリヤウ たまものをいただく。

【拜塵】ハイヂン 石崇の故事より、長者を逢迎すること、又、阿り事ふることにいふ。晉書に「石崇與二潘岳一、詔二事賈謐一、謐成君一、每レ出崇降二車路左一、望レ塵而拜」

【拜賜】ハイシ たまものをいただく。禮記に「君賜二車馬一、乘以拜レ賜」

【拜趨】ハイシユ 拜してはしる。隋都劇「奉レ觴酌レ酒前拜趨」

【拜謁】ハイエツ つつしみて上にまみゆ。漢書に「拜謁迓迎甚謹」

【拜禱】ハイタウ ながみいのる。宋史に「呂仲洙女名二良子一、父得レ疾、女焚レ香祝レ天、請二以レ身代一、女弟細良、亦相從拜禱」

【拜聽】ハイチヤウ つつしみてきく。

【拜擢】ハイタク 官にあげ用ゐる。後漢書に「其未レ及者、亦隨レ輩皆見二拜擢一」

【拜石丈人】ハイセキジヤウジン 米芾をいふ。石林燕語に「米芾好二奇石一、知二無爲軍一、初入二州廨一、見二立石頗奇一、喜曰、此足二以當一吾拜一、遂命取二袍笏一、拜レ之、每呼曰二石丈一、爲二言者所レ憚、時人呼レ芾、曰二拜石丈人一」

【拥】

ヨウ、ヨン。尸恩切。元。

ゐ下懇切。阮。

一おす、しりぞく(排擠)。

二むすぶ(結)三くくる(包括)四いたる(至)五ただす(愉)六ぢまる(佸に同じ)七はず(箸に通ず)。

【括】

クワツ、クワチ。古活切。曷。

一ひく二おす、しりぞく(排擠)。

三とづ(閉)四いたる(至)五ただす(愉)六たづねきはむ(根刷)七はず(箸に通ず)八あふ(會)九あつまる(佸に同じ)十もとどり(髻に通ず)。

【括弧】クワツコ 文章又は數學に用ゐる符號、()〔〕〈〉「」『』の如きもの。

【括約】クワツヤク しかとしめくくる。

【括結】クワツケツ すべくくる。易經に「括結否閉、賢人乃隱」

【括囊】クワツノウ つまみくくる。盧照隣「蹇産推聯、支離括囊」

【括糞】クワツフン 口をとぢていはず。易經に「六四括囊、无レ咎无レ譽」

【拭】

シヨク、シキ。設職切。職。

一ぬぐふ(揩)二きよむ(清)三しづかなり(靜)。

【拭目】シヨクモク めをぬぐひ見る。注意して見る。漢書に「天下莫レ不二拭レ目傾レ耳」

【拭拂】シヨクフツ ぬぐふ。韓偓「拭二拂朝簪一」

【拭淨】シヨクジヤウ ふききよむ。

【拮】

キツ、キチ。居質切。質。

カツ、ケチ。吉屑切。屑。

一はたらく二もつ(揭持)三する(爍)四せまる(逼)五かかぐ(揭に同じ)六あぐ(舉)七もつ。

【拮据】キツキヨ 手口ともになす貌。詩經に「予手拮据」

【拯】

ショウ。之陵切。蒸。

一すくふ(救)二たすく(助)三あぐ(擧)。

【拯救】ショウキウ たすけすくふ。(援救)。宋書に「世期聞レ之、馳往拯救、分レ食解レ衣、以贍二其乏一」

【拯恤】ショウジユツ すくひめぐむ。晉書に「宜二時拯恤救二其彫困一」

【拯弊】ショウヘイ 衰へたるをすくふ。(濟弊、救弊)。北史に「遂有二匡頹拯レ弊之志一」

【拯贍】ショウセン すくひにぎはす。北史に「以二六鎭大飢一、開レ倉拯贍」

【拯贖】ショウシヨク すくひあがなふ。蘇武報李陵書に「幸賴二聖明一、遠垂二拯贖一」

【拵】

ゼン、ニン。尼凜切。寢。

ゐジン、ニン。如甚切。寢。

からむ(搦)。

【拶】

カイ、ゲイ。胡改切。賄。

ゐキ、ケ。許既切。未。

代切。隊。

一うごく(動)二へる(減)ゐうごく

ばに なふ(擔)二うごく。

【拱】 ゆキョウ、ク。古勇切。腫。 ろ居用切。宋。ばキグ。渠竹切。屋。 ゆ一こまぬく二とる(執)三おほたま(珙に通ず、大璧)ろ一なさむ二こまぬくばのり、のっとる(法)。

【拱手】 キョウシュ 一もろ手をこまぬく。人を敬ふ禮。禮記に「遭二先生于道一趨而進、正立拱手」二何事をもせず。後漢書に「天水隴西、拱レ手自服」

【拱把】 キョウハ 拱は兩手にて握る、把は片手にて握る。孟子に「拱把之桐、梓人苟欲レ生レ之」

【拱揖】 キョウイフ 兩手をこまぬきてゐしゃくす。宋史に「肅然拱揖、不二以名呼一」

【拲】 ゆキョウ、ク。古勇切。腫。 ろキョク、コク。拘玉切。沃。 ばキク、コク。居六切。屋。 てかせ(械)。

【拳】 ゆケン、ゴン。巨員切。先。 ろケン、クワン。「己袁切。元。 ばキン 苦遠切。阮。 ゆ一こぶし二かがむ(屈)三うれふ(憂)四ねんごろ(勤懇)五いとをしむ(愛)六うやうやし(恭)七ささげもつ貌ろちから(力)ばゆみ(弩に同じ)。

【拳打】 ケンダ こぶしにてうつ。南史に「輒忿拳二打車壁一」

【拳曲】 キョクキク まきあがる。莊子に「其小枝拳曲、而不レ中二規矩一」

【拳法】 ケンパフ こぶしにて打ち合ふ技。

【拳勇】 ケンユウ たくましくつよし。拳は健の義。國語に「有二拳勇股肱之力一」

【拳拳】 ケンケン 一ささげもつ貌。中庸に「得二一善一則拳拳服膺、而弗レ失レ之矣」二れんごろなり。漢書に「不レ勝二拳拳一、不二敢不レ盡二愚心一」

【拳鬪】 ケントウ こぶしにてたたかふ。

【拓】 ハク。普百切。陌。 うつ(擊)。 說文に「拓の本字、手に从ふ、百の聲」

【拵】 ゆソン、ゾン。徂昆切。元。 ろ徂悶切。願。 ゆよる(据)ろさしはさむ(插)。

【拵】 ゆシュウ、ニュ。而中切。東。 ろジョウ、ニョウ。如蒸切。蒸。 ばジョウ、ニョウ。乳勇切。腫。 ゆたすく(相)ろ一こばむ(拒)二ふせぐ(拒)三おす(推)ばよる(扔に同じ、因)。サツ、サチ。子末切。曷。 せまる(逼)。 カウ、コウ。苦浩切。皓。 一かすむ(掠)二うつ(打)。 苦痛を與へて罪狀をしらぶ。

【拷】

【拷問】 カウモン

【拷責】 カウセキ 前に同じ。

【捐】 エン。捐の俗字。

【拶】 ゆチ。丑豸切。紙。ろイ。濱爾切。紙。ばチ、ヂ。陳知切。支。ばイ。余支切。支。ばタ、ダ。徒可切。哿。ゆシャ、セ。儲者切。馬。 ゆろ一わかつ(拆)二さる(去)三うつ(拍)四ひく(拽)ばひらく(拆)ばくはふ(加)ゆおほいなり。

【拶】

【協】 ゆケフ、コフ。迄葉切。葉。 ろラフ、ロフ。落合切。合。 一くじく(拉)二やぶる(摺)。

【掩】 ゆサク、シャク。色責切。陌。 ろサク、ソク。測角切。覺。 ゆ一とる(擇取)二たすく(扶)ろさしとる(刺取)。

【捩】 ゆエツ、エチ。羊列切。屑。 ろエイ。以制切。霽。 ばセイ、ゼイ。時制切。霽。 ひく(曳、引、拖)。

【捩身】 エイシン 身をひく。職を退く時などに用ゐる語。

【拽】 シフ、ジフ。是執切。緝。 一ひろふ、とる(掇)二なさむ(敢敢)三ゆごて(射韝)四とふ(十に通じ用ゐる)。

【拾】

【拾得】 シフトク ひろふ。錄異記に「李跳拾二得小石一」

【拾集】 シフシフ ひろひあつむ。

【拾摭】 シフセキ ひろひとる。袁淑「拾二摭遺餘一、含口所レ便」

【拾掇】 シフテツ ひろふ。王令「拾二掇穀種一無二餘遺一」

【拾遺】 シフイ おちのこれるをひろふ。史記に「汲黯願下出二入禁闥一拾レ遺補レ過」

【拾薪】 シフシン たきぎをひろふ。後漢書、承宮傳に「遂請留二門下一爲二諸生一拾レ薪執レ苦數年、勤學不レ倦」

【拿】 ジョ、ニョ。拏の俗字。

【掴】 インイン。伊眞切。眞。 一つく(就)二よる(仍)。 チ、ヂ。直之切。支。

【持】 一もつ二とる(執)三にざる(握)四まもる(守)五たもつ(保)六ただす(制)。

【持正】 ジセイ ただしき道をとり守る。晉書に「三人齊レ位、足レ相二持正一」

【持久】 ジキウ そのまま長くもちこたふ。東方朔「曠日持久、積二數十年一」

【持牢】 ジラウ とりまもることかたし。獻帝傳に「計在二持牢一」

【持玩】 ジグワン 手にもちあそぶ。白居易「魚中得二瑰寶一、持玩何磊砢」

【持戒】 ジカイ 〔佛〕佛の戒を固くとりまもる。法華經に「持戒清潔、如二淨明珠一」

【持重】 ジチウ かろがろしくせず。舊唐書、李晟傳に「將帥當二持重一、豈宜二自表飾以喧一哉也」

【持筆】 ジヒツ ふでをもつ。書く。魏志、注に「握レ牘持レ筆」

【持滿】 ジマン 一十分なる地位をたもつ。韓詩外傳に「子路曰、敢問持レ滿有レ道乎」二弓を十分ひきしぼる。(引滿)。漢書に「彀二弓弩一持レ滿」

【持說】 ジセツ 固くとり守る一定の言論。

【持論】 ジロン 前に同じ。晉書、陸雲傳に「與二兄機一齊レ名、雖二文章不レ及レ機、而持論過レ之、號曰二二陸一」

【持劍】 ジケン つるぎをもつ。說苑に「子路持レ劍」

【持衡】 ジカウ はかりざをもつ。唐書に「天下之勢、猶レ持レ衡」

【持議】 ジギ 一定の言論を固く取る。固くとれる一定の言論。宋史、苗授傳に「授遇レ事、持レ議不二苟合一」

【持二兩端】 ジリヤクタン 二心をいだく。史記に「晉聞二楚之伐レ鄭、發レ兵救レ鄭、其來持二兩端一故遲」

【持節使】 ジセツシ 天子より節(シルシ)を賜りて出づる使者。韓愈「丞相其選二宗室四品一人一、持レ節往使二君長一」

【挂】 ゆクワイ。ケ。古賣切。卦。 ろケイ。涓畦切。齊。 ゆ一かく(懸)二かかる(掛)三かぎる(畫)四ささぼる(礙)ろ一わかつ(別)二とる(鈎取)。

【挂帆】 クワイハン ほをあぐ。杜甫「挂レ帆遠色外、驚浪滿二吳楚一」

【挂冠】 クワイクワン かんむりをかく。轉じて、官途を退くことにいふ。後漢書に「逢萌字子慶、北海都昌人、王莽殺二其子宇一、萌謂二友人一曰、三綱絶矣、不レ去禍將レ及レ人、卽解レ冠挂二東都城門一、將二家屬一浮レ海、客二於遼東一」

【挂畫】 クワイグワ ろを懸く。薩都剌「焚レ香挂レ畫似二神仙一」

【挂冕】 クワイベン かんむりをかく。轉じて、官途を退くことにいふ。祖鴻勳「東都有二挂レ冕之臣一、南國見二捐レ情之士一」

【挂綬】 クワイジユ 印の紐を物に懸く。官を罷むるにいふ。元稹「陶君三十七、挂レ綬出二都門一」

【挂錫】 クワイシヤク 錫杖をかく。僧の一處に留るにいふ。裴休「挂錫十年棲二蜀水一」

【挓】 ゆチツ。陟栗切。質。 ろテツ、デチ。徒結切。屑。 ゆ一つく(撞)二禾をかる聲ろなげうつ(擲)。

【挓挓】 チツチツ 禾を刈るこゑの形容。詩經に「穫之挓挓、積之栗栗」

【掾】 ゆタ、ダ。都果切。哿。ろ都唾切。箇。 一はかる(攜に同じ)二うごく、うごかす(搖)ろ一帆をおろす二はかる。

【扰】 ホク、ボク。蒲北切。職。 うつ(擊)。

【指】 シ。軫視切。紙。 一ゆび二さす(斥)三ゆびさす、

しめす(示)㊀さしまねく(指麾)㊁おもむき(歸趣)㊂うつくし(美)㊃むれ、ころばせ(意向)。

【指支】シ ささふ。唐書に「首尾指支、幾不能相運掉」

【指爪】シサク ゆびのつめ。後漢書に「以大鐵刺指爪中」

【指斥】シセキ ゆびさす。撫言に「指斥貴倖不顧忌」

【指示】シシ ゆびさししめす。史記に「發指示獄處者人也」

【指目】シモク ゆびさし見る。史記に「且日卒往往語、皆指目陳勝」

【指名】シメイ なざす。なざし。史記、項羽紀に「非世所指名也」

【指使】シシ 人を指さして使ふ。禮記に「六十曰指者、指使」

【指南】シナン なしへみちびく。張衡「予習非而遂迷也、幸見指南於吾子」

【指針】シシン ㊀磁石のはり。㊁嚮導となるべきもの。方針。

【指授】シジュ なしふ。唐書に「黄裳自中指授、無不切于機」

【指畫】シクワク 手指にてゑがきて、意になしふ。後漢書に「聚米爲山谷、指畫形勢」又、禮記に「凡有指畫於君前用笏」

【指掌】シショウ たなごころをゆびさす。事の易きたとへ。禮記に「治國其如指諸掌而已乎」

【指揮】シキ さしづ。宋三朝政錄に「趙太祖曰、乘快指揮、一事誤失、史官必書」

【指意】シイ むれ。(旨意)。史記に「因發明序其指意」

【指麾】シキ さしまねく。北史に「把角如意以指麾」

【指嗾】シソウ さしづす。又、そそのかす。敎唆す。蘇軾「北伐犬戎隨指嗾」

【指撥】シハツ ゆびにてかきならす。又、つめびき。陳孚「一絲指撥春風前」

【指環】シクワン ゆびわ。宋史に「貢水晶指環、瑠璃屏、珊瑚樹」

【指摘】シテキ ㊀ゆびにてかく。列子に「指摘無所廢」㊁あばきいだす。唐書に「凡指摘盡中其弊」

【指顧】シコ ゆびさしかへりみる。陳師道「句裏江山隨指顧」

【指南車】シナンシヤ 支那の上古に用ゐし一種の車。路の方向に迷はざるやう、車上に直立軸の周圍に回轉し得る木偶ありて掌上に磁針をのせ、車の回轉に關せず常に南を指す裝置のものなりといふ。

【指ㇾ天射ㇾ魚】テンシヤシテ 無益なる事柄の喩。說苑に「秦用趙高、而天下知其亡也、非其人、而欲有功、譬其若夏至之日、而欲夜之長也、射魚指天、而欲發之當也、雖舜禹猶亦困、而又況乎俗主哉」

【指ㇾ月認ㇾ指】ユビヲシテ 眞を認めざるに喩ふ。大佛頂經に「如人以手指月、認指爲月、豈唯不識月輪、兼亦迷於指體」

【指ㇾ鹿爲ㇾ馬】シカヲユビサシテ 事を設けて人を欺くにいふ。趙高が秦の二世皇帝に馬を獻じて鹿なりといひ、羣臣のその妄を笑ひし者に中つるに法を以てせし故事に出づ。史記に見ゆ。

【挈】ケツ ケチ。苦結切。屑。

ろケイ、カイ。詰計切。霽。

はカツ、ケチ。訖黠切。黠。

㊀かけもつ(縣持)㊁ひっさぐ(提)㊂ととのふ(修整)ろ㊀かく(缺)㊁たつ(絕)㊂やく(約)㊃わりふ(契に通ず)㊄板に書したる文書はひとり(獨)。

【挈起】ケツキ 手にて持ちあぐ。

【挈瓶智】ケツヘイチ 智の小なる喩。左傳に「雖有挈瓶之智、守不假器」

【揑】ハイ、ベ。蒲蓋切。泰。

㊀はらふ(撥)㊁もとらす(捩)。

【按】アン。烏肝切。翰。ろアツ、アチ。阿葛切。曷。

㊀おさふ(抑)㊁さぐ(下)㊂よる(據)㊃とどむ(止)㊄ひかふ(控)㊅あぐ(擧)、なづ(撫)㊆しらぶ(巡察、考驗、糾問)㊇もみさする(按摩)㊈おす(捺)ろとどむ(止)。

【按兵】アンヘイ 兵をとどむ。穀梁傳に「江人黃人、各守其境、按兵不動」

【按治】アンチ しらべただす。唐書に「下御史按治、悉予民」

【按抑】アンヨク おさふ。蘇軾「至平無按抑」

【按殺】アンサツ 罪をしらべあげてころす。吳志、潘濬傳に「劉表辟爲部江夏從事時、沙羨長臧碫不修、濬按殺之、一郡震竦」

【按脈】アンミヤク 血液の循環を考へ察す。素問に「善診者、察色按脈」

【按問】アンモン しらべたづぬ。宋史、王欽若傳に「就第按問、欽若惶恐伏罪」

【按排】アンハイ よきほどに物の順序を定む。

【按察】アンサツ しらべ考ふ。後漢書に「凡盜賊發、主名不立、則推察行尋、按察奸宄、以起端緒」

【按劍】アンケン つるぎのつかに手をかく。史記に「韓王按劍、仰天大息」

【按摩】アンマ あんまとり。春秋繁露に「有按摩法、以手捏病氣也」

【按轡】アンヒ くつわをおさふ。史記に「于是天子乃按轡徐行」

【按圖索駿】アンヅヲシテトム 圖畫を按見して、駿馬を求めんとするも、その眞を失へる所ありて得がたし、以て至愚の喩とす。藝林伐山に「伯樂知其子之愚、但轉怒爲笑曰、此馬好跳不堪御也、所謂按圖索駿也」

【拏】ダ、チャク。陟格切。陌。はかる。

【抃】ロウ。弄の俗字。

【抪】㊀かぜぐ。㊁キ。古委切。紙。ろギ。魚鬼切。尾。

【抵】㊀シン。之刃切。震。ろキン、コン。居欽切。問。

㊀やぶりすつ(毀撤)ろかかる、かく(懸)。

【抻】㊀センネン。而宣切。先。

ろシ、ニ。日之切。支。は擂に同じ。

【抽】㊀ささふ(拄)ろひく(挐)。

ろわかす(燥)㊄ふるふ(振)ろぬぐふ(拭)。

【拔】カク、キャク。各額切。陌。

【拔察】サツ ろラク、リャク。盧各切。藥。

【拔劍】ケン つるぎのつかに手をかく。史記に「韓王拔劍、仰天大息」

【拔摩】マン あんまとり。春秋繁露に「有按摩法、以手捏病氣也」

【拔轡】ヒン くつわをおさふ。史記に「于是天子乃按轡徐行」

【拔圖索駿】ヅヲシテトム 圖畫を按見して、駿馬を求めんとするも、その眞を失へる所ありて得がたし、以て至愚の喩とす。藝林伐山に「伯樂知其子之愚、但轉怒爲笑曰、此馬好跳不堪御也、所謂按圖索駿也」

【拔】カツ。居欲切。燭。校に同じ。

㊀くらぶ(比)㊁はかる(計量)㊂むくゆ(報)㊃かんがふ(撿考)㊄みだる(亂)㊅いきどほる(憤意)。正字通に「明末、熹宗の諱を避けて、校省して拔に作る」

【挎】㊀コ、ク。空胡切。虞。ろ摳に同じ。

㊀もつ(持)。

【挏】㊀トウ、ヅ。杜孔切。董。

ろ徒紅切。東。

㊀かかへひく(擁引)㊁うごかす(動)。

【挼】㊀ダ、ナ。女加切。麻。

ろダヨ、ニョ。女余切。魚。

【挼】㊀拏に同じ㊁もつ(持)㊂ひく(引)ろ㊀ひく(牽)㊁わづらはす(煩)㊂もつ(持)㊃のびす(拘拏)。

【拏攫】ダクカク つかむ。揚雄「熊羆之拏攫、虎豹之凌據」

【挑】㊀テウ。吐彫切。蕭。ろテウ、デウ。徒了切。篠。はタウ、トウ。土刀切。豪。

㊀たわむ(撓)㊁うつ(撩)㊂すする(歃)㊃うすし(佻に通ず、薄)㊄になふ(杖荷)㊅とる(取)㊆えらぶ㊇かかぐ㊈くじる(穿抉)㊉めぐる(宛轉)㊊くむうつはろ㊀ひく(引)㊁もてあそぶ(弄)㊂いどむ㊃たはむる(戲)㊄ふるふ(掉に同じ)はた㊀はねをどる㊁ゆききすること。

【挑戰】テウセン たたかひをいどむ。左傳に

「趙旃請挑ㇾ戰」

【挑撥】テウハツ かかげあぐ。後村詩話に「主人苦也勤ニ挑撥一」

【挑擲】テウテキ かかげふるふ。梅堯臣「蠶月必紡績、繰車必挑擲」

【挒】㋑レツ、レチ。良薛切。屑。㊀かかぐ(搩)㊁ねづ(捩)。

【㧱】㋑ワ、グワ。五果切。哿。㋺ダ、ナ。奴果切。哿。趙魏の間の語にて、つむ(摘)。

【挓】タ、テ。陟加切。麻。開く貌(挓挱)。

【挕】デフ、ネフ。尼輒切。葉。とる(採)。

七畫

【挨】㋑アイ。英皆切。佳。㋺アイ、エ。於駭切。蟹。㋑㊀うつ(擊)㊁おす(推)㊂ひらく(旁排)㊃しひてすすむ㊄あひちかづく。㋺うつ。

【挨抌】アイシン うつ。列子に「攩拯挨抌」

【挨拶】アイサツ ㊀おしのけて進む。葛長庚「昔者天子登ニ封泰山一、其時士庶挨拶、獨召ニ一縣尉一行ㇾ轎、面前呼曰、官人來、衆皆靡然」㊁我國にて、返答・答禮・應對等の義とす。

【挩】㋑タツ、タチ。他括切。屑。㋺セイ、ゼ。輸芮切。霽。㋩エイ、エ。兪芮切。霽。㋑㊀とく(解抗)㊁あやまる(誤)㊂のぞく(除)㊃のこす(遺)㋺ぬぐふ(拭)㋩うごく、うごかす(抗に同じ、動)。

【挪】ダ、ナ。諾何切。歌。もむ(搓)。

【挫】㋑サ、ザ。祖臥切。箇。㋺臧戈切。歌。㋑㊀くじく(摧)㊁をる(折)㊂からむ(搦)㊃とる(捉)㋺おさふ(案)。

【挫北】ザホク くじけてにぐ。杜牧「兵非ㇾ脆也、穀非ㇾ殫也、而戰必挫北、是日不ㇾ循ニ其道一也」

【挫折】ザセツ くじく。(摧折)。元史に「雖ㇾ經ニ挫折一、無ニ少回撓一」

【挫針】ザシン はりをさす。莊子に「挫針治ニ繲足一以餬ㇾ口」

【挫ㇾ强】キヤウヲクジク つよきものをくじく。戰國策に「伐不ㇾ爲ㇾ人挫ㇾ强」

【挫頓】ザトン くじきやぶる。易林に「錮齰挫頓、枯槁腐蠹」

【挫鋒】ザホウ ほこさきをくじく。陸機「二邦之將、喪ㇾ氣挫ㇾ鋒」

【捒】サン、ソン。桑感切。感。うごく、うごかす(搖)。

【挭】カウ、キヤウ。古杏切。梗。㊀みだる(攪)㊁たわむ(撓)。

【挮】㋑テイ、タイ。他禮切。薺。㋺他計切。霽。㋑涙なさる㋺ぬぐふ(拭)。

【振】㋑シン。之刃切。震。㋺之人切。眞。㋩止忍切。軫。㋑㊀すくふ(救、拯)㊁ふるふ(奮)㊂さく(裂)㊃うごく(動)㊄とし(迅)㊅ととのふ(整)㊆ひらく(發)㊇をさむ(收)㊈やむ(止)㊉いにしへ(古)⑪むれとぶ貌㋺㊀あつし(厚)㊁さかんなる貌㋩ひとへぎぬ(袗に通ず)。

【振天】シンテン 天上にまでふるふ。孔子家語に「子路曰、願得ㇾ白羽若ㇾ月、赤羽若ㇾ日、鐘鼓之音、上振ニ於天一、旌旗繽紛、下蟠ニ於地一」

【振古】シンコ おほむかし。詩經に「匪ニ且有ㇾ且、匪ニ今斯今一、振古如ㇾ茲」

【振怖】シンフ ふるひおそる。史記に「燕王誠振ニ怖大王之威一」

【振衣】シンイ ころもをふるふ。世說に「宋景文云、左太沖詩、振ㇾ衣千仞岡、濯ㇾ足萬里流、使ニ人飄飄有ニ世表意一」

【振武】シンブ たけき力をふるひあらはす。國語に「而後振ニ武于外一」

【振刷】シンサツ 志をはげまして惡をのぞく。蘇轍「振刷磨淬、不ニ自屈服一」

【振卹】シンジユツ あはれみめぐむ。(賑卹)。南史に「會ニ年荒一、計ㇾ口振卹」

【振恐】シンキヨウ ふるひおそる。史記に「秦武陽色變振恐」

【振施】シンシ にぎはしほどこす。ほどこし。漢書に「振ニ施賓客一、家無ㇾ所ㇾ餘」

【振振】シンシン ㊀仁厚なる貌。詩經に「宜爾子孫振振兮」㊁盛んなる貌。左傳に「龍尾伏ㇾ辰、均服振振」

【振旅】シンリヨ いくさに勝ち兵ををさめて還る。左傳に「三年而治ㇾ兵、入而振旅」

【振掉】シンテウ ふるふ。(搖掉)。蘇轍「海水振掉魚龍驚」

【振毫】シンガウ ふでを揮ふ。ものを書く。宋書に「整ㇾ笏振ㇾ毫、已議ニ於帷筵之上一」

【振救】シンキウ ほどこしすくふ。漢書に「開ニ府庫一振救」

【振揚】シンヤウ ふるひあがる。ふるひあぐ。晉書、謝琰傳に「宜下振ニ揚仁風一、開中其自新之路上」

【振肅】シンシユク ふるひつつしむ。北史に「于ㇾ是朝野振肅」

【振貸】シンタイ にぎはしかす。晉書、王羲之傳に「時東土饑荒、羲之輒開ㇾ倉振貸」

【振萬】シンバン 身をうごかし舞ふ。宋史に「振萬方明ㇾ德、疾徐咸可ㇾ觀」

【振慄】シンリツ ふるひをののく。史記に「三軍之士皆振慄」

【振撫】シンブ すくひいたはる。(拯撫)。晉書に「曰ニ陰德陽德一、主ニ周急振撫一」

【振賚】シンライ にぎはしたまふ。北史、袁翻傳に「後蕭寶夤大敗ニ于關西一、翻請爲ニ西軍死亡將士一擧ㇾ哀、存而還者、並加ニ振賚一」

【振厲】シンレイ ふるひいさむ。范鎭「威振厲、氣物鬱」

【振廩】シンリン 救助米を與ふ。後漢書、和帝紀に「開ㇾ倉振廩三十餘郡」

【振盪】シンタウ ふりうごかす。

【振奮】シンフン 氣力。韋應物「翕習英豪集、振奮士卒驍」

【振擊】シンゲキ ふるひうつ。蔡邕「揚波振擊、龍躍鳥震」

【振濟】シンサイ にぎはしすくふ。魏志に「振ニ濟貧乏一、通ニ共有無一」

【振駭】シンガイ ㊀ふるひおどろく。王粲「禽獸振駭、魂亡氣奪」㊁涙わきあがる。晉書に「風波振駭、雲霧杳冥」

【振鐸】シンタク 鐸(古昔、教令を宣告するに、始と終とに振りし大鈴)をふり鳴らす。周禮に「司馬振ㇾ鐸、羣吏作ㇾ旗」

【挹】イフ、オフ。乙及切。緝。㊀くむ(抒酌)㊁こまぬく(揖に通ず)㊂しりぞく(退)。

【挹注】イフチユウ くみそそぐ。詩經に「泂ニ酌彼行潦一、挹ㇾ彼注ㇾ茲」

【挹酌】イフシヤク くむ。潘岳「所下以挹ニ酌洪流一、含中咀英芳上」

【挹損】イフソン おさへて我儘なることをなさず。魏志、甄皇后傳注に「后寵愈隆、而彌自挹損」

【挰】㋑タウ、ヂヤウ。直庚切。庚。㋺テイ、チヤウ。馳貞切。庚。㊀えらぶ(擇)㊁あぐ(擧)。

【挱】㋑サ。桑何切。歌。㋺師加切。麻。㋑すりもむ(摩挲)㋺ひらく貌(挓挱)。

【挴】バイ。莫罪切。賄。むさぼる(貪)。

【挵】ロウ。弄に同じ。

【挶】キヨク、コク。居玉切。沃。㊀かかふ(拘)㊁あげもつ(抱持)㊂つちふご(舁土の器)。

【挺】㋑テイ、ヂヤウ。徒鼎切。迥。㋺タウ、ヂヤウ。丈梗切。梗。㋑㊀ぬく(拔)㊁ぬきんづ㊂なほくもつ(直持)㊃ゆるやかなり(寬)㊄ひく(引)㊅なほし、ただし(直)㋺なほし(直)。

【挺出】テイシユツ ぬきんでいづ。杜甫「自謂頗挺出、立登ニ要路津一」

【挺立】テイリフ ぬきんでてたつ。南史、徐孝嗣傳に「孝嗣幼而挺立」

【挺身】テイシン 身をぬき出す。蘇軾「拔ㇾ劍而起、挺ㇾ身而鬭」

【挺秀】テイシウ ぬきいづ。すぐる。晉書に「英姿挺秀、藉ニ甚一時一」

【挺拔】テイバツ ぬきいづ。宋史、沈遼傳に「幼挺拔不羣」

【挺特】テイトク 前に同じ。唐書に「吳保安字永固、魏州人、氣挺特不ㇾ俗」

【挺挺】テイテイ ただしき貌。なほき貌。左傳に「周道挺挺、我心炯炯」

【挺傑】 すぐれぬきんづ。又、その人。晉書に「英姿挺傑、有二雄霸之風一」

【挺然】 ぬきいづる貌。晉書に「方正亮直、挺然不レ羣」

【挺槍】 やりをつき出す。唐書に「躍レ馬挺レ槍、刺二於萬衆中一」

【挺劍】 つるぎをぬく。戰國策に「唐雎挺レ劍而起」

【挺戰】 身をぬきんでて戰ふ。南史に「單身挺戰、衆莫二能當一」

【挺穟】 稻の穗ぬき出づ。ぬき出でたる稻の穗。潘岳「瞻二挺穟之傾掉一」

【挻】 ㊥セン。尸連切。先。㊦テン。抽延切。先。㊤エン。夷然切。先。

㊥一ひく(引)二とる(取)三のがる(遁)四てをうつ(擊掌)五やはらぐ(柔和)六もむ(揉)七ながし(長)八一とる(取)二あまれし(周)。

【挼】 ㊥ダ、ナ。奴禾切。歌。㊦サイ、セ。蘇回切。灰。㊤ダイ、ネ。奴回切。灰。㊥キ。羈規切。支。㊦スキ。宣錐切。支。㊤ラ。盧臥切。箇。㊥ダ、ナ。奴臥切。箇。

㊥もむ(按揉)㊦なえ一うつ(擊)二する(手摩)㊤神に供ふる柔穆の屬㊥もむ(捼)㊦をさむ(理)㊤おす(推)。

【挼祭】 神に食物を供ふ。儀禮に「祝命挼祭」注に「挼祭、祭レ神食也」

【挼穗】 稻のほをうつ。唐書に「百姓挼穗、以給二禁軍一」

【挽】 ㊥ベン、モン。武遠切。阮。㊦バン、マン。無販切。願。㊤ベン、メン。美辨切。銑。

一ひく(引)二すすむ(進)。

【挽引】 重き物などをひく。禮記、疏に「力政、挽引築作之事」

【挽回】 もとにひきもどす。

【挽車】 死人をのするくるま。

【挽牽】 ひく。一統志に「舟行挽牽五百人方可レ渡」

【挽歌】 葬る時に柩の車の綍を牽く者の歌。とむらひうた。晉書に「挽歌出二于漢武帝一」

【挻】 ㊥カウ、キャウ。丘耕切。庚。

一ことのれ(琴聲)二ひきのぶ(引伸)。

【揈】 一テフ。的協切。葉。

一ひねる(拈)二たもつ(固持)。

㊥ケフ、ゲフ。胡頰切。葉。㊦セフ。尸牒切。葉。㊤サフ、セ。蘇回切。灰。㊥キ。羈規切。支。㊦スキ。宣錐切。支。㊤ラ。盧臥切。箇。㊥ダ、ナ。奴臥切。箇。

㊥もむ(按揉)㊦なえ一うつ(擊)二する(手摩)㊤神に供ふる柔穆の屬㊥もむ(捼)㊦をさむ(理)㊤おす(推)。

【挼祭】 神に食物を供ふ。儀禮に「祝命挼祭」注に「挼祭、祭レ神食也」

【挼穗】 稻のほをうつ。唐書に「百姓挼穗、以給二禁軍一」

【挽】 ㊥ベン、モン。武遠切。阮。㊦バン、マン。無販切。願。㊤ベン、メン。美辨切。銑。

一ひく(引)二すすむ(進)。

【挽引】 重き物などをひく。禮記、疏に「力政、挽引築作之事」

【挽回】 もとにひきもどす。

【挽車】 死人をのするくるま。

【挽牽】 ひく。一統志に「舟行挽牽五百人方可レ渡」

【挽歌】 葬る時に柩の車の綍を牽く者の歌。とむらひうた。晉書に「挽歌出二于漢武帝一」

【挻】 ㊥カウ、キャウ。丘耕切。庚。

一ことのれ(琴聲)二ひきのぶ(引伸)。

【揈】 一テフ。的協切。葉。

一ひねる(拈)二たもつ(固持)。

㊥ケフ、ゲフ。胡頰切。葉。㊦セフ。尸牒切。葉。㊤サフ、セ。蘇回切。灰。㊥キ。羈規切。支。㊦スキ。宣錐切。支。㊤ラ。盧臥切。箇。㊥ダ、ナ。奴臥切。箇。

㊥もむ(按揉)㊦なえ一うつ(擊)二する(手摩)㊤神に供ふる柔穆の屬㊥もむ(捼)㊦をさむ(理)㊤おす(推)。

【挼祭】 神に食物を供ふ。儀禮に「祝命挼祭」注に「挼祭、祭レ神食也」

【挼穗】 稻のほをうつ。唐書に「百姓挼穗、以給二禁軍一」

【挽】 ㊥ベン、モン。武遠切。阮。㊦バン、マン。無販切。願。㊤ベン、メン。美辨切。銑。

一ひく(引)二すすむ(進)。

【挽引】 重き物などをひく。禮記、疏に「力政、挽引築作之事」

【挽回】 もとにひきもどす。

【挽車】 死人をのするくるま。

【挽牽】 ひく。一統志に「舟行挽牽五百人方可レ渡」

【挽歌】 葬る時に柩の車の綍を牽く者の歌。とむらひうた。晉書に「挽歌出二于漢武帝一」

【揈】 一テフ。的協切。葉。

一ひねる(拈)二たもつ(固持)。

㊥ケフ、ゲフ。胡頰切。葉。㊦セフ。尸牒切。葉。㊤サフ、セ。蘇回切。灰。㊥キ。羈規切。支。㊦スキ。宣錐切。支。㊤ラ。盧臥切。箇。㊥ダ、ナ。奴臥切。箇。

㊥もむ(按揉)㊦なえ一うつ(擊)二する(手摩)㊤神に供ふる柔穆の屬㊥もむ(捼)㊦をさむ(理)㊤おす(推)。

【挼祭】 神に食物を供ふ。儀禮に「祝命挼祭」注に「挼祭、祭レ神食也」

【挼穗】 稻のほをうつ。唐書に「百姓挼穗、以給二禁軍一」

【挽】 ㊥ベン、モン。武遠切。阮。㊦バン、マン。無販切。願。㊤ベン、メン。美辨切。銑。

一ひく(引)二すすむ(進)。

【挽引】 重き物などをひく。禮記、疏に「力政、挽引築作之事」

【挽回】 もとにひきもどす。

【挽車】 死人をのするくるま。

【挽牽】 ひく。一統志に「舟行挽牽五百人方可レ渡」

【挽歌】 葬る時に柩の車の綍を牽く者の歌。とむらひうた。晉書に「挽歌出二于漢武帝一」

【揈】 一テフ。的協切。葉。

一ひねる(拈)二たもつ(固持)。

㊥ケフ、ゲフ。胡頰切。葉。㊦セフ。尸牒切。葉。㊤サフ、セ。蘇回切。灰。㊥キ。羈規切。支。㊦スキ。宣錐切。支。㊤ラ。盧臥切。箇。㊥ダ、ナ。奴臥切。箇。

㊥もむ(按揉)㊦なえ一うつ(擊)二する(手摩)㊤神に供ふる柔穆の屬㊥もむ(捼)㊦をさむ(理)㊤おす(推)。

【挼祭】 神に食物を供ふ。儀禮に「祝命挼祭」注に「挼祭、祭レ神食也」

【挼穗】 稻のほをうつ。唐書に「百姓挼穗、以給二禁軍一」

【挾】 ㊥ケフ。胡頰切。葉。㊦セフ。尸牒切。葉。㊤サフ、セフ。于洽切。洽。㊥セフ。即協切。葉。

㊥一もつ(俾持)二おぶ(帶)三わきばさむ(披)四たすく(輔)五をさむ(藏)六まもる(護)七いだく(懷)八あふ(會)九やぶる(敗)十もつ(持)㊤一あまれし(洽に同じ)二めぐる(匝)三十干を甲の日より數へて次の甲の日に至る迄の稱、卽ち、十日(挾日)。

【挾日】 十日間の稱。周禮に「使二萬民觀二治象一、挾日而斂レ之」

【挾月】 つきかげをいだく。風物を樂しむ義にいふ。宋史に「軫レ風挾レ月、車駕凌レ雲」

【挾功】 いさをにほこる。陸機「挾レ功震レ主、自レ古所レ難」

【挾持】 はさみもつ。史記に「以二帝王術一挾二持浮說一」

【挾格】 規則を執る、卽ち規則に基づく義。唐書、崔鄲傳に「每レ擬レ吏親挾格、褒黜必當」

【挾提】 箸の俗稱。禮記、注に「今人或謂レ箸爲二挾提一」

【挾琴】 ことをたづさふ。江總「風流挾レ琴婦」

【挾貴】 富貴をたのみて人におごる。孟子に「不レ挾レ長、不レ挾レ貴」

【挾義】 正しき道をふみ行ふ。韓詩外傳に「鳳象戴レ德負レ仁、抱レ忠挾レ義」

【挾輔】 たすく。後漢書に「宜レ還二本朝一、挾輔王室」

【挾勢】 勢威をたのみとす。唐書に「大吏邊章簡、挾レ勢肆貪」

【挾纊】 わたを身につく。左傳に「楚子伐レ蕭、師人多レ寒、王巡二三軍一、拊而勉レ之、三軍之士、皆如レ挾レ纊」

【挾書律】 書物をもつことを禁ずる法令。秦の時に設け、漢の惠帝四年に

之を除さたり。

【挿】 サフ、セフ。插の俗字。

【捀】 ㊥ホウ、フ。數容切。冬。

㊦房用切。宋。

一たてまつる、ささぐ(奉)二かぞふ。

【捁】 ㊥カウ、ケウ。古巧切。巧。

㊦コク。枯沃切。沃。

㊥みだる(攪に同じ)㊦うつ(打)。ゴ、グ。五故切。遇。

【捂】 一ふる(抵觸)二むかふ(逆)三ささふ(支拄)。

【捃】 ㊥クン、コン。居運切。問。

㊦擧蘊切。吻。

ひろひとる(拾取)。

【捃採】 ひろひとる。多くの書中の要所を取り集む。北史、周世宗紀に「捃二採衆書一」

【捃摭】 前に同じ。周書、熊安世傳に「討二論圖緯、捃二摭異聞一」

【捃拾】 とりあつむ。蘇味道「野童來捃拾、田叟去謳吟」

【捄】 ㊥グ。恭于切。虞。㊦キウ、ジ。居尤切。尤。㊤居又切。宥。

㊥一つちなもる二かきあつむ(捋)㊦ながし㊤一すくふ(救に同じ)二とどまる(止)三まもる(護)。

【捅】 ㊥トウ、ツ。他孔切。董。㊦ソウ、ス。損動切。董。

㊥一すす

む(進)二ひく(引)㊤うつ(敲に同じ)。

【掘】 ㊥コン、ゴン。胡昆切。元。

㊦コン。苦本切。阮。㊤苦悶切。

㊥一とる(取)二くむ(抒、願。

墓)三おす(掘に同じ、推)㊦一しむ、うつ、たたく二しまる三ひとし(齊)。

【掘上】 しばる。くくる。

【掘縛】 くつをたたく。孟子に「皆衣レ褐掘レ履、織レ席以爲レ食」

【掘逼】 しまりかたまる。詩經、疏に「掘逼、而密緻」

【掘縛】 ㊥クワク、キャク。呼麥切。陌。

【掘逼】 ㊥カク、キャク。郝格切。陌。

【抹】 ㊥セキ、シャク。七迹切。陌。

㊦さく(裂)㊤ほる(堀)㊥のぞきはらふ(除掇)。

【捄】 ㊥ト、ヅ。同都切。虞。

㊦ヤ。余遮切。麻。㊤チョ。抽居切。魚。㊥タ、デ。直加切。麻。

一ふしひく(臥引)二ひく(引)三くむ(抒)㊤のぶ(擢)㊥なげうつ(擲)。

【捉】 一とる(握)二にぎる(握)三からむ(搦)四とらふ(捕)。

【捉捕】 とらふ。元稹「捉捕復捉捕、莫レ捉二狐與レ兎一」

【捉驛】 州縣の富人官命をうけて郵遞をあつかふ者。唐書に「初州縣取二富人一督二漕輓一、謂二之船頭一、主二郵遞一、謂二之捉驛一」

【捊】 ㊥ホウ、ブ。蒲侯切。尤。㊦フウ、フ。房尤切。尤。㊤フ。芳無切。虞。㊥拾に同じ。

㊦一ひきとる(引取)二すくふ(掬)㊤うつ(擊)。

【捊】 ㊥ラッ、ラチ。郎括切。曷。

㊦レッ、レチ。龍輟切。屑。

㊥一とる(取)二つまむ三なづ、する(摩)㊦とる、つまむ。

【捊采】 とる。詩經に「菀彼柔桑、其下侯旬、捊二采其劉一、瘼二此下民一」

【捊摩】 てにとりてなづ。

【捌】 ㊥ハッ、ハチ。布拔切。黠。

㊦ヘッ、ヘチ。必結切。屑。

㊤ハッ、ヘチ。百轄切。黠。

㊥一やぶる(扒に同じ、破)二うつ(擊)三わかつ(分)四やつ、數字の八に代へ用ゐる㊦一もとる(拗に同じ、捩)二さく(割)三わかつ(分)㊤さらひ(捌把)。

【捍】 ㊥カン。侯翰切。翰。㊦カン、ゲン。戶版切。濟。

一ふせぐ(扞)、まもる二ゆごく(拾)三たけし(猛、雕捍)四うごかす(捍撥)。

【捍塞】 ふせぎふさぐ。魏書、常景傳に「杜洛周反、景兼二尙書一爲二行臺一、與幽州都督平北將軍元譚一禦之、詔レ景出中險路之處、悉令二捍塞一」。

【捍衛】 ふせぎまもる。

【掟】 セン。旋の俗字。

【捐】 ㊀サウ、セウ。師交切。肴。㊁所教切。效。㊂セウ。思邀切。蕭。㊃一えらぶ(選)二かる(芟)三かすむ(掠)四ばらふ(拂)五一うつ(擊)二ささふ(支)㊅のぞく(除)。

【捐毬】 まりなうつ。張祜「白馬頓紅纓、捐毬紫袖輕」

【捏】 デツ、ネチ。乃結切。屑。一おす(捺)二からむ(搦)三ひねりあつむ(捻聚)。

【捉】 ㊀トウ、ツ。大透切。宥。㊁短に同じ。㊂よすくひ(四匊)。

【揀】 ㊀ショウ、シュ。荀勇切。腫。㊁ショ、ソ。所據切。御。㊂シュ、ス。色句切。遇。㊃ショク、ソク。輸玉切。沃。㊄ソウ、シュ。先侯切。尤。㊅一つつしむ(竦)に同じ、敬)二あぐ(上)三うごく(動)㊅よそふ(裝)㊆一つかぬ(束)二しばる(縛)㊇とる(撤に同じ、取)。

【捐】 エン。與專切。先。一すつ(弃)二のぞきさる(除去)三へす(損)。

【捐忘】 すてわする。阮籍「吹噓誰以益、江湖相捐忘」

【捐命】 いのちをすつ。漢書に「故常願捐二一旦之命一」

【捐金】 于野、而遠尋師學」

【捐館】 死ぬること。史記に「春湯君捐二館舍一」

【捐瘠】 うち棄てられてやせ衰ふ。漢書に「國亡捐瘠者、以蓄積多而備先具也」

【捐軀】 みをすつ。曹植「憂國忘家、捐軀濟難」

【挪】 ㊀ヤ、エ。余遮切。麻。㊁ヨ。羊諸切。魚。㊂一もてあそぶ(弄)二あざける(嘲)㊃のこり(殘餘)。

【挩】 ㊀カク、コク。古岳切。覺。㊁サク、ソク。仕角切。覺。㊂のとる(角)㊃さす(刺)。

【捕】 ㊀ホ、ブ。蒲故切。遇。㊁搏に同じ。㊂一とる(取)二とらふ(擒捉)三うちとる(擊取)。㊃とらへてただす。漢書に「廣漢捕治」

【捕治】 とらふ。唐書に「逃竄捕捉、使二吏捕治一」

【捕捉】 とらへどころなく物の得がたきに喩ふ。漢書に「求之盪盪、如二係風捕影一、終不可得」

【捕魚】 おさへとる。(拿捕)。

【捕拿】 魚をとらふ。吳志に「司馬自未獲二囚一繫妻男一」

【捕影】 とらへどころなく物の得がたきに喩ふ。漢書に「求之盪盪、如二係風捕影一、終不可得」

【捕擊】 とらへうつ。漢書に「王尊爲二京兆尹一、捕二擊豪俠一」

【捕獲】 いけどる。ぶんどる。梅堯臣「津頭吏卒雖二捕獲一、官司直惜二儒衣裳一」

【捕獸】 けものをとらふ。後漢書に「捕二得其獸一、送二太官一」

【捕獵】 狩りとる。遼史に「咸雍六年、禁二漢人捕獵一」

【捖】 ㊀クワン、グワン。胡官切。寒。㊁戸管切。旱。㊂クワツ、ケチ。古刹切。黠。㊃一けづる(刮)二する(摩)㊄一うつ(擊)二する(摩)㊅刮に同じ。

【捗】 ㊀ホ、ブ。蒲故切。遇。㊁蓬逋切。虞。㊂チョク、チク。竹力切。職。㊃なさむ(收斂、捗據)㊄捗に同じ、亂草を收むはうつ(打)。

國訓 はかゆく、はかどる。

【挻】 ㊀ソン、スン。子寸切。願。㊁サイ、セ。祖回切。灰。㊂シュン。七倫切。眞。㊃サイ、スキ。子對切。隊。㊄一おす(推)二つかむ(掐)三ひらく(擠)四おさふ(按)㊅おす(推)。

【挵】 ㊀シュク。式竹切。屋。㊁抽に同じ。㊂ひく(引)。

【挵】 ケイ。挈に同じ。

八畫

【捋】 トク。他德切。職。うつ(打)。

【捥】 ㊀ワン。烏貫切。翰。㊁烏丸切。寒。㊂ウツ、ウチ。紆勿切。物。㊃ワン。烏管切。旱。㊄うで(腕に同じ)㊅ねぢ(捩)㊆とる(取)。

【捡】 キン、ゴン。渠金切。侵。一いそぎもつ(急持)二もつ、とる、とらふ。

【掇】 ㊀ヨ、オ。於許切。御。㊁依據切。御。うつ(擊)。

【拯】 タフ、ドフ。達合切。合。一ゆびぬき(縫指)二つつむ(韜)三おかす(冒)四うつす(摹)。

【捨】 ㊀タク、トク。竹角切。覺。㊁ソク、ゾク。作木切。屋。㊂一なげうつ(擲)二おす(推)四木を刺する。ふる(鐫)㊅うつこふ(擊聲)。

【捩】 ㊀トク。都木切。屋。

【揔】 わかつ(分)。

【捫】 ㊀ホウ、フ。敷奉切。腫。㊁一ささぐ二すくふ(掬)。

【掛】 ケイ。挈に同じ。

【捭】 ㊀ハイ、ヘ。補買切。蟹。㊁ヘイ、ハイ。普米切。薺。㊃ハク、ヒャク。博厄切。陌。㊄一うつ(擊)二なげうつ(擲)三ひらく(擺に通ず)㊅こぼつ(敕に同じ、毀)㊆さく(拆)、ひらく。

【捭】 ㊀キョ、コ。斤於切。魚。㊁一はたらく(口と手と共に作す)二手を擧げ持つ㊃一よる(據)二てのやまひ(手病)三すぐなるうなじ(直項)。

國訓 すう。

【据】 ㊀居御切。御。

【揉】 ヲ。鄔果切。哿。つむ(摘)。

【捱】 ガイ、ゲ。宣佳切。佳。一こばむ(拒)二のびゆるむ。

【捲】 ㊀ケン、ゴン。巨員切。先。㊁ケン、クワン。居轉切。霰。㊂苦遠切。阮。㊃一いきほひ(氣勢)二いさむ三こぶし(拳)四力を用ゐる貌㊅一まく(卷に通ず)二なさむ(收)㊆うつ(搏)。

【捲手】 にぎりこぶし。淮南子に「五指之更彈、不若二捲手之一拳一」

【捲捲】 力を用ゐて勞する貌。莊子に「捲捲乎后之爲人」

【捲結】 まきむすぶ。釋名に「氣在外捲二結之一也」

㊀ふせぐ(捍)㊁つく(著)㊂なづ(摺)。ヒ。必至切。寘。あたふ(畀に同じ)。

【捭】 ㊀ハイ、ヘ。補買切。蟹。㊁ヘイ、ハイ。普米切。薺。㊃ハク、ヒャク。博厄切。陌。㊄一うつ(擊)二なげうつ(擲)三ひらく(擺に通ず)㊅こぼつ(敕に同じ、毀)㊆さく(拆)、ひらく。

【据】 ㊀キョ、コ。斤於切。魚。㊁一はたらく(口と手と共に作す)二手を擧げ持つ㊃一よる(據)二てのやまひ(手病)三すぐなるうなじ(直項)。

國訓 すう。

【揉】 ヲ。鄔果切。哿。つむ(摘)。

【捱】 ガイ、ゲ。宣佳切。佳。一こばむ(拒)二のびゆるむ。

【捲】 ㊀ケン、ゴン。巨員切。先。㊁ケン、クワン。居轉切。霰。㊂苦遠切。阮。㊃一いきほひ(氣勢)二いさむ三こぶし(拳)四力を用ゐる貌㊅一まく(卷に通ず)二なさむ(收)㊆うつ(搏)。

【捲手】 にぎりこぶし。淮南子に「五指之更彈、不若二捲手之一拳一」

【捲捲】 力を用ゐて勞する貌。莊子に「捲捲乎后之爲人」

【捲結】 まきむすぶ。釋名に「氣在外捲二結之一也」

【捻提】しっかりと手ににぎる。後漢書、注に「捻提猶掌提也」

【捻髮】かみを結髮にくむ。

【捻鬟】すだれをまく。

【捻】ヘイ、ヒャウ。柄に同じ。

【捻】㊀テン。他典切。銑。㊁チン。丑忍切。軫。㊂燃に同じ。

㊃ろのぶ(伸)。

【捻】㊀スキ。主粲切。紙。㊁タ。都火切。哿。㊂一むちうつ、うつ(擊)二つく(擣)㊃ばかる(揣)。

【捻扑】むちうつ。(敲扑)。魏志に「加二其捻扑之罰一」

【捻打】前に同じ。南史に「捻二打之一、無二期度一」

【捻殺】むちにて打ちころす。北史、王文同傳に「文同至二河間一、召二郡官人一、小有二遲違一者、輒覆二面于地一、而捻二殺之一」

【捻鏈】むちうつ。(鞭鏈、答鏈)。晉書に「嫂捻二鏈婢一過レ苦」

【捷】㊀セフ。疾葉切。葉。㊁サフ、セフ。測洽切。洽。㊂一かり(獵)二ぶんどりもの(戰利品)三かち、かつ(尅、勝)四かちのしらせ(勝報)五數の名(三十六銖)六とし(疾)、はやし(急)七つづく(接續)㊃さしはさむ(插に同じ)。

【捷巧】すばやくしてたくみなり。管子に「有二大略一者、不レ可二貴以一捷巧一」

【捷成】すみやかに成る。荀子に「君子事業捷成」

【捷速】すばやし。南史、謝莊傳に「其捷速如レ此」

【捷步】すみやかにあゆむ。後漢書に「捷二步深林一、尚不レ密」

【捷勁】すばやくしてつよし。北史、眞臘國傳に「人形小而色黑、婦人亦有二白者一、悉拳髮垂レ耳、性氣捷勁」

【捷疾】すばやし。北史に「解悟捷疾、爲二同業所レ尚」

【捷徑】ちかみち。離騷に「夫唯捷徑以窘レ步」

【捷敏】さとし。(機敏、警敏)。新序に「聰明捷敏、人之美才也」

【捷書】かちいくさのしらせぶみ。蘇軾「捷書夜到二甘泉宮一」

【捷報】かちいくさのしらせ。滝水燕談に「未レ逾レ月、而捷報聞」

【捷獵】かたたがひ。洞簫賦に「羅鱗捷獵、參差也」

【捷點】すばやくしてさかし。周禮、注に「鴆鴆是小鳥捷點者也」

【捷】㊀トツ、トチ。他骨切。月。なめらかなり(滑利)。㊁ダツ、ナチ。奴曷切。曷。㊂おす、手にて重く按す㊃からめとる(搦拑)㊄書法の名(微しく斜なる字體、卽ち、人大などの類)。

【捻印】印をおす。

【捻落】(佛)地獄。(奈落)。名義集に「捻落迦、或那落迦、此云二不可樂一」

【捻】㊀デフ、ネフ。諸協切。葉。㊁デツ、ネチ。乃結切。屑。㊂ひれる(指捻)㊃おさふ(按)。

【捻】㊀ダ、ナ。奴禾切。歌。㊁ダイ、ネ。奴回切。灰。㊂セン、ネン。而宣切。先。㊃ズキ。儒鏈切。支。㊄ヲ。烏禾切。歌。㊅キ。於毀切。紙。㊆ジャ、ニャ。儒邪切。麻。㊇一くだく(摧)二する(兩手にて相切摩す)㊃する(手にて物を摩す)㊄一もむ(按)二そむ(揺)㊅めぐらす㊆もつ(捫)㊇闕中の語にて、もむ(揉)。

【捻】㊀ツツ、ツチ。昨沒切。月。㊁シュツ、シュチ。卽律切。質。㊂サイ、セ。祖對切。隊。㊃ツツ、ツチ。蘇骨切。月。㊄一もつ(持)二てにもつ(手持)三ぬきとる(拔取)四むかふ(交對)五ふる(觸)㊅おす(按に同じ、推)㊆する(摩)。

【捻抑】とりおさふ。漢書に「不レ使二捻抑而刑一之也」

【捻胡】くびすぢをつかむ。漢書、金日磾傳に「捻レ胡投二何羅殿下一」注に「胡頸也、捻二其頸一而投二殿下一也」

【捻搏】頭髮をつかみて手にて擊つ。荀子に「詈侮、捻搏、捶笞、臏脚、斬斷、枯磔、藉靡、舌鐔、是辱之由レ外至者也」

【捻搔】草の上をふみあるく聲の形容。康熙字典に「捻搔行レ草聲」

【捻】㊀ワツ、ワチ。烏括切。曷。㊁ワツ、ワチ。烏八切。黠。㊂カツ、ゲチ。下瞎切。黠。㊃ワン。烏版切。潸。㊄一かかぐ(招)二ひく(援)㊅くじる(抉)㊆けづる(搔に同じ、搔)㊇とる(取)。

【捻】セイ、サイ。先齊切。齊。

栖に同じ。すむ、すみか。

康熙字典に「按ずるに、棲に从ふを正しと爲す」

【捻】クワク、コク。古獲切。陌。

掴に同じ。うつ(打)。

【捻】㊀ケン、ゴン。虛言切。元。㊁キン、コン。許斤切。文。㊂キツ、コチ。許訖切。物。㊃コン、ゴン。胡恩切。元。㊄一あぐ(擧)、かかぐ二たかくそびゆ、そばだつ㊅なあぐ(擧)㊆根に同じ、ひく(引)。

【捻捻】高くそびゆる貌。韓愈「戈矛頭戟戟、鳧蛇首捻捻」

【捻腫】ふくれあがる。清異錄に「一日復作、左腮捻腫」

【捻舞】まひあがる。朱熹「空質麗二晴暉一、龍鸞共捻舞」

【捻搖】あがる。あぐ。吳萊「我將レ呼二巨鰲一、滄海欲二捻搖一」

【捻翻】はねかへす。はねかへる。指月錄に「大地捻翻無二覓處一」

【捻簸】あふりあがる。あふりあぐ。蘇軾「風颿助二凝冽一、幃帳困二捻旗一」

【捻】㊀チ、ヂ。直吏切。寘。㊁丈里切。紙。㊂ショク、ジキ。常職切。職。㊃一なぐ(投)㊄もつ(持)㊅つづく、杖に拄へらる。

【捻】㊀タウ、ヂャウ。除庚切。庚。㊁一ふる(觸)二つく(撞)。㊂タイ、デ。都猥切。賄。㊃タウ、ヂャウ。除耕切。庚。

【捻】㊀ひらく(排)㊁うく、うつ(打に同じ)。㊂ハウ、ヒャウ。北萌切。庚。㊃ヘイ、ヒャウ。卑正切。敬。

【捻】㊀一しむ、せしむ(抨に同じ)二はじく(弾に同じ)三したがふ(隨從)㊃一のぞく(除)二しりぞく。

【掃】㊀サウ、ソウ。蘇老切。皓。㊁一すつ(弃)二はらふ三はく四きよむ㊄先到切。號。㊅一なづ、する。

【掃地】一地をはらふ。殘るものなきにいふ。漢書に「上古之遺烈、掃レ地而盡矣」二地をきよむ。國史補に「焚二香掃地而坐」

【掃刷】はらふ。爾雅、注に「振訊技拭掃刷、皆所二以爲一潔清一」

【掃帚】はばき。書苑に「取二掃帚一沾二泥汁一、書レ壁」

【掃拭】けがれを去る。(拂拭)。李白「掃拭青玉壁、爲レ余署二金罇一」

【掃除】ちりをはらひのぞく。史記に「趙王、掃除自迎」

【掃清】はききよむ。李白「長嘯萬里風、掃二清胸中憂一」

【掃彗】はばき。爾雅、注に「其形孛孛如二掃彗一」

【掃滅】はらひほろぼす。元好問「溫柔與二敦厚一、掃滅不二復留一」

【掃滌】はらひきよむ。南史に「百年榛穢、一朝掃滌」

【掃灑】はきすすぐ。さうぢ。李白「爲レ余掃灑石上月」

【掃地畫】ことごとく滅びて一物をも留めず。漢書に「秦滅二六國一、上古遺烈、掃レ地盡矣」

【掃晴娘】てりてりばうず。陔餘叢考に「吳俗、久雨後、閨閤中有レ剪レ紙爲二女形一、手持二一帚一、懸二簷下一、以祈レ晴、謂二之掃晴娘一、按元刻、李俊民有二掃晴婦詩一、卷レ袖拳レ裳手持レ帚、挂向二檐空一便搖レ手、其形可二想見一也」

【掃愁帚】酒の異名。蘇軾「應レ呼二釣レ詩鈎一、亦號二掃愁帚一」

【掃二鬚塵】上官にこびへつらふ

ないふ。宋史、寇準傳に「初丁謂出二準門一、至レ參二政事一、甚謹、嘗會二食中書一、羮汙二準鬚一、謂起徐拂レ之、準笑曰、參政、國之大臣、乃爲二官長一拂レ鬚耶、謂愧レ之」

【掄】㋑ロン。盧昆切。元。㋺リン。龍春切。眞。㋑㊀えらぶ(擇)㊁つらぬく(貫)㋺えらぶ(擇)。

【掄擇】えらぶ。歐陽詹「班爾圖二永安一、掄擇期二精專一」

【掅】㋑セイ、シャウ。七正切。敬。㋺倩に同じ。㋑㊀もつ(持)㊁てにもつ(拵)。

【掴】㋑カウ。居郎切。陽。㋺古浪切。漾。あぐ(扛に同じ)。

【掇】㋑タツ、ダチ。都括切。曷。㋺テツ、テチ。陟劣切。屑。㋩セツ、セチ。朱劣切。屑。㋑㋺㊀とる、ひろひとる(拾取)㊁もむ(揉)㋩みじかし(糍に同じ、短)。

【掇拾】とりあつむ。楊基「明朝買レ魚期二再酌一、我自掇二拾山中薪一」

【掇擷】とる。(採擷)。吳憕「披レ條采二其華一、掇擷紛瑣碎」

【授】シウ、ジュ。是酉切。有。㊀あたふ(予)㊁つく(付)㊂さづく。

【授戒】〔佛〕戒律を授くるをいふ。戒律とは佛の制定したる禁戒威儀にして、五戒・八戒・具足戒等の品類あり。

【授命】いのちをなげ出してはたらく。論語に「見レ利思レ義、見レ危授レ命」

【授受】授くると受くると。孟子に「男女授受不レ親」

【授業】生業を與ふ。又、わざを教へさづく。漢書、董仲舒傳に「孝景時爲二博士一、下レ帷講誦、弟子傳以二久次一相授業、或莫レ見二其面一」

【授賞】たまものをさづく。公羊傳、注に「明君見レ勞授レ賞」

【掉】㋑テウ、デウ。徒弔切。嘯。㋺ダウ、ネウ。女教切。效。㋩ダク、ニョク。女角切。覺。㋑㊀うごかす(搖)㊁ふるふ(振)㊂ただす(正)㋺ふるふ(甄)㋩もつ、たもつ(持)、ふるふ。

【掉舌】したをふるふ。辯論す。蘇舜欽「掉レ舌滅二西寇一、畫レ地收二幽燕一」

【掉尾】㊀尾をふるふ。上林賦に「揵レ鰭掉レ尾、振レ鱗奮レ翼」㊁最後の活動。

【掉二三寸舌一】雄辯をふるふ。ふるって辯論す。事文類聚に「蒯通謂二韓信一曰、酈生一士、伏レ軾掉二三寸舌一、下二齊七十城一」

【掊】㋑ホウ、フ。歩侯切。尤。㋺ホウ、フ。普后切。有。㋩ヒウ、フ。房尤切。尤。㋥ハウ、ベウ。薄交切。肴。㋭フ、ホ。芳遇切。遇。㋬ホク、ボク。鼻墨切。職。㋣ハイ、ベ。蒲枚切。灰。㋑㊀をさむ、あつむ(收斂)㊁ふかし(深)㊂へす(減)、かく㋺うつ(擊)、さく(剖に同じ)㋩かく(把)㋥ひきとる(引取)㋭㋬たふす、たふる(仆、踣)㋣かつ(克)。

【掊克】苛税を取り立つ。又、そのもの。孟子に「掊克在レ位則有レ讓」

【掊摘】あつめひろふ。文心雕龍に「掊二摘千里一、其僞一突」

【掏】タウ、チャウ。中莖切。庚。ひく(引)。

【掌】シャウ、サウ。止兩切。養。㊀てのうち(手中)㊁たなごころ(手心)㊂つかさどる(主)㊃ささぐ(捧)。

【掌故】禮樂の故事をつかさどる者。東方朔「悉レ力莫レ之、困二於衣食一、或失二門戶一、使二蘇秦張儀與レ僕竝生二於今之世一、曾不レ得二掌故一」

【掌握】掌中ににぎる。漢書に「陸賈謂二陳平一曰、爲二社稷計一、在二兩掌握一」

【掌跡】てのひらのあと。述異記に「其掌跡猶在焉」

【掌統】つかさどりすぶ。唐書に「將軍各二人、掌二統北衙禁兵一」

【掌中珠】人の子を愛していふ。杜甫「掌中探見一珠新」

【掍】コン。古本切。阮。㊀まじふ(混)㊁あはす(合)㊂おこる、おこす(起)。

【掎】㋑キ。擧綺切。紙。㋺キ、ギ。居宜切。支。㋩イ。隱綺切。紙。㋑㋺㊀かたかたひく(偏引)㊁かたあしなひく㊂はなつ(發)㊃したがふ㊄ぬく㋩正しからざること(掎匜)。

【掎角】鹿を捕ふるにその前をつなぐを、つのとるといひ、その後をつなぐを、あしとるといふ。前後相應じて敵に當るにいふ。左傳に「譬如レ捕レ鹿、晉人角レ之、諸戎掎レ之」

【掎摭】ひきひろふ。唐史に「楊國忠爲二林甫一掎摭」

【掏】タウ、ドウ。徒刀切。豪。㊀えらぶ(擇)㊁とる(抒)㊂くじる(掐)。

【掏兒】すり。

【掐】カフ、コフ。乞洽切。洽。つめにてさす(爪刺)。

【掐摘】爪にてかきとる。顏氏家訓に「吳郡陸襄父閑、被レ刑、終身布衣、蔬飯薑菜有二切割一、皆不レ忍レ食、居家惟以二掐摘一供レ厨」

【掑】キ、ギ。渠之切。支。いさまし(堅勇、拎掑)。

【排】㋑ハイ、ベ。蒲皆切。佳。㋺歩拜切。卦。㋑㊀おす(推)㊁しりぞく(斥)㊂つらぬ(列)㊃おく(安置)㊄たて(楯、彭排)㋺㊀つく(強突、排揩)㊁ふいがう(鞴に通ず)。

【排斥】おししりぞく。陸游「歛人汪臺符、投二書於烈祖一、宋齊丘忌二其名一、頗排二斥之一」

【排列】ならべつらぬ。

【排忌】おしのけてきらふ。五代史に「與二蘇逢吉等一內相排忌」

【排抑】おさへとどむ。溫子昇「便欲二望レ風排抑一」

【排空】そらをおしわく。魏濟「早晚時應レ至、輕舉一排レ空」

【排穿】おしわけひらく。皮日休「其祀四百餘、作者如二排穿一」

【排突】おしわけつきあたる。南史に「會偶象驚、排二突陸衛一」

【排卻】おししりぞく。參同契に「排二卻衆陰邪一、然後立二正陽一」

【排律】漢詩の一體、五言又は七言の對句を六句以上偶數に排列したるものの稱。

【排除】はらひのく。

【排陷】しりぞけおとしいる。吳志に「短二毀大臣一、排二陷無辜一」

【排虛】そらをおしわく。淮南子に「鳥排レ虛而飛」

【排詆】おしのけそしる。趙汝鐩「喧呼互排詆」

【排毀】前に同じ。拾遺記に「妙年者爭嫉レ之、競相排毀」

【排置】ならべおく。梅堯臣「收拾不二復嘗一、排二置屋角邊一」

【排斡】おしめぐらす。韓愈「力雖二能排斡一、雷電怪二詞詬一」

【排擊】おしひらきうつ。漢書に「排擊剌割、而衆理解也」

【排擠】おしのく。史記に「張湯爲二廷尉一、治二淮南獄一、排二擠莊助一」

【排擯】おししりぞく。李谿「西漢則王氏擅レ朝、排二擯宗室一」

【排欄】布帛等のへり。宋史に「鹵簿旗楷錯采爲レ之、排欄以二黃紫赤三色一」

【排闥】勢よくとびらをひらく。史記、樊噲傳に「噲乃排レ闥直入」

【掓】㋑シュク、ソク。式竹切。屋。㋺チク、トク。張六切。屋。ひろふ(叔に同じ、拾)。

【掤】㋑テウ、デウ。直紹切。篠。㋺田聊切。蕭。㋑さす(刺)㋺㊀かかぐ(挑に同じ)㊁みだす(攪)㊂めぐる。

【掔】㋑カン、ケン。丘閑切。刪。㋺ケン。苦堅切。先。㋑㊀かたし(固)㊁あつし(厚)㋺㊀ひきさる㊁もつ(持)㊂うつ(擊)㊃かたし㊄あつし。

【掕】㋑リョウ。里孕切。徑。㋺ロウ。盧登切。蒸。㋑馬を止む㋺とどむ(止)。

【掉】タイ、テ。ツヰ、ズヰ。撻に同じ。

【掖】 エキ、ヤク。羊益切。陌。
一わきばさむ（挾持）二たすく（挾扶）三わき（腋）四宮殿の旁舍、又、轉じて、宮庭の稱。
【掖門】 大門にそへる小門。漢書に「太微南四星、執二法中端門左右掖門一」
【掖庭】 おくごてん。（後庭）。漢書に「掖二除掖庭之亂獄一、去二炮烙之陷阱一」
【掖誘】 助けみちびく。（誘掖）。
【掖闈】 王宮の門。又、王宮のうち。（禁闈、皇闈）。盧藏用「左右端揆、盡二訏謨之略一、東西掖闈、備二忠讜之美一」
【掖】 ㊀ア、エ。倚下切。馬。㊁ア。倚可切。曾。㊂ア、エ。衣駕切。禍。
㊀㊁一うごかす 二とる ㊂あたふ。
【掘】 ㊀クツ、ゴチ。渠勿切。物。
㊁コツ、ゲチ。胡骨切。月。
㊂ケツ、ゲツチ。其月切。月。㊃コツ、ゴチ。五忽切。月。
㊀一ほる（掃）二つく（突）三ひとりだち（孤に同じ）四つくす（盡）五うがつ（穿）
㊁一あぐ（揚）二あな（窟に通ず）㊂穴をあく ㊃兀に通じ用ゐる。
【掘井】 ねどをほる。孟子に「有レ爲者譬若レ掘レ井」
【掘起】 おこる。
【掘穿】 ほりうがつ。（穿掘）。
【掘開】 ほりひらく。
【掘鑿】 ほりうがつ。

【掙】 ㊀サウ、シャウ。初耕切。庚。
㊁側迸切。敬。
㊂さす（刺）㊃さざる（刺）。
【掛】 ㊀クワイ、ケ。古賣切。卦。
一わかつ（別）二がく、かかる（挂に同じ）。 國讀 かかり。
【掛錫】 僧の止り住する處。釋氏要覽に「今僧止所住處、名二掛錫一」
【掛】 ㊀ゲイ、ガイ。吾禮切。霽。
㊁ケイ、ガイ。研計切。霽。㊂ゲ
【掛】 ㊀なぞらふ（擬）二したがふ（捉）三からむ（搦）㊃ひねり
【掛】 ㊀コク。蔑北切。職。
㊁クワク。呼麥切。陌。㊂キョク。
【掛】 ㊀一まどふ（或、惑に通ず）二くらし（惜）㊂さく（裂）㊃さ
ゐ（裂聲）。
【掛】 ㊀エン、オン。以贍切。豔。
㊁セン、ソン。舒贍切。豔。
【掛】 ㊀のぶ（舒）二かがやく（顯）㊂うごく（搖動）、ひらめく（搖）。
【掛】 ㊀セイ、ネ。而稅切。霽。
㊁ザ、ニ。女恚切。眞。
【掛】 ㊀とる ㊁扒ゐいる（內）。
【掛】 ㊀タウ、チャウ。陟盛切。梗。
ふるひはる（揮張）。國讀 おきて。

【掠】 ㊀リャク。力灼切。藥。
㊁リャウ。力讓切。漾。㊂一うばひとる（奪取）二かすむ（抄掠）三えり
とる（捎取）四かする（拂過）五書法の名（長撇）㊂一むちうつ（搒笞）二うばふ。
【掠水】 みづの上をかする。杜牧「沙上鷺鴻掠水分」
【掠刼】 かすめおびやかす。世說に「戴淵便二少年掠刼一」
【掠治】 むちうちて罪を治む。漢書に「廣機吏掠治」
【掠笞】 むちうつ。史記に「執二張儀一掠笞數百不服」
【掠盜】 かすめぬすむ。北史に「唯以二掠盜一爲賞」
【掠奪】 かすめうばふ。（略奪）。申鑒に「暴迫而取之、謂二之掠奪一」
【採】 サイ、セイ。此宰切。賄。
一とる（取）二つむ（摘）。
【採用】 とりもちゐる。
【採拾】 とりをさむ。ひろふ。（捃拾、掇拾）。後漢書に「嘗採拾以爲養」
【採斫】 てにとりてきる。蘇軾「窮探到二翠背一、採二斫黃楊子一」
【採琢】 えらびみがく。晉書に「荊璞發二採琢之榮一」
【採荷】 はちすをとる。梁書、江革傳に「年十七作二採荷詞一」
【採掠】 人をころし財をうばふ。晉書に「採掠無レ所レ獲、軍中大飢」
【採集】 とりあつむ。
【採銅】 銅をとる。唐書に「元和中、歲採二銅二十六萬有奇一」
【採摭】 ひろひとる。（拾摭）。書經、序に「採二摭羣言一」
【採摘】 とりつまむ。李益「採摘愧二芳鮮一、奉レ君歲暮節」
【採獲】 とりをさむ。唐書に「採獲刋緩爲二五十篇一」
【採嶽】 つみとる。謝朓「遇レ君時採嶽、玉座奉二金巵一」
【採藥】 くすり草をつみとる。晉書に「康嘗採レ藥游二山澤一」
【琳】 一うつ（打）二ころす（殺）。
【琳】 ㊀タン、トン。他含切。覃。
㊁セン、セン。時占切。鹽。
【探】 ㊀一さぐる、さがす 二うかがふ（伺）三もとむ（索）四こころみる（試）㊂とる（取）。
【探友】 友人をたづぬ。
【探求】 さぐりたづぬ。孫賓「且於二探求一爲レ廣」
【探究】 さぐりきはむ。元行冲「雖レ存二探究一、杳謀靡レ所」
【探抉】 さがしえぐる。（搜抉）。柳宗元「探抉遯隱」
【探花】 はなをさぐる。皮日休「野客書に「採集」

正閑移レ竹遠、幽人多病探レ花稀」
【探看】 さがしみる。李商隱「青鳥殷勤爲二探看一」
【探索】 さぐりもとむ。易經に「探レ賾索レ隱、鉤レ深致レ遠」
【探討】 さぐりたづぬ。（幽討）。孟浩然「探討意未窮、迴艇夕陽晚」
【探尋】 さがしたづぬ。法書要錄に「探二尋源流一、志逸肥遁」
【探湯】 一熱湯をさぐる。恐れ戒しむる意。論語に「孔子曰、見レ善如レ不レ及、我國にて、古見二不善一如レ探レ湯」二ダチ
代、是非正邪を判ずる爲、神に誓ひて熱湯に手を入れしめしこと、その邪なるものはただるといへり。
【探測】 さぐりはかる。高啓「中間得二深泉探測費二修綆一」
【探端】 はじめをさぐる。禮記、疏に「鄭注云、探レ端知レ緒」
【探賞】 勝景をさぐる。梅堯臣「在昔探賞猶可レ數、深景秀句今得レ傳」
【探閱】 さぐりけみす。李翠玉「洞宮四百日、玉籍恣二探閱一」
【探歷】 たづれあるく。駱賓王「林泉恣二探歷一」
【探險】 危險の場所をさぐる。
【探騎】 探偵の騎兵。張籍「軍中探騎暮出レ城」
【探卵患】 たまごをさぐらるるうれひ。己が居所を毀ぼるるにいふ。北史に「鷙鳥捨レ巢、必有二探レ卵之患一」
【探虎穴】 虎のすむ穴をさぐる。非常なる危險をおかすにいふ。三國志に「呂蒙曰、不レ探二虎穴一、安得二虎子一」
【探二龍頷一】 龍のあぎとをさぐる。非常なる危險をおかすにいふ。莊子に「千金之珠、必在二九重之淵、而驪龍頷下一、子能得レ玉者、必遭二其睡一也、使二驪龍而寤一之、子尙奚徵之有哉」
【探二囊中物一】 事をなすのはなはだ容易なるをいふ。五代史に「李穀曰、中國用レ吾爲レ相、取二江南一如探二囊中之物一耳」
【制】 ㊀セイ。尺制切。霽。㊁セツ、セチ。昌列切。屑。
【制】 一ひく（挽）二かぐ（揭）三とる（取）。
【制曳】 ひく。爾雅に「羣臣小人、無二敢我制曳一」
【制肘】 人の意を妨ぐ。呂氏春秋に「宓子賤治二亶父一、恐レ魯君之聽二讒人一而令中己不レ得レ行二其術一也、請二吏二人于君一、俱至二亶父一、令二之書一、子賤從レ旁時制二搖其肘一、書之不レ善、則子賤爲レ之怒、吏忠而辭、歸報二于君一、君曰、宓子以レ此諫二寡人之不肖一也」
【制御】 おさへつけて思ふままに使ふ。（制馭、制馭）。

【掣掣】セツセツ ひく貌。海賦に「或掣二掣洩一洩于裸人之國」」

【掣斷】セイダン ひききる。張養浩「麒麟掣斷黃金鎖」

【掛】 ヒョウ。悲陵切。蒸。

ふた(箭筩蓋)。一やなぐひ(箭筩)。二やづつの

【接】 ㋐セフ。子葉切。葉。㋑サフ、セフ。色甲切。洽。㋒ケフ。檄頰切。葉。㋓セツ。慣用音。㋔一まじはる(交)。二あふ(合、會)。三うく(受)。四もつ(持)。五つぐ(續)。六つらなる(連)。七ちかづく(近)。八かつ(勝)。九一とる(扱)。一はれかざり(袈に同じ)。二もつ(持)。㋕一さしはさむ(挾に同じ)。二もつ(持)。

【接刃】セツジン 一はものをあつ。漢書に「爭接二刃于公之腹一、以復二其怨一、而成二其功名一」」二戰端をひらく。晉書に「大軍相臨、交鋒接刃」

【接比】セツヒ ちかづく。漢書に「吳越與レ楚接比」」

【接木】セツボク 木をつぐ。つぎ木。金史、曹望之傳に「栽レ花接レ木」」

【接引】セツイン よせひく。宋書、張敷傳に「少有二盛名一、高祖見而愛レ之、以爲二世子中軍參軍一、數見二接引一」」

【接手】セツシュ うけとる。又、手をつらぬ。戰國策に「接レ手俛レ首欲レ言、而不レ敢」」

【接好】セツカウ よしみをまじふ。和睦す。國語に「兩君偃レ兵接レ好」」

【接延】セツエン もてなす。舊唐書に「請下於二私居一接中延賓客上」」

【接伴】セツバン 賓客をもてなす。又、應待をつかさどる人。宋史に「至二境首一接伴」」

【接近】セツキン ちかづく。向秀「余少與二嵇康呂安一、居止接近」」

【接武】セツブ 後者の足前者の跡の半をふむ。禮記に「堂上接レ武、堂下布レ武」」

【接待】セツタイ あしらひもてなす。晉書に「侍二從左右一、甚見二接待一」」

【接界】セツカイ さかひをつづく。史記に「楚魏與レ秦接レ界」」

【接納】セツナフ 引き入れて接見す。揚彪「每蒙二接納一、私自光慰」」

【接轂】セツコク こしきを接す。卽ち、車の近くあひならぶないふ。漢書に「萬章與二中書令石顯一相善、亦得レ顯二權力一、門車常接レ轂」」

【接踵】セツショウ あとをつづく。王安石「魏王兵馬接レ踵出」」

【接意】セツイ 他の心にかなふやうになす。曹植「承二顏色一、以接レ意」」

【接遇】セツグウ 互にあひまじはる。史記、風原傳に「入則與レ王圖二議國事一、以出二號令一、出則接二遇賓客一、應二對諸侯一」」

【接戰】セツセン 敵にちかづきてたたかふ。張巡「接戰春來苦、孤城日漸危」」一つぎ木。木をつぐ。葉適「接樹移レ花今復古」」二木に近よりまじる。庾肩吾「新枝漸接レ樹、故凍欲レ含レ流」」

【接膝】セツシツ ひざをつきあはす。陶潛「願接レ膝以交レ言」」

【控】 ㋐コウ、ク。苦貫切。送。㋑枯公切。東。㋒カウ、コウ。苦江切。江。㋓一ひく(引)、つぐ(告)。二とどむ(止)。三なぐ(投)。㋔一のぞく(除)。二ひく(打)。おさへとどむ。とりしまる。唐書に「忠嗣帶二四將印一、勁兵重地、控二制萬里一」」

【控制】コウセイ

【控咽】コウエン 要所をしめつく。周邦彥「扼レ轅控レ咽、屏二藩表裏一」」

【控御】コウギョ 馬をつかふ如くに人を制し治む。晉書に「善二于懷撫一、短二于控御一」」

【控馭】コウギョ 前に同じ。庾信「控馭五十州、風行數千里」」

【控繫】コウケイ ひかへとどむ。宋史に「控繫以扼二其衝一」」

【控轡】コウヒ くつわをひかふ。呂氏春秋に「約二審之一、而以控二其轡一」」

【揚】 テキ、チャク。他歷切。錫。かかぐ(挑)。

【推】 ㋐タイ、テ。他回切。灰。㋑スキ。昌錐切。支。㋒一しりぞく(排、卻)。二おす(盪、擠)。三すすむ(進)。四うつす(移)。五ゆづる(讓)。六あたふ(與)。七ゆだぬ(委)。㋓一おす。二うつる(瓶遷)。三えらぶ(擇)。四ささぐ(奉)。五すすむ(奬、進)。六たづぬ(尋繹)。七なじる(窮詰)。

【推刃】スイジン やいばをあつ。魏志に「不レ能下推レ刃爲二天下一報上仇」」

【推引】スイイン 人を引き立つ。唐書に「以レ推二引後進一爲二己任一」」

【推分】スイブン 己の分をおしはかりて、自ら安んず。晉書に「任レ眞推レ分澹如也」」

【推本】スイホン もとを究めたづぬ。漢書に「有レ意二其推一本之一也」」

【推斥】スイセキ おししりぞく。劉楨「四節相推斥、冬季風且涼」」

【推右】スイウ 尊重す。宣和書譜に「爲二時人所一推右一」」

【推先】スイセン おしすすめて第一とす。後漢書に「然皆推二先于愼一」」

【推舟】スイシウ ふねを手にておしやる。論語、疏に「能陸地推レ舟而行」」

【推步】スイホ 天文學上の語。數へておしはかる。書經、疏に「故命二羲和一、以其算術一推步」」

【推究】スイキウ おしきはむ。周書に「精レ心悉レ意、推二究事源一」」

【推來】スイライ ゆくすゑのことをおしかんがふ。揚雄「因レ往以推レ來、雖二千世一無レ不レ可知也」」

【推治】スイチ おしはかりただす。周禮に「推治獲レ實」」

【推知】スイチ おしはかりてしる。

【推尙】スイシャウ おしたっとぶ。唐書に「藻翰精富、一時流輩推尙」」

【推服】スイフク たふとびて從ふ。南史に「明達果斷、爲二當時推服一」」

【推劾】スイガイ 吟味を遂ぐ。宋書に「官吏推劾累二三百日一、獄未レ具」」

【推恩】スイオン 愛情を人の身に及ぼす。孟子に「故推レ恩、足二以保二四海一」」

【推校】スイカウ おしかんがふ。柳宗元「推二校千古一、無レ所二與讓一」」

【推原】スイゲン たづぬ。陸游「浩歌陌上君無怪、世諸推原自二楚狂一」」

【推問】スイモン 吟味す。晉書に「其父母尋訪得二李氏一、推問皆符驗」」

【推移】スイイ うつりかはる。楚辭に「聖人不レ凝二滯於物一、而能與レ世推移」」

【推量】スイリャウ おしはかる。

【推誠】スイセイ まごころを移し及ぼす。中說に「推レ之以レ誠、不レ言而信」」

【推輓】スイバン 車を後より推し、前より輓く。轉じて、人をおしすすむるにいふ。左傳に「衞君必入、夫二子者、或輓レ之、或推レ之、欲レ無入得乎」」

【推測】スイソク おしはかる。李商隱「驗二推測一、成則如二周卜一」」

【推尊】スイソン すすめたっとぶ。麻九疇「畫史推尊爲二第一一」」

【推敲】スイカウ 詩句を鍛煉するをいふ。湘素雜記に「劉公嘉話云、賈島初赴二舉京師一、一日於二驢上一得レ句、云、鳥宿池邊樹、僧敲月下門、始欲レ著二推字一、又欲レ著二敲字一、煉レ之未レ定、遂於二驢上一吟哦、時時引レ手作二推敲之勢一」」

【推察】スイサツ おしきはめ考ふ。後漢書、劉植傳論に「所レ宜二推察一者也」」

【推奬】スイシャウ ほめすすむ。杜甫「詞場竟踈闊、平昔濫二推奬一」」

【推窮】スイキウ おしきはむ。舊唐書に「崔璀情狀可レ見、宜二更推窮一」」

【推罵】スイバ おしやりののしる。蘇軾「往往爲二醉人所一推罵一」」

【推曆】スイレキ こよみをおしはかり定む。王縉「推レ曆正レ元、調レ律平レ害」」

【推轂】スイコク こしきをおす。人をおしすすむるにいふ。史記に「呂氏雅故本推轂高帝一、就二天下一」」

【推盪】スイタウ おしうごかす。王贈「縱二陰陽之推盪一、我質雜レ移」」

【推擊】スイゲキ うつ。法苑珠林に「若二是弟子舍利一、推擊便破矣」」

【推戴】スイタイ おしいただく。宋史、玉彥昇傳に「爲レ衆推戴」」

【推懷】スイクワイ 心の誠をおし及ぼす。南史に「高帝曰、我布衣時、懷珍便推レ懷投レ款、況在二今日一、寧當レ有レ異」」

【推薦】スイセン 人を上にすすめあぐ。晉書に「時賢竝相推薦」」

【推舉】すすめあぐ。漢書に「所推舉皆廉士賢士于己者」

【推譽】すすめほむ。鮑欽止「昨書推譽、皆過其實、謹避レ席、不敢當」

【推讓】おしゆづる。史記に「先宮有、而後推讓」

【推赤心置人腹】セキシンヲオシテヒトノハラニオク 己が心の誠あるを人に移して、先方の腹もかくありと疑はず。互に誠心をうち開きて相疑はざるにいふ。後漢書に「蕭王推赤心置人腹中」

【掩】

㊀エン。衣檢切。琰。ろアン、オン。烏感切。感。はエフ。乙業切。葉。

㊀一おほふ、をさむ(斂)、さへぎる(遮)二かくす(隱翳)三なづ(撫)四ぜにうち(意錢)五とづ(閉)六やむ(止)七おなじ ろおほふ(揜)に同じ、覆取)はうつ(打)。

【掩耳】みみをおほふ。聞かざらんとするにいふ。韓愈「言語纔及、輒掩レ耳」

【掩沒】おほはれかくる。おほひかくす。廣川書跋に「覆壓掩沒、故不復得其全文」

【掩映】エイ 前に同じ。李白「掩映乎四海之中」

【掩殺】エン 敵の不意につけこみて殺す。金史に「陰約漢軍、將吏乘レ夜掩殺」

【掩息】エン おほひやむ。漢書に「設言虛亡、則厚德掩息」

【掩討】エン 敵の不意につけこみてうつ。魏志に「掩討遼師、折衝四海」

【掩涕】エイ 泣くをおほひかくす。揚雄「臨江瀕而掩涕兮」

【掩屑】セツ 風ふきそよぐ。謝靈運「聆悲飄之掩屑」

【掩疵】シ 缺けたるところをおほひかくす。謝偃「誠貴躬而咎己、豈藏瑕而掩疵」

【掩塞】リツ おほひふさぐ。吳越春秋に「上天蒼蒼、不可掩塞」

【掩蔓】アイ おほひかくる。魏武帝「日掩蔓而西移」

【掩擊】ゲキ 敵の不意をうつ。北史に「宜分軍壓出掩擊不意」

【掩翳】エイ おほひかくす。東京夢華錄に「綵縷相對、繡旆相招、掩翳天日」

【掩襲】シフ 敵の不意につけこみておそひうつ。晉書、羊祜傳に「祜每與吳人交兵、不爲掩襲之計」

【掩卷吁】オホヒテクス 讀書して感動せし義にいふ。蘇轍「掩卷輒長吁」

【掩目捕雀】メノフトラフ 事を爲すには、誠實を旨とすべきにいふ。後漢書に「陳琳曰、諺有掩目捕雀、微物尚不可欺以得志、況國家大事乎」

【掩鈴】スズヲオホヒテ 自己の過をきくを惡むにいふ。朱熹「成書不出姓名、以避近名之譏、此與揜耳盜鈴之見何異」

【掩耳盜鐘】ミミヲオホヒテカネヲヌスム 自ら耳を掩ふとも惡事をかくす能はざるにいふ。呂氏春秋に「范氏亡、有得其鐘者、欲負而走、則大鐘不可負、以椎毀之、鐘鏗然有音、恐人聞之而奪己、遂掩其耳、惡聞其過、亦猶此也」

【措】

㊀ソ、ス。倉故切。遇。ろサク、シャク。側格切。陌。はセキ、シャク。七迹切。陌。

㊀一おく(置)二あぐ(擧)三なぐ(投)四しきほどこす(施布)五もちゐる(用)六すておく(委置)七まじはる ろ一とらふ(追捕)二せまる(迫に同じ、迫)三はさむ はさむ(刺に通す)四うがつ(穿)五やぶる(傷)。

【措大】ダイ 書生をいふ。五雜俎に「今人以秀才爲措大」

【措止】シ 始末をつく。

【措畫】クワク 處置す。宋史、李植傳に「植、措畫有方、廷議倚重」

【措置】チ 下におく。又、始末をつく。

【措辨】ベン ものごとをとりしきりて處置す。

【措辭】ジ ことばだて。文章詩歌などにいふ。(錯辭)。

【掫】

㊀ソウ、ス。將侯切。尤。ろ此苟切。有。はシウ、シュ。初尤切。尤。

㊀よまはり(行夜、擊拆)ろ一うつ(擊)二あさがら(麻幹)三たきぎ(薪)はに一と(取)二もつ(持)。

【掫徒】トク なかまをあつむ。孔子家語に「少正卯、其居處足以擅レ徒成レ黨」

【掬】

キク、コク。居六切。屋。

㊀一すくふ、むすぶ、ささぐ二左右のたなごころ三はなる(離)四一升の量五二三合の量、左右の掌に滿つるほど。

【掬水】スイ みづを手にてすくふ。又、すくひたるみづ。方干「掬レ水皆花氣、聽レ松似雨聲」

【掬弄】キロウ 水をすくひもてあそぶ。陸游「摘嗅砌下花、掬弄澗底泉」

【掬泉】キクセン いづみを手にてすくふ。徐照「遇景因開レ畫、思レ茶亦掬レ泉」

【掬壤】キジウ 一つかみの土くれ。抱朴子に「龍門沸騰、非掬壤所レ遏」

【掬水月在手】ツキヲミテアリレバ 自然妙得の義にいふ。于良史「掬レ水月在レ手、弄レ花香滿レ衣」

【掻】

ハ。擊に同じ。

【掽】

ゲ、ナ。女加切。麻。ひきあふ。

九畫

【掽】

ハウ、ビャウ。蒲孟切。敬。つく(擣)。

【掾】

㊀エン。以絹切。先。ろデン。重緣切。先。

㊀一よる(緣)二そへづかさ(屬官)ろはせおふ(馳逐)。

【掾史】シエン 長官の屬僚。後漢書に「郡國皆置諸曹掾史」

【掾】

ダク、ノク。昵角切。覺。

【揀】

ひく(引)。カン、ケン。古限切。潸。

㊀一えらぶ(選)二わかつ(分別)。

【揀擇】カンタク わかちえらぶ。范益謙「凡喫飲食、不可揀擇去取」

【揂】

㊀テイ、チャウ。知盈切。庚。ろカウ、キャウ。丘耕切。庚。

㊀ひく(引)ろことのれ(琴聲)。

【揃】

㊀ピン、ミン。眉貧切。眞。ろブン、モン。武粉切。吻。

㊀なづ(撫)、さぐる(摹)ろ扶に同じ。

【揄】

㊀シウ、シュ。卽由切。尤。ろイウ、ユ。夷周切。尤。

㊀あつむ、あつまる(聚)ろおほふ(掩)。

【揃】

㊀セン。卽淺切。銑。ろセン、ソン。千廉切。鹽。

㊀一きる(斷)、たつ(斷)二わかつ(分割)三えらぶ(擇)四そろふ ろ一しるし(驗)二とし(銳)三つらぬく(貫)。

図揃 そろふ。ひとそろへにかる。韓愈「不足令震驚」

【揃刈】セイガイ きりたひらぐ。魏書、明亮傳に「亮辭レ授勇武將軍、世宗笑曰、卿欲爲朕拓定江表、揃平蕭衍、非勇武不可」

【揃刈、不足令震驚】

【揃剽】セウ ききわかつ。史記に「夷後揃剽、分二方、卒爲七郡」

【揄】

㊀ユ。羊朱切。虞。ろエウ。餘招切。蕭。はイウ、ユ。以周切。尤。

はトウ、ヅ。度侯切。尤。ほチウ、チュ。丑鳩切。尤。ヘシュ。春朱切。虞。

㊀一ひく(引)二ほむることば(譽言)ろ揄に同じ はあぐ(擧)に一ひく(引)二たろ(垂)ほ手を垂れて行くへかたぶく貌(閃爍)。

【揄揚】ユヨウ ほめあぐ。杜甫「御札早流傳、揄揚非造次」

【揄樂】ユガク おこたりたのしむ。說苑に「聖賢之君、無揄樂之臣」

【揖】

ショウ、シキ。詛力切。職。

うつ(打)。タン、ダン。都玩切。翰。

ろなづ(撫)、さぐる(摹)ろ揄に同じ。

【揆】

ダン、ナン。奴感切。感。

とらふ(搦)。キ。求癸切。紙。

【揆】

㊀ほかる(度)二ほかりごと三のり(法)四つかさ(官)五宰輔の官。

【揆一】イツ その度同一なり。孟子に「先聖後聖、其揆一也」

【揆水】スイ みづの深さをはかる。陸機「臨淵揆レ水、而淺深難レ察」

【揆度】タク ほかる。(商度、測度)。書經、傳に「揆二度優劣」

【揆敍】 はかりついづ。孟子題辭解に「揆ニ敍萬類一」

【揆策】 はかりごと。聖主得賢臣頌に「圖レ事揆レ策、則君不レ用ニ其諫一」

【揆程】 定めたる法則。蔡邕「揆程徑用、以レ事上聞」

【揆測】 はかる。曆志に「三代之興、皆揆ニ測天行一」

【揹】 ㋑イ。羊捶切。紙。㋺タ、ダ。他果切。哿。㋑❶すつ(棄)❷とる(把)㋺❶おつ(落)❷ぬく(脫)❸かぞふ(揲)❹はかる。

【揈】 ㋑クヮウ。呼宏切。庚。㋺ケン。閻縣切。先。㋩撊の本字。

【𢭏】 シャ。昌者切。馬。うつ(擊)。(擊聲)㋺うつ(擊)。㋑❶ふるふ(揮)❷うつこゑ

【揉】 ㋑ジウ、ニユ。留由切。尤。㋺忍九切。有。㋩ゼウ、ネウ。留紹切。篠。㋑❶みだれまじる❷もむ❸したがふ(順)❹やはらぐ(柔)㋺❶たむ(直)㋩かがむ(屈)。

圖訓ごたごた、もめ。

【揉輪】 車の輪をためてつくる。管子に「不レ明ニ於化、而欲ニ愛レ俗易レ敎、猶ニ朝揉レ輪而夕欲ニ乘車一」

【揊】 ㋑ヒョク、ヒキ。芒逼切。職。㋺テツ、テチ。敕列切。屑。㋩うつこゑ(擊聲)㋺すつ(去)。

【揋】 ワイ、ヱ。烏回切。灰。ひく(揥)。

【揌】 サイ。桑才切。灰。❶うごかす(動)❷えらぶ(擇)。

【揍】 ソウ、ス。千候切。宥。❶さしはさむ(插)❷なぐ(投)。

【揎】 セン。須緣切。先。❶うでをまくる❷こころもなびらく、からぐ❸ちぢむ(蹙)。

【揎襞】 ちぢむ。漢書、注に「褰跛猶ニ揎襞一」

【揎袖】 うでまくり。元史に「吏令ニ崔自揎袖、吏懸レ筆而書焉」

【描】 ㋑ベウ、メウ。眉鑣切。蕭。㋺バウ、メウ。莫交切。肴。㋩眉敎切。效。㋑うつしゑがく(摹畫)㋺うつ(打)㋩なげうつ(擲)。

【描金】 まきゑ。

【描毫】 ゑがきしるす。賈島「貌堪ニ良匠描ニ毫寫一、行稱ニ高僧續ニ傳書一」

【描畫】 ゑがく。鄭玉「丹青花草春描畫、水墨林泉秋寫成」

【描摸】 ゑがきうつす。周密「丹青自是難ニ描摸一」

【描寫】 にせてゑがく。圖繪寶鑑に「梁楷東平相義之後、善ニ畫ニ人物、山水、道釋、鬼神、師賈、師古、描寫飄逸、青過ニ于藍一」

【摯】 ハウ。博旁切。陽。❶ふせぐ(捍)❷まもる(衛)❸ならぶ(竝)。

【提】 ㋑テイ、ダイ。杜奚切。齊。㋺都禮切。薺。㋩シ、ジ。市之切。支。㋑❶ひっさぐ(挈)❷あぐ(擧)❸つづみ(曲りたる木に釣り下ぐる鼓、馬の髦の上に立つるもの)❹つまびらかなり(媞に同じ)❺もつ(持)❻たすく(扶)❼ひきゆく(牽行)㋺❶たつ(絕)❷なげうつ(擲)㋩鳥の羣り聚れる貌。

【提示】 ひっさげ出してしめす。

【提出】 ささげ出す。

【提身】 みなぬきんづ。

【提拔】 うれしくてはれ上る。又、ひきたつ。庾信「天澤沛然、謬垂ニ提拔一」

【提供】 さし出す。もちだす。

【提封】 知行の地。漢書に「鄉本田提封三千一百頃」

【提持】 ささげもつ。

【提孩】 ちのみご。韓愈「莫レ煩ニ相屬和、傳示及ニ提孩一」

【提挈】 ❶互にたすけあふ。史記、張耳陳餘傳に「以ニ兩賢王、左提右挈、而責ニ殺レ王之罪、滅レ燕易矣」❷ひっさぐ。禮記に「班白不ニ提挈一」

【提要】 要領のみなあぐ。韓愈「記レ事者、必提ニ其要、纂レ言者、必鉤ニ其玄一」

【提起】 ひきおこす。もちだす。

【提案】 さし出す案。

【提控】 ひきて制御す。金史、章宗紀に「詔有司有宋宗族所レ居、各具以ニ聞長官、常加ニ提控一」

【提將】 たすく。元結「日行見ニ孤老、羸弱相提將一」

【提掖】 みちびきたすく。(誘掖)。唐書、許孟容傳に「孟容方勁有ニ禮學、每所ニ折衷、咸得ニ其正、好提ニ掖士一」

【提提】 ❶安くのびやかなる貌。詩經に「好人提提」疏に「行步安舒、而審諦也」❷シ 鳥の羣りあつまれる貌。詩經に「歸飛提提」

【提提】 たづさへ持つ。高適「吹噓成ニ羽翼、提提動ニ芳聲一」

【提筆】 ふでをたづさふ。王禹偁「提レ筆入ニ廣場、辭氣干ニ斗牛一」

【提督】 一隊の兵をすぶる人。

【提然】 ひいでぬきんでたる貌。

【提綱】 おほづなを引き上ぐ。事の總要を擧ぐ。宋史に「提レ綱而衆目張、振レ領而羣毛理」

【提槧】 文書をたづさふ。西京雜記に「揚子雲好レ事、常懷レ鉛提レ槧」

【提撕】 ❶ひっさぐ。韓愈「所レ職事無レ多、又不ニ自提撕一」❷後進を指導す。

【提窮】 ぎんみす。

【提頭】 文中にて、天子に關する文字を別行にして上に揚げ出すをいふ。名山藏に「翁萬達傳、萬達疏謝疏中、有ニ一人字失ニ提頭、爲ニ不敬、斥爲レ民」

【提擊】 あげうつ。漢書に「拔レ劍四面提擊、斧ニ壞戶牖一」

【提擎】 持ちあぐ。(攜擊)。劉師服「陋質荷ニ斟酌、狹中愧ニ提擎一」

【提衡】 ひとし。韓非子に「貴賤不ニ相踰、賢智提衡而立、治之至也」

【提觴】 さかづきをもつ。鮑照「提觴野中飲、愛心烟未レ開」

【提議】 議題に出す。

【提攜】 ❶互にひきゆく義。禮記に「長者與レ之提攜、則兩手奉ニ長者之手一」❷相たすくる義。孟郊「小儒創ニ章句、大賢嘉ニ提攜一」

【提耳面命】 事を諭すに詳切なるをいふ。詩經に「匪ニ攜手レ之、言示ニ之事、匪ニ面命レ之、言提ニ其耳一」

【插】 ㋑サフ、セフ。測洽切。洽。㋺扱に同じ。㋑❶さす、さしはさむ、刺し入る❷になひぼう(擔棒)❸すき(鍤に同じ)❹かぬ(攝)。

【插入】 はさみいる。

【插羽】 兵の召狀に鳥の羽をさす。その速ならんことを示すなり。漢書、注に「邊有レ警、輒露檄插レ羽」

【插花】 はなさしはさむ。又、いけばな。張耒「插レ花野婦抱レ兒至、曳レ杖老翁扶レ背行」

【插刺】 さしはさむ。さす。元稹「插ニ刺頭鬢一相誇張」

【插秧】 稻の苗をうう。高適「溪水堪レ垂レ釣、江田耐ニ插秧一」

【插畫】 ゑをさしはさむ。

【插腰】 こしにはさむ。庾信「蓮花插レ腰、甚得ニ蛟龍之氣一」

【揓】 シ。施智切。寘。とる(把)。

【揕】 ㋑チン。知鴆切。沁。㋺知林切。侵。㋑ねらひうつ㋺❶さす(刺)❷木を斫る聲。

【揕胸】 むねをつく。戰國策に「左手把ニ其袖、右手揕ニ其胸一」

【揖】 ㋑イフ。一入切。緝。㋺イフ、オフ。乙及切。緝。㋩シフ。側入切。緝。㋥イ。乙冀切。寘。㋑❶ゑしやく(拱手の敬禮)❷ゆづる❸すすむ(進)㋺くむ(挹に同じ)㋩❶あつむ(輯に通ず)❷なす(成)❸あはす(合)❹あつまる(聚)㋥ゑしやく(撎に同じ)。

【揖揖】 あつまる貌。詩經に「螽斯羽、揖揖兮」

【揖遜】 揖禮をなしてへりくだる。宋史に「揖遜之美、放勳比隆」

【揖讓】 拱手の禮をなしてへりくだる。論語に「子曰、君子無レ所レ爭、必也射乎、揖讓而升」

【掮】㊀シュン、ジュン。辭閏切。震。
㊁詳遵切。眞。

【揑】㊀カウ、キャウ。胡盲切。庚。
㊁なづ(摩)㊂なぐさむ(慰)。

【揚】㊀エイ、イャウ。永兵切。庚。
㊁一うつ(擊)二さす(刺)㊂ぬく(拔)。

【揚】ヤウ。與章切。陽。
一あがる、飛び擧る二おこる(發)三あぐ(擧)四ひらく(披)五あらはす(顯)六ほめとく(稱說)七つぐ(纘)八なの、まさかり(鉞)九まゆ、又、眉の上下十自ら足れりとす。

【揚名】ヤウメイ なをあぐ。孝經に「立レ身行レ道、揚二名于後世一」

【揚帆】ヤウハン ほをあぐ。(擧帆)。劉潛「揚帆乘二溟華一」

【揚沙】ヤウサ すなを吹き上ぐ。春秋緯に「月離二于箕一、則風揚レ沙」

【揚言】ヤウゲン いひふらす。大言す。大戴禮に「揚言者寡レ信」

【揚眉】ヤウビ まゆをあげて見る。列子に「揚レ眉而望レ之、弗レ見二其形一」

【揚櫂】ヤウエイ かぢをあげ舟をやる。江淹「緩步遵二汀渚一、揚レ櫂泛二春蘭一」

【揚袂】ヤウベイ たもとをあぐ。李白「揚レ袂正二北辰一、開レ襟攬二羣雄一」

【揚旆】ヤウハイ はたをたつ。沈約「推レ轂二崤嶓一、揚レ旆九河陰」

【揚揚】ヤウヤウ 得意なる貌。史記に「意氣揚揚、甚自得也」

【揚歌】ヤウカ はやしてうたふ。孫楚「牧豎吟二嘯於行陌一、舟人鼓レ檝而揚歌」

【揚搉】ヤウカク 揚はあぐ、搉はひく、あげひきてその趣旨を陳ぶ。漢書、叙傳に「揚二搉古今一、鑒二世盈虛一」

【揚厲】ヤウレイ たかくあぐ。韓愈「揚二厲無前之偉績一」

【揚播】ヤウハ あぐ。あがる。ちる。ちらす。呂氏春秋に「舟中之人盡揚播入二于河一」

【揚聲】ヤウセイ こゑをはりあぐ。孔融「天下談士、依以揚レ聲」

【揚箑】ヤウヘツ あふられあがる。あふりあぐ。王禹偁「樣枇杷任二揚箑一」

【揚鄰】ヤウテキ あげふるふ。舊唐書に「米至二京師一、或砂礫樣枇、雜乎其間一、開元初、詔、使二揚鄰而較二其虛實一」

【揚州之鶴】ヤウシウノカクワク 衆善を一身にあつめんと欲するに喩ふ。蘇軾「可レ使二食無レ肉、不レ可二居無レ竹、無レ肉令二人瘦一、無レ竹令二人俗一、人瘦尚可レ肥、俗士不レ可レ醫、傍人笑二此言一、似レ高還似レ癡、若對二此君一、仍大嚼、世間那有二揚州鶴一」注に「昔有レ客、言レ志、或願レ爲二揚州刺史一、或願レ多二財貨一、或願二騎レ鶴上一昇一、其一人曰、腰纏二十萬貫一、騎レ鶴上二揚州一、蓋兼二三人之欲一也」

【換】㊀セン、ネン。而宣切。先。
㊁セツ、ネチ。如劣切。屑。
㊂もむ(揉)㊃そむ(染)。シカ、シュ。疏鳩切。尤。

【掇】一おほくのこころ(衆意)二あつまる(聚)三つよくはやし(勁疾)四やさけび(矢行聲)五もとむ(求)六さがす(索)七たづぬ(討)。

【換】クワン、グワン。胡玩切。翰。
一かふ(交易、變改)二かはる(交替、變移)三あらたむ(改)四ほしいままなり(恣睢)。

【換名】クワンメイ 名をとりかふ。改名。

【換衣】クワンイ きものをとりかふ。ころもがへ。(更衣)。事文類聚に「進士薪及第、換レ衣、以二故衣一予レ人」

【換言】クワンゲン いひかふ。

【換易】クワンエキ とりかふ。穀梁傳、注に「擅相換易」

【換姓】クワンセイ めうじをとりかふ。改姓。

【換氣】クワンキ 空氣を入れかふ。

【換算】クワンサン 單位の異なる數量に計算しかふること。

【換銀】クワンギン りゃうがへ。

【換錢】クワンセン 前に同じ。

【換鵝】クワンガ 王羲之がその書を以て鵝と交換せし故事。晉書、王羲之傳に「羲之性愛レ鵝、山陰有二一道士一、養二好鵝一、羲之往觀焉、意甚悅、因求二市レ之一、道士云、爲寫二道德經一、當二擧レ羣相贈一耳、羲之欣然寫擧、籠レ鵝而歸、甚以爲レ樂、其任事如レ此」

【換骨奪胎】クワンコツダツタイ 古人の詩文の意趣を取り、その語句のみを換へて己のものとすること。捫蝨新話に「文章雖レ不レ要レ蹈二襲古人一言一句一、然自有二奪胎換骨等法一、所レ謂靈丹一粒、點レ鐵成レ金也」

【揜】㊀エン。衣檢切。琰。
㊁アン、オン。烏感切。感。
㊂一おほふ(覆)二さがしとる(索取)三くるしみせまる(困迫)四ほろぶ、ほろぼす(滅)五はやし、疾く歸る貌㊃おほふ(掩に同じ)。

【揜乎】エンコ 疾くかへる貌。司馬相如「揜乎反レ鄉」

【揜取】エンシュ おほひとる。穀梁傳、注に「揜二取衆禽一」

【掊】㊀アン、オン。烏紺切。勘。
㊁カン、コン。古暗切。勘。
㊂アン、エン。於咸切。咸。㊃於陷切。陷。
㊄エフ。奄涉切。葉。㊅一おほふ(覆)二なさむ(藏)㊂おほふ(掩)㊃ほろぶ、ほろぼす(滅)㊄吳人の語にて、なげうつ(拋)㊅えらぶ(揑)。

【搫】ショ、ソ。新余切。魚。
みづくみ、すなどる。
アツ、エチ。乙黠切。黠。
ぬく(拔)。

【搬】㊀アク、オク。乙角切。覺。
㊁チク。烏谷切。屋。㊃オウ、ウ。

【握】於候切。宥。或は、握に作る。
㊀一にぎる、にぎり(握)、もつ(持)二にぎりこぶし(拳)三てのうち(手裡)四と(ば)り(幄に通ず)五支那古代の算法の名㊁そなへ、そなふ(具)二小さき貌㊃喪葬に死者の手を束ぬる菜。

【握手】アクシュ 一てをにぎる。王績「曳レ裾出レ門迎、握レ手登レ前除」二西洋の禮式、互に手をにぎりて親密の情を表す。

【握沐】アクボク あらひ髮を結ぶ暇なく手にぎりながら士を見たりといふ周公の故事より、政治に精勵するをいふ。世說に「昔周公猶握レ沐吐レ食、以接二白屋之下一、天下歸レ德」

【握卷】アクケン 書物を手にもつ。齊書に「夜讀書隨二月光一、握レ卷升レ屋」

【握持】アクヂ にぎりもつ。後漢書、杜林傳に「林前於二西州一、得二漆書古文尚書一卷一、常寶二愛之一、雖レ遭二艱困一、握持不レ離レ身」

【握腕】アクワン かひなをにぎる。親む義にいふ。晉子夜秋歌に「握レ腕同遊戲」

【握髮】アクハツ 賢者を見るの急なるをいふ。周公の故事。韓愈「周公之爲二輔相一、其急二於見レ賢也、當二一食一、三吐二其哺一、方二一沐一、三握二其髮一」

【握臂】アクヒ ひぢをにぎる。戴復古「新交握レ臂行、肝膽猶楚越」

【握權】アクケン 權力をにぎる。解嘲に「旦握權則爲二卿相一、夕失レ勢則爲二匹夫一」

【握齷】アクアク 心せまくこせつくさま。(偓促)。史記に「委瑣握齷」

【握齷】アクアク 前に同じ。(齷齪)。史記、酈食其傳に「其將皆握齷、好二苛禮一、自用、不レ能レ聽二大度之言一」

【握符尊】アクフソン 天子のくらゐ。東都賦に「握二乾符一、闡二坤珍一」

【握月擔風】アクワツタンフウ 風月を愛する情の深きをいふ。春宴詩に「虞松方レ春、謂握レ月擔レ風、且留二後日一、呑レ花臥レ酒、不レ可レ過レ時」

【握兩把汗】アクリヤウハノアセヲニギル 兩手に汗をにぎる。危き場合に深くきづかふにいふ。投甕雜筆に「今世人勞二觀人涉レ險而濟者一、輒曰、爲レ爾捻二兩把汗一、按二元史一、憲宗召二趙璧一、問曰、天下何如而治、對曰、請先誅二近侍尤不善者一、憲宗不レ悅、璧退、世祖曰、秀才汝渾身都是膽耶、吾亦爲レ汝握二兩把汗一也」

【搦】㊀カク、キャク。乞格切。陌。
㊁カ、ケ。丘駕切。禡。
㊂とる、にぎる(把)㊃もつ(持)。
カウ、ケウ。古巧切。巧。

【挍】一まじふ(接)二もとる(戾)。
タン。他干切。寒。
めぐる(宛轉)。

【掾】スキ。楚委切。紙。㊁セン。權緝切。霰。㊂タ。丁果切。哿。

【揣】

シ、ダン。徒官切。寒。(は)スヰ。朱惟切。支。(へ)主棄切。紙。(と)シ。慣用音。(ゆ)㊀はかる(量度)㊁さだむ(定)㊂こころむ(試)㊃のぞく(除)(ろ)はかる(度)(は)うごかす(揺)(に)あつまる、聚る貌(ほ)(へ)むちうつ。

【揣知】はかりさとる。漢書に「揣二知其指一、不二敢發一レ言」

【揣度】おしはかる。柳宗元「退自揣度、惕然汗流」

【揣摩】己の心を以て人の心をおしはかる。朱熹「揣二摩心事一惟黃卷、料二理家傳一亦素書」

【揤】(ゆ)ショク、シキ。節力切。職。(ろ)シッ、シチ。秦悉切。質。(ゆ)つかむ(捽)(ろ)ぬぐふ(拭)。

【搮】ホウ、フ。方苟切。有。うつ(衣上より撃つ)。

【揆】ケイ、ケ。傾畦切。齊。㊀あたる(中)㊁さく(刲)。

【揥】(ゆ)テイ、タイ。丑例切。霽。(ろ)都黎切。齊。(は)テキ、チャク。他歷切。錫。(ゆ)㊀さしぐし(髮を摘ふる首飾)㊁すつ(捐)(ろ)さす(指)(は)㊀たはむる(戲)㊁とる(取)。

【掣】ラツ、ラチ。郎達切。曷。とぐ(研)。

【揨】タウ、チャウ。除耕切。庚。㊀ふる(觸)㊁つく(撞)。

【揩】(ゆ)カイ、ケ。丘皆切。佳。(ろ)苦戒切。卦。(は)カツ、ケチ。訖黠切。黠。(ゆ)ぬぐふ、する(摩拭)(ろ)㊀つく(强突)㊁つづみの名(㧐に通ず)(は)樂器の名(敔に同じ)。

【揩摩】すりみがく。桂海蟲魚志に「揩摩去レ皮」

【揩隷】楷書と隸書と。南史に「確字仲正、少驍勇有二文才一、尤工二揩隷一」

【揪】シウ、シュ。揫に同じ。

【揫】シウ、シュ。將由切。尤。㊀つかぬ(束)㊁をさむ(斂)㊂あつむ(聚)㊃こまかにす(細)。

【揬】トツ、ドチ。佗沒切。月。㊀つきあたる㊁ふる(觸)。

【揭】(ゆ)ケツ、ゲチ。渠列切。屑。(ろ)渠謁切。月。(は)ケイ。去例切。霽。(ゆ)㊀かかぐ㊁たかくあぐ(高擧)㊂になふ(擔)㊃おふ(負)㊄そる(反)㊅ながし(長)㊆しるし(表標)(ろ)車の疾き貌(偈に通ず)(は)かかぐ、からぐ。

【揭示】かかげしめす。宋史に「乾興初令二州縣一、錄二丁產及所產一、役使前レ期、揭二示不レ實者一、民得二自言一」

【揭焉】㊀いちじるし。㊁そばだつ貌。張衡「豫章參館、揭焉中峙」

【揭竿】さをたつ。過秦論に「斬レ木爲レ兵、揭レ竿爲レ旗」

【揭載】新聞雜誌等にかきのす。

【揭揭】㊀ながき貌。詩經に「葭菼揭揭」㊁たかき貌。楚辭に「揭揭以巍巍」㊂速にはしる貌。漢書、注に「揭揭疾驅貌」㊃物のぬけんとする貌。淮南子に「濟二其揭揭一」

【揭牓】看板をいだす。周伯琦「明朝揭レ牓醉二黃封一」

【揭驕】心おごる貌。射雉賦に「眄二箱籠一以揭驕、睨二驍媒之變態一」

【揭簾】すだれをかかぐ。韓偓「牛身映レ竹輕聞レ語、一手揭レ簾微轉レ頭」

【揭レ斧入レ淵】物を用ゐるにその所を得ざるをいふ。淮南子に「以二其所一レ修、而游二不用之鄉一、猶下樹二荷山上一、畜二火井中一、操レ釣上レ山、揭レ斧入上レ淵」

【搹】カク、キャク。各核切。陌。あらたむ(改)。

【揮】(ゆ)キ。吁韋切。微。(ろ)クン。吁運切。問。(は)コン、ゴン。胡昆切。元。(ゆ)㊀ふるふ(奮)㊁ふるふ(振)㊂うごく(動)㊃そそぐ(灑)㊄つくす(竭)㊅ちらす(散)㊆さしづばた(麾)㊇しるしばた(幡)(ろ)ふるふ(奮)(は)やぶれざること(揮掄)。

【揮斥】ほしいままなり。又、奮迅なり。莊子に「至人者上闚二青天一、下潛二黃泉一、揮二斥八極一、神氣不レ變」

【揮羽】はねをひろげうごかす。曹植

「揮レ羽邀二清風一」

【揮沐】あらひ髮をふるふ義。握沐といふに同じ。後漢書に「揮レ沐吐レ餐」

【揮染】筆をふるひ紙をそむ。書畫をかく。又、書畫。唐書、懷素傳に「無二紙可一レ書、種二芭蕉一供二揮染一」

【揮拳】こぶしをふりまはす。(振拳)。書評に「歐陽詢書若二草裏蛇驚、(中略)力士之揮一レ拳」

【揮涕】なみだをふるひ落す。晉書に「莫レ不二北望揮一レ涕」

【揮毫】書畫をかく。杜甫「揮レ毫落レ紙如二雲煙一」

【揮散】ちらす。柳宗元「日合邦之學者、論說辨問、貫二穿上下一、揮散而成同、幽昏而大明」

【揮掃】ふるひはらふ。陸游「忽然揮掃不二自知一」

【揮筆】書畫をかく。李頎「興來灑二素壁一、揮レ筆如二流星一」

【揮霍】疾き貌。陸機「紛紜揮霍」

【揮鞭】むちをふるふ。蔡邕「不レ動二干戈一、揮レ鞭而定」

【揮灑】筆をふるひすすぐ。書畫をかく。晁沖之「揮灑每被レ酒」

【揮レ淚斬二馬謖一】愁愛の心を以て法を行ふ。蜀志に「亮爲レ政無レ私、馬謖素爲二亮所一レ知、及二敗軍一、流涕斬レ之、而卹二其後一」

【揯】(ゆ)コウ。古鄧切。徑。(ろ)居層切。蒸。きびし(急)。

【揖】バウ、モウ。莫到切。號。㊀たすく(扶)㊁あたる(抵)。

【揰】(ゆ)ショウ、シュ。昌用切。宋。(ろ)チョウ、ヂュ。都朧切。腫。(ゆ)おしうつ(推擊)(ろ)㊀すつ(棄)㊁おしうつ。

【揱】(ゆ)サク、ソク。色角切。覺。(ろ)サウ、セウ。所教切。效。(は)セウ。相邀切。蕭。(に)シャク。息約切。藥。(ほ)サン、ソン。師咸切。咸。(ゆ)臂うるはしき貌(ろ)㊀訓義(ゆ)に同じ㊁梨に同じ(は)㊀そげて小さき貌㊁訓義(ゆ)に同じ(に)そぐ(削)(ほ)摻に同じ。

【揱爾】ほそくそげたる貌。周禮に「望二其幅一、欲二其揱爾而纖一也」

【揲】(ゆ)セツ、ゼチ。食列切。屑。(ろ)タフ、デフ。直甲切。洽。(は)エフ。與涉切。葉。(に)テフ、デフ。徒協切。葉。㊀えらびもつ(閲持)㊁もちかぞふ(持數)㊂はかる(度)。

【揳】(ゆ)セツ、セチ。先結切。屑。(ろ)ケツ、ケチ。奚結切。屑。(は)カツ、ケチ。訖黠切。黠。(に)擊に通ず。(ゆ)㊀ふさぐ(塞)㊁ひねる(撚)㊂ぬぐひけす(拭滅)㊃方正ならざること(攕揳)(ろ)はかる(絜に同じ)(は)うちもつ(擊持)(に)うつ、たたく。

【搣】カン、ゴン。撼の本字。

【援】(ゆ)エン、ヲン。于元切。元。(ろ)于眷切。霰。(は)于願切。願。(に)クワン、グワン。胡玩切。翰。(ゆ)㊀ひく(引)㊁ひきとる(引取)㊂ぬく(拔)㊃刃の直くして上に向へること㊄たすく(扶)(ろ)㊀たよる㊁たすく、たすけ(救助)㊂まじはる(接)(は)ひきもつ(引持)(に)拌援は、順はず、一に、拔扈。

【援引】ひく。後漢書に「其有下更相援引、希二附權强一者上」

【援助】たすけ。後漢書に「招二匈奴一、迎二烏桓一、以爲二援助一」

【援庇】たすけかばふ。元稹「無二親黨一、爲二臣援庇一」

【援兵】すくひの軍勢。

【援軍】前に同じ。

【援拯】たすけすくふ。舊唐書に「左右援拯、後得二累居二郡守一」

【援救】すくふ。すくひ。後漢書に「求二援救一、以濟二其患一」

【援筆】ふでをとる。字をかく。魏志に「植援レ筆立成、可レ觀」

【援應】あひ應じてたすけあふ。

【援糧】すくひの糧食。

【揵】(ゆ)ケン、ゲン。渠焉切。先。(ろ)ケン、ゴン。巨偃切。銑。(ゆ)㊀あぐ(擧)㊁になふ(肩に物を擧ぐ)

【撽】 ㊂とづ、とざし（閉）㊁ふさぐ（塞）㊂まじふ（接）㊃かたし（難）㊄水決の口を塞ぐ處に竹を樹ててその中に草と土とを塡めたるものの稱、さかふ（立界）。

㋴チ。陟利切。寘。㋺チ。陟侈切。紙。

㋴㊀さす（刺）㊁かすむ（劫）㊂うつ（搏）㋺㊀いたる（至）㊁さす（指）㊂つく（挃）㊃訓義㋴に同じ。

【抝】 アウ、エウ。於絞切。巧。㊀くじく（拉）㊁ねづ（拗）。

【撰】 セン。撰の本字。

【挨】 アイ。乙諧切。佳。㊀おす（推）㊁うつ（擊）㊂せおふ、背負ふ貌。

【擨】 ヤ。揶に同じ。

【擨揄】ヤユ 手をあげて嘲弄す。からかふ。あざける。（邪揄）。元稹「郿鄔笑二甯留一、燕薊受二擨揄一」

十畫

【㩗】 ㋴カイ、ゲ。戸佳切。佳。㋺ケイ、ガイ。胡計切。霽。㋩戸禮切。薺。㋴㊀はさむ（挾）㊁たすく（扶）㋺抗越閒の語にて、かふ（換）㋩かかぐ（揭）。

【搆】 ㋴コウ、ク。古候切。宥。㋺居候切。尤。㋴くらし（搆擺）㋺ひく（牽）。

【搉】 ㋴カク、コク。克角切。覺。㋺クワク。忽郭切。藥。㋴㊀たたきうつ（敲擊）㊁はかる（商量）㊂ひく（引）㊃もつぱらにす（搉に通ず）㋺てのうらかへす（搉に同じ）。

【搉場】カクヂヤウ 賣買を監督するところ。宋史に「景德二年置二霸州安肅軍搉場一」

【搎】 ㋴シュン。思尹切。軫。㋺息倫切。眞。㋴こばむ（拒）㋺えらぶ（擇）。

【搊】 ㋴シウ、ス。初尤切。尤。㋺側九切。有。㋩ス。莊俱切。虞。㋴㊀とる（拘）㊁つめびき（手彈）㊂はじく（彈）㋺㊀もつ（持）㊁あふぎ（扇）㋩とく（解）。

【搧】 セン。失冉切。琰。はやし（疾）。

【搴】 ㋴ケン、ゴン。渠言切。元。㋺ケン、ゲン。丘虔切。先。㋩カン、ガン。丘頰切。删。

【搋】 ㋴チ。丑豸切。紙。㋩タイ、テ。丑佳切。佳。㋺イ。演爾切。紙。㋴㊀あぐ（擧）、になふ㊁あばく（訐告）㊂たすく、ひく（援）㋺㋩ひく（援）。㋴㋺㊀わかつ（析）㊁ひく（拽）㋩㊀うつ㊁拳を人に加ふ。

【搌】 ㋴テン。知輦切。銑。㋺陟扇切。霰。㋴㊀のぶ（展）㊁つかぬ（縛束）㋺㊀まく（捲）㊁ぬぐふ（拭）。

【損】 ソン。鐀本切。阮。㊀へる、へす（減）㊁おとす（貶）㊂うしなふ（失）㊃やぶる、そこなふ（傷）㊄易の卦の名。

【損友】ソンイウ 交りて益なき友。論語に「友二便辟一、友二善柔一、友二便佞一、損矣」

【損失】ソンシツ そこれうしなふ。後漢書、和帝紀に「戊辰、詔、今年秋稼爲二蝗蟲所一レ傷、皆勿レ收レ租、更芻藁若レ有レ所二損失一、以レ實除レ之」

【損抑】ソンヨク おさへしりぞく。へる。宋書、王僧綽傳に「爲二侍中一、時二十九、中略從兄徽淸介士也懼二其太盛一、勸令二損抑一」

【損耗】ソンカウ へる。へらす。南史に「貨賄公行、帑藏損耗」

【損省】ソンセイ へらしはぶく。唐書、姚班傳に「惟殿下留レ心恭儉、損二者玩好一、以諷二天下一」

【損消】ソンセウ へる。阮籍「顏色改二平常一、精神自損消」

【損缺】ソンケツ そこなひかく。荀悅「淸節毀傷、公義損缺」

【損益】ソンエキ へるとますと。へらすとますと。又、そんとまうけと。論語に「子曰、殷因二於夏禮一、所二損益一可レ知也」

【損敗】ソンハイ そこなひやぶる。隋書に「每年收積、勿レ使二損敗一」

【損減】ソンゲン そこなひへらす。史記に「君子以二謙退一爲レ禮、以二損減一爲レ樂」

【損短】ソンタン 傷害をなす。唐書に「乃共菑二其跡一、損二短之一」

【損傷】ソンシヤウ きづつく。劉禹錫「危根易二損傷一」

【損瘠】ソンセキ おとろへやす。そこなひへる。蘇頲「損瘠相仍、流庸莫レ返」

【損膳】ソンゼン 食膳の費用をへらす。史記に「天子乃損レ膳、解二乘輿驂一、出二御府禁藏一、以贍レ之」

【搡】 ㋴サク、シャク。昔各切。藥。㋺色窄切。陌。㋩ソウ、ス。桑故切。遇。

㋴㊀うつす（摸）㊁さぐる（摸）㋺㊀えらぶ（擇）㊁もとむ、さぐる（索に同じ）㋩とる（取）。

【搏】 ㋴ハク、ヒャク。伯各切。藥。㋺フ、ホ。方遇切。遇。

㋴㊀もとめもつ（索持）㊁いたる（至）㊂とる（取）㊃くみうちす（格鬪）㊄つかむ（攫）㊅うつ（手擊）㋺とらふ（捕）。

【搏虎】ハクコ とらを手うちにす。又、無謀の勇の義。孟子に「晉人有二馮婦者一、善搏レ虎、卒爲二善士一」

【搏殺】ハクサツ 手うちにしてころす。左傳に「搏而殺レ之」

【搏景】ハクエイ 人の陰影をうつ。得べからざるをいふ。漢書に「匈奴獸聚而鳥散、從レ之如レ搏レ景」景は影に同じ。

【搏撮】ハクサツ うちつかむ。法苑珠林に「金翅大鳥、入レ宮搏撮」

【搏噬】ハクゼイ つかみくらふ。（攫噬）。曹植「試二之狡兎之捷一、以爲二搏噬之用一」

【搏戰】ハクセン くみうちしてたたかふ。漢書、李陵傳に「虜見二漢軍少一、直前就レ營、陵搏戰攻レ之」

【搏獲】ハククワク うちとる。後漢書に「貴二指縱之功一、薄二搏獲之賞一」

【搏髀】ハクヒ ももをうつ。戴表元「搏レ髀不レ覺長吝嗟」

【搏齧】ハクゲツ うちかむ。陸龜蒙「虎豹爭搏齧」

【搏二牛之蝱一不レ可二以破二蟣蝨一】ウシノバクヲウツモキシラミヲヤブルベカラズ 蝱（アブ）は大にして外に在り、蟣蝨（シラミ）は小にして内に在り、故に手にて搏てば牛につきたる蝱なば殺すべきも、蟣蝨をば殺す能はずとの義にて、外なる敵には勝つも、内なる敵には勝ちがたきに喩ふ。史記に見ゆ。

【擿】 テキ、チャク。他歷切。錫。㊀かかぐ（挑）㊁きる（伐）。

【搐】 チク、トク。敕六切。屋。㊀うごきいたむ㊁ひく（牽制）。

【搑】 ㋴ジョウ、ニュ。而隴切。腫。㋺如容切。冬。㋩ダウ、ノウ。濃江切。江。㋩擃に同じ。㋴つく（推擣）㋺㊀つく㊁なさむ（收）㋩ふさぐ（塞）。

【搒】 ㋴ハウ、ヒャウ。補曠切。漾。㋩北孟切。敬。㋺ハウ、ヒャウ。薄庚切。庚。㋴㊀おほふ（掩）㊁ふれなごぐ㋺やむ㋩㊀むちうつ（搒擊）㊁ひきあふ（相牽）。

【搒笞】ハウチ むちうつ。漢書、張耳傳に「吏搒笞數千」

【搒掠】ハウリヤク 前に同じ。（搒掠）。史記に「搒掠千餘、不レ勝レ痛自誣服」

【搰】 ㋴コツ、ゴチ。苦骨切。月。㋺コン、ゴン。古本切。元。㋴おす（推）㋺はさむ（措）。

【搓】 ㋴サ、七何切。歌。㋺此我切。哿。㋩サイ、セ。初皆切。佳。㋴もむ（挪）㋺ななめなり、邪めなる貌㋩おしうつ（推擊）。

【搔】 ㋴サウ、ソウ。蘇曹切。豪。㋺先到切。號。㋩サウ、セウ。側絞切。巧。㋴㊀する、なづ（刮）㊁かく（手爬）㊂さわぐ、さわがす（騷に通ず）㋺つかむ（攫）㋩㊀つめ（蚤に同じ）㊁つめきる。

【搔首】サウシユ 頭をかく。心おちつかず、若しくは、愁あるときなどの動作。詩經に「愛而不レ見、搔レ首踟蹰」

【搔蝨】サウシツ しらみの爲にかゆきをかく。易林に「亂頭多レ憂、搔レ蝨生レ愁」

【搔頭】サウトウ あたまをかく。後漢書、李固傳に「固獨粉飾レ貌、搔レ頭弄レ姿」

【搔擾】サウゼウ さわぐ。さわがす。吳志に「所在搔擾、更爲二煩苛一」

【搔癢】サウヤウ かゆきをかく。この語は常に

隔靴と合せ用ゐ、事を行ひて本意を達する能はざるに喩ふ。詩話總龜に「詩不ㇾ著ㇾ題、如㆓隔ㇾ靴搔ㇾ癢㆒」

【搕】㋑カフ、コフ。克盍切。合。㋺アフ、オフ。烏合切。合。

㋑❶とる（取）❷うつ（擊）㋺おほふ（覆）。

【搖】エウ。余招切。蕭。

❶うごく（動）❷ゆるぐ❸おこる（作）❹かぶりもの（首飾、歩搖の略）❺遙に通ず。

【搖車】〔植〕草の名。爾雅、疏に「杕夫可ㇾ食之草、一名搖車」

【搖曳】ゆらゆら動き引く貌。李白「功成拂ㇾ衣去、搖曳滄洲傍」

【搖旌】ゆらめくはた。白居易「年光同㆓激箭㆒、鄉思極㆓搖旌㆒」

【搖動】ゆるぐ。うごく。北史に「汾絳舊是周齊分界、恐生㆓搖動㆒」

【搖揚】うごかしあぐ。うごきあがる。張耀「青梧下映、泛㆓㒃葉㆒以搖揚」

【搖搖】うごく貌。うれふる貌。あやふき貌。飛びうつる貌。詩經に「行邁靡靡、中心搖搖」

【搖槳】楫をうごかす。溫庭筠「軋軋搖ㇾ槳聲」

【搖演】うごかしひらく。常袞「披㆓拂丹草㆒、搖㆓演青蘋㆒」

【搖漾】水のうごく貌。梁簡文帝「江搖漾而生ㇾ風」

【搖蕩】ゆれうごく。ゆりうごかす。史記に「隨ㇾ風澹淡、與ㇾ波搖蕩」

【搖撼】うごかす。（擺撼）。宋史に「多起㆓邪說㆒以搖㆓撼在位㆒」

【搖擺】うごかしふるふ。王令「搖㆓擺舌吻㆒歸㆓之仙㆒」

【搖櫓】ろをうごかす。船をやる。徐鉉「搖ㇾ櫓過㆓江遲㆒」

【搖ㇾ尾乞ㇾ憐】人の卑屈にして、こびへつらふさま、狗の所爲の如くなるに喩ふ。韓愈「若俛ㇾ首帖ㇾ耳、搖ㇾ尾而乞ㇾ憐者、非㆓我志㆒也」

【搗】タウ、トウ。覩老切。皓。

擣に同じ。

【搘】シ。而支切。支。

ささふ（榰）。

【搘梧】ささふ。唐書に「初鳳迦異築㆓柘東城㆒、諸葛亮石刻故在、文曰、碑卽仆爲㆓漢奴㆒、夷畏ㇾ誓常以ㇾ石搘梧」

【搙】㋑ヂョク、ノク。內沃切。沃。㋺ダク、ノク。女角切。覺。㋩ドウ、ヌ。乃豆切。宥。

㋑ひねる（捻）㋺おさふ（搵）㋩ささふ（拄）。

【搚】㋑ケフ。迄業切。葉。

❶くじく（挫）❷協に同じ㋺したがふ（從）。

【搛】㋑レン、ロン。離鹽切。鹽。㋺ケン、コン。堅嫌切。鹽。

㋑つづみうつ㋺もつ、夾み持つ。

【搋】㋑ヘイ、ベイ。鷙迷切。齊。㋺ヘツ、ベチ。蒲結切。屑。㋩ヒ。頻脂切。支。

㋑てなかへしうつ㋺ことなひく㋩まろばす（轉）。

【搜】㋑シウ、シュ。疎鳩切。尤。㋺セウ。先彫切。蕭。㋩サウ、セウ。山巧切。巧。

㋑もとむ、さぐる、さがす（搜に同じ）㋺うごく、動く貌㋩みだる（亂）。

【搜求】さがしたづぬ。韓愈「雕刻文刀利、搜求智網恢」

【搜爬】さがしてかきあつむ。孔平仲「撐突盤盂皸、搜爬堂廡汙」

【搜索】さがしもとむ。漢書に「提掖搜索、問㆓以所ㇾ聞」

【搜討】さぐりもとむ。韓琦「求者如ㇾ麻幾百年、宜乎今日難㆓搜討㆒」

【搜探】さぐる。さがす。韓維「奄㆓有勝跡㆒窮㆓搜探㆒」

【搜采】もとめとる。梁書に「自㆓漢魏㆒至㆓於齊梁㆒、竝皆搜採」

【搜訪】さぐりとふ。宋史に「仍搜㆓訪遺材㆒以備㆓擢任㆒」

【搜集】さがしあつむ。南史に「搜㆓集經記㆒招㆓學士㆒」

【搜粟】前に同じ。隋書に「後齊遷ㇾ鄴、頗更搜粟」

【搜獎】さがして引きたつ。南史に「搜㆓獎忠烈㆒」

【搜檢】さぐりしらぶ。南史に「搜㆓檢姦慝㆒不ㇾ避㆓強禦㆒」

【搜邏】さぐる。蘇舜欽「無㆓以答㆓高誼㆒、胸中强搜邏」

【搞】㋑カウ、ケウ。丘交切。肴。㋺カウ、コウ。口到切。號。

㋑うつ、たたく（敲に同じ）㋺たがふ。

【搡】サウ。蘇郎切。養。

❶うつ（搷）❷とどむ（揬）。

【搢】㋑シン。卽刃切。震。㋺セン。作甸切。霰。㋩セイ、サイ。牋西切。齊。

㋑❶さしはさむ（插）❷ふるふ（振）㋺㋩さしはさむ。

【搢笏】しゃくをさしはさむ。禮記に「端㆓韠紳㆒搢ㇾ笏」

【搢紳】貴顯の人。笏を大帶に插む義に取る。晉書に「所ㇾ謂搢紳之士者、搢笏而垂㆓紳帶㆒也」

【搣】㋑ベツ、メチ。亡列切。屑。㋺ケツ、ケチ。覬劣切。屑。

㋑❶うつ（批）❷ぬく（拔）❸する（摩）❹つかむ（捽）㋺そろふ（齊）。

【搤】㋑アク、ヤク。乙革切。陌。㋺エツ、エチ。壹結切。屑。㋩エイ、アイ。壹計切。霽。㋥アイ、エ。烏懈切。卦。

㋑❶とる（捉）❷もつ（持）❸にぎる（握）❹てにみつ（滿手、搤腕）㋺もつ（持）㋩とりひしぐ（拉）㋥にぎる（扼）。

【搤吭】のんどをしめつく。要害の地に據りて敵を制する義。史記に「今陛下入ㇾ關而都、案㆓秦之故地㆒、此亦搤㆓天下之吭㆒而拊㆓其背㆒也」

【搤咽】のどをつかむ。急所をおさふるに喩ふ。解嘲に「搤㆓其咽㆒、亢㆓其氣㆒」

【搤殺】にぎりてしめころす。詩經、箋に「搤㆓殺之㆒」

【搤腕】うでをきびしくにぎる。奮激の貌。史記に「莫ㇾ不㆓搤腕㆒」

【搥】㋑タイ、テ。都回切。灰。㋺ツヰ、ズヰ。直追切。支。

㋑❶あぐ（擿）❷なげうつ（擲）㋺うつ（擿）。國訓つち。

【搥背】せなをたたく。白居易「小奴搥㆓我足㆒、小婢搥㆓我背㆒」

【搦】㋑ヂャク、ニャク。昵格切。陌。㋺ヂョク、ニョク。女力切。職。㋩ダク、ノク。女角切。覺。

❶おさふ（按）❷なづ（摩）❸とる（捉）❹からむ。

【搧】ヨウ。

擁に同じ。

【搨】㋑セン。尸連切。先。㋺式戰切。霰。

うつ（批）。

【搨】タフ、トフ。德盍切。合。

❶うつ（手打）❷おかす（冒）❸うつす（臨摹）❹いしずり（搨本）。

【搨本】石碑などをすり寫したる帖。寶章待訪錄に「唐太師顏眞卿乞米帖、眞蹟在㆓蘇澥處㆒、士人多有㆓臨搨本㆒」

【搨地錢】唐代に茶商より收めたる稅金。唐書に「茶商所ㇾ過州縣有㆓重稅㆒、或掠㆓奪舟車㆒、露㆓積雨中㆒、諸道置ㇾ邸以收ㇾ稅、謂㆓之搨地錢㆒」

【搩】㋑ケツ、ゲチ。渠列切。屑。㋺タク、チャク。陟格切。陌。

㋑揭に同じ㋺はかる（度）。

【搪】タウ、ダウ。徒郎切。陽。

❶はる（張）❷つく（突）。

【搫】㋑ハン、バン。蒲官切。寒。㋺ハ、バ。蒲波切。歌。

㋑❶ただしからず（搫擭）❷はらふ、のぞく（除）㋺❶のぞく❷ちらす（散）❸なさむ（聚斂）。

【搬】ハン、バン。搫の字の重文。

❶はこぶ❷うつす。

【搭】タフ、トフ。德合切。合。

❶うつ（擊）❷つく（附）❸かく（挂）❹うつす（摹）。

【搭船】ふれにのりこむ。龍圖公案に「可ㇾ搭㆓我船㆒而去㆖」

【搭乘】前に同じ。

【搭鉤】ふれにのす。

【搭載】物をつりかくるかぎ。

【搭營】陣屋を張る。

【搯】タウ、トウ。他刀切。豪。

❶かかぐ❷たたく（叩）❸とり

いだす。

【搯擢】タウタク ぬきいだす。韓愈「鉤章棘句、搯二擢胃腎一」

【搯膺】タウヨウ 胸をうちたたく。長笛賦に「靁歎頽息、搯膺擗摽」

【搰】㋑コツ、クチ。胡骨切。月。㋺コツ、コチ。古忽切。月。❶ほる(掘)❷にごす(濁)❸みだる(亂)❹あばく(發)❺はたらく。

【搰搰然】コツコツゼン 力を用ゐる貌。莊子に「搰搰然用ㇾ力甚多、而見ㇾ功寡」

【搲】カウ、コウ。古雙切。江。あぐ(扛に同じ)。

【搳】㋑カツ、ゲチ。胡秸切。黠。㋺カツ、ケチ。丘瞎切。黠。❶こそぐ(猾)❷かく(搔)。

【搴】㋑ケン。丘虔切。先。㋺セン。巳仙切。先。❶とる(取)❷ぬく(拔)❸かかぐ❹ちぢむ(縮)。

【搴出】ケンシュツ つまみてひき出す。

【搴取】ケンシュ つまみとる。

【搴旗】ケンキ 敵にかちて旗をひき取る。漢書に「身履ㇾ軍搴ㇾ旗者數矣」

【搴擷】ケンケツ ぬきとる。釋無可「靈均曾搴擷、紉佩挂二荷裳一」

【搴攬】ケンラン かかげとる。王冷然「搴攬而不ㇾ盈」

【搵】㋑チン。烏困切。願。㋺チツ、チ。烏沒切。月。㋩ウン、ヲン。於粉切。吻。㋥於云切。文。㋑㋺❶ゆびにておす、おさふ(指按)❷そむ(染)❸しづむ(沒)㋩ささふ(拄)㋥しづむ(沈)。

【擊】ラン。擥の俗字。

【搶】㋑シャウ、サウ。千羊切。陽。㋺此亮切。漾。㋩此兩切。養。㋥鋤庚切。庚。㋭楚耕切。庚。㋑❶こばむ(拒)❷つく(突)❸とびかすむ(飛掠)❹あつまる(集)㋺帆をあぐ㋩❶つく(著)❷つく(突)㋥みだる(亂)㋭ははきぼし(慧星、欃搶)。

【搶風】シャウフウ 風を受けて帆をあぐ。庾闡「艇子搶ㇾ風、榜人逸ㇾ浪」

【搶攘】シャウジャウ みだる。漢書に「國制搶攘」

【搷】㋑テン、デン。徒年切。先。㋺伸に同じ。㋑❶うつ(急擊)❷あぐ(揚)❸ひく(引)。

【搸】シン。緇詵切。眞。❶ことのこゑ(琴瑟の聲)❷あつまる(聚)。

【搹】㋑アク、ヤク。乙革切。陌。㋺カク、キャク。古核切。陌。❶にぎる(把)❷にぎり(把)❸もつ(持)。

【携】ケイ。攜の俗字。

【搿】ヨ。舁の俗字。

【搻】ザク、ニャク。搦に同じ。

【揲】エフ。弋渉切。葉。攝に同じ。箕舌。

【搾】〔國字〕しぼる。

十一畫

【摋】㋑サツ、サチ。桑葛切。曷。㋺サツ、セチ。山戛切。黠。㋩サイ、セ。師駭切。蟹。㋥セツ、セチ。私列切。屑。㋑❶はらひけす(掃滅)❷ふるひちらす(揮散)㋺うつ(擊)㋩はらひすつ(攞撥、捽撥)㋥❶うつ(擊)❷くさび(槷)。

【摗】㋑ソウ、ス。速侯切。尤。㋺損動切。董。㋑とる(取)㋺はしる(趨に同じ、走)。

【摎】㋑キウ、ク。居尤切。尤。㋺リウ、ル。力求切。尤。㋩カウ、ケウ。古肴切。肴。㋥ダウ、ネウ。女巧切。巧。㋭ラウ、レウ。力交切。肴。㋬レウ。離昭切。蕭。㋑❶くくる(絞)❷もとむ(求)㋺❶とる(捋)❷つかぬ(束)㋩❶まとふ(纏)❷むすぶ(結)㋥みだる(擾)㋭まつはる(纏)㋬おさふ(擦)。

【摏】ショウ、シュ。書容切。冬。❶うつ(搗)❷つく(衝)❸たた

く(撞)。

【摐】㋑サウ、ソウ。楚江切。江。㋺シュウ、シュ。七恭切。冬。❶つく(撞)❷みだる(撩)。

【摢】㋑コ、グ。後五切。麌。㋺呼誤切。遇。㋑❶もとる(悖)❷たがふ(違)❸さかふ(逆)㋺しく(施)。

【挽】トウ、ツ。當侯切。尤。❶うつ(批)❷とる(攬)。

【摑】㋑クヮク、カク。古伯切。陌。㋺キャク。古獲切。陌。❶うつ(批、打)❷みみうつ(撾に同じ)。國訓 つかむ。

【㨯】クヮク。摑に同じ。

【摒】ヘイ、ヒャウ。卑正切。敬。❶はらふ(拂)❷のぞく(除)。

【摓】ホウ、ブ。符容切。冬。❶ささぐ(捧に通ず)❷うけたまはる(奉)❸ぬふ(縫に同じ)❹おほいなり(逢に同じ、摓衣)。

【摕】㋑テイ、タイ。丁計切。霽。㋺テツ、デチ。徒結切。屑。㋩トツ、ドチ。陀沒切。月。㋑つまみとる(撮取)㋺かすめとる(掐取)㋩うつ(擊)。

【摖】㋑セイ、サイ。七計切。霽。㋺サツ、セチ。初戛切。黠。㋑かかげとる(挑取)㋺おす(推)。

【摌】㋑サン、セン。所簡切。潸。㋺ソン、ゾン。所恨切。願。㋑❶うごかす(動)❷えらぶ(擇)❸とどむ(止)㋺ふるふ(揮)。

【摘】㋑テキ、チャク。他歷切。錫。㋺タク、チャク。竹厄切。陌。㋑❶あばく(發)❷うごかす(動)❸ひろふ(拓)❹さす(指)㋺つまむ(手取)。

【摘芳】テキハウ 花をつみとる。江淹「摘ㇾ芳拾ㇾ藥、含ㇾ詠吐ㇾ辭」

【摘要】テキエウ 要點をつまみとる。

【摘茶】テキチャ ちゃをつむ。僧惠洪「摘茶時節亂山閒」

【摘書】テキショ ぬきがき。

【摘綴】テキテツ つまみとる。元稹「掃除田地靜、摘綴園蔬美」

【摘問】テキモン ぬきだしてとふ。唐書に「試擧二諸條一摘二問之一」

【摘抉】テキケツ あばきだす。漢書、孫寶傳に「故欲三摘抉以揚二我惡一」

【摘插】テキサフ つまみはさむ。宋石城樂に「摘插環髻前」

【摘發】テキハツ つまみてあばく。後漢書に「相監司以摘二發其姦一」

【摘載】テキサイ 要點のみをつまみて書き載す。

【摘錄】テキロク ぬきがき。前に同じ。

【摘釁】テキキン きずをひろひだす。後漢書に「抉ㇾ瑕摘ㇾ釁、掩二其弘美一」

【摙】レン。力展切。霰。❶おふ(負)❷かたぐ(擔)❸おさふ(按)。

【摚】㋑タウ、ダウ。徒郎切。陽。㋺タウ、チャウ。除庚切。庚。❶こゆ(距)❷ふる(觸)。

【摛】㋑チ。抽知切。支。㋺リ。鄰知切。支。㋑❶しく(布)❷ひらく(發)❸のぶ(捩)㋺はる(張)。

【摛藻】チサウ 藻は詞藻なり、字句をのべしく。班固「馳辯如二濤波一、摛藻如二春華一」

【擄】ロ、ル。郎古切。麌。❶うごかす、うごく(動)❷つよし(强)。

【摜】クヮン、ケン。古患切。諫。❶ならふ(慣に同じ)❷おぶ。

【掎】㋑キ、ギ。倶爲切。支。㋺キ。墟綺切。紙。㋑❶いただく(戴)❷とる(攲に同じ)㋺たな(庋に同じ、戶棚)。

【摝】㋑ロク。盧谷切。屋。㋺ロウ、ル。盧貢切。送。㋑❶うごく(動)❷うごかす(搖)❸ふる(振)。

【摞】㋑ラ。盧戈切。歌。㋺ラ。魯過切。箇。おさむ(理)。

【摟】㋑ロウ、ル。郎侯切。尤。㋺ル、ロ。力朱切。虞。㋑❶ひく(牽)❷ひきあつむ(曳聚)㋺挽き申ばす、のぶ、ひく。

【摠】ソウ、ス。作孔切。董。㊀すぶ㊁總に同じ。みな(皆)㊂おほし(衆)㊃むすぶ(結)。

【摡】㋑カイ。居代切。隊。㋺キ、ケ。許旣切。未。㋑㊀そそぐ(滌)㊁ぬぐふ(拭)㊂あらふ(灌)㋺㊀とる(取)㊁ぬぐふ。

【搌】サイ。撮に同じ。

【摢】㋑コ、ウ。胡故切。遇。㋺擭に同じ。㋑ささふ(障)。

【摣】㋑サ、セ。莊加切。麻。㋺ダ、ナ。女加切。麻。㋩サイ、セ。莊蛙切。佳。㋑㋺㊀とる(取)㊁つかむ(攫)㋩うつ(搏)。

【擶】セン。揃の俗字。

【摤】シャウ、サウ。七兩切。養。㊀みがく(磨)、とぎあらふ(磨滌)㊁搶に同じ。

【搸】テツ、デチ。丁結切。屑。なげうつ(擿)。

【搗】タウ、トウ。擣の俗字。

【㨷】㋑キン、コン。居覲切。問。㋺擧欣切。文。㋑ぬぐふ(拭)㋺ただし(靖)。

【摥】タウ。他浪切。漾。㊀ひらく(排)㊁おす(推)㊂おしひらく(排)。

【摦】クワ、ゲ。胡化切。禡。ゆたかなり、ひろし(寬)。

【摧】㋑サイ、ゼ。昨回切。灰。㋺摧内切。隊。㋩サ、ザ。寸臥切。箇。㋑㊀おす(擠)㊁をる(折)㊂ひく(挏)㊃はばむ(沮)㊄くじく(挫)㊅くだく(挫)㊆おさふ(抑)㊇ほろぼす(滅)㊈しりぞく(退)㊉いたる(至)㋺へらす、へる(減)㋩㊀まぐさ(莝)に同じ、斬芻)㊁まぐさかふ。

【摧北】力くじけて逃ぐ。唐書に「每レ戰必爲二先鋒一、所レ嚮摧北」

【摧扤】くだけうごく。劉孝威「不レ見山巓樹、摧扤下爲レ薪」

【摧朽】くちたるものをくだく。物の破り易きをいふ。北史に「六軍電發、有レ若レ摧レ朽」

【摧折】くじく。(毀折、撓折)。漢書に「雷霆所レ擊、無レ不二摧折一」

【摧抑】おさふ。鮑照「摧抑多二嗟思一」

【摧拉】くじきひしぐ。潘尼「林木摧拉、沙粒竝糜」

【摧殄】くだけなくなる。くぢきつくす。隋書に「摧二殄侯景一、克二復河南一也」

【摧紆】くじけまとふ。柳宗元「此心未レ愜、祇益摧紆」

【摧剉】くじく。蘇轍「空詑乘二峽船一、行意被二摧剉一」

【摧破】くだけやぶる。くだきやぶる。後漢書に「鐵脛五校、莫レ不二摧破一」

【摧挫】くじく。(折挫、抑挫)。元稹「電卷風收盡摧挫」

【摧剝】くづれはがる。陸游「荒寒過二吳宮一、摧剝觀二禹穴一」

【摧陷】くだきおとしいる。南史に「所レ至無レ不二摧陷一」

【摧裂】くだけさく。蔡琰「募レ我獨得レ歸、哀叫聲摧裂」

【摧落】くだけちる。王粲「山川于レ是搖蕩、草木爲レ之摧落」

【摧殘】くだけそこなふ。陳後主「摧殘枯樹影、零落枯藤陰」

【摧頓】くじく。論衡に「干將之刀、人不二摧頓一」

【摧感】氣くじけ心うごく。吳志に「權益以摧感、言則隕レ涕」

【摧碎】くだく。舊唐書に「當二其鋒一者無レ不二摧碎一」

【摧厭】くだきつぶす。蘇轍「歸來父老藏、崇商長二摧厭一」

【摧稿】かれ木をくだく。破れ易きをいふ。徐積「戰而北、若レ摧レ稿」

【摧輪】わをくだく。新論に「摧レ輪則無二以行一レ舟」

【摧撓】をれまがる。陳琳「摧二撓棟梁一、孤二弱漢室一」

【摧褫】くじきうばふ。玉海に「神骭

弓銘、電激星流、敵膽摧碎」

【摧擊】くだきうつ。陳與義「摧擊竟自碎、映レ空白煙走」

【摧轅】車のながえををる。中論に「至二于覆レ車而摧一レ轅」

【摧臆】胸をくじく。孫楚「遂陷レ首以摧レ臆」

【摧靡】くじきなびく。舊唐書に「當二其鋒一擊レ之、無レ不二摧靡一」

【摧斃】くじきたふす。魏志、注に「憑二賴天威一、摧二斃姦凶一」

【摧艫】舟のともをくじく。寰宇記に「跳波激射、摧レ艫碎レ軸」

【摧枯拉朽】かれたる木をくだき、くちたる木をつぶす。物のなしやすきにいふ。晉書に「將軍之舉二武昌一、若二摧レ枯拉一レ朽、何所二顧慮一乎」

【摩】㋑バ、マ。莫婆切。歌。㋺ビ、ミ。忙皮切。支。㋑㊀せまる(迫)、ちかづく(近)㊁みがく(研)㊂とぐ(研)㊃する(揩)㊄なづ(撫)㊅けす(滅)㋺神の名(施摩)。

【摩天】天までせまりちかづく。李白「吾觀摩レ天飛、九萬方未レ已」

【摩尼】〔佛〕珠の通名。翻譯名義集に「摩尼、圓覺鈔、又云二如意一、謂意中所レ須財寶衣服飮食種種之物、此珠悉能出生、令二人皆得一二如意一、故名爲レ寶」

【摩拂】する。詩疏廣要に「牝牡飛鳴、翼相摩拂」

【摩耶】〔佛〕摩訶摩耶の略。唐に大術といひ、或は大幻といふ云云。西域記に見ゆ。

【摩滅】すれてきゆ。すれてつぶる。尙書、序に「錯亂摩滅、弗レ可二復知一」

【摩捋】なづ。爾雅、疏に「強蟲名也、一名蚚、好自摩捋者」

【摩偷】〔佛〕㊀酒と譯す、印度には、穀酒・果酒・藥酒の三種ありといふ。㊁美地と譯す、忉利に屬する下天の稱。翻譯名義集に「摩偷此翻二美地一、此上天名、皆居二須彌四埵一」

【摩訶】〔佛〕(梵語 *Maha.*) 大・多・勝の三義あり、普通には、大と譯す。

【摩戛】すれ合ひて發する音。晁補之「窓間竹數十竿、相摩戛、聲切切不レ已」

【摩撫】なでさする。蘇軾「欲レ把二瘡痍一手摩撫」

【摩擦】する。こする。

【摩羅】㊀〔佛〕華鬘をいふ。翻譯名義集に「西域結鬘師、多用二蘇摩羅華一」㊁〔植〕ゆりの異名。本草に見ゆ。

【摩壘】㊀敵壘に接近して旗をなで切りするをいふ。左傳に「許伯曰、吾聞致レ師者、御靡レ旌、摩レ壘而還」㊁他人の詩文などのよく古の大家に頡頏するを稱揚していふ

【摩登伽】〔佛〕(梵語 *Matanga.*) 作惡業と譯す。旃陀羅族にして卑賤の業を營む男子の通稱。

【摩登祇】〔佛〕(梵語 *Matangi.*) 惡作業と譯す。旃陀羅族にして卑賤の業を營む女子の通稱。

【摩乾軋坤】天地にみち塞がる義。劉基「於赫龍虎之靈、摩レ乾軋レ坤、魁二擊山一而獨尊」

【摩羅伽陀】〔佛〕七寶の一、金翅鳥の口邊より出づる綠色の珠にして、能く一切の諸毒を避く、世に希有なるを以て寶となす云云。智度論に見ゆ。

【摪】㋑シャウ、サウ。七亮切。漾。㋺牂に同じ。㋑たすく(扶)㋺さす(刺)。

【搳】バツ、マチ。莫八切。黠。うつ(打)。

【搯】㋑セイ、セ。祖芮切。霽。㋺エイ、エ。于劌切。霽。㋩セツ、セチ。蘇絶切。屑。㋑㋺さく(裂)㋩はらふ(掃)。

【擨】セン、ゼン。隨戀切。霰。㊀ひく(引)㊁かかぐ(挑)。

【摫】キ。均窺切。支。㊀さく(裂)㊁たつ(裁)。

【摬】㋑エイ、イヤウ。於境切。梗。㋺アウ、ヤウ。倚兩切。養。㋩キヤウ、カウ。巨兩切。養。うつ(擊)。

【摭】㋑セキ、シャク。之石切。陌。㋺シャク。職略切。藥。
とる、ひろひとる(拓に同じ)。
【摭拭】セキショク とりぬぐふ。李白「摭拭欲レ贈レ之」
【搴】㋑ガウ、ゴウ。牛刀切。豪。㋺カウ、ケウ。丘交切。肴。
㋑うつ(擊)㋺うつ(橫撾)。
【搴殺】ガウサツ うちころす。公羊傳に「膳宰熊蹯不レ熟、公怒以レ斗搴二殺之一」
【撤】カウ、ゴウ。魚到切。號。うごく、うごかす(動)。
【擉】サク、ソク。仕角切。覺。❶さす(刺)❷つらぬく(貫)。
【摯】㋑シ。脂利切。寘。㋺チ。陟利切。寘。㋑❶にへ(贄に同じ)❷とる(執)❸いたる(至)❹すすむ(進)❺きはむ(極)❻いたす(致)❼やぶる(傷)❽くだく(折)❾たけし(勇猛)㋺❶とく(解)❷ひくし(輊に通ず、低)。
【摯拘】シコウ かかはる。とらふ。又、つなぎとどむ。韓愈「富貴自摯拘、貧賤亦煎焦」
【摯獸】シジウ あらあらしきけもの。禮記に「前有二摯獸一、則載二貔貅一」
【摰】ゲツ、ゲチ。倪結切。屑。❶あやふし(臲に同じ、隉)❷安からず❸ひく(掣に同じ、挽)。
【㩵】㋑ゲイ。倪制切。霽。㋺擊字の變體。㋑すれあふ。

【摱】㋑バン、マン。模元切。元。㋺莫晏切。諫。㋑ひく(引)㋺うつ(擊)。
【㨻】㋑サン、ゾン。昨甘切。覃。㋺サン、セン。所斬切。豏。㋩サン、ゾン。在敢切。感。㋥姐紺切。勘。㋭セン、ゼン。疾染切。琰。㋬摲字の變體。㋑しばらく(暫)㋺❶ついづ(次)❷きりとる(截取)㋩うつ(擊)㋥あぐ(擧)㋭とる(取)。
【撕】㋑サン、セン。所鑑切。陷。㋺セン、ゼン。疾染切。琰。㋑❶かる(芟)❷なぐ(投)❸ふさぐ㋺のぞく(除)。
【摳】㋑コウ、ク。口侯切。尤。㋺オウ、ウ。於口切。有。㋩ク。虧于切。虞。㋑❶ひっさぐ、かかぐ(提)❷さぐる(探)㋺うつ(毆に同じ)㋩かかぐ。
【摴】チヨ、ト。抽居切。魚。のぶ(舒)。
【摵】㋑サク、シャク。沙劃切。陌。㋺シュク、ソク。所六切。屋。㋩ベイ、メイ。綿批切。齊。㋥ソク。七則切。職。㋑❶かすむ(揹)❷木葉の落つる聲❸はらふ(拂)㋺いたる(到)㋩うつ(批に同じ)㋥みがく(摩)。
【摵摵】サクサク 木の葉のおつるこゑの形容。盧諶「摵摵芳葉零」

【搏】㋑タン、ダン。徒官切。寒。㋺セン。朱遄切。先。㋩テン、デン。持兗切。銑。㋥縛に同じ。
㋑❶ひねりあつむ(捏聚)❷まろし(圜)❸うつ(拍)❹にぎる(握)❺垂れ下る貌㋺❶ほしいままにす(擅)❷專の古文字㋩たば(把束)。
【搏心】センシン 搏は專の古字なり、心をもっぱらにす。史記に「搏レ心壹レ志」
【搏苴】タンシヨ 〔植〕蘘荷の異名。
【搏食】ダンジキ 〔佛〕人間の飲食營養。翻譯名義集に「古譯經律皆搏食、乃至通俗文手團曰レ搏」
【搏黍】タンシヨ ❶きびをにぎりまろむ。儀禮に「搏レ黍授レ祝」❷〔動〕黃鳥の異名。
【搏搏】タンタン 垂れ下る貌。張衡「志搏搏以應レ懸兮、誠心固其如レ結」
【擽】㋑セウ。子小切。篠。㋺レウ。落蕭切。蕭。㋩サウ、セウ。側交切。肴。㋥ラウ、ロウ。郎刀切。豪。㋑うつ(擊)㋺はたらく、はたらき(動作)㋩㋥とる(鈔、抄に同じ)。
【摸】㋑バク、マク。末各切。藥。㋺ボ、モ。莫胡切。虞。㋑❶さがす、さぐる、もとむ、とる(索)❷つかむ(捫)㋺うつす、のっとる(摹に同じ)。
【摸索】モサク てさぐりす。隋唐佳話に「暗中摸索、著亦可レ識」

【摸稜】モリヨウ 是非を決せざるをいふ。唐書、蘇味道傳に「嘗謂レ人曰、決レ事不レ欲二明白一、誤則有レ悔、摸稜持二兩端一可也、故世號二摸稜手一」
【摹】ボ、モ。莫胡切。虞。❶のっとる(規)❷ならふ(倣)❸うつす(寫)。
【摹本】ボホン うつしたる書物。皇朝類苑に「今傳二樂毅論一者、皆摹本也」
【摹倣】ボハウ まねぶ。まねびならふ。唐天清錄集に「漸摹二倣之一、遂得二天趣一」
【摹臨】ボリン みてうつす。宣和畫譜に「故俗畫摹臨、莫二克髣髴一」
【㨾】ヤウ。弋亮切。漾。❶のっとる(法)❷のり(樣式)。
【摺】㋑セフ、ソフ。質涉切。葉。㋺ラフ、ロフ。盧合切。合。㋑❶たたむ(疊)❷ひだ❸やぶる(敗)㋺拉に同じ、くじく(折)、ひしぐ(挫)。國訓 する。
【摺拉】セフラフ とりひしぐ。庾信「碉谷摺拉」
【摺脇】セフケフ わきばらをやぶる。淮南子に「擴捲一擠則摺レ脇傷レ幹」
【摺齒】セフシ 齒をくじく。史記、范雎傳に「折レ脇摺レ齒」
【摺疊】セフテフ たたむ。文苑彙傳に「此乃拆卸摺疊之亭也」
【摻】㋑サン、セン。師咸切。咸。㋺セン、ソン。思廉切。鹽。㋩サン、セン。所斬切。豏。㋥セウ。千遙切。蕭。㋭サン、ソン。七紺切。勘。㋑㋺しなやかなり(攕に同じ)㋩❶とる(執)❷ほそし(細)❸しなやかなり㋥もつ(持)㋭鼓の曲の名。
【摻摻】サンサン 女子の手のほそき貌。詩經に「摻摻女子、可二以縫一レ裳」
【摼】㋑カウ、キャウ。丘耕切。庚。㋺ケン。輕煙切。先。㋑つく(撞)㋺ひく(牽の古文字)。
【摽】㋑ヘウ。婢小切。篠。㋺紕招切。蕭。㋩ヘキ、ヒャク。匹歷切。錫。㋥ハウ、ヘウ。匹交切。肴。㋑❶うつ(擊)❷おつ(落)❸むねうつ、憂ひ苦しむ㋺❶きっさき❷すつ(捐)❸さしまねく(麾)❹うつ(蔽に同じ)❺高く擧る貌㋩うつ(擊)㋥なげうつ(拋に同じ)。
【摽末】ヘウマツ きっさき。漢書、王莽傳に「摽末之功」注に「刀末之摽」
【摽拂】ヘウフツ うつ。淮南子に「攫援摽拂、手若二蔑蒙不一レ失二一紘一」
【摽梅】ヘウバイ 嫁期のすぎたるをいふ。詩經に「摽有レ梅、其實七兮、求レ我庶士、迨二其吉一兮」
【摽然】ヘウゼン たかくあがる貌。管子に「摽然若二秋雲之遠一」
【摽擊】ヘウゲキ うつ。左傳、注に「長木斃二踣于地一、不レ擇レ物而後摽擊一」

【攓】セン。親然切。先。さしはさむ(插)。
【摾】キャウ、ガウ。其亮切。漾。弶に同じ。❶あみはる❷いぐるみとる。
【掩】エン。掩の本字。
【揊】ヒョク、ヘキ。拍逼切。職。副、疈に通ず。さく(割)。
【揞】イン、オン。於金切。侵。❶やすくやはらぐ(愔に同じ)❷ふかくしづかなり。
【揞揞】インイン 安らかに和らぎたる貌。深くして靜かなる貌。淮南子に「推二其揞揞一、擠二其揭揭一、此謂レ因レ勢」
【揵】ケン、ゴン。居言切。元。揵子は、樗蒲の采の名。
【摃】ラウ。郎宕切。漾。うつ(擊)。

十二畫

【撅】㋑ケイ、ケ。姑衞切。霽。㋺ケツ、ケチ。紀劣切。屑。㋩ケツ、グヮチ。居月切。月。㋑かかぐ(揭)㋺たゆ(撥)㋩❶ほる(掘)❷とる(把)❸うつ(擊)❹なぐ(投)。
【撆】ヘツ、ヘチ。芳滅切。屑。❶うつ(擊)❷わかつ(別)❸ひく(引)❹はらふ(拂)❺ぬぐふ(拭)❻と

ろ（略）㊆筆法の名。

【撇】(ゆ)ヘツ、ヘチ。匹蔑切。屑。(ろ)ヘイ。必弊切。霽。(ゆ)㊀擊に同じ㊁かかぐ（揭）(ろ)うつ（摽）。

【撇孛】空疏なり。柳宗元「僕乃單庸撇孛、離疏空虛」

【撈】(ゆ)ラウ、ロウ。郞刀切。豪。(ろ)郞到切。號。(は)レウ。力弔切。嘯。(ゆろ)とる（取）(は)鉤にて取る。

【撈魚】うなぎすくひとる。

【撈採】水をくぐりて取る。元史に「聽ニ民於楊村直沽口ニ撈採ヒ」

【撈攎】手にとりもつ。李賀「撈攎去不レ歸」

【撊】カン、ケン。買限切。潸。㊀つよし、たけし（猛）㊁怒れる貌、いきまく。

【撊然】いかれる貌。左傳に「今執事撊然授レ兵登レ陴」

【撋】(ゆ)ゼン、ネン。而宣切。先。(ろ)ジュン、ニュン。濡純切。眞。(は)スヰ、ズヰ。儒垂切。支。(に)ダ、ナ。奴禾切。歌。(ゆ)㊀くだく（摧）㊁もむ(ろ)ぬぐふ（拭）(は)㊀もむ（挼）㊁そむ（擩染）(に)もむ。

【撌】キ。丘愧切。寘。とる（擓）。

【⿰扌賁】フン、ゾン。符分切。文。㊀ぬぐふ（拭）㊁きよむ（淸）。

【撍】(ゆ)サン、ソン。子感切。感。(ろ)作紺切。勘。(は)作含切。覃。(に)シン、ソン。側吟切。侵。(ほ)セン、ソン。慈鹽切。鹽。(ゆ)てうごく（手動）(ろ)ひろふ（掇）、うごく(は)つく（盡）(に)とし（疾）、すみやかなり（速）(ほ)つむ（摘）。

【撎】(ゆ)エイ、アイ。於計切。霽。(ろ)イ。於賜切。寘。ゑしやく。

【撏】(ゆ)シン、ジン。徐心切。侵。(ろ)サン、ゾン。徂含切。覃。(は)セン、ゾン。徐廉切。鹽。(ゆろ)とる（取）(は)つむ（摘）。

【⿰扌棠】ダウ。橖に同じ。ささふ（支）。

【撐】タウ、チャウ。丑庚切。庚。㊀つっぱり、ひかへばしら（支柱）㊁ささふ（支）㊂ひらく（撥）㊃さをさす（棹）。

【撐抉】かかぐ。司空圖「其驅駕氣勢若ニ掀雷扶電、撐ニ抉於天地之垠ニ」

【撐拄】ささふ。ささへ。林景熙「天地綱常要ニ撐拄ニ」

【撐突】ささへつく。杜甫「撐ニ突波濤ニ挺叉入」

【撑】タウ、チャウ。撐の俗字。

【撒】サツ、サチ。桑葛切。曷。㊀ちらす（散）㊁はなつ（放）㊂まく（播）㊃なげうつ（擲）。

【撒水】みづをまく。

【撒布】ふりまく。

【撒菽】まめをまく。陸游「風聲如ニ飜濤、雨點如ニ撒菽ニ」

【撓】(ゆ)ダウ、ネウ。奴巧切。巧。(ろ)女教切。效。(は)カウ、コウ。呼毛切。豪。(に)ゼウ、ネウ。爾紹切。篠。(ほ)人要切。嘯。(へ)ゲウ。馨幺切。蕭。(ゆ)㊀うごく、うごかす㊁みだる(ろ)㊀かく（搔）㊁つまむ（抓）㊂かがむ（屈）㊃みだる(は)みだる(に)たわむ（揉）(ほ)めぐる（繞に同じ）(へ)めぐる、めぐらす（撓挑）。

【撓尼】たわみくるしむ。曹植「嬌嬌公侯、不レ撓ニ其尼ニ」

【撓曲】たわめまぐ。

【撓折】くじく。（摧折、毀折）。後漢書に「撓ニ折棟梁ニ、孤ニ弱漢室ニ」

【撓屈】たわめかがむ。秦觀「不レ爲ニ利害之所ニ撓屈ニ者、所謂人節也」

【撓直】すぐなるものをたわめ曲ぐ。荀悅「撓レ直爲レ曲、剗レ方爲レ圓」

【撓挑】めぐる。めぐらす。莊子に「登レ天遊レ霧、撓挑無レ極」

【撓情】心をまぐ。後漢書に「撓レ情則違ニ廢禁典ニ」

【撓亂】みだる。漢書に「匈奴之衆易ニ撓亂ニ」

【撓撓】うごく貌。うごかす貌。莊子

に「復之撓撓以遊ニ無端ニ」

【撓擾】くるしめみだす。後漢書に「撓ニ擾百姓ニ、忿ニ怒四夷ニ」

【㨨】(ゆ)抽の本字。(ろ)リウ、ル。力救切。宥。(ゆ)㊀ひく（引）㊁ぬきんづ（抽）(ろ)ひきならす。

【⿰扌項】カウ、コウ。虎項切。講。かたぐ、になふ（擔荷）。

【⿰扌就】(ゆ)シウ、シュ。即就切。宥。(ろ)シュク、ソク。就六切。屋。(ゆ)とる（攬）(ろ)うつ（極擊）。

【⿰扌畫】(ゆ)クワク。忽麥切。陌。(ろ)サク、シャク。昔摑切。陌。(ゆ)つんざく、さく（裂）(ろ)裂くこゑ。

【攟】キン、クン。牛尹切。軫。つかぬ（束）。

【撕】(ゆ)セイ、サイ。先齊切。齊。(ろ)シ。相支切。支。(ゆ)ひっさぐ（提）(ろ)さく（斯に同じ）。

【⿰扌貳】(ゆ)チ、ヂ。直利切。寘。(ろ)ジ、ニ。而至切。寘。あたる（當）。

【⿰扌啻】(ゆ)チ。陟利切。寘。(ろ)擿に同じ。(は)摘に同じ。(ゆ)すつ（棄）。

【撖】(ゆ)カン、ゲン。苦減切。豏。(ろ)カン、コン。口含切。覃。(ゆ)㊀かかる（挂）㊁あやふし（危）(ろ)かく、かかる（挂）。

【撗】(ゆ)クワウ、ワウ。古曠切。漾。(ろ)胡光切。陽。(ゆ)みつ（充）(ろ)かうらいしば（結縷草）。

【撘】タフ。搭に同じ。

【撙】ソン。祖本切。阮。㊀くじく（挫）㊁おさふ（抑）㊂おもむく（趨）㊃あつまる貌㊄おほし（衆）。

【撙節】制限をなしおさふ。禮記に「君子恭敬撙節、退讓以明レ禮」

【撙撙】あつまる貌。甘泉賦に「齊總總以撙撙、其相膠轕兮」

【撚】デン、ネン。乃殄切。銑。㊀にじる（蹂）㊁したがふ（從）㊂とる（執）㊃まだつづかず㊄ひねる（指にて撚す）。

【撚抹】ひねりなづ。葛長庚「挑攏撚抹緩復急」

【撚紙】かみより。こより。

【撚絲】よりいと。

【撚斷】ひねりきる。盧延讓「吟成一箇字、撚斷數莖鬚」

【撛】リン。里忍切。軫。㊀ぬきだす（挺）㊁たすく（扶）。

【撜】(ゆ)ショウ。常證切。證。(ろ)タウ、チャウ。除庚切。庚。(ゆ)たすく、すくふ（拯に同じ）(ろ)ふる（振に同じ、觸）。

【撝】(ゆ)キ。吁爲切。支。(ろ)キ。于嬀切。支。(は)羽委切。紙。(ゆ)㊀さしまねく（麾）㊁さく（裂）㊂ふるふ（揮）(ろ)たすく（佐）(は)さく（裂）。

【撝挹】しりぞく。王儉「功成弗レ有、固秉ニ撝挹ニ」

【撝謙】へりくだる。（謙遜）。李至「撝謙則天下莫ニ與レ汝爭レ强」

【撞】タウ、ドウ。傳江切。江。㊀つく（突）㊁うつ（擊、擣）。

【撞入】つきいる。史記に「警衞止レ噲、噲直撞入」

【撞突】つきあたる。王起「若乃飛ニ驚刀ニ以撞突」

【撞挏】つきうごかす。漢書、注に「以ニ馬乳ニ爲レ酒、撞挏乃成也」

【撞捽】うちあたる。韓愈「峽山逢ニ颶風ニ、雷電助ニ撞捽ニ」

【撞著】あとさきそろはず。禪林類聚に「南堂靜云、須彌山高不レ見レ嶺、大海水深不レ見レ底、簸レ土揚レ塵無レ處レ尋、回レ頭撞著自家底」

【撞撞】つきうつ貌。李益「仙鐘撞撞迎ニ海日ニ、海中離離三山出」

【撞擊】つくとうつと。論衡に「夫以レ筳撞レ鐘、以レ算擊レ鼓、不ニ能鳴ニ者、所レ用ニ撞擊ニ之者小也」

【撞壞】うちくづす。晉書に「歎曰、好家居纖兒、欲レ撞ニ壞之ニ邪」

【撞鐘】 シタク かねをつく。禮記に「善待レ問者如レ撞レ鐘」 クワン。苦綰切。旱。

【撽】 とらふ(提)。

【撟】 ゆケウ。擧天切。篠。ろ擧喬切。蕭。ぱケウ、ゲウ。嬌廟切。嘯。 ゆ一ほしいままなり(擅)二いつぱる(詐)三かこつく(託)四つよき貌五ぜのびす六あがる(擧)七たむ(曲を正す)ろ一とる(取)二のばす(伸)三えらぶ(選)四あぐぱ一あぐ、あがる二かすむ。

【撟然】 ケウ ゼン 一強き貌。荀子に「撟然剛折」 二あがる貌。史記に「舌撟然而不レ下」

【撼】 ケキ、キャク。訖逝切。陌。 一もつ(持)二うつ(擊)。

【撥】 ハン、ベン。博幻切。諫。 一つなぐ(紲)二うつ(引擊)。

【撚】 サン。捻の俗字。

【撢】 ゆタン、ドン。他紺切。勘。 ろイン。夷針切。侵。ぱタン。心切。侵。ぱタン、ドン。徒感切。感。 ゆろさぐる(探)ぱ一をさむ(修)二くむ(掬)ぱおほふ(揩)。

【撣】 ゆタン、ダン。徒干切。寒。 ろ徒旱切。旱。ぱセン、ゼン。市連切。先。ぱテン。澄延切。先。 ゆ一ふる(觸)二ひく(彈に通ず)三ゆるし(持つことを堅からず)ろ一ひっさげもつ(提持)二いましむ(敵)三つつしむぱ

【撣撣】 ダン 提げ持つ。又、つつしむ。揚子太玄經に「荷レ福縞レ肩、提レ禍撣撣」

【撤】 テツ、デチ。直列切。屑。 一ひらく(發)二はらふ(除)三ぬく(抽)四はぐ、むく(剝)五すつ(捨)。

【撤去】 テツキヨ とりのく。宋史に「每レ至レ官有司例設二供帳一悉命撤去」

【撤回】 テツクワイ 一度出したるものを取戻す。

【撤兵】 テツペイ 兵をひきあぐ。

【撤退】 テツタイ すてしりぞく。

【撤備】 テツビ そなへの兵をひきあぐ。唐書に「撤二邊備一以靖二中邦一」

【撥】 ゆハツ、バチ。比末切。曷。 ろヘツ、ヘチ。房越切。月。 ゆ一のぞく(除)二をさむ(治)三ひらく(發)四はなつ(發)五めぐらす(轉)六たゆ(絕)七はらふ(拂)八そる(反)九あぐ(揚)十ばち十一ひつぎなは(紼)十二ひく、かきならすろたて(大楯)。

【撥去】 ハツキヨ はらひのく。漢書に「撥二去古文一、焚二滅詩書一」

【撥刺】 ハツラツ 矢の弦を離るる聲。張衡「彎二威弧之撥刺一兮」注に「撥刺張弓貌」

【撥剌】 ハツテキ かきのく。崔道融「酒醒撥剌殘灰火」

【撥無】 ハチ 〔佛〕撥は押しのけはねかへして顧みざるなり、他にこの事ありとするを見聞しても退けて顧みざる義。殆ど因果の道理を無視するにいふ。地藏十輪經に「撥二無因果一、斷二滅善根一」

【撥棄】 キツ はらひすつ。杜甫「妻孥隔二軍壘一、撥棄不レ擬レ道」

【撥簾】 レン すだれをかかぐ。白居易「香爐峰雪撥レ簾看」

【撥亂反正】 ハツラン ヘンセイ 亂を平げて治平ならしむ。漢書に「帝起二細微一、撥二亂世一、反二之正一、平二定天下一」

【撦】 シャ、セ。齒者切。馬。 一ひらく(開)二さく(裂)。

【撦】 セツ。絕に同じ。

【撦】 ゆラフ、ロフ。拉に同じ。ろケフ、コフ。協に同じ。ぱキフ、コウ。敍に同じ。ぱタフ、トフ。揚に同じ。

【撑】 ゆセイ、シャウ。先命切。敬。 ろ撐に同じ。

【撑】 ゆ一ひく(引)二うでまくりす。キ、ケ。丘衣切。微。 一ひきとる(撥取)二とる(取)。

【撤】 ゆセウ。蘇彫切。蕭。ろソウ、ス。先侯切。尤。ぱセウ、ゼウ。才笑切。嘯。 ゆ一えりとる(擇取)二とる(取)三ぬぐふ(拭)ろ一訓義ゆに同じ二おす(推)ぱぬぐふ(拭)。

【撥】 ゆシク、ソク。息六切。屋。ろセウ。先弔切。嘯。 うつ(擊)。

【撥】 ケツ、ゲチ。胡結切。屑。 一ほどけつる(汲水具)二しばる(縛)三つかぬ(束)。

【撰】 ゆヒ。芳未切。未。 ろブン、ホン。方問切。問。 ぱフツ、ホチ。父沸切。物。 ゆろたふす(擊仆)ぱとらふ(執)。

【撩】 ゆレウ。洛蕭切。蕭。ろラウ、ロウ。郎到切。號。ぱレウ。朗鳥切。篠。 ゆ一なぶる、いどむ(挑弄)二かすめとる、かすむ(掠取)三をさむ(理)四みだるろとる(撈に同じ)ぱ一かすむ二たすく(扶)。

【撩理】 リレウ をさむ。段玉裁「理レ亂謂二之撩理一」

【撩亂】 レウラン みだれあふ貌。(繚亂)。

【撩摘】 レウテキ つまみとる。元稹「撩摘芳情遍、搜求好處終」

【撩撥】 レウハツ からかふ。いらだたす。

【撩戰】 レウセン戰をいどむ。魏志に「但持二長矛一撩戰」

【撫】 ゆブ、フ。芳武切。麌。ろ摹に同じ。 ゆ一なづ(摩)二なぐさむ(慰)三たもつ(有)四したがふ(循)五もつ(持)六うつ(拍)七よる(據)八ほやし(急疾)九おさふ(按)。

【撫世】 ブセイ 世人をなぐさめやすんず。莊子に「以レ此進爲而撫レ世、則功大名顯、而天下一也」

【撫心】 シン こころをなぐさめさだむ。宋玉「於レ是撫レ心定レ氣、復見二所夢一」

【撫存】 ブソン なでいつくしむ。後漢書に「修二復祖宗一、撫二存萬姓一」

【撫有】 ブイウ なでやすんじてたもつ。穀梁傳、注に「臨撫二有之一也」

【撫安】 ブアン なでやすんず。吳志に「孫策命レ慈、往撫二安之一」

【撫定】 ブテイ やすんじしづむ。漢書に「項梁立二韓公子橫陽成一爲二韓王一、欲レ以撫二定韓地一」

【撫弄】 ブロウ たはむれもてあそぶ。(戲弄)。晉書に「陶潛蓄二素琴一、每レ有レ酒輒撫弄」

【撫育】 ブイク いつくしみそだつ。陳子昂「早蒙二撫育之恩一」

【撫抱】 ブハウ なでいだく。宋史に「或中夜啼號、必自起撫抱」

【撫和】 ブワ なでやはらぐ。晉書に「撫二和百姓一、甚得二歡心一」

【撫柔】 ブジウ なでやすんず。柳宗元「統二制三軍一、撫二柔萬人一」

【撫恤】 ブジユツ やすんじめぐむ。北史に「善撫恤、劫盜息止」

【撫訓】 ブクン なでをしふ。北史に「撫二訓諸弟一、友愛甚篤」

【撫納】 ブナフ なでとりいる。吳志に「承レ制還、使、宣レ恩撫納」

【撫御】 ブギヨ やすんじ治む。宋史、高繼勳傳に「性謙有二機略一、善撫二御士卒一」

【撫絃】 ブゲン 琴の類をなぐ。淮南子に「搏レ琴撫レ絃」

【撫接】 ブセツ したしみちかづく。宋書、袁顗傳に「惟賦レ詩談レ義而已、不レ能レ撫二接諸將一」

【撫教】 ブケウ なでをしふ。史記に「撫二教萬民一、而利二誨之一」

【撫結】 ブケツ したしみてむすぶ。後漢書に「撫二結雄傑一、懷二輯羌虜一」

【撫琴】 ブキン ことをひく。王粲「獨夜不レ能レ寐、攝レ衣起撫レ琴」

【撫馭】 ブギヨ いつくしみてつかふ。南史に「善撫馭得二人死力一」

【撫勞】 ブラウ なでねぎらふ。後漢書に「車駕親幸撫勞」

【撫綏】 ブスヰ しづめやすんず。書經に「用集二大命一、撫二綏萬方一」

【撫掌】 ブシヤウ 手のひらをなづ。庾信「陸士衡聞而撫掌、是所二甘心一、張平子見而陋レ之、固其宜矣」

【撫軾】 ブシヨク 車の前のよこざをなづ。王褒「撫レ軾歎兮作レ詩」

【撫養】 ブヤウ なでやしなふ。後漢書に「撫二養百姓一、同二之赤子一」

【撫寧】 ブネイ なでやすんず。晉書に「撫二寧四海一、保二有康年一」

【撫慰】 ブヰ なでなぐさむ。(安慰、綏慰)。吳越春秋に「修レ德行レ惠、撫二慰百姓一」

【撫劍】 ブケン けんをなづ。孟子に「夫撫レ劍

疾視曰、彼惡敢當レ我哉、此匹夫之勇、敵ニ一人ニ者也」

【撫輯】ブシフ なでやはらぐ。宋史、理宗紀に「詔ニ呂文德ニ、城ニ黃平ニ、深入ニ蠻地ニ、撫輯有レ方」

【撫鞠】ブキク なでやしなふ。潘岳「嗟爾母氏劬勞撫鞠」

【撫膺】ブヨウ むねをさする。陸機「撫レ膺論レ心、有レ時而誤」

【撫鎮】ブチン なでしづむ。北史に「令以撫ニ鎮之ニ」

【撫檻】ブカン てすりをなづ。王褒「撫レ檻兮遠望、念レ君分不レ忘」

【撩】サク、シャク。測革切。陌。たすく。扶。ケウ。來幺切。蕭。あぐ。擧。

【播】㊀バ。補過切。箇。㊁補火切。哿。㊂一しく(布)㊃たれまく、うう(植)㊄あぐ(揚)㊅ほなつ(放)㊆のぶ(舒)㊇すつ(棄)㊈ちらす(散)㊉うつる(遷)㊊のがる(逋)㊋ほどこす(施)㊌一しく(布)㊍うごかす(簸に同じ、搖)。

【播告】一般につげ知らす。書經に「王播告之修」

【播殖】まきうう。後漢書に「假田播殖、以娛ニ朝夕ニ」

【播植】前に同じ。南史に「性好ニ播植ニ躬勤レ耕」

【播揚】しきあぐ。又、しきあがる。嘯賦に「散ニ滯積ニ而播揚」

【播越】遠方にさまよふ。左傳に「茲不穀、震盪播越」

【播棄】すつ。書經に「力行無レ度、播ニ棄黎老ニ」

【播種】たねをまく。孟子に「今夫麰麥播ニ種而耰レ之」

【播蕩】流涙す。左傳に「成公播蕩」

【播灑】まきそそぐ。又、まきちらす。

【撮】㊀サツ、サチ。麤括切。曷。㊁サイ、セ。祖外切。泰。㊂サン、ザン。祖官切。寒。㊃一つかむ㊄一つまむ㊅つまみ(程の量)㊆量の名(圭の四倍、一圭は黍六十四粒)㊇あつむ(聚)㊈ひく(挽)㊉もとどり(會撮)㊊ひのりもの(乘載器)。

【撮土】つまむほどの土。蔣防「縮ニ地勢ニ于撮土之間ニ」

【撮影】寫眞をとる。

【撮摩】つかみこする。楞嚴經に「如ニ以手掌ニ撮ニ摩虛空ニ」

【撰】㊀サン、セン。雛莞切。潸。㊁セン。仕免切。銑。㊂サン。損管切。㊃一つくる(述作)㊄一こと(事)㊅のり(則)㊆そなふ(具)㊇のぶ(述)㊈一えらぶ(選に同じ)㊉一やる(遣)㊊もつ㊋訓義㊌に同じ㊍かぞふ(算に同じ、數)、はかる(計)㊎一あつむ(集)㊏とる、やる。

【撰次】順序をかきたつ。後漢書に「撰ニ次天子至ニ于庶人ニ」

【撰定】えらびさだむ。晉書、張華傳に「撰ニ定官書ニ」

【撰述】書物をえらびつくる。晉書に「凡所ニ撰述ニ百餘萬言」

【撰答】命により作りて報答す。齊書に「慧曉撰ニ答詔草ニ」

【撰集】えらびあつむ。後漢書に「令ニ班固撰ニ集其事ニ」

【撰碑】たていしの文をえらび作る。聖宋撰遺に「近撰レ碑獲ニ潤筆二百千ニ」

【撰曆】こよみをつくる。劉歆「張蒼撰レ曆、皆成ニ于帷幕ニ、貢ニ于王門ニ」

【撰錄】えらびしるす。南史に「大小悉撰錄」

【撕】㊀タ、ダ。吐火切。哿。㊁井。羊捶切。紙。㊂キ。劉規切。支。㊃せまくながし(狹長)㊄一すつ(棄)㊅一ひれる(捫)㊆すつ。

【撲】㊀ハク、ボク、ゴク。弼角切。覺。㊁ホク、ボク。普木切。屋。㊂一うつ(擊に同じ)㊃一うちあふ(相搏)㊄たふす、たふる(踣)㊅一つみ(扑に同じ、杖)㊆一うちつく(拂著)㊇すこしうつ(小擊)㊈未だ調習せざること㊉ぬぐふ(拭)。

【撲打】うつ。(打撲)。南史に「左右失旨者、手加ニ撲打ニ」

【撲殄】うちほろぼす。唐書に「當ニ乘レ機撲殄ニ」

【撲破】うちこわす。儈齊已「到頭須ニ撲破、卻散與ニ他人ニ」

【撲馬】訓練ぜざるうま。荀子に「若レ馭ニ撲馬ニ」

【撲朔】つまづく貌。木蘭辭に「雄兎脚撲朔、雌兎眼迷離」

【撲殺】うちころす。唐書に「何不レ撲ニ殺此獠ニ」

【撲毬】まりをうつ。(打球)。張憲「杖ニ撲毬竅ニ手親犖」

【撲筆】ふでをなげうつ。韓愈「推レ書撲レ筆歎ニ慷慨ニ」

【撲滅】うちけす。書經に「若ニ火之燎ニ于原ニ、不レ可ニ嚮邇ニ、其猶可ニ撲滅ニ」

【撲罰】うちたたきてつみす。後漢書に「孝明皇帝始有ニ撲罰ニ」

【撲盤】ほたるをとる。高觀國「撲レ盤涼夜沈沈月」

【撲蕩】うちたひらぐ。魏志に「遂駐ニ大軍ニ、分ニ兵撲蕩」

【撲鏡】かがみをなげうつ。魏志、夏侯惇傳、注に「軍中號レ惇爲レ盲、惇惡レ之、每照レ鏡恚怒、輒撲ニ鏡於地ニ」

【摩】タツ。撫に同じ。

【撥】シウ、シュ。所丘切。尤。風の吹く聲。

【撥撥】風のふくおとの形容。楊愼「邊地多ニ悲風ニ、樹木何撥撥」

【撩】テウ。掉に同じ。

十三畫

【撻】タツ、ダチ。他達切。曷。㊀うつ(扶)㊁とし(疾)㊂いたる(達)㊃附の側の矢をあてがふ處、章にて作る。

【撻笞】むちうつ。白虎通に「或曰、撻笞之刑也」

【撻罰】つみしうつ。元稹「誅求與ニ撻罰ニ、無ニ乃不ニ逡巡ニ」

【撻戮】うちてはづかしむ。周禮に「撻戮而罰レ之」

【撼】カン、ゴン。戶感切。感。うごかす、うごく(撼に同じ)。ゆりうごかす。

【撼動】うごきたふる。韓愈「天雪冰撼頓」

【撼頓】寒傷レ汝、羸饑撼頓喉阻、不レ得ニ少息ニ」

【撼鈴】紘如レ撼レ鈴」すずをならす。顧況「一紘一撼摩」うごかしせまる。嚴下放言に「晉人好爲レ人作ニ題目ニ、目ニ李元禮ニ曰、譏譏如ニ勁松ニ、下ニ風力ニ、排ニ雲雨ニ、撼ニ摩牛空ニ」

【撼膝】ひざをうごかす。莊子「長樂暇日、陋巷窮時、聊撼レ膝以書レ紳、匪ニ攢心而就レ簡」

【撽】㊀ケキ、キャク。古歷切。錫。㊁カウ、ケウ。口教切。效。㊂邀に同じ。㊃ケウ。詰弔切。嘯。㊄うつ(擊)㊅吉了切。篠。㊆もつ(持)。

【擎】㊀うつ(擊)㊁つづみうつ。㊂ケウ。詰弔切。嘯。

【撚】㊀タ、デ。張瓜切。麻。㊁うつ(擊)㊂つづみうつ。㊃うちころす。吳志に「撚ニ殺主簿ニ、仍見ニ驅逐ニ」

【撚殺】つづみをうつ。岑參「軍中置レ酒夜撚レ鼓、錦筵紅燭月未レ午」

【撚鼓】うつ。魏書、沈文秀傳に「文秀持レ節衣冠、坐ニ於齋內ニ、亂兵入執而縛ニ送于白曜ニ、左右令拜、文秀曰、二國大臣無ニ相拜之禮ニ、白曜怒レ之、乃至ニ撚撻ニ、後還ニ其衣ニ、爲レ之設レ饌」

【撚撻】うつ。

【撩】㊀ケン。居奄切。琰。㊁レン。良冉切。琰。㊂一つかぬ(束)㊃かんがふ(挍)㊄とどむ(拘)㊅あぐ(擧)㊆かざる(局)㊇なさがす(搜)㊈いがた(摸型)㊉みる(察)㊊なさむ、こまぬく(拱)。

【撩按】しらぶ。范桴「相過倘逐撩ニ尊酒ニ、撩按墻東野菊花」

【擖較】（ケンカク） いましむ。いましめ。魏志、注に「告二子弟一、使二各自擖較一」

【擁】（ヨウ） ㋐一おほふ（蔽）二いだく（抱）三もつ（持）四まもる（衛）五くま（曲隈）六かこひ（範圍）七したがふ（從）㋑一さへぎる（遮）二ささふ（障）。

【擁立】（ヨウリツ） たすけたつ。

【擁抱】（ヨウホウ） かかへいだく。宋史、燕王德昭傳に「惟吉德昭子五歲、常乘二小飛輿及小鞍鞍馬一、太祖命二黃門一擁抱出入常從」

【擁柱】（ヨウチュウ） はしらをいだく。史記、齊世家に「莊公問二崔杼病一、遂從二崔杼妻一、崔杼妻入レ室、與二崔杼一自閉レ戶不レ出、公擁レ柱而歌」

【擁旆】（ヨウハイ） はたをもつ。晉書に「長沙勤王擁二旆戎場一」

【擁書】（ヨウショ） 書物をかかふ。本を所持す。蔡邕「擁レ書抱レ籍」

【擁腫】（ヨウショウ） はれあがる。莊子に「其大本擁腫、而不レ中二繩墨一」

【擁彗】（ヨウイク） たすけそだつ。漢書に「受二遺武皇一、擁二彗孝昭一」

【擁塵】（ヨウジン） 他を顧みずして苦學する義。翻譯名義集に「道超苦學、獨二坐一室、以二儒佛經典一繞レ座、手不レ釋レ卷、任二塵擁レ室」

【擁劍】（ヨウケン） 一〔動〕はさみの偏大なる蟹。二劍を手にす。孟浩然「魚游擁レ劍來」

【擁膝】（ヨウシツ） ひざをいだく。駱賓王「伏レ枕憂思深、擁レ膝獨長吟」

【擁據】（ヨウキョ） たもちまもる。（保據、扼據）。

【擁衛】（ヨウエイ） かばひまもる。後漢書に「常以二甲冑一、擁二衛親族一」

【擁蔽】（ヨウヘイ） おほひかくす。潛夫論に「此奸雄所二以逐レ黨進一、而處士所二以愈擁蔽一也」

【擁閼】（ヨウアツ） ささへとどむ。史記に「又擁閼不レ通」

【擁樹】（ヨウジュ） 木をいだく。杜甫「返照入レ江翻二石壁一、歸雲擁レ樹失二山村一」

【擁彗】（ヨウセイ） ははきにて道をきよむ。陸游「山童擁レ彗行」

【擁鵠】（ヨウコク） かばひまもる。漢書に「郅支怨レ漢擁二護呼韓邪一、而不レ助レ己」

【擁萬卷】（ヨウバンケン） 多くの書冊を藏す。北史、李謐傳に「丈夫擁二書萬卷一、何假南面百城一」

【擁節杖】（ヨウセツジョウ） 符信をいだき旗をたづさふ。天子の命を受けて任に外に在るをいふ。隋書に「擁レ節杖レ旄任二當連率一」

【擂】（ライ） ㋐ライ。力堆切。灰。㋑ する（磨）、みがく（研）。

【擦】（サツ） キン。巨今切。侵。捻に同じ。一もつ（持）二いそぎもつ。

【擇】（サイ） ㋐サイ、セ。仕壞切。卦。㋑崇懷切。佳。㋒とりひしぐ（拉）。そこなふ（損）。

【擄】（ロ） ダウ、ノウ。匿講切。講。一さす（刺）二つく（撞）。ロ、ル。郎古切。麌。鹵に通ず。

【擄】（ロウ） 一う（獲）二かすむ（掠）。セン、ゼン。時戰切。霰。一もつ（有）二ほしいままなり三ほしいままにする（據）。

【擅劫】（センコウ） 思ふままにおびやかす。漢書に「擅二劫諸侯兵一入レ關」

【擅柄】（センヘイ） 勢力をほしいままにふるまふ。道德指歸論に「專レ權擅レ柄、人之所レ畏也」

【擅美】（センビ） うつくしきをひとりにて占む。宋書に「標レ能擅レ美、獨映二當時一」

【擅殺】（センサツ） ほしいままに、ころす。（專殺）。宋史、仁宗紀に「詔獲二劫盜一者、奏裁毋二擅殺一」

【擅敕】（センシャ） ほしいままにゆるす。隋書に「權武晚生二子一、與二親客一宴集、酒酣遂擅敕二所部內獄囚一」

【擅場】（センジョウ） すぐれたるうでまへありて、場中に敵なき者の稱。東京賦に「秦政利膂長距、終得二擅場一」

【擅恣】（センシ） 氣ままなり。（放恣、從恣）。詩

經、箋に「此篇議二皇父擅恣一」

【擅朝】（センチョウ） 朝廷にて權力をほしいままにす。漢書、成帝紀論に「外氏擅レ朝」

【擅發】（センハツ） 軍勢をほしいままに出す。五代史に「太祖以二其擅發レ兵挫二失國威一、遣二劉捍代一重師一」

【擅斷】（センダン） ほしいままに事をとりきむ。陳琳「擅二斷萬機一」

【擅議】（センギ） ほしいままにはかりさだむ。漢書に「漢宗廟之禮、不レ得二擅議一」

【擅權】（センケン） 權力をほしいままにす。漢書に「攝レ政擅レ權、而背二宗室一」

【擿】（チャク） 一もむ二もみあらふ。ヘン、ボン。符袁切。元。チャク。陟略切。藥。

【擢】（タク） 一うつ（擊）二おく（置）。㋐ タク、ヂャク。直格切。陌。㋑ タク、ダク。達各切。藥。

【擇】（タク） 一えらぶ（選）二える（簡）三ぬきとる（拔取）。

【擇木】（タクボク） 木をえらぶ。晉書、李充傳に「充曰、窮猿投レ林、豈暇擇レ木」

【擇良】（タクリョウ） よきものをえらぶ。宋書、謝靈運傳に「非レ龜非レ筮、擇レ良選レ奇、斟レ榛開レ徑、尋レ石覓レ崖」

【擇善】（タクゼン） 前に同じ。中庸に「擇レ善固執之者也」

【擇處】（タクショ） 居處の善惡をえらぶ。戰苑に「君子居必擇レ處、游必擇レ士」

【擇筆】（ヒツ） ふでをえらぶ。廣川書跋に「余求二前人論レ書、必先擇レ筆、至二于動作皆得一如レ意、非是則未二嘗書一也」

【擇鄉】（キョウ） 鄉の善惡をえらぶ。荀子に「君子居必擇レ鄉、遊必就レ士」

【擇遣】（ケン） えらびて遣す。蘇軾「朝廷擇遣大臣爲二蜀人所一愛信一者」

【擇賢】（ケン） 賢者をえらぶ。左傳に「年均擇レ賢、義均則卜レ古之道也」

【擇賢】（ケン） 近所をえらぶ。景福殿賦に「擇レ賢擇レ鄰」

【擇言擇行】（ケンコウ） えらびぬくべき言行。孝經に「非レ法不レ言、非レ道不レ行、口無二擇言一、身無二擇行一」

【擇滅无爲】（ムイ） 〔佛〕三无爲の一。擇力所得の滅といふ義。大藏法數に「擇卽揀擇、滅卽寂滅、謂擊聞之人、用レ智揀擇、遠二離見思繫縛一、卽證二寂滅眞空之理一、是名二擇滅无爲一」

【擇子莫如父】（シバクシ） 親はよくその子の善惡をえらび分くるをいふ。左傳に「擇二子莫一如レ父、擇二臣莫一如レ君」

【撲】（ハク） ホク、ボク。撲に同じ。

【撲】（セツ） セツ、ゼチ。撲に同じ。かぞふ（數）。

【擽】（ソク） ㋐サク、ソク。測角切。覺。㋑ショク、ソク。殊玉切。沃。一さす（刺）二やす（魚を捕ふる具）。

【擊】（ケキ） ㋐ケキ、キャク。古歷切。錫。㋑ゲキ。慣用音。一ころす（殺）二うつ（撲）三ふる（觸）四おそふ（襲）五ささふ（支）六おさふ（抑）七たたく（扣）八せめころす（攻殺）九やいば（鐵刃）十なのこのかんなぎ（覡に同じ、男巫）。

【擊缶】（ケキフ） ほとぎをうつ。史記に「秦王爲一擊レ缶」

【擊沈】（ケキチン） うちしづむ。

【擊戾】（ケキレイ） ねぢれもとる。荀子に「行而俯項非二擊戾一」

【擊柝】（ケキタク） ひゃうしぎをうつ。又、夜番。荀子に「抱關擊柝、而不二自以爲一寡」

【擊破】（ケキハ） うちやぶる。漢書に「漢王引兵、北擊二破終公一」

【擊殺】（ケキサツ） うちころす。魏志、許褚傳に「他等不レ知入レ帳、見レ褚驚愕、色變、褚覺レ之、卽擊二殺他等一」

【擊逮】（ケキタイ） うちしりぞく。

【擊滅】（ケキメツ） うちほろぼす。史記に「故擊レ兵擊二滅之一」

【擊劍】（ケキケン） 劍をつかふわざ。漢書、司馬相如傳に「少時好二讀書一、學二擊劍一」

【擊搏】（ケキハク） うつ。宣和書譜に「如レ畫二鷹隼一、使二人見レ之、則有二擊搏之意一、然後爲レ工」

【擊撞】（ケキトウ） 前に同じ。韓愈「文章自娛戲、金石日擊撞」

【擊節】（ケキセツ） ひゃうしをとる。蜀都賦に「巴

脆彈レ絃、漢女擊レ節」

【擊磬】ゲイキ 磬石をうつ。論語に「擊レ磬襄入二于海一」

【擊斷】ダン ㊀刑罰をほしいままにす。史記に「涇陽華陽、擊斷無諱」㊁うちきる。史記に「擊二斷子路之�canopy一」

【擊壤】ジヤウ 支那古代の遊戯。壤は木にて造り、形履の如し、その一を地にたて、三四歩を去り、他の一壤にて之をうつなり。史記に「帝王之世、天下太和、百姓無事、有二八九十老人一擊レ壤而歌」

【擲】ケツ、コチ。居謁切。月。

揭に同じ。

【攪】ケイ、ギヤウ。渠營切。庚。

すごろくのさい。

【操】㊥サウ、ソウ。倉刀切。豪。

㊥七到切。號。

㊀とる(把)㊁もつ(持)㊂あやつる㊃みさを(持守、持念)㊄おもむき(風調)㊅琴の曲。

【操守】シユ とりまもる。唐書、裴度傳に「神觀邁爽、操守堅正」

【操矛】ボウ ほこをとる。後漢書に「關西諸郡、婦女猶戴レ戟、操レ矛挾レ弓負レ矢」

【操行】カウ おこなひ。みさを。南史に「操行爲二鄉里所一稱」

【操耒】ライ すきを取る。徐穉「有レ客能操レ耒、而捨二其良田一」

【操舟】シウ ふねをあやつる。杜甫「能者操レ舟疾若レ風」

【操弄】ロウ あなどりてあつかふ。(傾弄)。

後漢書に「操二弄國權一」

【操尙】シヤウ 品行たかし。晉書、羊祜傳に「祜執レ德沖虛、操尙清遠、德高而體卑、位優而行恭」

【操竿】カン ふえをとる。王安石「操レ竿入レ齊人、雅鄭亦復殊」

【操持】ヂ とりまもる。李商隱「李杜操持事レ略レ齊」

【操刺】ラツ たけくいさまし。五代史、注に「世俗謂二勇猛一爲二操刺一」

【操宰】サイ つかさどる。張九齡「何時遇二操宰一」

かたくまもる。東方朔「操愈堅而不レ衰」

【操琴】キン ことをとる。蔡邕「舅姑若命二之鼓レ琴、必正坐操レ琴、而奏レ曲」

【操筆】ヒツ ふでをとる。書く。後漢書に「陳廷尉宜二便操レ筆」

【操植】シヨク みさを。晉書、袁湛傳に「湛少有二操植一」

【操業】ゲフ 心のとり守りとわざと。晉書に「猶當レ崇二其操業一、以弘二風尙一」

【操觚】コ 觚は木の方なる札、いにしへ事を記すに用ゐしもの、故に文を作ることにいふ。文賦に「或操レ觚以卒爾、或含レ毫而遄然」

【操箋】セン 書きつけをもつ。陸雲「操レ箋染レ翰、思溢情煩」

【操練】レン 兵をねる。

【操履】リ おこなひ。北史に「操履貞懿、立言忠鯁」

【操遹】ヨク うつ。宣和畫譜に「操遹之次、忽見二浮雲在レ空」

【操縱】ジユウ あやつる。巧に人をつかふ。

【操韻】オン みさを。宋史、文同傳に「同以學名レ世、操韻高潔、自號二笑笑先生一」

【操轡】ヒツ たづなをとる。後漢書、靈帝紀に「帝駕二四驢一、躬自操レ轡、驅馳周二旋京師一」

【擎】ケイ、ギヤウ。渠京切。庚。

㊥擎に通ず。

㊀ささぐ(捧)㊁あぐ(擧)。

【擎天】テン 樹木などの高くそびゆる形容。宋史、劉永年傳に「生四歲、仁宗使レ賦二小山詩一、有二一柱擎レ天之語一」

【撤】㊥ケイ。敵に同じ。

㊥擊に同じ。

【擺】ハク、ヒヤク。匹麥切。陌。

てごたへ。

【擺擽】ハク 射て物にあつる聲の形容。西京賦に「流鏑擺擽」

【搋】ケン。寧の本字。

デン。鑁に同じ。

【搬】㊀むちうつ㊁うつ(擊)㊂むち(榜)。

【搋】タウ。丁浪切。漾。

おほひかくす(撰搋)。

【搋】

とても。

サク、シヤク。色責切。陌。

はこ(鳥を捕ふる具)。

【擐】㊥クワン、ゲン。胡慣切。諫。

㊥ケン。古泫切。銑。㊁揎に同じ。

㊀つらぬく(貫)㊁つなぐ(繫)㊂かかぐ。

【擐甲】カフ 甲冑をきる。國語に「喪中乃令二服レ兵擐レ甲」

【擐衣】イ 衣をかかぐ。禮記、注に「謂二擐レ衣出二其臂一」

【搊】サ、セ。師加切。麻。

とらふ(掬)。

【攕】セフ。接に同じ。

キン。巨今切。侵。捻、拎に同じ。

㊀とりこにす㊁とりこ㊂とる。

【攕】とらふ。爾雅、疏に「鳥力小、可二攕提一而取レ之」

【攕斬】ザン とりこにするときり殺すと。宋史に「攕二斬三十八人一」

【攕拎】ソウ とらふ。葉適「然皆以二殺刑獄搏擊攕拎一爲レ職」

【攕縛】バク いけどりにす。金剛經鳩異に「衆遂攕二縛五六人一」

【攕縱】キン ショウ とりこにするとゆるすと。李邕「迭爲二攕縱一、更相鬭搏」

【攕二奔馬一】ホンバク トリコニス 力のつよきをいふ。舊唐書に「敬泰形甚短小、若レ不レ能レ勝レ衣、至二於野外馳逐一、能攕二奔馬一」

【攕レ賊先擒レ王】ゾクヲトリコニスニハマヅオウヲトリコニス その部下をとりこにするには、先づその巨魁をとりこにすべしとの義。杜甫「射レ人先射レ馬、擒レ賊先擒レ王」

【搥】サフ、ソフ。疾盡切。合。

㊀もつ(持)㊁まじふ(和雜)㊂けがす。

わるるおと(破聲)㊃

【搊】ヘウ。匹沼切。篠。

おつ(摽に同じ、落)。

クワイ、ケ。枯懷切。佳。

【搋】㊀ぬぐふ(拭)㊁する(揩摩)。

クワイ、ゲ。古外切。泰。

【搊】なさむ(收)。

サイ、セ。取猥切。賄。

㊀さぐる(探)㊁さがす(索)。

【搊】㊥タン、トン。都濫切。覃。

㊥タン、トン。都甘切。單。

㊁セン、ゼン。時豔切。豔。

【搊】㊥エン。以贍切。豔。㊁タン、トン。都濫切。覃。

㊀かたぐ、になふ㊁おふ(負)㊂かす(假)㊃一になふもの(荷物の數)

(荷物)㊀か(荷物)をかつぐ男。唐書に「見二公主擔夫爭レ道」

【擔夫】フ

【擔架】ガン 傷病者を載せて運搬する具。

【擔負】フク に なふ。詩經、箋に「謂二擔二負天之多福一」

【擔保】ホウ 抵當の物品。ひきあて。

【擔笈】キフ 本箱をおふ。北史、高允傳に「允性好二文學一、擔レ笈負レ書」

【擔荷】カン にもつをになふ。又、にもつ。管子に「負レ任擔荷」

【擔鼓】コウ 牽牛星の異名。爾雅、注に「今荆楚人呼二牽牛星一爲二擔鼓一、擔者荷也」

【擔板漢】カンバン 〔佛〕板をになひたる者の、一方は見ゆれども他方は見えざるが如く、その一を知りて、その二を知らざる迂夫に喩ふ。

【攜】ケイ。攜の俗字。

【攜】ケイ。攜の俗字。

【攜】

㊥カツ、ケチ。丘瞎切。黠。

㊁クワツ、ケチ。古滑切。黠。

㊂レフ。力涉切。葉。㊃タフ、デフ。直甲切。洽。㊄エフ。七涉切。葉。㊅ケイ。去例切。霽。

㊀一けづる(刮)㊁わたす(架)㊂なる(折)㊃むちうつ㊄一かく(搖)㊅をさめもつ(理持)㊆つづく、重なり接く貌㊇糞の物を掃き入るる處(糞舌)㊈こそぐ(刮)。

【擗】

㊥ヘキ、ビヤク。毗亦切。陌。

㊁ヘキ、ビヤク。匹歷切。錫。

㊀一うつ、むれを拊つ㊁かがむ(手足を屈折す)㊂さく、ひらく(拆)。

【擗踊】ヘキヨウ かなしみてむれをうち、など

りあがる。孝經に「擗踊哭泣」

【擗摽】（ヘキ） むねうちてかなしむ。張協「敎孤爲之擗摽」

【擘】（ハク） ㊀ハク、ヒャク。博厄切。陌。㊁ヘキ、ヒャク。蒲歷切。錫。㊀一さく（攜）㊁つんざく（裂）㊂弓を張る、はる㊃おやゆび（大指）㊄おやゆび（大指）。

【擘指】（ハク） おやゆび（拇指、巨指）。爾雅に「頭大如二人擘指一」

【擘張】（ハク） 手にて弓をはる。漢書、注に「今之弩以手張者、曰二擘張一」

【擘擺】（ハク） つんざきつかむ。埤雅に「罷遇人、則擘而擺之」

【擘柳風】（ハク） 春の疾風。風土記に「河朔春時、疾風數日、一作三日乃止、曰二吹花擘柳風一」

【擘窠之字】（ハク） 大いなる文字。淵鑑類函に「顏眞卿請乞二御書題一放生池碑額一表曰、臣今謹據レ石擘窠大書一本隨レ表奏進」

【揪】 ユ。揪に同じ。

【據】 キョ、コ。居御切。御。㊀一おさふ（按）㊁よる（依）㊂やすんず（安）㊃ひく（引）㊄たすく（援）㊅たよる（依托）㊆よりどころ㊇まもる（拒守）㊈形ある貌㊉つかむ。

【據火】（キョ） （動）螢の異名。（敎火、愼火）。

【據掌】（キョ） 左手にて右手をおほひなづ。禮記に「君賜稽首、據掌致二諸地一」

【據義】（キョ） 正道にしたがひよる。唐書に「伏伽至誠慷慨據レ義、懇切指二朕失一無所レ諱」

【據軾】（キョ） 車のまへの横木による。莊子に「據レ軾低レ頭」

【據榻】（キョ） 腰掛にもたる。唐書に「初義琰使二高麗一、其王據レ榻召見」

【據膝】（キョ） ひざにもたる。莊子に「左手據レ膝、右手持レ頤」

【據レ虛據レ影】（キョ） 用兵に巧にして、敵なして力を加ふること能はざらしむるないふ。管子に「善者之爲レ兵也、使二敵若レ據レ虛、若レ搏レ影」

【據】 ヒョウ。皮證切。徑。よる（依）。

十四畫

【擳】 ビ、ミ。武移切。支。山の名（擳拘）。セイ、サイ。子計切。霽。㊀おす（推）㊁おとしいる（陷）㊂おつ、おちいる（墜）㊃ひらく（引）㊄ばらふ（拂）。

【擠】 ㊀おしのく㊁おつ、おちいる（墜）㊃ひらく（引）㊄ばらふ（拂）。

【擠害】（ガイ） 兒怯不花嘗與二阿魯圖一謀、擠害脫脫一」

【擠排】（ガイ） おしのく。馮子振「揮二斥日月、擠二排煙霞一」

【擠陷】（ガイ） 人を罪におとしいる。唐書に「楊炎罪不レ至レ死、杞擠二陷之一」

【擣】 ヘウ。摽に同じ。

【擣】 タク。拓に同じ。

【擡】 ダイ。堂來切。灰。㊀もたぐ、あぐ（擧）㊁うごかす（動）。

【擡頭】（カイ） れだんを高くす。

【擡頭】（トウ） 文中にて他人の姓名を記すに一字下げて上に空處を作るないふ。尊敬の意を表すなり。明律附解に「第一擡頭、第二擡頭」

【擡擧】（タイキョ） さしあぐ。

【擢】（タク） ㊀ぬく（拔）㊁ひきだす（抽出）㊂ひく（引）㊃ぬきんづ㊄あぐ（擧）㊅そびゆ（聳）㊆そばだつ㊇さる（去）㊈すつ（徹）。

【擢用】（タク） ぬき出してつかふ。後漢書に「程烏李育以レ有二才幹一、皆擢用之一」

【擢秀】（タク） 人にすぐれぬきいづ。徐勉「雄州擢秀、弱冠升レ朝、穿二綜百家一、伺二漁大學一」

【擢昇】（タク） ぬきあげてのぼす。舊唐書に「自レ古郡守蜂令、皆妙二選賢德一、欲レ有二擢昇一、宰相必先試以臨レ人」

月、擠二排煙霞一」

【擢能】（タク） 能ある者をぬき上ぐ。劉子に「昔時人君拔二奇于囚虜一、擢二能于屠販一」

【擢授】（タク） 順序によらずして授く。晉書に「以レ能擢二授殿中侍御史一」

【擢登】（タク） ぬきあげてのぼす。後漢書、徐稺傳に「若使レ擢二登三事一、協レ亮天工一、必能翼二宣盛美一、增二光日月一」

【擢賞】（タク） ぬきんでほむ。陳書、宣帝紀に「戶有二增進一、卽加二擢賞一」

【擢潤】（タク） のびます。潘岳「新莖擢潤、齊葉垂腴」

【擢賢】（タク） 賢者をぬき出す。後漢書に「擢二賢于衆愚之中一」

【擢レ髮贖レ罪】（カミノケヲヌキテツミアガナフ） つみのおほきをいふ。史記に「擢二賈之髮一、不レ足二以贖一賈之罪一」

【擣】 ㊀ダウ、トウ。都皓切。皓。㊁チウ、チュ。陳留切。尤。㊀一うつ（擊）㊁きづく（築）㊂たたく（敲）㊃うすつく（舂）㊄よる（依）㊅あつまる（聚）。

【擣衣】（ウ） 衣をうつ。又、きぬた。李白「長安一片月、萬戶擣衣聲」

【擣剉】（ウ） こまかにつきくだく。齊東野語に「蔡倫以レ布擣剉作レ紙」

【擣碪】（ウ） 衣をうつ。陳鴻「典盡衣未レ熟、隣家夜擣レ碪」

【擣虛】（ウ） 敵の備へなき處をうつ。史記に「批レ穴擣レ虛」

【擥】 カウ、キャウ。呼梗切。梗。はなかむ。ラン、ロン。魯敢切。感。㊀一つまみもつ（撮持）㊁すべもつ（執持）㊃もつ（持）㊄とる（采）。

【擥取】（ラン） 不レ覺臨取、乃實兒也」

【擥】 ロン。擥に同じ。

【撲】 ㊀ボク。普木切。屋。㊁撲に同じ。

【擦】 ㊀ことごとく（盡）㊁あつまる（聚）。サツ、セチ。初戛切。黠。㊀さする㊁なづ。

【擧】 ㊀ヨ。以諸切。魚。㊁舉の本字。㊂あぐ（扛）、かく（舁に同じ）。チ。陟利切。寘。

【擡】 つまづく（躓に同じ、跲）。

【擲】 ㊀ヤ。以遮切。麻。㊁イ。余支切。支。㊂投に同じ、もてあそぶ（弄）㊃慰に同じ、わらふ（笑）。㊄ジュ、ズ。樹主切。麌。㊅ズキ。儒誰切。支。㊆セン、ネン。而宣切。先。㊇ジュ、ニュ。而遇切。遇。㊈ザュ、ニュ。尼主切。麌。㊉ドウ、ヌ。乃豆切。宥。

【擴】 ㊀そむ（染）㊁一そむ㊂ひたす（擺）㊃一ひたす㊄もむ（捫に同じ）㊅すむ（進）㊆ささふ（拄）㊇くらし（攜擺）。

【擬】 ㊀エフ。益涉切。葉。㊁テフ、デフ。託協切。葉。㊂アフ、オフ。乙甲切。洽。㊃エン、ガン。於琰切。琰。㊄おさふ、一指にて按ふ㊅おさふ（按）㊆もつ（持）。

【擫】 エフ。壓に同じ。

【擬】 ギ。偶起切。紙。㊀ばかる（度）㊁かたどる（像）㊂くらぶ（比）㊃にる（似）㊄なぞらふ。

【擬古】（ギ） 古になぞらふ。捫蝨新話に「擬古詩雖二於近似一、觀二江文通雜體詩三十首一、便者淵明具體、叔敖復生也」

【擬把】（ギハ） わりあてとる。羅隱「擬二把金錢一贈二嘉禮一」

【擬定】（ギテイ） かりにさだむ。

【擬度】（ギタク） なぞらへはかる。易經、疏に「必擬二度之一而後言」

【擬則】（ギソク） 模範として從ひたよる。（依則）。成公綏「法二象金革一、擬二則陶匏一」

【擬】 ケツ。揭に同じ。

【擫】 になふ（擔）。

【擫】 ㊀リク。屋韡切。陌。㊁コ、ゲ。胡誤切。遇。㊂クヮ、ゲ。胡化切。禍。㊃クヮク、グヮク。胡郭切。藥。㊄一にぎる（握）㊁とる（取）㊂とく（解）、わかつ（分）㊃わな（機檻）。㊅タン。親緩切。旱。まはす（轉）。

【擫】

〔手部〕 擺 擷 擯 摔 撻 擰 擱 擲 擷 擴 擷 擷 擷

〔手部〕 擦 攄 攢 攄 摩 摭 擬 擂 攄 摔 蹂 塌 攔 攤 攝 攥 攥 攥

【攝政】セツシヤウ 天子に代りて大政を行ふ。又、その人。歐陽修「所レ謂攝政者、臣行二君事一之名也、伊尹周公、共和之臣」

【攝理】セツリ 人にかはりて事をなさむ。左傳に「士服景伯如レ楚、叔魚攝理」

【攝葉】セツエフ ちぢまる。楚辭に「衣攝葉以儲與兮」

【攝然】セツゼン やすらかなる貌。漢書に「天攝然、人安二其生一」

【攝養】セツヤウ からだをやしなふ。庾信「小人乖二攝養一、岐路阻二逢迎一」

【攝齊】セツセイ ふるひおそる。漢書に「輻重人衆、攝齊者弗レ取」

十九畫

【攤】クワン。姑還切。刪。一のっとる(則)二うをのこ(魚子)三かかはる。

【攤】ヤウ。良何切。歌。ろ朗可切。咎。ゆえらぶ(揀)ろさく(裂)。ゆクン、コン。舉蘊切。吻。

【攥】ろ居運切。問。ゆとる(取)ろひろふ(攤に同じ)。

【攤】ゆビ、ミ。忙皮切。支。ろバ、マ。莫臥切。箇。ゆ擊に同じ。ゆろ一やぶる(弊)二かれのつくところ(鐘の擊を受くる處)。

【攤隧】スヰ 鐘のしゅもくのあたるところ。周禮、注に「攤所レ擊之處、隧在二鼓中窪一、而生レ光、有レ似二夫隧一」

【攤】ゆリ。鄰知切。支。ろ攜に同じ。

【攢】ゆサン、ザン。徂丸切。寒。ろ子罕切。旱。ゆ一あつまる(聚)二むらがる(簇)三おほふ(覆)ろなる(折)。えらぶ(擇)ろなる(折)。

【攢立】サンリフ むらがりたつ。史記、司馬相如傳に「攢立叢倚」

【攢起】サンキ あつまりたつ。夏侯湛「長堂攢起、柔條列布」

【攢峯】サンホウ かさなれるみね。(疊峰)。駱賓王「攢峯衒二宿霧一」

【攢鋒】サンホウ ほこさきをあつむ。顏廷之「攢レ鋒成レ林、按レ鞍爲レ圍」

【攢叢】サンソウ くさむら。宋之問「廻合兮攢叢一」

【攢攢】サンサン あつまれる貌。漢嘯嗜歌に「秉下何攢攢、榮華各有レ時」

【攣】ゆレン。閔員切。先。ろ龍眷切。霰。ゆ一かがまる(拘牽)二手足のかがまる病三しかる(係)二ひく、ひきつらなるろ一かたふ(戀に通ず)。

【攣子】シン ふたご。戰國策に「夫攣子之相似者、惟其母知之而已」

【攣跼】エン 手足のまがりて、のびざる病。柳宗元「可ァ以已二大風攣跼瘻癘一、去二死肌一殺二蟲虱一」

【攣攣】レン こひしたふ貌。漢書に「上所以攣攣顧二念我一者、乃以二平生容貌一也」

【攤】ゆタン。他干切。寒。ろダン、ナン。乃旦切。翰。ゆ一ゆるむ(緩)二ゆるし(緩)三ちらす(散)四ひらく(開)ろおさふ(按)。

【攤書】タンシヨ 書物をひらく。世說に「王戎滿床攤レ書」

【攤錢】センセン ぜにうちのあそびわざ。杜甫「白晝攤レ錢高浪中」

【攦】ゆレイ、ライ。郎計切。霽。ろシ。所綺切。紙。ゆリ。鄰氷切。紙。ゆレキ、リヤク。郎敵切。錫。ゆレツ、レチ。力結切。屑。ゆサイ、セ。所賣切。卦。ゆろ一なる(折)二さく(撕)ゆうつ(擦に同じ、擊)ゆれぢる(捩に同じ、拗)ゆばらふ(掃)。

二十畫

【攩】ゆタウ。底朗切。養。ろクワウ、ワウ。戶廣切。養。ゆシヤウ、サウ。止兩切。養。ゆクワウ、ワウ。胡曠切。漾。ゆ一うつ(擊)二むれ(黨に同じ、朋群)三とどむ(遏)ろゆ一おしゆく(推行)二うつ(擊)ゆうつ(打)。

【攪】ゆカウ、ケウ。古巧切。巧。ろカク。慣用音。一みだる(亂、撓)二かきまはす、つかむ(把)。

【攪水】カウスイ 水をかきまはす。東京夢華錄に「圍レ盆以二銀子一攪レ水」

【攪拌】カクハン かきまはす。

【攪亂】カクラン かきみだす。郭經「攪二亂鵲思一爲停レ觴」

【攪撓】カクカウ かきみだす。元稹「羣動皆攪撓、化作二流渾渾一」

【攪攪】カクカク いりみだるる貌。韓愈「攪攪爭附託、無ニ人角二雌雄一」

【攫】ゆガツ、ガチ。牙葛切。曷。ろサツ、ザチ。才達切。曷。一にぎる(把)二うつ(擊)三もつ(持)。

【攫】ゆクワク、カク。厥縛切。藥。ろワク。拘玉切。沃。ゆ一うつ(搏)二うちとる(撲取)三もつ(持)ろとる(取)ゆ攫に同じ、つかむ。

【攫肉】クワクニク にくをつかむ。戴復古「羣鴉攫レ肉鬪飛鳴」

【攫釵】クワクサイ かんざしをつかむ。宋史に「有二禁卒一、白晝攫二婦人金釵於市一」

【攫搏】クワクハク つかみとる。つかみうつ。禮記に「鷙蟲攫搏、不レ程二勇者一」

【攫援】クワクエン つかみひく。淮南子に「搏レ琴撫レ絃、參彈復徽、攫援摽拂」

【攫漉】クワクロク つかむ。卞彬「探揣攫漉、日不レ替レ手」

【攫噬】クワクゼイ つかみくらふ。王粲「譬如二虎豹一奮攫噬」

【攫擴】クワクシヤク うでぐみす。うでまくりす。

又、つかみぬすむ。蘇軾「雖レ余亦得レ攫二攫其傍一也」

【攫金者不レ見人】キンクワクシヤフヒトヲミズ 慾の爲に思ハ何事をもなさるといふ。列子に「昔齊人有二欲レ金者一、詰旦衣冠而之レ市、適二鬻金者之所一、因攫二其金一而去、吏捕得レ之、問曰、人皆在焉、子攫二人之金一、何、對曰取レ金之時不レ見レ人、徒見レ金」

【攤】デフ、ネフ。諸叶切。葉。ひれる(捻)。

二十一畫

【攬】ラン。擥に同じ。

【攬筆】ランヒツ ふでをとる。(援筆、執筆)。

【攬轡】ランヒン たづなをとる。後漢書に「登レ車攬レ轡、慨然有レ澄二清天下一之志ト」

【攔】ゆ一にぎり(把)二つか(柄)三もつ(持)。

【攤】ゆラ。魯果切。哿。ろレイ、ライ。力雷切。霽。ゆあかはだかろわかる、わかつ(分判)。毛羽のなき貌。荀子に「攤攤今其狀屈化如レ神」

二十二畫

【攫】ゆテフ、デフ。達協切。葉。ろタフ、トフ。敵盍切。合。

ゆ一なさむ(敗)二おす(擠)三かく(掛)ろひらく(排)。

二十九畫

【攜】ケツ、ヂチ。紆勿切。物。ねぢりもとる(拗戾)。

支部

部首

【支】シ。章移切。支。一もつ(持)二わかつ、わかる(分)三かぞふ、かんぢゃう(計算)四えだ(枝に通ず)五えだ(庶)六ささふ(拄)七わりふ(券)八てあし(肢に通用す)九てあて(給與)十えと(干巵に同じ。說文に「竹枝を去るなり、手、半竹を持するに从ふ」

【支子】シシ 次子。又、妾の子。禮記に「支子不レ祭、祭必告二於宗子一」

【支干】シカン 十二支と十干と。えと。

【支川】シセン 本流より分かれたる水。えだかは。莊子に「九州名川三百、支川三千、小者無數」

【支分】シブン こまかにわかつ。戰國策に「支二分方城膏腴之地一、以薄レ鄭」

【支用】シヨウ あてもちゐる。宋史に「雜物庫掌レ受二內外雜輸之物一、以備二支用一」

【支出】シシユツ 一しはらひ。しだし。二妾腹

〔支部〕 支 攲 攺 敺 敲 敍 敍 敍

「業等收縛考問」

【收擇】シウタク とりえらぶ。歐陽修「往往蒙見二收擇一」

【收輯】シウシフ とりあつむ。朱熹「故敢收二輯遺文一、藏二之家廟一」

【收擅】シウセン をさめしむ。魏書に「世哲爲二相州刺史一、亦無二清白狀一、鄴洛市鄽收二擅其利一、爲二時論所一鄙」

【收縮】シウシユク ちぢまる。ちぢむ。詩經、傳に「霜降而收二縮萬物一」

【收檢】シウケン とりまとむ。後漢書に「收二檢遺著一、舉レ力補綴」

【收繫】シウケイ 獄につなぐ。漢書、玉章傳に「妻子皆收繫」

【收藏】シウザウ をさめたくはふ。文子に「收藏蓄積、而不レ加レ富」

【收繩】シウイソ 釣瓶なはをひきあぐ。周易集解に「以二轆轤一收レ繩也」

【收穫】シウクワク 穀物をとりをさむ。穀物のとり入れ。書經に「收穫有二多少一」

【收攫】シウクワク とりあげてもつ。宋史、劉敞傳に「勸レ帝收二攫威權一、無レ使二聰明蔽塞一、以消二災咎一」

【收纖】シウシン ともづなをひきあぐ。出帆するにいふ。鮑照「收レ纖辭二帝鄉一」

【收斂劑】シウレン 下痢を止むるくすり。

【收二之桑榆一】コレヲサウユニシウス 前日の失敗を後日に回復するに喩ふ。後漢書、馮異傳に「失二之東隅一、收二之桑榆一」

攷

カウ、コウ。考の古文字。

攸

三畫

シ。或支切。支。

一ほどこす(施)二しく(敷)。

ユイウ、ユ。以周切。尤。

ゆ 以九切。有。

一ところ(所)二とほし、遠き貌三おくるかかりて危き貌。

かかりてあやふき貌。左傳に「攸攸外二寓」

とほき貌。漢書に「攸攸外二寓」

【攸然】イウゼン 水を泳ぐ貌。孟子に「始舍レ之圉圉焉、少則洋洋焉、攸然而逝」

改

カイ、ケ。古亥切。賄。

一あらたむ二あらたまる三かふ。(更)。

【改化】カイクワ 改めて教に從ふ。史記に「黔首改化、遠邇同レ度」

【改元】カイゲン 一年號を改む。中說に「改レ元立レ號非レ古也」二政治をあらたむ。春秋、疏に「諸侯于二其封內一、各得レ改レ元」

【改正】カイセイ あらためただす。南史に「示二其可否一、徐令二改正一」

【改刊】カイカン けづりただす。曹植「古人寫二鳥跡一、文字無二改刊一」

【改色】カイシヨク いろを變ふ。李德林「歲寒無二改色一、年長有二倒枝一」

【改作】カイサク あらためつくる。しなほす。史記、華嶠傳に「初嶠以二漢紀煩穢一、慨然有二改作之意一」

【改命】カイメイ 一從來の行爲をあらたむ。左傳に「改レ命、吉」二名をかふ。左傳に「改レ命曰レ生」

【改革】カイカク あらためかふ。

【改易】カイエキ あらたまりかはる。あらためかふ。孟郊「本性隨改易」

【改窆】カイヘン あらためてはうむる。南史に「凡七柩皆改窆焉」

【改俗】カイゾク 舊來の惡習をあらたむ。東觀漢記に「鄧訓拜二張掖太守一、以レ身率レ下、河西改レ俗」

【改修】カイシウ あらためなほす。晉書に「退靜思レ愆、改修二其德一」

【改科】カイクワ おきての條目をなほす。晉書に「改二投書棄市之科一」

【改悔】カイクワイ くやむ。論衡に「瞿然起坐、心覺二改悔一」

【改悟】カイゴ 過をさとりてあらたむ。

【改悛】カイシユン 行爲をくいあらたむ。

【改造】カイザウ あらためつくる。宋史に「嘉泰元年中奉大夫愈豐等請レ改二造新曆一」

【改異】カイイ 特別なるものとして尊敬す。後漢書に「特加二改異一」

【改都】カイト みやこをうつしかふ。左傳、疏に「文王改二都于豐一」

【改換】カイクワン かふ。又、かはる。(易換、更換)。魏收「改二換朝章一」

【改畫】カイクワク ふをかきあらたむ。虞世南「掖庭羞二改畫一」

【改裝】カイサウ よそほひをあらたむ。後漢書に「鼓史何不レ改レ裝、而輕敢進乎」

【改盟】カイメイ 約束をかふ。左傳に「晉人請二改盟一、弗レ許」

【改置】カイチ あらためおく。周書に「改二置宿衛官員一」

【改葬】カイサウ あらためてはうむる。

【改道】カイダウ その行ふ所の道をあらたむ。白虎通に「王者有二改レ道之文一」

【改過】カイクワ あやまちをあらたむ。易經に「君子以改レ過宥レ罪」

【改號】カイガウ 名をあらたむ。春秋、注に「荊始改レ號曰レ楚」

【改構】カイコウ 組立をかへあらたむ。陳書に「改二構亭宇一、修二山池卉木一」

【改撰】カイセン あらためて著作す。舊唐書に「故復請レ改二撰實錄一」

【改廢】カイハイ あらたむるとやむると。

【改曆】カイレキ こよみをあらたむ。又、こよみのあらたまること。新年。史記に「漢改レ曆、以二正月一爲二歲首一、而色上レ黃」

【改勵】カイレイ 志をあらためてはげむ。晉書に「慨然有二改勵之志一」

【改竄】カイザン つくりあらたむ。晉書に「無レ所二改竄一、辭甚清壯」

【改藝】カイゲイ わざの巧拙をしらふ。周禮に「春合二諸學一、秋合二諸射一、以改二其藝一、進退之」

【改舊】カイキウ ふるきことをあらたむ。周書に「稽二諸典故一、創レ新改レ舊、方始備焉」

【改鑄】カイシユ あらためいる。後漢書に「宜改二鑄大錢一」

【改觀】カイクワン みえのかはるないふ。北夢瑣言に「朱溫盛禮郊迎。人士改レ觀」

【改玉】カイギヨク 玉は佩玉、行步なり、佩玉は行步を節するもの、故に佩玉を易ふれば、步調をも改めざるべからず。法を變ずれば事も亦變ずるに喩ふ。國語に「先民有レ言、改レ玉改レ行」

【改】イ。養里切。紙。改と異なり。穀改は鬼魅を逐ふ、大剛卯。

【攺】フ、ア。芳武切。襄。なづ(撫)。

【攷】コツ、コチ。苦骨切。月。おだやかならず、又、なめらかならず。(敲攷)。

【攻】コウ、ク。沽紅切。東。

一うつ(擊)二おかす(侵)三をさむ(治)四かたし(堅)五よし(善)六つくる(作)七せむ八ならふ(習)九とぐ十みがく(研)。

【攻玉】コウギヨク たまをみがきをさむ。易林に「鉛刀攻レ玉、堅不レ可レ得」

【攻伐】コウバツ せめうつ。國語に「有二刑罰之辟一、有二攻伐之兵一」

【攻究】コウキウ 事理ををさめきはむ。

【攻討】コウタウ せめうつ。吳志に「攻討一年破レ之」

【攻掊】コウホウ 前に同じ。宋濂「醫言濕熱勝、良劑急攻掊」

【攻堅】コウケン 强き敵をせむ。魏志、注に「攻堅易二於折一、枯、摧レ敵甚二於湯レ雪」

【攻研】コウケン みがききはむ。王建「詩禮不二外學一、兄弟相攻研」

【攻陷】コウカン せめおとしいる。(破陷)。晉書に「胡烈攻二陷關城一」

【攻虛】コウキヨ 敵の備へなき處をせむ。(擊虛)。管子に「釋レ實、而攻レ虛」

【攻圍】コウイ せめかこむ。祖君彥「四面攻圍、千里援絕」

【攻寡】コウクワ せめうばふ。李康「利害生二其左一、攻寡奪出二其右一」

【攻蹂】コウジウ せめふみにじる。宋史に「羣盜攻蹂無二全城一」

【攻熨】コウウツ 病ある處に藥を貼る。又、そこをあたたむ。轉じて治療の義。柳宗元「吾奸辭工書皆病也、日思二砭針攻熨一」

【攻擊】コウゲキ せめうつ。韓非子に「天下無レ道、攻擊不レ休」

【攻瘞】コウレイ やまひをいやす。(治療)。孔叢子に「獻二攻療之方一」

【攻獲】コウクワク 敵國をせめて物をかすめと

る。戰國策に「臣恐ァ其攻獲之利、不ル如ニ所レ失之費一也」

【攻守同盟】 二國以上同盟して、その中の一國が同盟以外の國と戰端を開くときは、同盟せる國が之を助くるをいふ。

【攻苦食レ啖】 苦境にありて粗末のものを食ふ。史記に「呂后與ニ陛下一攻苦食レ啖」

【攻城野戰】 城をせめ野にたたかふ。史記に「廉頗曰、我爲ニ趙將一有ニ攻城野戰之大功一」

【攷】 ㋐カン。居寒切。寒。ろ候旰切。幹。 ㋑一もとむ(求)二う(得)三すすむ(進)ろ敲に同じ。

【孚】 ガク。學の俗字。

四畫

【攽】 ㋐ハン。布還切。刪。ろヒン。悲巾切。眞。 ㋑わかつ、わかる(頒に同じ、分)ろへる、へす(減)。トン、ドン。都困切。願。

【皷】 一ひく(引)二する(摩)。

【攸】 ㋐キン、ゴン。渠金切。侵。 ろカン、ゴン。口含切。覃。 ㋒ケン。去劍切。豔。 ㋓ケン、ゴン。丘嚴切。鹽。

【放】 ㋐ハウ。甫妄切。漾。 ろ分兩切。養。 ㋒分房切。陽。 ㋑一おふ(逐)二はなつ三はなちやる四ほしいままなり(肆)五さる(去)六おく(置)七すつ(捨)八ゆるす(縱)九すたる(廢)十ならふ(倣)十一ならふ(比)二なる(至)三いたす(至)㋔船をあはす。世なのがれたる人。山野に放浪する人。中說に「陶元亮放人也、歸去來有ニ遯レ世之心一焉」

【放士】 前に同じ。山海經に「其縣多ニ放士一」

【放火】 ひなつけてやく。つけび。易林に「從レ風放レ火、荻芝俱死」

【放手】 漢書に「權門請託、殘吏放手」

【放心】 心をほしいままにする。書經に「難レ收ニ放心一、閑レ之維難」

【放生】 〔佛〕功德を積むため、魚鳥などの生物をはなちやる。東齊記事に「魯公喜ニ于放生一」

【放民】 ほしいままなるたみ。謝翺「狂歌作ニ放民一」

【放古】 古にならふ。漢書に「宜ニ少放レ古以自節一焉」

【放任】 なりゆきにまかす。又、なげやりにす。

【放歩】 きままにあるく。朱熹「出レ門放歩人爭看」

【放佚】 きままなり。正法念經に「此放逸過、一切過中最爲ニ勝上一」

【放言】 ほしいままにいふ。ほしいままなることば。論語に「隱居放言」

【放志】 ほしいままなる志。又、志をほしいままにす。陸雲「眇ニ區外而放レ志兮、眷ニ天路一而怡レ顏」

【放免】 はなちゆるす。ゆるす。宋史に「廣南有レ買ニ人男女一爲ニ奴婢一轉傭利者一竝放免」

【放利】 利による。論語に「放ニ於利一而行多レ怨」

【放牧】 はなしがひす。後漢書に「自レ是牛馬放牧」

【放夜】 非番の夜。西都雜記に「正月十五夜、勅許ニ弛レ禁前後各一日一謂ニ之放夜一」

【放流】 逐はれさまよふ。史記に「屈平雖ニ放流一、顧ニ楚國一繫ニ心懷王一」

【放效】 かたどりならふ。詩經に「天下莫レ不ニ放效一以爲レ法」

【放神】 心をほしいままにす。韋應物「放レ神遺レ所レ拘」

【放溟】 きままにあそびくらす。金史に「放ニ溟山水間一」

【放恣】 きままなり。(縱恣、擅恣)。孟子に「諸侯放恣、處士橫議」

【放紛】 もつる。蘇軾「敢ニ拾散亡一理ニ放紛一」

【放逸】 一きままなり。後漢書に「棄ニ放逸一、而赴ニ束縛一」二〔佛〕大煩惱地法の一として、二十隨煩惱の一に數ふ。正法念經に「此放逸過、一切過中、最爲ニ勝上一」

【放率】 さっぱりとしたり。晉書に「帝獺賞ニ其放率一」

【放蜂】 のろしをあぐ。唐書に「其放レ蜂有ニ一炬二炬三炬四炬一」

【放散】 わがままなり。阮籍「其民放散肴亂、藪竄澤居」

【放惰】 ほしいままにしておこたる。杜牧「疎愚放惰」

【放棄】 一ゆるしはなつ。春秋、疏に「寬ニ其罪一、而放ニ棄之一也」二なげやりにす。吳越春秋に「大王放ニ棄忠直之言一」

【放殛】 おひはらひの罪にす。又、その刑罰。書經に「鯀則放殛不レ敎」

【放逐】 おひはらふ。史記に「放ニ逐義帝一、而自立」

【放肆】 ほしいままなり。關尹子に「一鰕至微、亦能放ニ肆乎大海一」

【放溢】 ほしいままにして道にはづる。魏志に「精誠不レ制、則放溢無レ極」

【放禽】 鳥なばなつ。梁簡文帝「解レ網放レ禽、穿レ泉掩レ菌」

【放逢】 ものに拘らずして意のままなり。晉書に「深以ニ放逢一爲レ非レ道」

【放傲】 高ぶりてほしいままなり。洛陽伽藍記に「性愛ニ恬靜一、丘園放傲」

【放歌】 聲をほしいままにしてうたふ。杜甫「放歌頗悲絕」

【放誕】 ほしいままに大言す。南史に「檀超、少好ニ文學一、放誕任レ氣」

【放遠】 はなちとほざく。王珪「簡ニ拔俊賢一、放ニ遠邪佞」

【放遣】 はなちやる。後漢書、李恂傳に「恂到ニ田舍一、爲レ所ニ執獲一、羌素聞ニ其名一、放ニ遣之一」

【放銜】 くつわをはなつ。易林に「放レ銜垂レ轡、奔馬不レ制」

【放醉】 ほしいままにふふ。白居易「尋レ春放醉尙ニ粗豪一」

【放論】 ほしいままにあげつらふ。史記に「莊子散ニ道德一、放論」

【放學】 學課をはりてやすみとなる。陸游「貪看忘卻還レ家飯、恰似ニ兒童放學時一」

【放蕩】 ほしいままなり。魏志、武帝紀に「少機警有ニ權數一、而任俠放蕩、不レ治ニ行業一」

【放邁】 ほしいままなり。北史に「容貌魁偉、放邁自高」

【放濫】 ほしいままにしてみだりなり。後漢書に「事多ニ放濫一、物情生レ怨」

【放縱】 わがままなり。王僧孺「天然放縱、極有ニ筆力一」

【放鞚】 くつわをはなつ。白居易「放レ鞚體安騎ニ穩馬一」

【放黜】 はなちしりぞく。書經に「崇ニ信姦回一、放ニ黜師保一」

【放擲】 なげやりにす。うちすつ。

【放曠】 うち開きてひろし。晉書、桓石秀傳に「性放曠、常弋ニ釣林澤一」

【放懶】 おこたりてしまりなし。白居易「怕レ寒放懶日高臥」

【放鑄】 みだりに鑄る。漢書、食貨志に「使ニ民放鑄一」

【放纜】 ともづなをはなつ。韓維「野艇時放レ纜」

【放下僧】 事物を放棄して執著なき禪僧。

【放生會】 〔佛〕囚へたる魚鳥を放ちて法を修する法會。支那にては、唐の肅宗天下に詔して放生池を置くこと金石錄に見え、我國にては、元正天皇養老四年、石清水にて行ひしに始まる。乾淳佛時記に「四月八日、爲ニ佛誕日一、諸寺各有ニ浴佛會一、是日四湖作ニ放生會一、小舟競ニ賣龜魚螺蚌一放生」

【放言高論】 思ひのままに言論す。文章軌範に「放言高論、筆端不ニ容束一」

【放飯流歠】 大いに食ひ、流しこむ。如く飲む。禮記に「毋ニ放飯一、毋ニ流歠一」

【放送】 ものに拘らずして意のままなり。晉書に「深以ニ放逢一爲レ非レ道」

【放傲】 高ぶりてほしいままなり。洛陽伽藍記に「性愛ニ恬靜一、丘園放傲」

【放歌】 一きままなり。後漢書に「棄ニ放逸一、而赴ニ束縛一」二〔佛〕大煩惱地法の一として、二十隨煩惱の一に數ふ。正法念經に「此放逸過、一切過中、最爲ニ勝上一」

【放率】 さっぱりとしたり。晉書に「帝獺賞ニ其放率一」

【放蜂】 のろしをあぐ。唐書に「其放レ蜂有ニ一炬二炬三炬四炬一」

【放散】 わがままなり。阮籍「其民放散肴亂、藪竄澤居」

【放惰】 ほしいままにしておこたる。

【放棄】 一ゆるしはなつ。春秋、疏に「寬ニ其罪一、而放ニ棄之一也」二なげやりにす。吳越春秋に「大王放ニ棄忠直之言一」

【放殛】 おひはらひの罪にす。又、その刑罰。書經に「鯀則放殛不レ敎」

【放逐】 おひはらふ。史記に「放ニ逐義帝一、而自立」

【放肆】 ほしいままなり。關尹子に「一鰕至微、亦能放ニ肆乎大海一」

【放溢】 ほしいままにして道にはづる。魏志に「精誠不レ制、則放溢無レ極」

【放禽】 鳥なばなつ。梁簡文帝「解レ網放レ禽、穿レ泉掩レ菌」

【放逢】 ものに拘らずして意のままなり。晉書に「深以ニ放逢一爲レ非レ道」

【放傲】 高ぶりてほしいままなり。洛陽伽藍記に「性愛ニ恬靜一、丘園放傲」

【放歌】 一きままなり。後漢書に「棄ニ放逸一、而赴ニ束縛一」二〔佛〕大煩惱地法の一として、二十隨煩惱の一に數ふ。正法念經に「此放逸過、一切過中、最爲ニ勝上一」

【放率】 さっぱりとしたり。晉書に「帝獺賞ニ其放率一」

【放蜂】 のろしをあぐ。唐書に「其放レ蜂有ニ一炬二炬三炬四炬一」

【放散】 わがままなり。阮籍「其民放散肴亂、藪竄澤居」

【放惰】 ほしいままにしておこたる。

【放棄】 一ゆるしはなつ。春秋、疏に「寬ニ其罪一、而放ニ棄之一也」二なげやりにす。吳越春秋に「大王放ニ棄忠直之言一」

【放殛】 おひはらひの罪にす。又、その刑罰。書經に「鯀則放殛不レ敎」

【放逐】 おひはらふ。史記に「放ニ逐義帝一、而自立」

【放肆】 ほしいままなり。關尹子に「一鰕至微、亦能放ニ肆乎大海一」

【放溢】 ほしいままにして道にはづる。魏志に「精誠不レ制、則放溢無レ極」

【放禽】 鳥なばなつ。梁簡文帝「解レ網放レ禽、穿レ泉掩レ菌」

【放逢】 ものに拘らずして意のままなり。晉書に「深以ニ放逢一爲レ非レ道」

【放傲】 高ぶりてほしいままなり。洛陽伽藍記に「性愛ニ恬靜一、丘園放傲」

【放歌】 一きままなり。後漢書に「棄ニ放逸一、而赴ニ束縛一」二〔佛〕大煩惱地法の一として、二十隨煩惱の一に數ふ。正法念經に「此放逸過、一切過中、最爲ニ勝上一」

【放率】 さっぱりとしたり。晉書に「帝獺賞ニ其放率一」

【放蜂】 のろしをあぐ。唐書に「其放レ蜂有ニ一炬二炬三炬四炬一」

【放散】 わがままなり。阮籍「其民放散肴亂、藪竄澤居」

【放惰】 ほしいままにしておこたる。

【放棄】 一ゆるしはなつ。春秋、疏に「寬ニ其罪一、而放ニ棄之一也」二なげやりにす。吳越春秋に「大王放ニ棄忠直之言一」

【放殛】 おひはらひの罪にす。又、その刑罰。書經に「鯀則放殛不レ敎」

【放逐】 おひはらふ。史記に「放ニ逐義帝一、而自立」

【放肆】 ほしいままなり。關尹子に「一鰕至微、亦能放ニ肆乎大海一」

【放溢】 ほしいままにして道にはづる。魏志に「精誠不レ制、則放溢無レ極」

【放禽】 鳥なばなつ。梁簡文帝「解レ網放レ禽、穿レ泉掩レ菌」

【敀】 ㊀ヒ。普鄙切。紙。㊁匹夷切。支。㊂ひび、ひびき㊃紙に同じ。

【政】 ㊀セイ、シャウ。之盛切。敬。㊁諸盈切。庚。
㊀一まつりごと二ただす(整理)㊂みつぎ(征に同じ、賦税)。

【政化】 法を以て下を治む。德を以て人を導く。國を治む。後漢書に「禮樂、政化之本」

【政本】 まつりごとのもと。禮記に「禮其政之本與」

【政令】 まつりごとのおきて。又、政府の命令。

【政治】 まつりごとよく行はる。まつりごと。書經に「道洽政治、澤潤生民」

【政典】 まつりごとに關する總べての法則。周禮に「四曰政典、以平邦國、以正百官」

【政府】 まつりごとを行ふ最高府。宋史、歐陽修傳に「其在政府、與韓琦同心輔政」

【政柄】 まつりごとを執る權。左傳に「三世執其政柄」

【政眊】 まつりごとの道くらし。漢書、董仲舒傳に「先王之道、必有偏而不起之處、故政有眊而不行」

【政略】 政事上のはかりごと。一般に、かけひきの義に用ゐる。

【政條】 政令法律の類。元史に「宣暢國威、敷布政條」

【政務】 まつりごと。後漢書に「政務之績、有絶異之效」

【政術】 まつりごとのてだて。後漢書、安帝紀に「詔舉明政術、遠古今、能直言極諫者、各一人」

【政教】 まつりごとに「內修政教」

【政策】 政事上のはかりごと。

【政道】 まつりごとのみち。後漢書に「政道或虧、則姦臣當其罰」

【政經】 まつりごとのこと。「政經有序、德洽人心」

【政塗】 まつりごとのしかた。梁書に「思弘政塗、莫知津濟」

【政樞】 まつりごと。唐書に「勤秉政樞、博逮謀猷」

【政談】 政事上に關する談論。

【政績】 まつりごとのいさを。南史、韋叡傳に「所居必有政績」

【政聲】 善政のほまれ。後漢書、杜根傳に「根位至巴郡太守、甚有政聲」

【政權】 まつりごとを行ふ權。

【政體】 まつりごとのたてかた。晉書に「該覈政體」

【政如蒲盧】 蒲盧は蒲萄なり、生長極めて速かなれば、政の擧がること速かなるに喩ふ。一說に、蒲盧は土蜂なりと。中庸に「夫政也者、蒲盧也」

【政如魯衞】 まつりごとの相似たるにいふ。魯の祖周公、衞の祖康叔の兄弟なりしよりいふ。漢書、馮奉世傳に「大馮君小馮君、兄弟繼踵相因循、聰明賢智、惠吏民、政如魯衞、德化均、周公康叔猶二君」

【攸】 タン、トン。多感切。感。㊀さす(刺)㊁うつ(擊)。

五畫

【攺】 ㊀カ。許我切。哿。㊁口箇切。箇。うつ(擊)。

【敉】 フツ、ボチ。符勿切。物。㊀わる、やぶる(破)㊁うつ(擊)。ハク、ヒャク。博陌切。陌。㊀つよし(强)㊁せまる(迫に同じ)㊂おほいにうつ(大打)㊃つく(附)㊄おこす。

【故】 テン。丁兼切。鹽。ばかる(量)。コウ、ク。擧厚切。有。たたく、うつ(擊)。カウ。更に同じ。

【敏】

【敃】 ㊀ビン、ミン。美殯切。軫。㊁眉貧切。眞。㊂フン、ホン。數文切。文。㊃つよし(强)㊄つとむ(勉)㊅みだる(亂)。

【敉】 ㊀ブ、ム。亡遇切。遇。㊁ボウ、ム。迷浮切。尤。㊂つとむ(彌)㊃つとむ(勉)。

【故】 コ、ク。古暮切。遇。
㊀一ふるし(舊)二もと三ことさらに四こと(事)五むかし(昔)、いにしへ(古)六ふるき物事七ゆゑに(上を承け下を起す語)八たくみなり(巧)九しりあひ(知人)十ならはし(先例)十一ゆゑ十二ときあかし(訓詁)十三常ならざることがら(凶喪災難の類)。

【故人】 一ふるきとも。後漢書に「朕故人嚴子陵共臥耳」二死にたる人。

【故山】 ふるさと。謝靈運「故山日既遠、風波豈還時」

【故夫】 もとのをっと。李商隱「不許文君憶故夫」

【故方】 ふるきしかた。史記に「靈去其故方、更悉以禁方與之」

【故心】 ひさしく思ひゐたるこころ。(宿心)。何遜「故心不存此」

【故衣】 ふるききもの。古辭に「新衣誰常補、故衣誰當綻」

【故老】 としより。後漢書に「國有大政、必議之於前訓、諮之於故老」

【故池】 ふるきいけ。謝靈運「故池不更穿」

【故地】 むかし所有せし土地。殷堯藩「此去多應收故地」

【故宅】 もとのいへ。(舊宅)。水經に「孔廟卽夫子之故宅也」

【故式】 ふるきのり。(舊式)。潘尼「弛齋禁、反故式」

【故志】 一もとのこころざし。二ふるきことを記したる書。後漢書に「皆懷歸藪澤、修其故志矣」

【故吾】 むかしの我身。莊子に「雖忘乎故吾、吾有不忘者存」

【故里】 ふるさと。白居易「二疏返故里、四老歸舊山」

【故址】 ふるき城あと。ふるき家のあと。賀鑄「人生物數不相待、摧頹故址秋風前」

【故步】 もとのあゆみぶり。後漢書、班固傳に「謬陵餘子、有學步于邯鄲者、未得髣髴、失其故步、匍匐而返」

【故法】 ふるきおきて。詩經、箋に「紂之亂、乃不用先王之故法之所致」

【故房】 ふるくより住まひしへや。李白「新寵方妍好、掩淚出故房」

【故府】 ふるきくら。國語に「君若使有司求諸故府、其可得也」

【故苑】 ふるきその。舊宮詩に「故苑煙花客自看」

【故記】 ふるきかきもの。呂氏春秋に「嘗讀故記」

【故俗】 ふるきならはし。漢書、霍去病傳に「因其故俗、爲屬國」又、食貨志に「其故俗治無賦稅」

【故窆】 ふるきつか。唐書に「合葬建陵、啓故窆」

【故紙】 ふるきかみ。ほぐ。反故。北齊書に「安能作刀筆吏、返披故紙乎」

【故家】 一處に多年住居せるいへ。(舊家)。孟子に「故家遺俗、流風善政」

【故船】 ふるきおほふね。王褒「波生從故船、沙漂湧新潮」

【故巢】 ふるす。晉書に「燕雀何徘徊、意欲還故巢」

【故國】 ふるくよりあるくに。孟子に「所謂故國者、非有喬木之謂也」

【故敗】 ふるびやぶる。魏書、劉仁之傳に「衣服故敗」

【故粟】 ふるきあば。管子に「發故粟以田數」

【故都】 ふるきみやこ。史記に「韓王成因故都、都陽翟」

【故琴】 ふるきこと。盧照隣「故琴無復雪、新樹但生煙」

【故智】 前人のちゑ。史記に「秦王必祖張儀之故智」

【故路】 もとのみち。劉詵「白髮涉江尋故路」

【故袴】 ふるきはかま。列子に「卜子使其妻爲袴、妻問曰、今袴何如、夫曰、象吾故袴」

【故絮】 ふるきわた。宋史に「昔人謂、

甑有二蓼飯一、床有二故絮一」

【故粧】シヤウ 以前にかはらざるよそほひ。梁簡文帝「故粧猶累日」

【故程】テイ もと來しみち。劉言史「偶隨二下山雲一、荏苒失二故程一」

【故絲】シ ふるきいと。梁簡文帝「奪鏡迷二朝色一、縫鍼脆二故絲一」

【故資】シ もとよりの資財。漢書、婁敬傳に「因二秦之故資一、甚美二膏腴之地一、此所謂天府」

【故鄉】キヤウ ふるさと。史記に「威加二海內一兮歸二故鄉一」

【故歲】サイ ふるどし。まへのとし。喬知之「故歲雕梁燕、雙去今來隻」

【故道】ダウ ふるきみち。又、もとのとほりみち。漢書に「五月漢王、引兵從二故道一、出襲雍」

【故意】イ わざとするこころ。楊萬里「羣兒有二新舌一、六學無二故意一」

【故園】エン ふるさと。虞集「遊子聞二春雨一、思レ親望二故園一」

【故葉】エフ ふるきは。張正見「風落二新枝一、霜飛二故葉一」

【故柳】シヤ ふるきうてな。温庭筠「芳筵想像情難レ盡、故柳荒涼路已迷」

【故蓁】キ ふるきくつひも。梁簡文帝「苦階沒二故蓁一」

【故態】タイ むかしのさま。（舊態）。後漢書、疊光傳に「帝笑曰、狂奴故態也」

【故實】ジツ ふるき事實。國語に「問二于遺訓一、咨二于故實一」

【故墉】ヨウ ふるきかき。耶律楚材「頹垣繞二故墉一」

【故緣】リヨク もとのみどり。蘇軾「春冰無二眞堅一、霜葉失二故緣一」

【故廟】ベウ ふるきやしろ。韓愈「因二其故廟一、易而新レ之」

【故墟】キヨ むかしの城あと。詩譜に「成王封二母弟叔虞於堯之故墟一」

【故弊】ヘイ ふるくしてやぶれたるもの。南史に「衣被二故弊一」

【故編】ヘン ふるきしょもつ。楊萬里「長亭夜濯レ足、吹レ燈呻二故編一」

【故瘡】サウ ふるききず。戰國策に「故瘡未レ息、驚心未レ去」

【故濠】ガウ ふるきほり。柳宗元「磻谿近二餘基一、阿城連二故濠一」

【故儔】チウ ふるきとも。徐彥伯「浩歌向二闌渚一、婉戀故儔心」

【故壘】ルイ ふるきとりで。晉書に「屯二于韓王故壘一」

【故舊】キウ むかしよりのしりあひ。ふるきなじみ。周禮に「以二賓射之禮一、親二故舊一」

【故朋】ホウ ふるきあしあと。もとの形跡。謝翺「牧羊尋二故蹤一」

【故蹤】シヨウ もとのままのいつくしみ。

【故寵】チヨウ 史記に「將軍又何以得二故寵一乎」

【故積】コク ふるきひつ。蘇軾「請歸祇二故積一、靜喪珠當レ反」

【故轍】テツ 前に通過せし車のあと。轉じて、しきたりの道。陶潛「量レ力守二故轍一」

【故疇】チウ もとのあぜ。陸雲「望二故疇之迴邃一兮」

【故櫪】レキ もとのうまや。杜甫「馬嘶思二故櫪一、歸鳥靈斂レ翼」

【故人疎】ソ ふるきともも尋ね來らず。孟浩然「不才明主棄、多病故人疎」

【故人意】イ むかしなじみのこころ。史記に「以二綈袍戀戀有二故人之意一、故釋レ之」

攲

テイ、タイ。典禮切。薺。かくる、かくす（隱）。

六 畫

【攲】カク、キヤク。古伯切。陌。うつ（擊）。カフ、コフ。葛合切。合。一あつまる（會）二あはす（合）。サク、シヤク。測革切。陌。むちうつ。

【攲】ケイ、ケ。涓惠切。霽。一おかす（侵）二はなつ（放）。ワウ。紆往切。養。一まがる、まぐ二おかす。

【敕】セイ。所例切。霽。ろサイ、セ。所賣切。卦。決殺に同じ。

【攲】カン。侯肝切。翰。ろカ。許我切。哿。

【攲】とどむ、やむ（止）ろうつ（毆）。ジョ、ヅ。徐呂切。語。一ついで（次第）二ついづ三いとぐち（緒）四のぶ（述）五はしがき六つらぬ（陳）七官位官職を授く。

【敘】康熙字典に「按ずるに、說文に、敘は支に从ひ、余に从ふ。五經文字に、叙に作りて、又部に入るるは非なり。正字通には、周伯琦の說に因りて、攵に从ひ、余に从ふ、今說文に遵ひて改正す」

【敘任】ニン 位を授け官に任ず。

【敘次】ジ ついで。しだい。

【敘位】イ 位を授く。

【敘別】ベツ わかれをつぐ。元稹「遶巡來敘レ別、頭白顏色驚」

【敘述】ジユツ 言をのぶ。

【敘事詩】ジシ 韻文の一種、事實をのべたるもの。

【敘情詩】ジヤウ 韻文の一體、自家の感想を表すもの。

【敘事詩】ジシ 敘事詩の對。

【敘寒暄】カンケン 時候の挨拶をのぶ。

敵

ハウ、ヒヤウ。披庚切。庚。板を打つ聲。

七 畫

【敵】ピ、ミ。母婢切。紙。一なづ（撫）二やすんず（安）三いつくしむ（愛）。

【敵】チク、トク。丑六切。屋。ろシカ、シユ。舒救切。宥。

【敵】やむ（病）二いたむ（痛）ろかる（薨）。

ろそこなふ（害）ろくだす（降）。

【敵】カツ、カチ。恪八切。黠。うつ（擊）。

【敵】クワツ、ケチ。乎刮切。黠。ろキ。去智切。寘。一つく（盡）ろあへぐ（喘息）。

【敵】カウ、ゲウ。胡教切。效。ろケウ。吉了切。篠。

【敵】カウ、ゲウ。下巧切。巧。一のっとる（法）二いたす三いさを（功績）四かたどる（象）五まなぶ（學）六しるし（功驗）七つとむ（力）八さづく（授）九そなふ（具）ろあきらかなり（明）ねあらはる。

【敵力】リコク はたらき。ききめ。文同「少睡始知茶効力」

【敵尤】イウ 人の惡事をまぬ。左傳に「原伯曰、效レ尤其亦將レ有レ咎」

【敵用】ヨウ 一はたらき。ききめ。二はたらきをつくす。獨孤及「少年當レ效レ用」

【敵果】カウ できばえ。てがら。しあげ。

【敵忠】チユウ まごころをつくす。張九齡「古節猶不レ棄、今人爭效レ忠」

【敵逆】ギヤク 不順なることをいたす。左傳に「去レ順效レ逆、所二以速レ禍也」

【敵祥】シヤウ きざしをあらはす。宋史に「皎鑒澄澈、效レ祥千年」

【敵情】ジヤウ まごころをつくす。史記に「效レ情正レ義」

【敵答】タフ しるし。こたへ。梁書に「捕レ影槩レ風、終無二效答一」

【敵愚】グウ 心力をつくすことの謙辭。漢書、主公偃傳に「今臣不二敢隱レ忠避レ死、以效レ愚」

【敵誠】セイ まごころをいたす。嵇康論に「各供二方物一、以效レ誠耳」

【敵義】ギ 正しき道をつくす。北齊書、高乾傳に「正是英雄效レ義之會也」

【敵績】セキ いさををいたす。呂氏春秋に「故敵績銘二乎金石一」

【敵驗】ケン ききめ。しるし。潛夫論に「論士必定二於志行一、毀譽必參二於效驗一」

【敵鑿】ヒンニ 强ひて人眞似をなす。莊子に「西施病レ心而矉二其里一、其里之醜人見而美レ之、歸亦捧レ心而矉二其里一、其里之富人見レ之、閉レ門而不レ出、貧人見レ之、挈二妻子一而去レ之走、彼知レ美レ矉、而不知二矉之所二以美一」矉は顰に同じ。

【敵愚忠】グチユウ 己がまごころをつくすことの謙辭。枚乘「臣願披二腹心一、而效二愚忠一」

敝

ハウ、ヒヤウ。披庚切。庚。板を打つ聲。

七 畫

【敝】カン。侯肝切。翰。ろカ。許我切。哿。

【敝】とどむ、やむ（止）ろうつ（毆）。ジョ、ヅ。徐呂切。語。一ついで（次第）二ついづ三いとぐち（緒）四のぶ（述）五はしがき六つらぬ（陳）七官位官職を授く。

【敝】康熙字典に「按ずるに、說文に、敝は支に从ひ、余に从ふ。五經文字に、叙に作りて、又部に入るるは非なり。正字通には、周伯琦の說に因りて、攵に从ひ、余に从ふ、今說文に遵ひて改正す」

【敝任】ニン 位を授け官に任ず。

【敝次】ジ ついで。しだい。

【敝位】イ 位を授く。

【敝別】ベツ わかれをつぐ。元稹「遶巡來敝レ別、頭白顏色驚」

【敝述】ジユツ 言をのぶ。

【敝事詩】ジシ 韻文の一種、事實をのべたるもの。

【敝情詩】ジヤウ 韻文の一體、自家の感想を表すもの。

【敝事詩】ジシ 敝事詩の對。

【敝寒暄】カンケン 時候の挨拶をのぶ。

【敝】ヒ。トウ、ツ。他孔切。董。ろソウ、ス。損動切。董。

㊀うつ(擊)、たたく㊁ひく(引)。

【敲】 ㊀ホ、フ。滂模切。虔。㊁補に同じ。 ㊂やぶれかかる。

【斆】 ヤ。吐火切。嚮。

やすし、やすんず(安に同じ)。

【敎】 ホツ。勃に同じ。

㊀にはかに㊁たちまち。

【敎】 カウ、ケウ。古孝切。效。

㊀なしへ(誨)㊁なしふ(誨)㊂ならふ(效)㊃みちびく(導)㊄つぐ(語)㊅さづく(授)㊆のり(法)㊇しむ、せしむ(令)。

【敎化】 ㊀敎へ導きて、智を開き善にすすめしむ。貞觀政要に「人君之理、莫レ大ニ乎道德敎化一也」㊁〔佛〕敎法を垂れて化導す。法華經に「轉ニ無上法輪一、敎ニ化諸菩薩一」

【敎示】 なしへしらす。 元稹「父兄相敎示、求レ利莫レ求レ名」

【敎本】 なしへのはじめ。禮記に「祭者敎之本也」

【敎戒】 なしへいましむ。漢書、陳萬年傳に「萬年召レ咸、敎ニ戒於牀下一」

【敎判】 〔佛〕敎相判釋の略、佛一代の說法を分類して二類又は三類等とするないふ。

【敎坊】 歌舞をなしふるところ。唐書に「開元二年、置ニ敎坊於蓬萊宮側一、京都置ニ左右敎坊一、掌ニ俳優雜劇一」

【敎命】 皇后のおほせ。五代史に「皇太后及皇后、交ニ通藩鎭一、太后稱ニ詔令一、皇后稱ニ敎命一」

【敎治】 なしへなさむ。周禮に「平ニ敎治一、則冢宰聽レ之」

【敎育】 なしへそだつ。しつけす。しつけ。孟子に「君子有ニ三樂一、中略得ニ天下英才一而敎ニ育之一、三樂也」

【敎典】 敎育を掌り王を佐けて邦國を安んずる法則。又、敎育に關するすべての法則。周禮に「二曰、敎典」

【敎訓】 なしふ。なしへ。左傳に「越十年生聚、而十年敎訓」

【敎唆】 なしへそそのかす。品字箋に「以レ言弄レ人、謂ニ之唆哄敎唆一」

【敎授】 ㊀なしへさづく。史記に「子夏居ニ西河一、敎授爲ニ魏文侯師一」㊁學官の職名。書言故事に「宋元豐、始興ニ三舍一、諸大郡府始置ニ敎授一人一」

【敎勒】 なしへいましむ。後漢書、馬廖傳に「廖性寬緩、不レ能ニ敎ニ勒子孫一」前に同じ。參同契に「嚴父施レ令、敎ニ敕子孫一」

【敎敕】 なしへならはす。梁簡文帝「敎習」 なしへさとす。禮記に「是以「聚レ徒敎習、學侶成レ羣」

【敎喻】 なしへならす。

敎喻而德成也」

【敎馴】 なしへならす。漢書に「及ニ敎馴服習之至一、可ニ牽持駕服一」

【敎肄】 なしへならはす。頭陀寺碑に「方廣東被、敎肄南移」

【敎督】 なしへただす。漢書に「賜レ書敎ニ督以所レ不レ及」

【敎意】 敎訓のこころばへ。中說に「旁行而不レ流矣、安知ニ敎意一哉」

【敎誨】 なしふ。なしへ。晉書に「敎ニ誨子孫一」

【敎戰】 戰爭の法をなしふ。蘇轍「旦暮敎レ戰」

【敎織】 はたおるわざをなしふ。古樂府に「十三敎ニ汝織一」

【敎援】 なしへならす。周禮に「養ニ猛獸一、而敎ニ援之一」

【敎勸】 なしへすすむ。杜牧「益勸ニ桑苧機織一、廣ニ狹俗所レ未レ習、敎勸成レ之」

【敎觀】 〔佛〕敎相と觀法と。敎相とは一宗の敎義をいひ、觀法とは各宗旨の眞理を觀念するをいふ。

【敎行證】 〔佛〕敎は佛一切の言敎、行は敎によりて修行し、進取する義、證は言敎所詮の義理に證契するなりといへり。翻譯名義集に「青龍疏云、有ニ敎行證一、名爲ニ正法一」

【敎學半】 人を敎ふるも亦我學を助くることあるが故に、その學ぶ業の半に居るとの義。禮記に「兌命曰、敎學半」

【敎一識百】 少しく敎ふれば これより推して他の多くを自らさとる。オのすぐれたるにいふ。小學に「文王生而明聖、太任敎レ之以レ一而識レ百」

【敎外別傳】 聲敎の外に於て文字を立てず、心印を單傳し、直指人心見性成佛といふ特別なる義を立てたること。祖庭事苑に「正宗記曰、其所レ謂敎外別傳者、非レ謂ニ黃卷赤軸閒言聲字色縱ニ然之一有レ狀者直與ニ法相無相一一也、亦非ニ果別一於佛敎一也、正其敎迹所レ不レ到者也」

【敎學相長】 敎ふると學ぶと相須って、我學業を增進す。禮記に「雖レ有ニ嘉肴一、弗レ食不レ知ニ其旨一也、雖レ有ニ至道一、弗レ學不レ知ニ其善一也、是故學然後知レ不レ足、敎然後知レ困、知レ不レ足、然後能自反也、知レ困然後能自强也、故曰ニ敎學相長一也」

【敎子以ニ義方一】 正義を以て子供の敎育をなす。左傳に「石錯曰、愛レ子、敎以ニ義方一、弗レ納ニ于邪一」又、馮道「燕山竇十郎、敎レ子以ニ義方一」

【敺】 ㊀シン。丞眞切。眞。 ㊁章忍切。軫。

㊀一よろこびてうごく貌㊁擊つこと。

よろこぶ。

【敏】 ビン、ミン。美殖切。軫。

㊀とし、はやし、すばやし(疾)㊁すみやかなり(速)㊂おごそかなり(莊)㊃つつしむ(敬)㊄かしこし、さとし(聰)㊅おほゆび、足の拇指。

まつりごとを滯らず行ふ。中庸に「人道敏レ政」

【敏疾】 すばやし。高適「懷ニ果斷之沈潛一、任ニ性情之敏疾一」

【敏悟】 さとし。(明悟)。宋史、元絳傳に「絳生而敏悟、五歲能作レ詩」

【敏速】 とくすみやかなり。(捷速)。晉書に「機悟敏速、甚有ニ鄉曲之譽一」

【敏敎】 さときなしへ。易林に「敏敎勁疾、如ニ猿升レ木」

【敏捷】 すばやし。杜甫「敏捷詩千首、飄零酒一杯」

【敏腕】 すばやき手腕。うできき。

【敏智】 さとし。劉攽「敏智通達」

【敏達】 さとく通ず。漢書に「敏達好レ政、欲ニ爲レ國忠一」

【敏慧】 さとし。(警慧)。五代史に「憐ニ其敏慧一、以爲レ子」

【敏銳】 さとくするどし。唐書、張薦傳に「薦敏銳有ニ文辭一」

【敏邁】 すぐれてかしこし。東軒筆錄に「歐陽永叔之詩、才力敏邁」

【敏識】 さとくしる。賈至「雅志沖澹、敏識精達」

【敏黠】 さとくわるがしこし。遂史、太祖紀に「謂ニ左右一曰、諸弟性雖ニ敏黠而蓄レ奸稔レ惡、嘗自矜レ有ニ出レ人之智一」

【敏聰】 さとくして智多し。南史、臧盾傳に「盾爲レ人、敏聰有ニ風力一」

【敏有レ功】 すばしこく勤むれば、百事ここに興り功皆成るべし。論語に「寬則得レ衆、信則民任焉、敏則有レ功、公則說」

【敕】 ㊀セン。失冉切。琰。

㊁ダフ、ネフ。呢洽切。洽。

㊀手を擧ぐる貌㊁つく(盡)。

【救】 キウ、ク。居祐切。宥。

㊀すくふ㊁すくひ㊂とどむ(止)㊃たすけ、たすく(助)㊄まもる(護)㊅いましむ(禁)。

【救世】 世をすくふ。唐書に「浩然有ニ救世之意一」

【救扞】 すくひまもる。冊府元龜に「命ニ左右一救扞獲レ免」

【救災】 わざはひをすくふ。左傳に「救レ災恤レ鄰道也」

【救助】 すくひたすく。戰國策に「至ニ其相救助一如レ一也」

【救命】 人命をすくふ。

【救恤】 すくひあはれむ。左傳に「救レ菑恤レ鄰、天之道也」

【救時】 ときをすくふ。唐書、姚崇傳に「崇爲ニ救時宰相一」

【救援】 すくふ。

【救解】 すくひとく。宋史、思恭傳に

「思恭盡レ力救解」

【救頽】 くづれをすくふ。謝靈運「採レ藥救レ頽」

【救禦】 すくひふせぐ。國語に「如レ壅ニ大川一、潰而不レ可ニ救禦一也」

【救弊】 衰へたるをすくふ。(濟弊、拯弊)。宋史に「安有ニ先儒爲レ法、不レ思レ救ニ其弊一耶」

【救藥】 すくふ。詩經に「多將ニ熇熇一、不レ可ニ救藥一」

【救療】 すくひいやす。北史、李元忠傳に「性仁恕、無ニ貴賤一、皆爲ニ救療一」

【救濟】 すくふ。吳志に「思レ平ニ世難一、救ニ濟黎庶一」

【救難】 なんぎをすくふ。(拯難)。史記に「常出ニ奇計一、救ニ紛糾之難一」

【救護】 たすけまもる。周禮、疏に「救護、使ニ天下得ニ其所一也」

【救火夫】 消防夫。顧體集に「凡城郭村鎭、公設ニ救火夫數十名一、使ニ其晝夜巡邏一」

【救レ火以レ薪】 その害の卻つて甚だしきに至る喩。鄧析子に「令煩則民詐、政擾則民不レ定、不レ治ニ其本一而務ニ其末一、譬如ニ拯レ溺錘レ之以レ石、救レ火投レ之以レ薪」

【救レ火揚レ沸】 烈火を消し、沸湯をさます。事の尋常手段にては爲し難きに喩ふ。史記、酷吏傳に「昔天下之網嘗密矣、然姦�al萌起、其極也、上下相遁、至レ於不レ振、當ニ是之時一、吏治若ニ救レ火揚レ沸一、非ニ武健嚴酷一、惡能勝ニ其任一而愉快乎」

【救過不レ贍】 己の過を救ふに日の足らざるないふ。戰國策に「太后救レ過不レ贍、何暇乃私レ魏醜レ夫乎」

【救レ寒莫レ如レ重裘】 寒さをふせぐは、重ねぎするを第一とす。中論に「語稱救レ寒莫レ如レ重レ裘、止レ謗莫レ如レ修レ身、療レ暑莫レ如レ親レ冰」

【敝】 ㋐チン、ヂン。直刃切。震。㋑ジョウ。辰陵切。蒸。㋒なさむ(治)㋓㊀のぶ(申)㊁もとらす、引き戻す㊂をさむ㊃㊄のぶ㊅もとらす。タツ、ダチ。徒活切。曷。ぬすむ(竊取)、うばふ(奪)。ギョ、ゴ。魚巨切。語。㊆いましむ(禁)㊇とどむ(止)

【敔】 ㋐㊀ぎょ、ゴ。魚巨切。語。㊁いましむ(禁)㊂とどむ(止)

【敕】 チョク、ヂキ。恥力切。職。㊀みことのり㊁ただす(正)㊂かたむく(傾)㊃をさむ(理)㊄つつしむ(謹)㊅いましむ(誡)㊆つぐ(語)㊇すすむ(勸)㊈いそぐ(急)㊉しるす(書)㊊ことのふ(整)㊋つかる(勞)㊌せむ(責讓)㊍さす(地を舌す)。○熟語は力部勅の字の下に收む。

【敖】 ㋐ガウ、ゴウ。五勞切。豪。㋑㊀なぶる、たはむる(戲)㊁あそぶ(遊)㊂おごる(傲)㊃かまびすし(囂に同じ)㊄はさみ(鰲に同じ)㊅いる(熬に同じ)㊆ながし㊇よろこばし㊈おごる、おごり(傲に同じ)㊉なぶる(調弄)。

【敖民】 おごれるたみ。漢書に「朝無ニ廢官一、邑無ニ敖民一」

【敖敖】 ㊀長き貌。一說に、欣ぶ貌。詩經に「碩人敖敖、說ニ于農郊一」㊁おごる貌。爾雅に「仇之敖敖」

【敖惰】 おごりおこたる。大學に「之ニ其所ニ敖惰一而辟焉」

【敖蔑】 おごりあなどる。王沈「敖蔑道素、懾ニ吁權門一」

【敖遊】 あそぶ。蘇軾「挾ニ飛仙一以敖遊、抱ニ明月一而長終」

【敖不レ可レ長】 人におごる心は、增長せざる樣にすべし。禮記に「敖不レ可レ長、欲不レ可レ縱、志不レ可レ滿、樂不レ可レ極」

【敗】 ハイ、ヘ。簿邁切。卦。㊀そこなふ(損)㊁くづる(頽)㊂くつがへる(覆)㊃つひゆ(潰)㊄こぼつ、こぼる(毀)㊅やぶる(破)㊆くづす(壞)㊇くさる(腐)㊈ほろぼす(滅)㊉わざはひ(凶殘)㊊やぶれほろぶ。

【敗亡】 やぶれほろぶ。

【敗北】 乖敗之名、故以ニ敗走一爲レ北」

【敗衣】 やぶれぎもの。司空曙「安貧著ニ敗衣一」

【敗臼】 星の名。後漢書に「敗臼察レ災而揚レ輝」

【敗朽】 くさる。參同契に「金性不ニ敗朽一、故爲ニ萬物寶一」

【敗走】 やぶれはしる。宋史、岳飛傳に「飛于ニ太行山一遇レ敵、單騎持ニ丈八鐵槍一、刺ニ殺黑風大王一、敵衆敗走」

【敗沒】 ほろぶ。魏志に「近濟陰魏諷ニ山陽曹偉一、皆以レ傾レ邪敗沒」

【敗卻】 戰やぶれてしりぞく。史記、淮陰侯傳に「敗ニ卻彭城一」

【敗柳】 枯れかれるやなぎ。韓偓「敗柳凋花松不レ知」

【敗笈】 こはれたる本箱。蘇舜欽「侈侈張ニ敗笈一」

【敗舫】 こはれたるふね。溫庭筠「荷疊平橋闇、萍稀敗舫沈」

【敗衄】 たたかひやぶる。五代史に「大小百餘戰、未ニ嘗敗衄一」

【敗紙】 ほご。反故。志林に「以ニ敗紙半幅一、書ニ其上一」

【敗骸】 やぶれ。(毀骸、破骸)。貢父「有ニ爲義山者一、衣服敗骸」

【敗絮】 つかひふるしのわた。陳師道「寒氣挾レ霜侵ニ敗絮一」

【敗筆】 つかひがらしのふで。太平廣記に「僧智永學書、敗筆如ニ丘山一」

【敗散】 やぶれちる。やぶりちらす。宋史に「民艅敗散、自然之理」

【敗遁】 戰やぶれてにぐ。水經、注に「戰ニ于龍澤一、田布敗遁」

【敗喪】 やぶれほろぶ。王羲之「安西敗喪、公私惋怛」

【敗傷】 やぶれそこなふ。韓非子に「藏ニ大器一而數徙之、則多ニ敗傷一」

【敗碎】 やぶれくだく。禮記、疏に「若餒、則敗碎不レ直」

【敗鼓】 やぶれつづみ。韓愈「牛溲馬渤、敗鼓之皮」

【敗業】 仕事をあやまる。しくじりたる仕事。戰國策に「是故事無ニ敗業一」

【敗窳】 やぶれくさる。宋史、謝德權傳に「膚積多忠ニ地下濕一、德權累レ甓爲レ臺、以藉レ之、遂無ニ敗窳一」

【敗穀】 こく物をやぶりそこなふ。禮記に「介蟲敗レ穀、戎兵乃來」

【敗艑】 底淺く平かなる舟のやぶれたるもの。盧山記に「龍遂委ニ船山頂一、今有ニ敗艑一」

【敗蕉】 やぶればせを。張時徹「嚴霜切重レ衾、疾風裓ニ敗蕉一」

【敗頽】 やぶれくづる

【敗壁】 やぶれたるかべ。孫覿「破扉風自掩、敗壁雨先頽」

【敗醬】 「植」をみなへし。(紋醬)。

【敗績】 ㊀たたかひ大いにやぶる。そのいさをを失ふ義。左傳に「大崩曰ニ敗績一」㊁轉じて、すべて事をやぶるにいふ。國語に「國無ニ敗績一」

【敗禮】 禮をやぶる。書經に「欲敗レ度、縱敗レ禮」

【敗壞】 やぶれくづる。後漢書に「若衣敗壞、一以相補、猶有レ所レ完」

【敗爛】 やぶれただる。朱子題跋に「此紙幸脫ニ于敗爛之中一」

【敗天公】 やぶれ笠。本草綱目、注に「弘景曰、此乃所レ戴竹笠之敗者、取レ竹燒灰用、李時珍曰、中庸穹天論云、天形如レ笠而冒ニ地之表一、則天公之名、蓋取ニ于此一」

【敗碁有ニ勝著一】 負け碁に反つて勝つ手あり。五代史に「勝者所レ用敗者之碁也、爲レ之易ニ置其處一而勝矣」

【敗軍將不レ可ニ以言レ勇】 負けいくさ。荀子、注に「北者

敗軍之將、不レ可ニ以言一勇、亡國之大夫、不レ可ニ以圖一存、今臣敗亡之處、何足ニ以權ニ大事一乎」

【敚】 テイ、チャウ。徒鼎切。迴。つく、つくす(盡)。

【敚】 コウ、クク。寇に同じ。

八畫

【敍】 ㊀タク、トク。竹角切。覺。 ㊁トク。丁木切。屋。 ㊂一うつ、たたく(擊)二なげうつ(擿) ㊃たたく聲。

【敝】 ヘイ、ハイ。毘祭切。霽。 一すつ(棄)二やぶる(敗)三つかる(罷)四おほふ、おほひ(蔽に通ず)五ひとはばぎれ(一幅巾)六つづれ。

【敝甲】 やぶれたるよろひ。史記に「我有二敝甲一、欲二以觀一中國之政一」

【敝衣】 やぶれたる著物。史記、范雎傳に「范雎聞レ之、爲二微行一、敝衣間步」

【敝邑】 わが國といふ謙辭。左傳に「衛告宋曰、君爲レ主、敝邑以レ賦從」

【敝鬼】 物をやぶる幽魂。後漢書に「生爲二惡吏一、死爲二敝鬼一」

【敝兵】 兵をそこなふ。戰國策に「敝レ兵勞レ衆、不レ足二以成一名」

【敝衲】 やぶれたる僧衣。長阿含經に「尊者迦葉著二敝衲一」

【敝屐】 やぶれたるはきもの。梅堯臣「閒穿二敝屐一登」

【敝族】 おとろへたる家がら。秦觀「豈惟一敝族之榮」

【敝帷】 やぶれたるとばり。禮記に「敝帷不レ棄、爲レ埋レ馬也」

【敝惡】 やぶれてきたなし。唐書に「主者不レ虔、祭器敝惡」

【敝箒】 鞭をそこなふ。王褒「庸人之御二駑馬一、傷レ吻敝レ策、而不レ進二于行一」

【敝箑】 やぶれたる竹かご。搜神記に「崔文子學二仙于王子喬一、子喬化爲二白鯢一、而持レ藥與二文子一、文子驚怪引レ戈擊レ鯢中レ之、因墮二其藥一、俯而視レ之、王子喬之尸也、置二之室中一、覆以二敝箑一、須臾化爲二大鳥一、翻然飛去」

【敝裘】 やぶれたるかはごろも。岑參「白髮悲二明鏡一、青春換二敝裘一」

【敝筥】 やぶれたるはこ。易林に「破箑敝筥、棄二捐于道一」

【敝蓋】 やぶれたる車のおほひ。禮記に「敝蓋不レ棄、爲レ埋レ狗也」

【敝縕】 やぶれたるどてら。崔融「蠶織休廢、敝縕闕如」

【敝褐】 やぶれたるぬのこ。郝經「東風吹二敝褐一、水氣撲二虛簷一」

【敝篋】 やぶれたるはこ。宋史、章鑑傳に「敝篋貯二一玉杯一」

【敝廬】 あばらや。己の家の謙辭。左傳に「杞梁之妻曰、有二先人之敝廬在一」

【敝蹤】 やぶれ草履。孟子に「舜視レ棄二天下一、猶レ棄二敝蹝一也」

【敝敝】 ヘイ。以智切。寘。 一あなどる(侮)二あらたむ(改)三よろこぶ(悅)四かろし(輕簡)。

【敝】 カン、コン。古覽切。感。 一あへてす二おかす(犯)三いさむ(勇)四あへて、あへて…せんや。

【敢決】 力つよくとりきむ。(果決)。

【敢直】 杜甫「壯夫思二敢決一、哀詔惜二精靈一」 勇しく思ひきりよく正し。唐書、段平仲傳に「朝廷有二得失一、未レ嘗不二論奏一、世推二其敢直一」

【敢戰】 心を決して劇しく戰ふ。五代史に「不二徒與一我同年一、其敢戰領レ我」

【敢毅】 おしきりてつよし。(果毅)。唐書、石雄傳に「敢毅善戰、氣蓋二軍中一」

【敢斷】 思ひきりよし。決斷よし。(剛斷、勇斷)。大戴禮に「誠立而敢斷」

【敢龍】 ひろくりっぱなり。洛陽伽藍記に「修梵寺北有二永和里一、里中皆高門峻屋、齋館敢龍」

【敷】 テン。多珍切。銑。 一つかさどる(主)二つれ(常)。 ザツ、ザチ。自曷切。曷。 ゆばり(尿)。

【敹】 ㊀タツ、タチ。都活切。曷。 ㊁セツ、セチ。七絕切。屑。

【敹】 ㊀一輕重をはかる(故敹)二食ふに喚ばずして自ら來る、又、食ふことおそし(敹敹) ㊁たつ(斷)。

【敺】 イ。以智切。寘。 一あなどる(侮)二あらたむ(改)三よろこぶ(悅)四かろし(輕簡)。

【敢】 カン、コン。古覽切。感。 一あへてす二おかす(犯)三いさむ(勇)四あへて、あへて…せんや。

【敢決】 力つよくとりきむ。(果決)。

【敢直】 杜甫「壯夫思二敢決一、哀詔惜二精靈一」 勇しく思ひきりよく正し。唐書、段平仲傳に「朝廷有二得失一、未レ嘗不二論奏一、世推二其敢直一」

【敢戰】 心を決して劇しく戰ふ。五代史に「不二徒與一我同年一、其敢戰領レ我」

【敢毅】 おしきりてつよし。(果毅)。唐書、石雄傳に「敢毅善戰、氣蓋二軍中一」

【敢斷】 思ひきりよし。決斷よし。(剛斷、勇斷)。大戴禮に「誠立而敢斷」

【敢爲】 他をかへりみずして行ふ。老子に「不二敢爲一天下先一」

【散】 ㊀サン。蘇旱切。旱。 ㊁相干切。寒。 ㊀一はなつ(放)二ちる、ちらす三ひま(閒暇)四しく(布)五あらく六むだ七ほしいまま八こぐすり、藥石の屑九琴の曲の名、廣陵散十漆ぬりの櫃 ㊂躡に同じ。

【散人】 世の用をなさざる人。世事をすててひまなる人。(閒人)。書言故事に「唐陸龜蒙以レ舟載二茶竈筆床釣具一、往二來江湖一、號二江湖散人一」

【散木】 用なき木。溫庭筠「散木無二斧斤一、纖莖得二依托一」

【散文】 字句の數、又韻などに制限なき普通の文。韻文の對。

【散布】 ちりしく。韓愈「攢生猶有レ隙、散布忽無レ垠」

【散究】 職務なくひまなり。王禹偁「平生好二泉石一、況復官二散究一」

【散在】 諸所にちらばりてあり。

【散地】 一無用の地。白居易「散地閒居少二禍胎一」二自國内にて戰爭する時は、兵士家を思ひて散逃し易し、之を散地といふ。史記に「兵法、諸侯戰二其地一爲二散地一」

【散吏】 閑散の官吏。于寶晉紀總論に「王彌者青州之散吏也」

【散材】 無用の木。やくにたたぬ人がら。陸游「社櫟終然幸二散材一」

【散志】 こころざしを他に馳す。禮記に「齊者不レ樂レ言、不二敢散一其志一也」

【散兵】 まばらに兵を配置す。隋書に「馬步隊與二軍中散兵一、交爲二兩番一、五日而代」

【散步】 さまよひあるく。そぞろあるき。金史に「散二步門外一、南望二高阜一」

【散芳】 かをりをちらす。謝靈運「淵轉レ渚而散レ芳」

【散花】 ちる花。又、花をちらす。陸游「釣レ魚散花洲」

【散插】 ちらしさしはさむ。王建「粟金腰帶象牙錐、散插紅領玉突枝」

【散員】 任務なき人數。又、その人。(閒員)。白居易「散員足レ庇レ身」

【散案】 ちりみだる。文心雕龍に「憲章散案、彝倫攸レ斁」

【散紛】 こなごなちらす。飛びちりたること。宗愨「散紛初成レ蝶、翦綵作二新梅一」

【散殊】 いろいろにことなり。禮記に「天高地下、萬物散殊、而禮制行焉」

【散陽】 冬時に陽氣の藏まらざるをいふ。國語に「天無二伏陰一、地無二散陽一」

【散液】 ちり解く。齊民要術に「下レ水十日、塊氐散液」

【散敗】 ちりくづる。ちらしくづす。南史に「彥之將レ回レ師、護之書諫、彥之不レ納、散敗而歸」

【散絲】 いとをちらす。ちらしたるいと。張協「密雨如二散絲一」

【散軼】 ちり失す。

【散策】 そぞろあるき。蘇軾「散策塵外遊、麾レ手謝二此世一」

【散絮】 わたをちらす。ちりたる綿。李建勳「狂酒玉壺初散レ絮」

【散逸】 一ちり失す。北史に「山東寇亂、學者散逸」二ひまなり。世事に關係せず。南史、梁忠烈世子方傳に「性愛二林泉一、好二散逸一」

【散意】 他方面に心をちらす。阮瑀「抱懷數年、未レ得レ散レ意」

【散亂】 ちりみだる。史記に「收二散亂之兵一、欲二以徑入一强秦一」

【散置】 ちらしおく。晉書に「輒散置」

【散盡】 大路一」

【散盡】 ちりつく。ちらしつくす。李白「散盡空掉レ臂」

【散慮】 心のうさをはらふ。隋書に「閑二魚鳥一以散レ慮」

【散籌】 竹くじをちらす。世說に「每與二夫人一燭下散レ籌算計」

【散齊】 七日閒のものいみ。禮記に「故散齊七日以定レ之」

【散漫】 とりとめなし。ちらばる。唐書、五行志に「朱全忠決二其堤一、因爲二河一、散二漫千餘里一」

【散僚】 下級の官吏。又、事務少き官

吏。舊唐書に「夫御二宰相一當レ委レ之信レ之親レ之禮レ之、如レ于レ事不レ効、于レ國無レ勞、則置二之散秩一、黜二之遠郡一」

【散樸】 かざりなき本來のきぢなうしなはしむ。吳均「三皇已散レ樸、五帝初尚レ賢」

【散樂】 野人の音樂。さるがく。周禮に「掌レ教レ舞二散樂一」

【散髮】 かみなちらす。 後漢書、袁閎傳に「閎終散レ髮絕レ世」

【散積】 たくはへなちらす。五代史に「勸二其散レ積以禳レ之」

【散錢】 ぜになちらす。晉書に「蒙遜升二南景門一、散レ錢以賜二百姓一」

【散儒】 卑賤の地位に在る儒者。又、束縛を受けざる儒者。荀子に「隆レ禮雖レ未レ明、法士也、不レ隆レ禮、雖二察辯一、散儒也」

【散賜】 わかちあたふ。漢書、儒林張山傳に「散二賜九族一、田畝不レ益」

【散職】 定まりたる職務なき官吏。白居易「散職無二拘束一」

【散擲】 ちらしなぐ。蘇軾「戲將二桃核一、裹二黃泥一、石間散擲如二風雨一」

【散離】 ちりはなる。 後漢書に「騶樸散離、人物錯乖」

【散釋】 ちりとく。後漢書に「神色自若、辭對無レ變、事遂散釋」

【散二鬱陶一】 うさなはらす。北夢瑣言に「小貂遊二隣寺一、以散二鬱陶一」

【敺】

ハウ、ヒャウ。普庚切。庚。うつ、たたく(擊)。

【敄】

クワ。苦果切。哿。
一みがく(研)二うつ(擊)。

【敉】

ビセウ。先了切。篠。
ビシャグ。尺約切。藥。
ビうつ(撲)ろとる、かすむ。
ビロク。盧谷切。屋。
ビリョク、ロク。力玉切。沃。
ビうつ(擊)ろうつ(擊)。

【敦】

ビトン、ドン。都昆切。元。
ビタイ、テ。都回切。厎。ビタン、タクリ、ドウ。大到切。號。ビシュン。主尹切。軫。ビトン、ドン。都困切。願。ビト
ン。杜本切。阮。
ビあつし(厚)
ビいかる(怒)ビとがむ(誰何)ビつらぬ(陳)ビつとむ(勉)ビなぜまる(迫)ビなげうつ(擲)十おほいなり(大)ろ一さだむ(斷)二なさむ(治)三獨處りて移らざる貌ビ一ろ
あつまりむらがる貌ビ一ろ(影)二ろがく(畫)ビおほひ(覆)ヘはば(幅)と一なか三たつ(竪)三くらし。ちくらし。

【敦化】 篤厚なるをしへ。又、篤厚の風に化す。中庸に「小德川流、大德敦化」

【敦至】 あつくつくす。後漢書、鄭均傳に「恩禮敦至」

【敦朴】 情あつくしてかざりなし。唐書に「以二敦朴一爲レ先、雕文爲レ後」

【敦牟】 黍稷を入るる器。禮記に「敦牟卮匜、非レ餕莫二敢用一」

【敦尙】 あつくたっとぶ。圖畫見聞志に「高麗國敦尙二文雅一、漸染二華風一」

【敦固】 あつくかたし。後漢書、吳良傳に「賞質敦固、公方廉恪」

【敦厲】 風俗あつし。左傳に「民生敦厲、和平只聽」

【敦忠】 心あつくしてまことあり。史記に「端直敦忠、事業有レ常」

【敦和】 あつくやはらぐ。禮記に「樂者敦和、率レ神而從レ天」

【敦勉】 あつくつとむ。史記に「安和敦勉、莫レ不レ順レ令」

【敦故】 舊知に情あつくす。白居易「蓬人益敦レ故」

【敦厚】 人情あつし。禮記に「溫柔敦厚詩教也」

【敦圉】 虎に似て小なる獸の名。淮南子、注に「豊廉獸名、長毛有レ翼、敦圉似レ虎而小」

【敦害】 大いなるわざはひ。漢書に「淺爲二尤悔一、深作二敦害一」

【敦悅】 あつくよろこぶ。後漢書に「執レ義賢固、敦悅二詩書一」

【敦崇】 あつくたっとぶ。晉書、載記に「墓客寶字通祐、垂之第四子也、少輕果無二志操一、及レ爲二太子一、砥礪自修、敦崇二儒學一、工二談論一、善屬レ文」

【敦琢】 選擇す。えらぶ。詩經に「有レ萋有レ且、敦二琢其旅一」

【敦圉】 いきまく。魏都賦に「白虎敦二圉乎崑崙一」

【敦雅】 質朴にしていやしからず。蜀志、樂竺傳に「竺雅容敦雅、而幹翮非レ所レ長、是以待レ之以二上賓之禮一」

【敦喻】 ねんごろにさとす。晉書に「宣旨優詔敦喻」

【敦睦】 あつくむつまし。宋史、竇儀傳に「太祖嘗謂二宰相一曰、竇儀質重嚴整有二家法一、閨門敦睦、人無二讒語一」

【敦業】 仕事に手あつくす。管子に「上惠二其道一、下敦二其業一」

【敦愿】 人情あつくしてすなほなり。史記に「政尙二忠樸一、猶有二先王之風一、潁川敦愿」

【敦槃】 黍稷を盛る器ととかきと。荀子に「斗斛敦槃者、所二以爲レ嗔也」

【敦悶】 丁寧にぎんみす。潘尼「留二精儒術一、敦二閱古訓一」

【敦樂】 あつく好む。後漢書に「退二壓山谷一、敦樂二詩書一」

【敦學】 あつく學ぶ。又、學にあつき人。蘇頲「用レ儒今作レ相、敦レ學舊爲レ師」

【敦篤】 てあつなり。後漢書に「感二時澆薄一、慕二尙敦篤一」

【敦穆】 人情あつくやはらぐ。王儉「仁經義緯、敦二穆于閨庭一」

【敲】

ビキ。居宜切。支。ろ去倚切。紙。
ビとるろかたたがひ。
エフ、オフ。於業切。葉。

【敵】

一つく、相著く二そむく、相反す。

九畫

【敬】

ケイ、キャウ。居慶切。敬。
一うやうやし(恭)二いましむ
三つつしむ、つつしみ(愼)四うやまふ、うやまひ。
【敬弔】 死者をうやまひ弔ふ。李德裕「臨レ風敬弔、願與レ神遊」
【敬止】 つつしみてとどまるべき所にとどまる。詩經に「穆穆文王、於緝熙敬止」
【敬白】 つつしみて申す。
【敬同】 君親に事ふるに敬意か同じくす。孝經に「資二於事一父以事レ君、而敬同」
【敬共】 つつしみうやまふ。左傳に「敬共朝夕」
【敬戒】 いましむ。左傳に「與二三子一生在二敬戒一、不レ在レ富也」
【敬身】 身を大切にす。禮記に「君子無レ不レ敬也、敬レ身爲レ大」
【敬忠】 尊敬し忠義をつくす。論語に「季康子問、使二民敬忠以勸一、如レ之何」
【敬承】 つつしみてうけつぐ。孟子に「啓賢能敬承二繼禹之道一」
【敬服】 うやまひ從ふ。搜神記に「百姓敬服、從者如レ歸」
【敬厚】 うやまひてあつくす。後漢書に「此眞儒生也、以レ是愈見二敬厚一」
【敬待】 うやまひあしらふ。(優待、禮待)。後漢書、杜根傳に「酒家知二其賢一、厚敬二待之一」
【敬昵】 うやまひしたしむ。北史に「竝敬二昵之一」
【敬重】 うやまひおもんず。
【敬若】 うやまひしたがふ。後漢書に「敬二若昊天一、以綏二兆人一」
【敬神】 かみをうやまふ。禮記に「夏道尊レ命、事鬼敬レ神、而遠レ之」
【敬虔】 つつしむ。つつしみ。皮日休「爲レ之加二敬虔一」
【敬恭】 つつしみうやうやし。詩經に「敬二恭明神一」
【敬挹】 たっとびうやまふ。南史、王慮之傳に「宗人江槩位至二侍中一、性豪侈、惟見レ軻(江軻)則敬挹焉」
【敬祭】 まつることをつつしみてす。史記に「吾甚重レ祠、而敬レ祭」
【敬終】 事の結末を全からしめんと心がく。禮記に「事レ君愼レ始、而敬レ終」

〔支部〕 敬敏敵敲敷敲敲敲

【敷】 ㊀フ、ホ。芳無切。虞。
㊁傅に同じ。
㊂一つらぬ、つらなる（陳）二しく（布）
二ほどこす（施）四ちらす（散）五あまれ
く（徧）六ひろく（廣）。
【敷弘】 しきひろむ。晉書に「出贊二衮
職一、敷二弘五教一」
【敷告】 あまねくつぐ。（布告、普告）。
晉書に「可レ敷二告天下一、使ム知二區區之朝
思一聞レ過也」
【敷枝】 ひろがれるえだ。神異記に「敷
枝一里餘」
【敷治】 まつりごとを布く。孟子に「舉
レ舜而敷治焉」
【敷衍】 しきのぶ。舊唐書に「掃二除沴
氣一、敷二衍德音一」
【敷政】 まつりごとをしく。詩經に
「敷レ政優優、百祿是遒」
【敷施】 しきほどこす。書經に「翕受敷
施」傳に「翕合也」
【敷奏】 敷は陳、奏は進なり、のべす
すむ。書經に「敷奏以レ言、明試以レ功」
【敷宣】 あまねくしめす。晉書に「敷二
宣五經一」
【敷教】 をしへをしく。書經に「敬敷二
五教一在レ寛」
【敷設】 しきまうく。かまへおく。
【敷揚】 のべあらはす。柳宗元「陛下
奉二率前規一、敷二揚盛典一」
【敷演】 しきのぶ。成公綏「分二賦物
理一、敷演無レ方」
【敷敷】 ひろくつらなる貌。韓愈「敷敷
花披レ蕚」
【敷暢】 しきのぶ。書經、序に「約レ文
申レ義、敷二暢厥旨一」
【敷贊】 のべたすく。宋書、劉穆之傳
に「翼二新王化一、敷二贊百揆一」
【敲】 ハウ、ヘウ。匹交切。肴。
㊀シュ、ス。爽主切。虞。㊁ス。色
句切。遇。㊂サク、ソク。色角切。
㊃ソク。蘇谷切。屋。㊄ショク、ソク。
㊅スウ。慣用音。
【數】 ㊀ソク。蘇谷切。屋。㊁ショク、ソク。
趨玉切。沃。㊂スウ。慣用音。
㊃一かぞふ（算）二はかる（計）三しら
ぶ（閱）四せむ（責）五數ふべき程の、若
干の㊅一かず二量をつもるに用ゐる記
號三しな（差異）四まはりあはせ（運命）
五ことわり（條理）六ありさま（情勢）
七わざ（技術）八ばかりごと（謀略）九算
術㊆一しばしば二ちかし（近）三はやし
（疾）四せまる（促）五うながす六せはし、
わづらはしく汲汲）㊇一せまる（迫）二す
みやかなり（速）五こまかし（細密）。
【數口】 五六人。孟子に「數口之家可二
以無レ飢矣」
【數白】 しばしば申しあぐ。漢書に
「往者數白、三光垂レ象、變動見レ端」
【數四】 度「斷蓬之風數四」
【數行】 ㊀いくすぢ。柳宗元「今來數
行淚」二ギヤウ。五六行。羊士諤「蜀國魚牋
數行字」
【數汎】 しばしばうかぶ。荀濟「數汎二
明月沼一、頻遊二向日灣一」
【數百】 二三百より五六百までの間
なおほよそといふ數。史記に「卒二萬
人、騎數百」
【數奇】 ふしあはせ。史記、李將軍傳
に「以爲李廣老數奇、毋レ令レ當二單于一、恐
不レ得レ所レ欲」
【數罟】 目のこまかきあみ。孟子に
「數罟不レ入二洿池一」
【數家】 ㊀五六軒の家。劉長卿「苦封
三徑絶、溪向二數家一通」二術數を修めた
る者。漢書、注に「數家術數之家也」
【數珠】 梵語にて、鉢塞莫、又、哆陀婆
羅密多印といふ。ずず。（念珠）。釋氏要
覽に「牟梨曼陀羅呪經云、梵語鉢塞莫、
梁云二數珠一、此乃是引二接下根一、牽二課修
業一之具也」
【數術】 はかりごと。蜀志、陳祗傳に
「多二技藝一、挾二數術一」
【數戰】 たびたびたたかふ。韓詩外傳
に「數戰則民疲」
【數斟】 しばしばくむ。五六杯。陶潛
「班荊松樹下、數斟已復醉」
【數器】 權衡（ハカリ）。周禮、注に「同二其
數器一、使三權衡之輕重無二異同一也」
【數噍】 たびたびかむ。禮記に「數噍
毋レ爲二口容一」
【數窮】 しばしばくるしむ。老子に
「多言數窮、不レ如守レ中」
【數興】 しばしばおこる。後漢書に
「征二伐遠方一、軍役數興」
【數數】 ㊀いそがはしき貌。莊子に
「彼其於レ世未三數數然一也」二たびたび。
白居易「乘レ閒數數來相訪」
【數レ米而炊】 瓊末の事にこせ
つくないふ。莊子に「簡レ髮而櫛、數レ米
而炊」

【敺】 ク、コ。驅の古文字。

十二畫

【敻】 キフ、コフ。迄及切。緝。
うつ（擊）。
【敺】 ラン、ロン。盧玩切。翰。
㊀みだる（亂）二わづらふ（煩）
三おこたる（惰）。
【敲】 ケウ。居夭切。蕭。
㊀つらぬ（連）二つながる（繫）
三たて（盾）。
【敵】 セン、ゼン。時戰切。霰。
㊀おぎなふ（補）二なさむ（治）。
セイ、シャウ。之郢切。梗。
㊀ひとしくす（齊）二ととのふ
三なさむ（理）。
說文に「齊なり、攴に从ひ、束に从ひ、正
に从ふ」注に「之を束ね、又、少しく之を
擊ちて正しからしむるなり」
【整比】 ととのへならぶ。唐書に「使ム
與二緒元一整比ム」
【整民】 人民をして秩序あらしむ。左
傳に「夫禮所二以整一民」
【整列】 正しくならぶ。左傳に「建鼓
整列、二臣死レ之」
【整武】 いくさの備へをととのふ。楊
戲「受二遺阿衡一、整二武齊一文」
【整峻】 正しくして高し。（方峻）。北
史に「學涉二經史一、風儀整峻」
【整涼】 すすしくす。
【整笏】 しゃくを正しく持つ。謝朓
「整レ笏侍二升平之禮一」
【整旅】 軍勢をそろふ。高思元「敦陣
整レ旅、必務成レ師」
【整陣】 軍のせいぞろへ。
【整理】 正しくをさめととのふ。左
傳、疏に「整二理天下之民一」
【整然】 ととのへる貌。
【整頓】 ととのふ。又、ととのへるこ
と。水經、注に「北有二雙石闕一甚整頓」
【整暖】 あたたかくす。
【整齊】 正しくそろふ。（齊整）。呂覽
に「行陣整齊」
【整齋】 ととのふ。晉書、何曾傳に
「曾性至孝、閨門整肅、自レ少及レ長、無二
聲樂嬖幸之好一」
【整穀】 ととのひ正しくしてつよし。
唐書、范希朝傳に「以二戰守功一、累兼二御
史中丞一、治レ軍整穀」
【整整】 正しくととのへる貌。宣和書
譜に「宋綬嘗爲二小字一、正書、整整可レ觀」
【整鼎】 正しくおごそかなり。（方鼎、
端鼎）。宋史、曹琮傳に「琮小心謹畏、御
レ軍整鼎」

十三畫

【斁】 ㊀タク、トク。竹角切。覺。
㊁トク、ドク。都木切。屋。
㊂ショク、ソク。朱欲切。沃。
㊃陰を去る刑㊄うつ（擊）。
【斁】 ㊀エキ、ヤク。羊益切。陌。
㊁ト、ヅ。當故切。遇。
㊂一いとふ（厭）二をはる（終）三あきら
か（明）四さかんなり（盛）㊅一ぬる（塗）
二やぶる（殯に同じ、敗）。
【斂】 レン。良冉切。琰。
㊀とる（取）一をさむ（收）三あ
つむ（聚）四しまる（管束）。
韻會に「斂に作るは非なり」
【斂手】 手を出さず。しわざをやむ。
後漢書、鮑永傳に「世祖曰、貴戚且斂レ手
以遏二二鮑一」
【斂去】 手ををさめて去る。宋史、何

〔支部〕 斂 斂 斃 斂 斂 斂

【文畝】（ブンポ）紙の異名。

【文馬】（ブンバ）裝飾せるうま。史記に「兵車百乘、文馬四百匹」

【文豹】（ブンペウ）斑文のある豹。後漢書に「國多二文豹一」

【文脈】（ブンミヤク）文章上に貫ぬけるすぢみち。

【文祖】（ブンソ）陶堯の始祖。書經に「受二終于文祖一」注に「文祖者堯始祖之廟」

【文弱】（ブンジヤク）おとなしくしてよわし。世說に「士龍爲レ人、文弱可レ愛」

【文酒】（ブンシユ）文を作り酒を酌む。南史、江革傳に「革性強直、爲二權貴所レ疾、謝レ病還レ家、除二光祿大夫一、優游閒放、以二文酒一自娛」

【文囿】（ブンユウ）文學をまなぶところ。駱賓王「馳二文囿一以遊レ魂」

【文書】（ブンショ）かきもの。漢書に「文書盈二于几閣一、典者不レ能二徧睹一」

【文陣】（ブンヂン）文學者の社會。玉堂遺事に「張九齡爲二文陣雄帥一」

【文庫】（ブンコ）書籍を納めおくくら。又、筆紙などを入れおく手箱。宋史に「金耀門有二文庫一、藏二三司帳簿一」

【文格】（ブンカク）文章のしながら。于頔「深論二窮文格一」

【文魚】（ブンギヨ）あやあるうを。山海經に「睢水其中多二文魚一」

【文章】（ブンシヤウ）㊀あや。史記に「刻二鏤文章一、所二以養一目也」㊁のり。禮記に「近二文章一」㊂文字を以て思想を發表するもの。漢書に「文章則司馬遷相如」文學のをしへ。晉書に「三百里擠二文敎一」

【文敎】（ブンケウ）あやあるくみひも。阮籍大人先生傳に「挾二金玉一、垂二文組一」

【文組】（ブンソ）木目あるあづさ。史記に「文梓爲レ槨」

【文梓】（ブンシ）文章を集めたる書物。白居易「摩架多二文集一、偶取二一卷一披」

【文集】（ブンシフ）文明の光華。後漢書に「敷二文華一、以緯二國典一」

【文華】（ブンクワ）學問上の用意。史記に「有二武事一者、必有二文備一」

【文備】（ブンビ）あやある犀角。後漢書、馬援傳に「援征二交趾一、載二薏苡一歸、人以爲二明珠文犀一」

【文犀】（ブンサイ）文章にひいでたる人。唐明皇「既調二鼎鼎一、又擅二雕龍一、有レ典有レ則、是爲二文雄一」

【文雄】（ブンユウ）文士なかまのかしら。鍾嶸「平原兄弟、鬱爲二文棟一」

【文棟】（ブントウ）官吏を登用する試驗場。劉孝綽「義府文場、詞人髦士」

【文場】（ブンヂヤウ）文章に關するはなし。

【文話】（ブンワ）みやびやかなり。風流。吳志に「乾德博好、文雅是貴」

【文雅】（ブンガ）文章の意味。元史に「操筆立就、文意蒼古」

【文意】（ブンイ）文學の運命。袁桷「清寧閣二文運一、鬱二彼古帝都一」

【文運】（ブンウン）文學に關するつどひ。南史に「文會之盛、當時莫レ比」

【文會】（ブンクワイ）詩文書畫などのわざ。史記に「使二刀筆之吏弄二文墨一」

【文墨】（ブンボク）羽毛にあやある鳥。應璩「文禽戲二綠水一」

【文禽】（ブンキン）文章の意味。南史、陸澄傳に「讀レ易三年、不レ解二文義一」

【文義】（ブンギ）あやあるとばり。袁宏「文幌曜二瓊扇一」

【文幌】（ブンクワウ）文章にひいでたる人。宋名臣言行錄に「眞一代之文豪也」

【文豪】（ブンガウ）かざり。宋史に「言無二文飾一、洞二見肝膈一」

【文飾】（ブンショク）あやある印の紐。虞世南「帶二文綬一而旁垂」

【文綬】（ブンジユ）あや。古詩に「文綵雙鴛鴦」

【文綵】（ブンサイ）文字とことばと。論衡に「故其文語與レ俗不レ通」

【文語】（ブンゴ）あやあるねりぎぬ。喬知之「平砧搗二文練一」

【文練】（ブンレン）あやぎぬ。唐書に「河南府河南郡土、貢二文綾繪穀絲葛一」

【文綾】（ブンリヨウ）かざりをつく。吳志に「美貌者、不レ待二華采一、以崇レ好、艷姿者、不レ待二文綺一、以致レ愛」

【文綺】（ブンキ）おきて。法律。史記に「漢興有二朱家田仲王公劇孟郭解之徒一、雖二時扞二當世之文網一、然其私義廉潔退讓、有二足レ稱者一」

【文網】（ブンモウ）

【文蔡】（ブンキ）あやあるくつひも。楊維楨「曰大聖之所レ履、豈遠異二夫文蔡一」

【文榱】（ブンスヰ）紋あるたるき。七啓に「彤軒紫柱、文榱華梁」

【文箴】（ブンシン）作文につきてのいましめ。唐詩記事に「李德裕嘗爲二文箴一」

【文樂】（ブンガク）文道の音樂。武樂の對。公羊傳に「婦人無二武事一、獨奏二文樂一」

【文穀】（ブンコク）あやあるうすぎぬ。曹植「被二文穀之華袿一」

【文駟】（ブンシ）うつくしき四馬。顏延之「文駟列二乎華廐一」

【文學】（ブンガク）㊀あらゆる學問の總稱。史記、灌夫傳に「夫不レ喜二文學一、好二任俠一」㊁詩歌・文章等に關する學問。

【文錦】（ブンキン）あやあるにしき。淮南子に「管子文錦也」

【文龜】（ブンキ）模樣あるかめ。爾雅に「五曰二文龜一」

【文誄】（ブンダン）文章に關するはなし。

【文儒】（ブンジユ）文才に長けたる學者。晉書に「逮二于孝武一、崇二尚文儒一」

【文壇】（ブンダン）文學者の社會。

【文檄】（ブンゲキ）ふれぶみ。晉書、劉超傳に「專掌二文檄一」

【文翰】（ブンカン）かきもの。文書。王禹偁「兩朝掌二文翰一、十年侍二晃旒一」

【文燭】（ブンショク）〔燼〕なんてんしょくの異名。

【文繁】（ブンハン）かざり多し。後漢書に「文繁者實荒」

【文憲】（ブンケン）がくもん。崇靖「多才之英、篤藝之彥、役レ心精微、耽二此文憲一」

【文聲】（ブンセイ）文を作るに巧なるほまれ。宋史、孔文仲傳に「文仲與二弟武仲、平仲一皆以文聲一起、江西時號二三孔一」

【文織】（ブンシヨク）あやあるおりもの。周禮に「凡王之獻、金玉兵器文織良貨賄之物、受而藏レ之」

【文繒】（ブンシヨウ）あやあるきぬ。說文に「綺、文繒也」

【文繒】（ブンシヨウ）文學上のわざ。中論に「盛德之士、文藝必衆」

【文藝】（ブンゲイ）文章のしるし。禮記、序に「文章詳悉、義理精審」

【文證】（ブンショウ）かきもの。迴賢「文牘日冗繁、民力愈疲竭」

【文牘】（ブントク）書物。書經に「由レ是文籍生焉」

【文籍】（ブンセキ）文章のことば。唐書に「劉知幾與二兄知柔一、並以レ善二文辭一、知レ名」

【文辭】（ブンシ）かきもの。晉書に「文簿盈積」

【文簿】（ブンボ）あやのぬひとり。孟子に「所二以不レ願一人之文繡一也」

【文繡】（ブンシウ）文章。あや。唐書に「有二文藻智數一」

【文藻】（ブンサウ）日・月・星辰の類。晉書に「文曜麗二乎天一」

【文曜】（ブンエウ）うつくしきひかり。劉陶「瞰二三光之文耀一、視二山河之分流一」

【文鷁】（ブンゲキ）天子の遊樂に用ゐるふね。子虛賦に「游二於清池一、浮二文鷁一」

【文辯】（ブンベン）文章と辯說と。淮南子に「治レ國有レ理、不レ在二文辯一」

【文譽】（ブンヨ）作文に巧なるほまれ。宋史、陳宜中傳に「少甚貧而性特俊拔、既入二大學一、有二文譽一」

【文體】（ブンタイ）文章のすがた。隋書に「世有二澆淳一、時移二治亂一、文體三變、邪正或殊」

【文字飲】（モンジイン）詩文の會をなして酒を飲む。韓愈「不レ解文字飲、惟能醉二紅裙一」

【文武勳】（ブンブノクン）政を施し及び戰をなすいさを。蔡邕「昭二公文武之勳一焉」

【文法吏】（ブンパフノリ）法規に精通せる吏。漢書、元帝紀に「宣帝所レ用多二文法吏一、以二刑名一繩レ下」

【文無害】（ブンガイ）刑法を用ゐて人を害する所なきないふ。史記、蕭相國世家に「以二文無害一、爲二沛主吏掾一」

【文人相輕】（ブンジンアヒカロンズ）文章家は互に相輕んじあなどる。典論に「文士相輕、自レ古而然」

【文不レ加レ點】（ブンフカテン）文を作りて全く美なるをいふ。摭言に「李白在二翰林一、詔草二白蓮花序及宮詞一、方大醉中、貴人以レ水沃レ之、稍醒索レ筆、文不レ加レ點」

【文王之囿】ブンワウノイウ 周の文王の動物を畜へる園。孟子に「文王之囿、方七十里」

【文行忠信】ブンコウチウシン 文藝、行狀、道に親切なり、言行違はず、この四つは孔子の人を教へし道。論語に「子以レ四教、文行忠信」

【文如ニ春華一】ブンハシユンクワノゴトシ 文詞のはなやかなるをいふ。曹植「文如ニ春華一、思若ニ湧泉一」

【文武兩道】ブンブリヤウダウ 文と武との二道。李義山集に「貴ニ忠孝之兩全一、則忠可レ移レ孝、正ニ文武之二道一、則武可レ輔レ文」

【文武兼備】ブンブケンビ 文と武とを兼ね備ふ。唐書、裴行儉傳に「帝曰、行儉提ニ孤軍一、深入ニ萬里一、兵不レ血レ刃、而叛黨禽夷、可レ謂ニ文武兼備一矣」

【文恬武嬉】ブンテンブキ 文官も武官も安逸にふけりて禍亂の起るを知らざる意。韓愈「相臣將臣、文恬武嬉」

【文章絶唱】ブンシヤウノビツシヤウ 世に稀なる名文をいふ。鶴林玉露に「太史公伯夷傳、蘇東坡赤壁賦、文章絶唱也」

【文章宿老】ブンシヤウノシユクラウ 文章界に於ける老大家。唐書に「李嶠富ニ才思一、然其仕前與ニ王勃、楊盈川一接、中與ニ崔融、蘇味道一齊レ名、晚諸人沒、而爲ニ文章宿老一、一時學者取レ法焉」

【文章四友】ブンシヤウシユウ 崔嶠・崔融・蘇味道・杜審言をいふ。

【文過】其實】ブンクワソノジツ 文飾すること實地に過ぎたり。後漢書、馮衍傳に「以ニ文過ニ其實一、遂駿ニ於家一」

【文場元帥】ブンヂヤウノゲンスイ 文壇の驍將。事文類聚に「唐張九齡號ニ詞人之冠一、又號ニ文場元帥一」

【文獻不レ足】ブンケンフソク 徵證すべき典籍と賢者とに乏し。論語に「子曰、夏禮吾能言レ之、宋不レ足レ徵也、殷禮吾能言レ之、宋不レ足レ徵也、文獻不レ足故也、足則吾能徵レ之矣」

【文質彬彬】ブンシツヒンピン あやときちと雜りて均しき貌。論語に「文質彬彬、然後君子」

【文章一小技】ブンシヤウイツセウギ 文章は一小技藝なり。これは杜甫が激する處ありて作りし句なりと傳ふ。杜甫「文章一小技、於レ道未レ爲レ尊」

【文陣之雄師】ブンヂンノユウシ 文章の大家。唐書、蘇頲傳に「張九齡嘗覽ニ頲文卷一、謂ニ同列一曰、蘇生之俊贍無レ敵、眞文陣之雄師也」

【文臣不レ愛レ錢】ブンシンフアイセズ 文臣金錢を貯ふる者を愛せず。宋史に「或問ニ岳飛一、天下何時太平、飛答曰、文臣不レ愛レ錢、武臣不レ惜レ死、則天下平矣」

【文選爛秀才半】モンゼンタレシウサイハンナリ 宋代に、科擧の士、競ひて四六駢儷の文を學び、文選一部を爛熟せば試驗に及第し、秀才となるべき資格の半分を得たりとの意。老學庵筆記に「國初尚ニ文選一、當時文人專ニ意此書一、故草必稱ニ王孫一、梅必稱ニ驛使一、月必稱ニ望舒一、山水必稱ニ清暉一、至ニ慶曆後一、悪ニ其陳腐一、諸作者始一ニ洗之一、方ニ其盛時一、士子至ニ爲レ之語曰ニ文選爛秀才半一、建炎以來尚ニ蘇氏文章一、學者翕然從レ之、而蜀士尤盛、亦有レ語曰、蘇文熟喫ニ羊肉一、蘇文生喫ニ菜羹一」

【文者貫レ道之器也】ブンハミチヲツラヌクノキナリ 文章は人たる道を載せて、永遠につらぬくうつはなり。李華の崔孝公文集序に見ゆ。

【文章經國之大業】ブンシヤウケイコクノタイゲフ 文章は國家をなさむる一大事業なり。典論に「文章經國之大業、不朽之盛事、年壽有レ時而盡、榮樂止ニ於其身一、二者必至之常期、未レ若ニ文章之無レ窮」

【文籍雖レ滿レ腹不レ如ニ一囊錢一】ブンセキハラユミテトウセンニシカズ 學問に長ずとも、之を實行せざれば、囊中の錢にも及ばず。後漢書、趙壹傳に「河清不レ可レ俟、人命不レ可レ延、順レ風激ニ靡草一、富貴者稱レ賢、文籍雖レ滿レ腹、不レ如ニ一囊錢一、伊優北堂上、抗辭倚ニ門邊一」

六 畫

【敃】ハン、ヘン。遣閑切。刪。まだら。

【攽】ビ。徵に通ず。

〔文部〕 斉 斌 斐 斑 編 斕 敗 斃 斃 斃

食む者、卽ち、賤吏の稱。戰國策に「邑中自二斗食以上一、至二尉內吏一」

【斗室】 せまきへや。黃中堅「斗室何來豹脚蚊、殷如二雷鼓一、聚如レ雲」

【斗酒】 一斗のさけ。張說「斗酒跕二朋愛一、蝴蝶出二御溝一」

【斗栱】 柱上のますがた。爾雅に「枅一名レ欂、卽櫨也、皆謂二斗栱一也」

【斗斛】 量の名。ます。管子に「衡石也斗斛也」

【斗帳】 ちひさきとばり。釋名に「小帳曰二斗帳一」

【斗桶】 十升を盛る器。史記に「平二斗桶權衡丈尺一行レ之」

【斗量】 ますにてはかる。吳書に「趙咨使レ魏、文帝善レ之曰、吳如二大夫一者幾人、咨曰、聰明特達者八九十人、如二臣之比一、車載斗量、不レ可二勝數一」

【斗絕】 かけはなる。後漢書に「河西斗絕、在二羌胡中一」

【斗檐】 よりかかりなきこしかけ。

【斗筲】 一竹にて作り飯米など盛る器。二俸祿の少きにいふ。後漢書に「大丈夫焉能處二斗筲之役一乎」三人の器量のちひさきにいふ。論語に「斗筲之人、何足レ算也」

【斗祿】 すこしのふち。歐陽修「試問塵埃勒二斗祿一」

【斗綱】 北斗の第一・第三・第七の三星。漢書に「斗綱之端、連二貫營室一」

【斗箕】 二十八宿の二つの星の名。爾雅に「斗箕之間漢津也」 ますとばかりと。淮南子に「令二官市一、同二度量一、鈞二衡石一、角二斗稱一、端二權槩一」

【斗櫳】 わづかの兵糧の義。戰國策に「不レ費二斗糧一、不レ煩二一兵一」

【斗筵】 けはしくそばだつ。水經、注に「二壁爭レ高、斗筵相亂」

【斗鷄】 時計、もと鷄の形を作りて時刻をしらしめたるに起る。

【斗毫】 たちまちおほゆ。韓愈「吟二君詩一、罷看二雙鬢一、斗覺霜毛一半加」

【斗儲】 すこしのたくはへ。左思「內顧無二斗儲一」

【斗膽】 一斗大のきも。廣き度胸。胡曾「推二葛亮之心一、負二姜維之斗膽一」

【斗升活】 少しばかりの惠を以てのすくひ。莊子に「我東海之波臣也、君豈有二斗升之水一而活レ我哉」

【斗南一人】 天下第一の賢才といふ意。唐書、狄仁傑傳に「蘭仁基曰、狄公之賢、北斗以南一人而已矣」

【斗折蛇行】 北斗星の折れ曲れるが如く、蛇の行くが如き狀。柳宗元「潭西南而望、斗折蛇行、明滅可レ見」

【斗】 三畫

トウ、ツ。斗の本字。

【斗】 三畫

ショウ。識蒸切。蒸。のぼる、のぼす(登)。

【斗】 四畫

カツ、ケチ。訖點切。點。はかる(量)。

【斗】 五畫

ハン。博幔切。翰。わく、物を量りて半に分つ。シン。斟に同じ。

【斗】 六畫

コク。烏八切。點。斛に同じ。

【斗】

ワツ、ワチ。烏括切。曷。

【斗】

クワツ、クワチ。呼括切。曷。とる(掐に同じ、取)。くむ(抒)。レウ。落蕭切。蕭。

【料】

一かず二かぞふ(數)三なさむ(理)四はかる(量)五かんがへはかる(度)六とりもつ(持)七ふりつづみ(小鼓)八しろ(材質)九あてがひ(給與物)。

【料力】 ちからをはかる。史記に「勾踐頓首再拜曰、孤嘗不レ料レ力、以與レ吳戰、困二於會稽一、痛入二于骨髓一」

【料峭】 春風の肌寒く感ぜらるるさま。蘇軾「東風料峭羊角轉」

【料得】 おしはかる。杜甫「蒼天變化誰料得」

【料揀】 ばかりえらぶ。韓愈「婦孃恣料揀、兒癡謁盡髮」

【料量】 ますにてはかる。史記、孔子世家に「及レ長爲二委吏一、料量平」

【料理】 一事をばかりなさむ。晉書、王徽之傳に「桓沖謂曰、卿在レ府日久、比當二相料理一」二我國にて、食物を割烹するにいふ。

【料簡】 一はかりえらぶ。蔡邕「沙汰虛究、料二簡眞實一」二我國の俗語にて、意見、又は宥恕の意に用ゐる。

【斛】

カフ、ケフ。苦洽切。洽。いる(入)。トウ、ツ。當口切。有。ひしゃく。

【斛】 七畫

コク。胡谷切。屋。一量目の名、斗の十倍二こくます、ますめ。

【斜】

ヤシャ、セ。徐嗟切。麻。ヤ、エ。余遮切。麻。一ちる(散)二くむ(抒)三ななめに四ななめなりゐ谷の名。

【斜月】 かたむけるつき。子夜歌に「斜月飛二光照一」 ゆふひ。(夕日)。虞世南「綠野明二斜日一、青山淡二晚煙一」

【斜雨】 ななめにふるあめ。林逋「細風斜雨不レ堪レ聽」

【斜插】 ななめにさしはさむ。白居易「水邊斜插一漁竿」

【斜斜】 一正しからざる貌。杜牧「整整復斜斜」二雨雪などのふる貌。劉克莊「曉風細細雨斜斜」三月かげなどの斜にさす貌。蘇軾「窺レ戶月斜斜」

【斜徑】 ななめなるこみち。元行恭「草深斜徑沒、水盡曲池空」

【斜視】 ななめに見る。何遜「托二斜視于遺響一」

【斜貫】 ななめにうがつ。北戶錄に「斜二貫一溪一」

【斜欹】 かたむく。(傾欹)。杜甫「舟楫任二斜欹一」

【斜陽】 ゆふひ。(夕陽)。劉滄「雁叫斜陽一背塞レ雲」

【斜暉】 ゆふぐれのひかり。(晚暉、夕暉)。徐陵「岸水帶二斜暉一」

【斜傾】 かたぶく。(傾斜)。溫庭筠「流水斜傾出二武關一」

【斜漢】 天の河。李嘉祐「斜漢初過レ斗、寒雪正護レ霜」

【斜據】 ななめによる。王延壽「枝掌二杈枒一而斜據」

【斜榮】 ななめにまつはる。梁簡文帝「錦幾復斜榮」

【斜對】 ななめに相向ふ。

【斜影】 ななめなるかげ。王僧孺「翠枝結二斜影一」

【斜豎】 ななめに立つ。梁簡文帝「石砌危橫、崖階斜豎」

【斜窺】 ななめにうかがふ。向子諲「斜窺秋水長、軟語春靄近」

【斜縮】 ななめにちぢむ。晉書、石勒載記に「從事中郎劉奧坐レ營二建極殿一、井木斜縮、斬二于殿中一」

【斜瞻】 ななめに見る。劉峻「前望蒼龍門、斜瞻白鶴館」

【斜蠹】 ななめにあがる。孫覿「樓高斜蠹酒旗風」

【斜】 八畫

カ、ケ。古雅切。馬。たまのさかづき(玉爵)。

【斟】 九畫

シン。職深切。侵。一ます(益)二はかる(計)三くむ(勺)四とる(取)。

【斟酌】 くみはかる。國語に「後王斟酌焉」

【斟慥】 ためらふ。うたがふ。後漢書に「志斟慥而不レ澹」

〔斗部〕斛斟斡斟斛斟斟斟斛斟斟斛斟斟斛

樹木をきる。禮記に「樹木方盛、乃命二虞人一、入レ山行レ木、毋レ有二斬伐一」

【斬決】ザンケツ きりやぶる。 揚雄「秦作二無道一、斬二決天紀一」

【斬毒】ザンドク きりそこなふ。宋書に「執レ藥隨レ視非二情味一、于甘苦一、揮レ斤斬レ毒、豈忘レ痛二于肌膚一」

【斬斫】ザンシヤク きる。晉書に「便皆斬斫」

【斬殺】ザンサツ 敵のかうべをきる。宋史、徽宗紀に「詔、西邊用レ兵能招二納羌人一者、與二斬級一同レ賞」

【斬衰】ザンサイ 喪服。縫はざるを斬といふ。禮記に「斬衰括レ髮以レ麻」

【斬首】ザンシユ くびをきる。

【斬新】ザンシン あたらし。この語は唐人の方言なりといふ。洛浦禪師「斬新日月、特地乾坤」

【斬罪】ザンザイ くびきりの刑。

【斬斷】ザンダン きりたつ。杜甫「天兵斬斷青海戎、殺氣南行動二坤軸一」

【斬馘】ザンクワツ くびきる。陸游「被レ堅執レ銳提レ戈斬馘」

【斬馬劍】ザンバケン 馬をきるするどきつるぎ。漢書に「朱雲曰、臣願賜二尚方斬馬劍一、斷二佞臣一人頭一、以厲二其餘一」

【斬刻哀】ザンエツ 喪中のかなしみ。禮記に「三年之喪如レ斬、期之喪如レ刻」

【斬蛇劍】ザンダ 漢の高祖が蛇をきりし名劍。西京雜記に「高祖斬二白蛇一劍、十二年一加二磨瑩一、刃上常若二霜雪一」

【斬將搴旗】ハツシヤウケンキ 敵將をきり、ころして旗をさしあぐ。李陵「斬レ將搴レ旗、追レ奔逐レ北」

【斬將刈旗】ハツシヤウガイキ 敵將をきり、敵の旗をきり倒す。史記、項羽紀に「爲二諸君一讓レ圍、斬レ將刈レ旗、令二諸君知一二天亡レ我非二戰之罪一也」

【斷】ダン、ダン。斷の俗字。

八畫

【斫】タク、トク。斲に同じ。

【斗】サク、ソク。側角切。覺。

【斯】一たつ(斷)二きる(斬)三けづる(削)。シ。息移切。支。一この、これ、ここ(此)二すなはち(卽)三さく(析)四しろし(白)五いやし(賤)六かく七これ、ここに(句調を助くるに用ゐる字)八無意味の助字九かしらづつみ(纏に通ず)。

【斯文】シブン この道。又、この學。論語に「天之將レ喪二斯文一也、後死者不レ得レ與二於斯文一也」

【斯民】シミン このたみ。孟子に「子將ァ以二斯道一覺二斯民一也」

【斯界】シカイ この道。

【斯須】シシユ しばらく。禮記に「禮樂不レ可二斯須去一レ身」

【斯道】シダウ 一仁義の道。論語に「子曰、誰能出不レ由レ戶、何莫レ由二斯道一也」二轉じて、その奉ずる道にもいふ。

【斯人而有二斯疾一】コノヒトニシテシツアリ 深くその病に罹りしを惜むにいふ。論語に「伯牛有レ疾、子問レ之、自レ牖執二其手一曰、亡レ之命矣夫、斯人也而有二斯疾一也、斯人也而有二斯疾一也」

【斫】キ。剞に同じ。

【斬】サン、セン。剗に同じ。

九畫

【新】シン。息鄰切。眞。一はじめ(初)二あたらし三あらたにす四あたらしきもの五開墾より二年目の田畝の稱六木を取る。

【新水】シンスイ あたらしきみづ。李孝光「雪消新水鴨頭綠」

【新方】シンハウ あたらしきしかた。耿湋「老醫逃二舊疾一、朽藥誤二新方一」

【新戶】シンコ あたらしき世帶もち。北史に「詔給二內徙新戶耕牛一、計レ口受レ田」

【新民】シンミン 日に改進する教を民に施して面目をあらたにせしむ。大學に「康誥曰、作二新民一」

【新田】シンデン あらたにひらきたる田。韻會に「田一歲曰レ菑、二歲曰レ畬、三歲曰二新田一、四歲則曰レ田」

【新立】シンリフ あらたに位につく。左傳「魯公新立、鄰國及レ時來朝」

【新式】シンシキ あたらしきかた。又、あたらしき法式。北史に「不レ依二新式一者、悉追二停之一」

【新年】シンネン あらたなるとし。後漢書に「太史令一人、掌二天時景曆一、凡歲將レ終、奏二新年曆一」

【新竹】シンチク ことしだけ。わかたけ。司空圖「數竿新竹當レ軒上」

【新曲】シンキヨク あらたに作りたる樂のふし。魏文帝「絃歌奏二新曲一」

【新衣】シンイ あたらしきもの。古辭に「新衣誰當補、故衣誰當レ綻」

【新任】シンニン あらたに官に任ぜらる。

【新米】シンマイ その年出來たるこめ。北史に「人有ァ餉二新米一斛一者ァ」

【新妝】シンサウ 今なしたるけしやう。杜甫「借問漢宮誰得レ似、可レ憐飛燕倚二新妝一」

【新剏】シンサウ あらたにはじめつくる。沈亞之「新二剏山亭一、置二石壇一」

【新知】シンチ あたらしきしりびと。顏眞卿「新知綢座笑相視」

【新味】シンミ はつもの。王灣「新味瓜初剖」

【新柔】シンジユ あらたに出でたる草木の芽。孟郊「野蔬拾二新柔一」

【新柯】シンカ あたらしきえだ。劉基「新柯荏苒舊柯壯」

【新苦】シンク あたらしきこけ。李德裕「松逕長二新苦一」

【新律】シンリツ あらたにつくられたるおきて。北史、周高祖紀に「保定三年二月庚子、初頒二新律一」

【新奇】シンキ あたらしくめづらし。宋史、張嶷傳に「上疏進レ言者多矣、今皆以爲二陳腐一、而別取二新奇之說一」

【新建】シンケン あらたにたつ。後漢書に「時許都新建、賢士大夫、四方來集」

【新胎】シンタイ はじめてはらむ。庾信「解レ角新胎、戴レ藤初孕」

【新郎】シンラウ はなむこ。

【新英】シンエイ あらたに生じたる花又は葉。元稹「新英蜂採掇」

【新鬼】シンキ あらたに死にたるもの。左傳に「吾見二新鬼大、故鬼小一」

【新茶】シンチヤ あらたに作りたるちや。劉禹錫「松花滿枕試二新茶一」

【新茗】シンメイ 前に同じ。趙師使「一縷水沈香散後、半甌新茗味回時」

【新案】シンアン あたらしき工夫。

【新脆】シンゼイ あたらしくして柔かなり。周邦彥「夏里敗二新脆一」

【新涼】シンリヤウ はじめてすずし。朱熹「晝永倦二殘暑一、宵分立つすずけ。喜二新涼一」

【新國】シンコク あらたに建てたるくに。禮記に「維興之日、從二新國之法一」

【新習】シンシフ あらたに習ふ。又、あたらしき習慣。孟郊「時文有二新習一」

【新設】シンセツ あらたにつくりまうく。

【新楮】シンチヨ あたらしきえだ。杜甫「綠竹半含レ籜、新楮纔出レ墻」

【新莖】シンケイ あらたに生じたるくき。韓愈「新莖水レ漏牛猶枯」

【新訟】シンシヨウ あたらしきうったへ。隋書に「受二領新訟一、皆不レ立二文案一」

【新報】シンパウ あたらしきしらせ。伊洛淵源錄に「一人云有二新報一云」

【新晴】シンセイ あらたにはる。杜甫「久雨巫山暗、新晴錦繡文」

【新參】シンサン あらたにまじはる。又、その者。東都事略に「紬中彈文、乃新參也」

【新粧】シンシヤウ あらたに成りしよそほひ。蘇軾「峩峩兩煙鬟、曉鏡開二新粧一」

【新墳】シンフン はなむこ。全唐詩話に「姚家新墳是房郎」

【新菊】シンキク あらたに芽を出したるきく。許渾「新菊亦侵レ籬」

【新陽】シンヤウ あたらしきはる。初春。陸游「新陽蘇醒春前柳」

【新萍】シンヘイ あらたに生じたるうきぐさ。王融「新萍泛レ沚、華桐發レ岫」

【新詩】シンシ あたらしく作りたる詩。杜甫「新詩改罷自長吟」

【新會】（シンクワイ） あらたにあふ。漢書に「將吏新會」

【新義】（シンギ） あたらしき說。晉書、王接傳に「接注ニ公羊春秋ニ、多有ニ新義ニ」

【新穀】（シンコク） その年出來たる穀類。論語に「舊穀既沒、新穀既升」

【新聞】（シンブン） みみあたらしき話。安得長者言に「吳俗坐定、輒問ニ新聞ニ、此游閒小人入レ門之漸」

【新說】（シンセツ） あらたなる言說。

【新嘗】（シンシヤウ） 新穀を廟にすすめて神を祭る。にひなめ。禮記に「未レ嘗不レ食レ新」

【新絲】（シンシ） 若葉のみどり。白居易「風吹ニ新絲ニ草芽拆」

【新稻】（シンタウ） あらたにみのりたるいね。蘇軾「新稻香可レ飯」

【新製】（シンセイ） あらたに作る。あらたに作りたる型。陶潛「衣裳無ニ新製ニ」

【新墾】（シンコン） あらたに土地をひらく。

【新撰】（シンセン） あらたに著作す。舊唐書に「其舊本不レ得レ注、破候新撰成同進」

【新築】（シンチク） あたらしくきづく。朱松「一軒新築斂ニ柴荊ニ」

【新編】（シンヘン） あらたにあみ作る。又、その詩文。李商隱「舊著思玄賦、新編雜擬詩」

【新醅】（シンバイ） あらたにかもせるもろみざけ。陸游「一笑擧ニ新醅ニ」

【新趨】（シンスウ） あたらしきおもむき。武少儀「不レ易ニ舊所ニ、別成ニ新趨ニ」

【新蓮】（シンレン） あらたに生じたるはす。孫登「新蓮夾レ岸紅」

【新禧】（シンキ） 新年のよろこび。

【新樣】（シンヤウ） あたらしきかた。張祜「新樣花紋配ニ蜀羅ニ、同心雙帶壓ニ金蛾ニ」

【新螢】（シンケイ） はつほたる。賈島「一點新螢報ニ秋信ニ」

【新鮮】（シンセン） あたらし。太玄經に「新鮮自求ニ光于己ニ也」

【新舊】（シンキウ） あたらしきとふるきと。晉書、張華傳に「撫ニ納新舊ニ、我夏懷レ之」

【新薦】（シンセン） あたらしきむしろ。晉書、陶侃母湛氏傳に「湛氏乃撤ニ所レ臥新薦ニ、自剉給ニ其馬ニ」

【新醅】（シンエキ） あたらしきさけ。周禮、疏に「事酒爲ニ新醅ニ」

【新篘】（シンクク） あたらしきたけのかは。程垓「竹粉翻ニ新篘ニ」

【新鑄】（シンシユ） あらたにいる。舊唐書、食貨志に「乾封新鑄之錢、今有司貯納、更不須レ鑄」

【新體】（シンタイ） あたらしきていさい。王惲「舊聲今漸遠、新體此無レ加」

【新相知】（シンサウチ） あたらしきしりびと。楚辭に「樂莫レ樂ニ兮新相知ニ」

【新發意】（シンホツイ） 〔佛〕發意とは上求菩提、下化衆生の大心を發したることにて、新に佛門に入りたるものをいふ。法華經に「新發意菩薩、供養無數佛」

【新機軸】（シンキジク） 今までありしものよりは一きは新らしき工夫。

【新陳代謝】（シンチンタイシヤ） ふるきものは去りてあたらしきものこれに代る。

【新涼燈火】（シンリヤウトウクワ） 涼氣やや生じ、燈火に對ひて讀書するによろし。朱松「新涼宜ニ燈下ニ、永夜勘ニ書帙ニ」

【新沐者彈レ冠】（アラタニモクスルモノハカンムリヲハジクル） あらたにかみ洗ふ者は、冠の塵をはらふ。外物に汚さるゝを懼るゝなり。荀子に「新浴者振ニ其衣ニ、新沐者彈ニ其冠ニ、人之情也」史記に「新沐者必彈レ冠、新浴者必振レ衣」

【新涼入ニ郊墟ニ】（シンリヤウカキヨニイル） あたらしき涼風は村はづれまで來れり。韓愈「時秋積雨霽、新涼入ニ郊墟ニ」

【斷】

トウ、ツ。當侯切。尤。

【斯】

さき、くは。

テイ、チヤウ。都挺切。迥。

三足兩耳の鍑、かなへ。

十 畫

タン、ダン。斷の俗字。

【斷】

タク、トク。竹角切。覺。

㊀きる（斫）㊁けづる（削）。

【斷輪】（リクリン） わをつくる。莊子に「桓公讀ニ書於堂上ニ、輪扁斲ニ輪於堂下ニ」

【斷斲】（ロクロク） きりてみがく。國語に「趙子爲レ室、斲ニ其椽ニ、而礱レ之」

十一 畫

【斷】

㊀コウ、ク。壚侯切。尤。

㊁オウ、ウ。烏侯切。尤。

㊂けづる（剛に同じ、剜）㊃すき（偃鉏）。ショ。章恕切。御。

きる（斫）。

【斷】

㊀キン、ゴン。渠巾切。眞。

㊁几隱切。吻。

㊂せり（芹菜）㊃つよし。

十二 畫

【斯】

リン。離珍切。眞。

石澗を流るる水の響音。

十三 畫

【斬】

チヤク。張略切。藥。

㊀すき（鐯に同じ、鑊）㊁やぶる（破）。

【斲】

タク、トク。斲の俗字。

十四 畫

【斷】

㊀タン、ダン。徒管切。旱。

㊁杜玩切。翰。

㊀一きる（截）㊁たゆ、たつ（絕）㊂きれ（片段）㊃一たつ㊄たゆ㊅きれ㊆きむ㊇さだむ㊈守りて變ぜざる貌㊉專一なる貌㊊さだめ㊋決行、敢爲。

【斷正】（ダンセイ） 裁決して是非をただす。晉書に「凡斷ニ正臧否ニ、宜ニ先稽ニ之禮律ニ」

【斷乎】（ダンコ） きっぱりしたる貌。蘇軾「斷斷乎如ニ藥石必可ニ以伐レ病ニ」

【斷行】（ダンカウ） ㊀おしきりておこなふ。㊁きれされとなりて列をなさず。庾信「鶯鳥灑翼度、濕雁斷行來」

【斷言】（ダンゲン） いひきる。

【斷決】（ダンケツ） とりきむ。後漢書、馮異傳に「時以ニ私心ニ斷決、未ニ嘗不レ有レ悔」

【斷私】（ダンシ） 私慾をたつ。諸葛亮「斷レ私降レ意、以養ニ將士ニ」

【斷金】（ダンキン） 極めて固きまじはり。易經に「二人同レ心、其利斷レ金」

【斷念】（ダンネン） おもひきる。あきらむ。

【斷佞】（ダンネイ） わるものを斬る。高啓「誠レ妖正思レ今、斷レ佞猶慕レ昨」漢書、朱雲傳に「雲曰、臣願賜ニ尙方斬馬劍ニ、斷ニ佞臣一人頭ニ、以厲ニ其餘ニ」

【斷岫】（ダンシウ） けはしき山のほら。皇甫松「歷ニ斷岫ニ而崢嶸」

【斷崖】（ダンガイ） きりたちたる如きがけ。周賀「斷崖曾向壁中禪」

【斷坡】（ダンハ） きれたるどて。趙元鼎「斷坡斷歷對ニ寒松ニ」

【斷例】（ダンレイ） 罪人を處分したる例。晉書、杜預傳に「法者蓋繩墨之斷例、非ニ窮理盡性之書ニ也」

【斷岸】（ダンガン） きりたちたるきし。蘇軾「江流有レ聲、斷岸千尺」

【斷定】（ダンテイ） たしかにきむ。裴夷直「斷定今年不レ看レ花」

【斷面】（ダンメン） 物のきりくち。

【斷限】（ダンゲン） さかひをさだむ。

【斷峯】（ダンホウ） けはしきみね。（絕峯、峻峯）。

【斷案】（ダンアン） 前提より推論せられたる斷定。

【斷食】（ダンジキ） ある日限內食事せず。佛本行經に「若因ニ斷食ニ當レ得ニ大福ニ者、其野獸等、應レ得ニ大福ニ」

【斷罟】（ダンコ） あみをたちきる。國語に「里革斷ニ其罟ニ、而棄レ之」

【斷脊】（ダンセキ） せなをきる。商子に「吏遂斷ニ顚頡之脊ニ」

【斷梅】（ダンバイ） 梅雨のをはり。陸游「輕雷轣轆斷梅初」自注に「鄉人謂ニ梅雨有レ雷、曰ニ斷梅ニ」

【斷梗】（ダンカウ） 飄轉して定まらざる貌。元好問「半生無ニ根著ニ、飄轉如ニ斷梗ニ」

【斷絃】（ダンゲン） つるいとをきる。元稹「孤琴在ニ幽匣ニ、時逃斷絃聲」

【斷斬】（ダンザン） たちきる。後漢書に「未レ有レ不ニ斷斬ニ以示ニ武威ニ者ニ也」

【斷趾】（ダンシ） あしをきる。唐書、刑法志に「太宗卽位、中略謂ニ侍臣ニ曰、肉刑前代除レ之久矣、今復斷ニ人趾ニ、吾不レ忍也、於レ是除ニ斷趾法ニ」

【斷腹】（ダントウ） くびなきる。戰國策に「斷レ腹決レ腹」

【斷棧】（ダンサン） 切斷せるかけはし。陸游「馬經ニ斷棧一危無レ路」

【斷絡】（ダンラク） きれたるわた。又、きるるとつながるると。沈遼「我生無レ庸如ニ斷絡一」

【斷絕】（ダンゼツ） たちきる。杜甫「厚祿故人書斷絕、恆飢稚子色凄涼」

【斷雲】（ダンウン） ちぎれたるくも。朱超「孤生如ニ斷雲一」

【斷然】（ダンゼン） きっぱりしたる貌。

【斷腕】（ダンワン） うでをきりはなす。韓琦「斷腕未レ足レ駭」

【斷割】（ダンカツ） 刀にてきりたつ。又、物ごとをきりもりす。書經に「水能灌漑、火能烹飪、金能斷割、木能興作、土能生殖、穀能養育」

【斷腸】（ダンチヤウ） ㊀はらわたを絕ちきる。魏志に「病若レ在ニ腸中一、便斷レ腸洫洗」㊁心を痛むること甚だし。杜牧「芳草復芳草、斷腸還斷腸」

【斷剗】（ダンセン） 刀にてきりはなす。范梓「百怪日夜出、思ニ爾一斷剗一」

【斷落】（ダンラク） 文章の句切り。品字箋に「篇章斷落亦曰レ節」

【斷碑】（ダンヒ） かけたるいしぶみ。黃庭堅「斷碑零落臥ニ秋風一」

【斷槎】（ダンサ） きれぎれとなりたるいかだ。陸游「低昂泛ニ斷槎一」

【斷綻】（ダンタン） ほころぶ。ほころび。韓維「補ニ裝斷綻一搜ニ尺寸一」

【斷碧】（ダンヘキ） きれぎれなるみどり。范俊「行雲飛ニ斷碧一」

【斷魂】（ダンコン） 甚だしく心をいたむ。韋莊「自是春愁正斷魂」

【斷獄】（ダンゴク） 罪を裁判す。鹽鐵論に「今斷レ獄設以レ萬計、犯レ法滋多」

【斷疑】（ダンギ） うたがはしきを裁決す。易經に「以斷ニ天下之疑一」

【斷截】（ダンセツ） たちきる。（截斷）。謝靈運「彭排烏槍、斷ニ截衢巷一」

【斷澌】（ダンシ） きれぎれに成りたる氷。范梓「前輩風流逐ニ斷澌一」

【斷察】（ダンサツ） しらべみる。（檢察）。後漢書、王吕傳に「能斷ニ察疑獄一、發ニ起姦伏一」

【斷箭】（ダンセン） をれたる矢。五代史、契丹錄に「德光擊レ晉、戰ニ於戚一、城兵既交、殺傷相半、陣間斷箭遺鏃、布厚寸餘」

【斷編】（ダンペン） みじかき文章。きれぎれの文書。宋史に「凡周漢以降、金石遺文、斷編殘簡、一切綴拾、謂ニ之集古錄一」

【斷樹】（ダンジユ） 木をきる。きりたる木。禮記に「斷ニ樹一、殺ニ一獸一」

【斷橋】（ダンケウ） はしをおとす。おちたるはし。杜甫「斷橋無ニ復板一」

【斷礎】（ダンソ） ちぎれたるいしずゑ。周霆震「荒碑斷礎悉輿致」

【斷臂】（ダンビ） ひぢを絕ちきる。歐陽修「京師歲旱、有ニ浮屠人一、斷レ臂禱レ雨」

【斷轅】（ダンエン） 車のながえをきる。又、ちぎれたるながえ。杜甫「摧折如ニ斷轅一」

【斷斷】（ダンダン） 守りて變ぜざる貌。專一なる貌。書經に「斷斷猗無ニ他技一」

【斷織】（ダンシヨク） はたをたちきる。孟母の故事より、半途に學を廢するを戒むるにいふ。列女傳に「孟母以レ刀斷ニ其織一」

【斷壞】（ダンクワイ） きれくづる。陸龜蒙「有ニ編簡斷壞者一、緝レ之」

【斷巖】（ダンガン） きりたちたる如きいは。戴表元「斷巖蒼龍角、汲レ流紫雲根」

【斷續】（ダンゾク） たえ又つづく。蘇軾「或爲レ雲洶湧、或作レ線斷續」

【斷末摩】（ダンマツマ） 〔佛〕意識の明了位より悶絕位に移る間の苦、卽ち、臨終の苦しみをいふ。倶舍論に「臨ニ命終時一、多爲ニ斷末摩苦受所レ逼」

【斷金契】（ダンキンノチギリ） 極めて固きちぎり。水經、注に「嵩字仲山宛人、與ニ山陽范式一有ニ斷金契一」

【斷金侶】（ダンキンリヨ） 固きちぎりを結べるとも。吳澄「此中斷金侶、清氣浮沉鉴」

【斷腸花】（ダンチヤウクワ） 〔植〕秋海棠の異名。錦字箋に「舊傳昔有ニ女子一、憶レ人不レ至、淚洒レ地、遂生ニ此花一、色如ニ美婦一、而甚媚、名ニ斷腸花一」

【斷レ長補レ短】（チヤウタチヲタツテタンヲオギナフ） きりもりす。禮記に「四海之內、斷レ長補レ短、方三千里、爲レ田八十萬億、一萬億畝」

【斷章取義】（ダンシヤウシユギ） 詩文を解するに、作者の本意に拘らず、取りて自己の用となすをいふ。孟子に「魯頌曰、戎狄是膺、荆舒是懲、周公方且膺レ之」朱注に「按今此詩爲ニ僖公之頌一、而孟子以ニ周公一言レ之、亦斷レ章取レ義也」又、孝經、孔傳に「斷レ章取レ義、上下相成」

【斷髮文身】（ダンパツブンシン） 頭髮を剪りいれずみす。左傳に「仲雍嗣レ之、斷髮文身、羸以爲レ飾、豈禮哉」

【斷機之戒】（ダンキノイマシメ） 學事を中途にして廢するをいましむるなり。孟母の故事より出づ。列女傳に「及ニ孟子既學而歸一、孟母問ニ學所レ至、孟子曰、自若也、孟母以レ刀斷ニ其機一曰、子之廢レ學、若ニ吾斷ニ斯機一、孟子懼、旦夕勤學不レ息、師ニ事子思一、遂爲ニ名儒一」

【斷港絕潢】（ダンカウゼツクワウ） 港は支流、潢は池、連絡の絕えたるをいふ。韓愈「學者必愼ニ其所レ道、道ニ於楊墨老莊佛之學一、而欲レ之ニ學人之道一、猶レ航ニ斷港絕潢一以望レ至ニ於海一也」

【斷頭將軍】（ダントウシヤウグン） 決死の將軍といふ意。蜀志、張飛傳に「至ニ江州一、破ニ巴郡太守嚴顏一、生ニ獲顏一、飛呵レ顏曰、大軍至、何以不レ降而敢拒戰、顏答曰、卿等無狀、侵ニ奪我州一、我州惟有ニ斷頭將軍一、無レ有ニ降將軍一也」

【斷薺畫粥】（ダンセイクワクシユク） 貧にして力學するをいふ。書言故事に「范希文修學、最貧、在ニ長白山僧舍一、煮ニ粟二升一、作ニ粥一器一、經レ宿遂凝、以ニ刀畫爲ニ四塊一、早晚取ニ二塊一、斷ニ薺數十莖一、而啗レ之」

【斷爛朝報】（ダンランチヤウハウ） 王安石が春秋をそしれる語。周麟之春秋經解、跋に「王荆公初欲レ釋ニ春秋一、以行ニ天下一、而孫莘老之書已出、一見而忌之、自知レ不レ能ニ復出ニ其右一、遂詆ニ聖經一、而廢レ之曰、此斷爛朝報也、不レ列ニ於學官一、不レ用ニ於貢舉一」

【斷齊盤】（ダンセイバンイフキル） 盤匜は銅器なり、極めて鋭利なる劍の義。戰國策に「吳子之劍、肉試則斷ニ牛馬一、金試則截ニ盤匜一」

【斷而敢行鬼神避レ之】（ダンジテカンカウスレバクシンモコレヲサク） 斷じて行へば障礙に打ち勝ち得べきをいふ。史記、李斯傳に「願レ小而忘レ大、後必有レ害、狐疑猶豫、後必有レ悔、斷而敢行、鬼神避レ之、後有ニ成功一」

【斷】

十八畫

ク、ゴ。權俱切。戾。きる（劍に同じ）。

二十一畫

㊀チヨク、トク。陟玉切。沃。㊁サク、ソク。之角切。覺。

●きる（斫）㊂鑿に同じ。

方部

【方】

ハウ。分房切。陽。

一いま（今）二まさに（且）三むき四くらぶ（比）五かたはら（旁）六ならぶ（併）七おく（放）八あたる（當）九たもつ（有）十ただし（正）十一おほいなり十二くに（國）十三みち（道）十四ことがら十五あや（文）十六いた（板）十七いかだ（泭）十八ひとし（齊）十九かた十神仙の術 廿醫療の術 廿一仿に同じ 廿二四角形 廿三四邊、四方 廿四祭の名。

【方人】（ハウジン） 一人の方と己の方とを引きくらぶ。論語に「子貢方レ人」二（カタヒト） 我國にて、一味同心のものの稱。

【方寸】（ハウスン） 一一寸四方。漢書に「黃金方寸而重一斤」二心をいふ。列子に「吾見ニ子之心一矣、方寸之地虛矣、幾聖人也」

【方丈】（ハウジヤウ） 一一丈四方なり。孟子に「食前方丈、侍妾數百人、我得レ志不レ爲也」二寺院の正寢の稱。釋氏要覽に「方丈蓋寺院之正寢也、唐顗慶年中、敕ニ王玄策一往ニ西域一、至ニ毗耶黎城東北四里許一、維摩居士宅、示レ疾之室遺趾、參レ石爲レ之、玄策躬以ニ手板一縱橫量レ之、得ニ十笏一、故號ニ方丈一」三轉じて、長老の稱。白居易「方丈若能來問レ病」四海中の神仙の住むといふ山の名。史記に「齊人徐市等上書言、

海中有三三神山一、名曰二蓬萊方丈瀛洲一、仙人居レ之、請得レ齋戒與二童男女一求レ之」

【方士】 くに。書經、疏に「盡貢二其方土所レ生之物一」

【方士】 ㊀周代の官名。㊁仙術を行ふ人。江淹「方士練二王液一」

【方内】 くにうち。史記に「方内之治亂、在二陛下所レ執」

【方外】 ㊀よすてびと。後には、主として佛教徒を指す。莊子に「孔子曰、彼遊二方之外一、而丘遊二方之内一者也」㊁中國の方域外、卽ち、夷狄の地の稱。楚辭に「覽二方外之荒忽一兮」

【方冊】 しもつ。陸倕「布在二方冊一、無レ彰二器用一」

【方今】 ただいま。いま。魏志、齊王傳に「正始元年、詔曰、方今百姓不レ足、而御府多作二金銀一」

【方田】 田圃の縱横を等分の長さにすること。(均田)。通典に「宋熙寧五年、修二方田一」

【方冬】 十月の異名。(初冬)。杜甫「方冬變レ所レ爲」

【方正】 ただし。漢書、董仲舒傳に「陛下舉二賢良方正之士一」

【方舟】 ふねをならぶ。史記、蘇秦傳に「方レ舟而下」

【方羊】 ㊀苦勞の貌。一說に、遊戲。左傳に「如二魚竀尾衝レ流、而方二羊裔一焉」

㊁彷徉に通ず。さまよふ。史記に「外隨二大王後車一、彷二徉天下一」

【方式】 方法上の形式。

【方行】 普くゆきわたる。書經に「方二行天下一、至二于海表一、罔レ有レ不レ服」

【方技】 醫術の書籍。晉書、張華傳に「華於二圖緯方技之書一、莫レ不二詳覽一」

【方志】 ㊀ただしきこころざし。㊁地方のことがらを記したる書籍。皇甫謐「其鳥獸草木、則驗二之方志一」

【方言】 一地方にのみ行はるる言語。王維「因レ人見二風俗一、入レ境聞二方言一」

【方伯】 一方面の大諸侯。又、權力の最も大なる地方官。禮記に「千里之外、設二方伯一」

【方位】 方角位置。朱子語錄に「孤虛以二方位一言、如レ俗言二某方利某方不利之類一」

【方折】 四角にまがる。尸子に「水圓折者有レ珠、方折者有レ玉」

【方命】 王命にさからふ。書經に「僉曰於鯀哉、帝曰吁咈哉、方レ命圮レ族」

【方物】 ㊀その地方に産するもの。書經に「無レ有二遠邇一、畢獻二方物一」㊁各別に命名す。史記に「民神雜糅、不レ可二方物一」

【方社】 四方の神と土地の神と。詩經に「祈レ年孔夙、方社不レ莫」箋に「祈二豐年一甚早、祭二四方與社一、又不レ晚」

【方牀】 四角なるとこ。南史、賀革傳に「革有二六尺方牀一」

【方京】 四角なる倉庫。說文に「圓謂二之囷一、方謂二之京一」

【方皇】 さまよふ。(彷徨)。荀子に「方皇周浹、曲得二其次序一、是聖人也」

【方便】 ㊀(佛)便宜にしたがって人を導く方法。維摩經に「以二無量方便一、饒二益衆生一」㊁てだて。

【方面】 ㊀一方面に當る大將の義。通鑑に「袁紹與レ操共興レ兵、紹問レ操曰、若事不レ輯、則方面何所レ可レ據」㊁かくばりたるかほ。後漢書、高獲傳に「爲レ人尼首方面」㊂一方の土地。石闕銘に「區宇乂安、方面靜息」

【方直】 ただしくなほし。晉書、郭琦傳に「琦少方直有二雅量一」

【方案】 しかたのかんがへ。方法の工夫。(孝案)。

【方虐】 まさにそこなふ。詩經に「天之方虐、無二然謔謔一」

【方軌】 わだちをならぶ。史記に「車不レ得レ方レ軌」

【方針】 ㊀羅針盤の方位をさししめす針。㊁めざす方。一定の目的。

【方祇】 土地。顏延之「方祇始凝」

【方峻】 ただしくたかし。唐書、於陵傳に「於陵器量方峻、進止有二常度一、節操堅明」

【方書】 ㊀方術の書籍。唐書、李聽傳に「聽好二方書一」㊁四方の文書。漢書、張蒼傳に「秦時爲二御史一、主二柱下方書一」

【方重】 方正にして嚴重なり。後漢書、牟融傳に「融代二伏恭一爲二司空一、舉動方重、甚得二大臣節一」

【方矩】 かねざし。曲尺。玉篇に「圜曰レ規、方曰レ矩」

【方術】 方士のわざ。仙術。北史、周澹傳に「澹多二方術一、尤善二醫藥一」

【方略】 はかりごと。史記、驃騎傳に「天子欲レ教二之孫吳兵法一、對曰、願二方略如何一耳、不レ至レ學二古兵法一」

【方舸】 ふねをならぶ。曾鞏「魚鱗方レ舸集」

【方陳】 方形のぢんだて。國語に「以二萬人一爲二方陳一」

【方壺】 神仙の住むといふ島。列子に「渤海之東有二大壑一焉、其中有二五山一焉、一曰岱輿、二曰員嶠、三曰方壺、四曰瀛州、五曰蓬萊」

【方客】 道士の稱。太玄經に「大開二帷幕一、以引二方客一」

【方望】 近郊にて四方の神を祭る。又その祭。公羊傳に「天子有二方望之事一」

【方程】 數學の名。算經に「九章名義、八曰、方程」

【方策】 しょもつ。中庸に「文武之政、布在二方策一」

ただしくしてのりあり。(端雅)。北史、婁昭傳に「昭方雅正直、有二大度一深謀一」

【方慎】 ただしくしてつつしみぶかし。(眞慎)。北史に「孝伯性方慎忠孝」

【方廉】 ただしくしていさぎよし。李虞仲「清眞不レ撓、方廉自持」

【方榻】 四角なるゆか。宋書に「自レ非二三署一、不レ得レ止二方榻一」

【方槩】 紙の異名。

【方聞】 道ただしく智ひろし。漢書、武帝紀に「詳延二天下方聞之士一、咸薦二諸朝一」注に「方、道也、聞、博聞也」

【方箱】 四角なる車のものを入れ載する處。玉海に「爲レ車者、有二廣箱一、有二方箱一」

【方潔】 ただしくしていさぎよし。後漢書、王丹傳に「丹資性方潔、疾二惡强豪一」㊁紙の異名。

【方穀】 こしきをならぶ。魏文帝「列翠星陳、戎車方レ轂」

【方槩】 ただしきみさを。元經傳に「何充器局方槩、有二萬夫之望一」

【方頰】 四角なるほほ。梁書、太宗紀に「方頰豐下、鬚髯如レ畫」

【方諸】 月より水をとる鏡。晉書に「方諸可二以取二水于月一」

【方劑】 くすりを調合す。又、調合したる藥。

【方瞳】 方形なるひとみ。拾遺記に「有二父老五人一、方瞳握二青筠杖一」

【方轅】 ながえをならぶ。西京賦に「冠帶交錯、方レ轅接レ軫」

【方檢】 ただしきおこなひ。北史、裴駿傳に「弱冠通二涉經史一、方檢有二禮度一、鄉里宗敬焉」

【方輿】 地をいふ。(坤輿)。宋玉「方地爲レ輿、圓天爲レ蓋」

【方壘】 方形のいしずゑ。元稹「方壘荊山採、修椽郢匠鉤」

【方額】 四角なるひたひ。唐書、太平公主傳に「太平公主、則天皇后所レ生、方額廣頤、多二陰謀一」

【方殿】 ただしくしておごそかなり。(整殿、端殿)。晉書、王雅傳に「王恭風神簡貴、志氣方殿」

【方頸】 四角なるひたひ。五代史に「郭無爲棣州人、方頸烏喙、好學多聞」

【方轡】 くつわをならぶ。晉書に「佞人方レ轡、竝レ后載馳」

【方寸地】 一寸四方ばかりの地。唐書、員半千傳に「陛下何惜二玉陛方寸地一、不レ使二臣披二露肝膽一乎」

【方山冠】 古の樂人の用ゐしかんむり。後漢書に「方山冠、制似二進賢一、前高七寸、後高三寸、纓長八寸、似二進賢冠一、五采穀爲レ之、祠二宗廟一、天子八佾、四

時五行、樂人服レ之、冠衣各如ニ其行方之色一」

【方外地】ハウグワイ　度外に置くべき土地。漢書に「越方外之地、劉髮文身之民也」

【方外侶】ハウグワイノリコ　世俗に遠ざかれる輩、卽ち、僧などの稱。僧峻然「逍遙方外侶、往尋府中情」

【方外學】ハウグワイガク　孔孟以外の敎、卽ち、佛敎の稱。眞德秀「雖ニ早從ニ方外之學一、而跬步不レ忘ニ君父一」

【方面寄】ハウメンキ　一方面を守る大將のつとめ。名臣言行錄に「自謂當ニ方面寄一、不ニ敢辭一」

【方便囊】ハウベンナウ　手さげぶくろ。清異錄に「唐季王侯、競作ニ方便囊一」

【方伯連帥】ハクハクレンスイ　周代に諸侯の上に位して一方を支配せし官。禮記に「千里之外設ニ方伯一」又「十國以爲レ連、連有レ帥」

【方底圓蓋】ハクテイエンガイ　四角なる底の器に圓きふた。物の相合はざるに喩ふ。顏氏家訓に「使ニ疎薄之人而節ニ量親厚之恩一、猶ニ方底而圓蓋一、必不レ合矣」

【方枘圓鑿】ハウゼイエンサク　枘は柄、鑿は穴、四角なる柄に圓き穴の義にして、物の相合はざるに喩ふ。史記に「持ニ方枘一、欲レ內ニ圓鑿一、其能入乎」

【方圓殊合鈎繩異レ惡】ハウエンガフコトナシコウジヨウクワイフコトナシ　方は四角、圓はまる、鈎は曲り、繩は直なり、兩者の性相異なりて合はざるに喩ふ。楚辭に見ゆ。

【方寸之木可レ使レ高ニ於岑樓一】ハウスンノキモシヨウヨクタカカラシ　至卑のものも至高のものより高き事あるにいふ。孟子に「不レ揣ニ其本一而齊ニ其末一、方寸之木可レ使レ高ニ於岑樓一」

四畫

【旂】カイ、ゲ。下戒切。卦。一むすぶ（結）二ひざかけ、まへだれ（補膝）。

【旒】カウ、ガウ。胡剛切。陽。一わたる（度）二いかだ（筏）。

【於】ヨ。衣虛切。魚。

（一）に一おいて二にて三より四をる（居）五ゆく（往）六かはる（代）八ここに（此）九おける十おもよる（依）十一離きこと多き貌ろあ（歎息の聲）。

【於乎】ああ。感歎の辭。詩經に「於乎小子、未レ知ニ臧否一」

【於邑】かなしみむすぼる。史記、劉客傳に「大呼レ天者三、卒於邑悲哀、而死ニ政之旁一」

【於於】多難の貌。太玄經に「上九白舌於於、屈ニ根于君子一否信」

【於皇】ああ。感歎の辭。詩經に「於皇武王、無競維烈」

【於菟】〔動〕虎の異名。左傳に「楚人謂ニ乳穀一、謂ニ虎於菟一」

【於越】越の國。春秋に「五月於越敗ニ吳于檇李一」注に「於越、越國也」

【於戲】ああ。感歎の辭。詩經に「於戲前王不レ忘」

五畫

【施】シ。式支切。紙。（一）賞是切。紙。（二）庵智切。寘。（三）イ。以豉切。寘。

（一）余支切。支（二）セ。慣用音。

（一）ほどこす（二）まうく（設）（三）わかつ（賦）（四）つく（著）（五）もちゐる（用）（六）くはふ（加）（七）ほる（掘）（八）つられしめす（九）進み難き貌（十）喜悅の貌（ろ）（一）ゆるむ（弛）（二）かふ（易）（三）すつ（捨）（四）いさを、てがら（五）めぐみあたふ（惠與）（六）ほどこす（七）うつる（移）（八）およぶ（及）（九）のぶ（延）（十）うつす（移）（一）なめ（斜）。

【施用】シヨウ　ほどこしおこなふ。史記に「各乘異難ニ施用一」

【施化】シクワ　萬物をそだつ。又、萬物そだつ。淮南子に「天地之施レ化也、嘔ニ之而生、吹ニ之而落」

【施主】セシユ　〔佛〕佛又は僧などに物を施す人。檀那。又、葬式、法事などの供養をなす主。香主。釋氏要覽に「梵語陀那鉢底、唐言ニ施主一」

【施行】シカウ　（一）政をおこなふ。史記、蕭相國世家に「便宜施行」（二）實地にほどこしおこなふ。（三）キヤウ　僧侶・貧民などに金品をほどこし與ふ。

【施法】ハフ　おきてを布く。周禮に「施ニ法於官府一、而建ニ其正一、立ニ其貳一」

【施舍】（一）恩德を布く。舍も施と同義。左傳に「施舍不レ倦」（二）旅客の荷物をおろす所。國語に「鮮無ニ施舍一」（三）與ふると與へざると。國語に「聖人之施舍也議レ之」（四）恩惠を施し罪などをゆるす。左傳に「施舍已レ責」

【施政】シイ　政令をしく。書經、傳に「蹈ニ行先王光大之道一、施ニ政于我童子一」

【施施】シシ　（一）進みがたき貌。詩經に「彼留子嗟、將其來施施」（二）喜悅の貌。孟子に「施施自レ外來」

【施罟】コシ　あみをはる。擊虞「施レ罟殷レ網、人用不レ匱」

【施效】シカウ　ほどこしいたす。漢書に「進士不レ得ニ施效一、斥遂又非ニ其愆一」

【施展】テン　ほどこしのぶ。白居易「平生賞心事、施展十未レ一」

【施從】シヨウ　見えがくれに跡をつけゆく。孟子に「蚤起施從ニ良人之所レ之一」

【施博】ハク　ほどこすことひろし。淮南子に「德之所レ施者博、則惑之所レ行者遠」

【施設】セツ　まうく。史記、孫子吳起傳論に「吳起兵法世多有、故弗レ論、論ニ其行事所ニ施設一者ニ」

【施爲】シ　しわざ。韓愈「浮屠四來何施爲、擾擾四海爭奔馳」

【施髢】テイ　そへがみを加ふ。莊子に「禿而施レ髢、病而求レ醫」

【施賑】シン　ほどこしすくふ。後漢書、馬援傳に「凡殖ニ財產一、貴ニ其能施賑一也」

【施與】ヨ　ほどこす。ほどこし物。吳志、魯肅傳に「家富ニ于財一、性好ニ施與一」

【施罾】ソウ　あみをしく。元稹「雪中方賭桂、木上莫レ施レ罾」

【施療】セウ　無料にて治療す。

【施鍼】シン　からだにはりす。宋史、王克明傳に「魏安行妻風痿、十年不レ起、克明施鍼、而步履如レ初」

【施鞋】コウ　くつわをとりつく。陸游「赤手騎レ鯨不レ施レ鞋」

【施鞶】ハン　大帶をつく。儀禮に「庶母及ニ門內施レ鞶」

【施餓鬼】キガ　〔佛〕無緣の亡者の靈を弔ひて讀經供養す。

【施人愼勿レ念】セヒトニヒドヨシデハカナシ　愚を賣ることなかれといふ義。崔子玉「施レ人愼勿レ念、受レ施愼勿レ忘」

六畫

【旁】（一）ハウ、バウ。步光切。陽。ろ蒲浪切。濂。（二）ハウ、ヒヤウ。晡橫切。庚。（三）ハウ。鋪郎切。陽。

（一）つくり（漢字の右方）（二）おほいに（大）（三）ひろく（廣）（四）かたはら（側）（五）あまねし（六）ほとり（邊）ろ（一）よる（依）（二）交り橫はる（三）馳騁して息まざる貌（四）まじる（混）。

【旁引】バウインガ　ひろく考證す。杜牧「尙宜ニ旁引曲釋、壓壓繹繹一」

【旁午】バウゴ　往來の繁きをいふ。一縱一橫の義なり。漢書、霍光傳に「使者旁午」

【旁求】バウキウ　あまねくもとむ。書經に「旁ニ求俊彥、啓ニ廸後人一」

【旁舍】バウシヤ　かたはらの小屋。史記に「高祖敵從ニ旁舍一來」

【旁枝】バウシ　わきに出でたるえだ。酉陽雜俎に「山有ニ寶玉木一、旁枝皆下垂」

【旁格】バウカク　あまねくきはむ。南史、齊太祖紀に「昔我祖宗英叡、旁ニ格幽明一」

【旁穿】バウセン　あまねく通ず。楊弘貞「或躍旣而決決、皆洞達而旁穿」

【旁旁】バウバウ　はしりて止まざる貌。詩經に「四牡彭彭、王事旁旁」

【旁側】バウソク　そば近きところ。又、侍臣。漢書に「內媚ニ事旁側一」

【旁通】バウツウ　つぶさにつくす。易經に「六

【旂】（一）はた（二）ろ旒に同じ。

【旂旐】ハイイ　はたあし。宋史に「旂旐羽紛」

【旂旐】イヨウ　はたあしあるはた。後漢書に「建ニ其旂旐一、尊ニ卑上下一」

爻發揮、旁通レ情也」

【旁眯】ヘイ かたばらをみる。潘岳「瞬ニ悍目ニ以旁眯」

【旁牌】ハイ たて。蘇軾「長力擅ニ旁牌ニ」

【旁震】シン 四方にひびく。揚子に「雷椎窒歇、輿物旁震」

【旁暢】チャウ あまねくのぶ。史記に「武威旁暢、振ニ動四極ニ」

【旁綜】ソウ あまねくすべあつむ。晉書に「加以ニ旁綜廣深、博聞彊識ニ」

【旁潤】ジュン あまねくうるほふ。潘尼「和氣四充、惠澤旁潤」

【旁魄】ハク ひろく下におよぶ。漢書に「大漢之德旁魄」

【旁燭】ショク あまねくてらす。漢書に「明哲煌煌、旁燭無レ疆」

【旁礴】ハク 混同して一にす。又、みちひろがる。莊子に「之人也、之德也、將レ旁ニ礴萬物ニ以爲ル一」

【旁矚】ショク あまねくみる。蘇軾「延レ英旁矚、念ニ故老之不レ來」

【旁若無人】ボウジャクブジン かたばらにひとなきがごとし。人前をもはばからず無禮のふるまひをなす。史記に「高漸離擊レ筑、荊軻和而歌ニ於市中ニ相樂也、已而相泣、旁若レ無レ人」

【旁觀者審當レ局者迷】ボウクワンスルモノハアキラカニキヨクニアタルモノハマヨフ 旁觀者の判斷の公平にして、當局者の卻つて誤あるをいふ。鹽鐵論に「從レ旁議者易レ是、其當レ局則亂」

旂

【旂】キ、ゲ。渠希切。微。すずあるはた、はた(旌旗)。

【旂旐】チク 旂は龍を描けるはた、旐は龜蛇を描けるはた。轉じて、はたないふ。詩經に「出車彭彭、旂旐央央」

【旂夾板】キケフバン 旗竿ばさみ。

旃

【旃】セン。諸延切。先。

一これ(之)二けおり(旃裘)三あらはす(表)四曲柄のはた。

【旃表】センヘウ あらはす。說文に「旃ニ表士衆ニ」

【旃茵】センイン 毛製のしとね。淮南子に「席ニ旃茵、傅ニ旄象ニ」

【旃旌】センセイ はた。班固「建ニ日月之旃旌」

【旃裘】センキウ けおりのころも。史記に「被ニ旃裘ニ」

旄

㊀バウ、モウ。莫袍切。豪。

㊁一犛牛、又、その尾二はたぼこ(犛午の尾を竿頭につけたる旗)ろ一層の毛ながし三おいぼれ(耄に通ず)。

【旄牛】バウギウ からうし。山海經に「潘侯之山有レ獸焉、其狀如レ牛、而四節生レ毛、名曰ニ旄牛ニ」

【旄丘】バウキウ 丘の前方高く後方低きもの。

【旄雅】に「前高旄丘、後高陵丘」はた。徐彥伯「瑞氣蜿ニ蜒于旄斿ニ」

【旄斿】カウ 旬、祥光燿ニ瑜于旄斿ニ」

【旄倪】ゲイ 老人と小兒と。孟子に「反ニ其旄倪」

【旄旒】リウ はたのたれ。周禮、疏に「箋旌之下、亦有ニ旄旒ニ」

旆

㊀ハイ、バイ。蒲蓋切。泰。

ろハツ、バチ。蒲撥切。曷。

一はた(旗)二長き貌三垂れ下る貌四飛びあがる貌。

正字通に「旆は、俗の旆の字」

【旆旆】ハイハイ 一垂れ下る貌。又、飛び揚る貌。詩經に「胡不ニ旆旆ニ」二長き貌。詩經に「荏菽旆旆」

【旆旌】ハイセイ はた。詩經に「蕭蕭馬鳴、悠悠旆旌」

旅

㊀リョ、ロ。力擧切。語。

ろ陵如切。魚。

一おほし(衆)二もろもろ(衆)三たびたびと五ならぶ(陳)六ついづ(序)七ともにす(俱)八よろひのされ九やまつり十えびすのなさ(西戎の長)十一軍兵五百人の稱十二播種に因らずして生ふる易の卦の名ろつらぬ(陳)。

【旅力】リョリク うでぢから。詩經に「旅力方剛、經ニ營四方ニ」

【旅衣】イリョ たびごろも。(客衣)。崔湜「清霜換ニ旅衣ニ」

【旅生】セイ 禾の種を播かずして生へたもの。後漢書に「野穀旅生、麻朮尤盛」

【旅百】ハク おほくならぶ。左傳に「庭實旅百、奉レ之以ニ玉帛ニ」

【旅次】シ たびのやどり。杜甫「老夫轉不レ樂、旅次兼ニ百憂ニ」

【旅行】リカウ たびに。たびす。

【旅炊】スヰ たびにてかしぐ。陸游「旅炊雜ニ沙土ニ、得レ飽何暇擇」

【旅拒】キョ ふせぐ。後漢書に「大姓侵ニ小民ニ、黠羌欲ニ旅拒ニ」

【旅泊】ハク たびやどりす。とまり。博異志に「欣ニ此旅泊ニ、接奉不レ得ニ鄉重ニ耳」

【旅抱】ハウ たびごころ。李商隱「歸期無ニ雁報ニ、旅抱有ニ猿侵ニ」

【旅店】テン やどや。項斯「旅店開偏早」

【旅思】シ たびのおもひ。駱賓王「青陸芳春斷、黃沙旅思催」

【旅亭】テイ やどや。(客亭、逆旅)。

【旅食】シヨク 他鄉にてくらす。戴復古「旅食思ニ鄉味ニ、砧聲起ニ客愁ニ」

【旅前】ゼン むれをなしてすすむ。易林に「蒼鷺羣行、相得旅前」

【旅客】カク たびびと。(羈客)。易林に「路多ニ枳棘ニ、步刺ニ我足ニ、不レ利ニ旅客ニ」

【旅情】ジヤウ たびごころ。(客情)。楊愼「坡老旅情昌歜酒」

【旅寓】グウ やどや。元稹「旅寓難レ堪レ託、官僚自可レ憑」

【旅愁】シウ たびのうれへ。(羈愁)。杜甫「日出清ニ江望ニ、暄和散ニ旅愁ニ」

【旅費】ヒ ろぎん。

【旅裝】サウ たびよそほひ。

【旅檯】エイ 大いなるはしら。詩經に「松桷有レ梴、旅檯有レ閑」

【旅魂】コン たび人のこころ。杜甫「空山獨夜旅魂驚」

【旅鴈】ガン たびのかり。何遜「霜洲旅鴈渡、朔飄吹ニ宿莽ニ」

【旅館】ガウ 一四旅に產する犬の一種。二書經の篇名。書經に「四旅底貢ニ厥獒ニ、太保乃作ニ旅獒ニ」

【旅憩】ケイ たびぢにてやすむ。李白「醉來脫ニ寶劍ニ、旅憩高堂眠」

【旅館】クワン やどや。孟浩然「旅館歸心逼、荒村客思盈」

【旅樹】ジユ 門屏をいふ。禮記に「臺門而旅樹、反坫繞龠」

【旅葬】リョ キ 〔植〕おほあふひ。阮瑀「堂上生ニ旅葬ニ」

【旅進旅退】リョシン リョタイ 衆と共に進退す。王禹偁「有ニ無レ毀無レ譽、旅進旅退、竊レ位而苟レ祿、備レ員而全レ身者、亦無レ所レ取焉」

七畫

旋

㊀ヒ。攀糜切。支。

ろ母被切。紙。

㊁一なびく(靡)二さしづばた(麾)三衣服の貌ろ旌旗の貌。

旒

リウ、ル。旒に同じ。

【旗】ハン。妃罔切。養。

【旗人】ハウジン すゑものづくり。陶工。周禮に「旗人爲レ簋」

旋

㊀セン、ゼン。似宣切。先。

ろ辭戀切。霰。

一かへる(反)二もどる(戾)三まとふ(遶)四めぐる、めぐらす、まはる五まろし(圓)六りゅうづ(鐘懸)七ゆばり(小便)八やや(差)九しきりにろめぐる、まとふ(繞)。

【旋毛】センマウ うづまきたるけ。聞見後錄に「碧雲霞脚馬也、莊憲太后、臨レ朝以賜ニ荊王ニ、王惡ニ其旋毛ニ」

【旋止】シ かへりきたる。曹植「今我旋止、素雪云飛」

【旋反】ハン めぐりかへる。詩經に「既不ニ我嘉ニ、不能ニ旋反ニ」

【旋曲】キヨク めぐりまがる。淮南子に「能進退履繩而旋曲」

【旋沫】マツ めぐるあわ。李巡「旋沫飜成ニ碧玉池ニ」

【旋軍】グン いくさなかへす。(凱陣)。

【旋風】フウ つむじかぜ。高適「一日千里如ニ旋風ニ」

【旋泉】セン うづまくいづみ。水經、注に「昭山下有ニ旋泉ニ、深不レ可レ測」

【旋師】シ いくさなかへす。

【旋廻】ハイ はたなめぐらす。軍をかへす

義。顔延之「大軍旋レ廟、渾儀在レ路」

【旋渦】セン めぐりうづまく。うづまき。（盤渦）。袁桷「撫レ俗水旋レ渦」

【旋淵】エン ふかきふち。嚴忌「蛟龍潛ニ於旋淵ニ分、身不レ挂ニ於罔羅ニ」

【旋逝】セン めぐりさく。斐度「神魚鼓舞而旋逝」

【旋斡】アツ めぐる。めぐらす。陸游「上天何蒼蒼、四序浩旋斡」

【旋盤】バン 陶器をつくるろくろ。

【旋環】カン めぐる。又、めぐらす。班固「或旋環而紆鬱」

【旋踵】シュウ くびすをめぐらす。暫時の義。史記、吳起傳に「其父不レ旋レ踵、遂死ニ於敵ニ」

【旋轉】テン まはる。北史に「雲表見ニ一大鳥ニ射レ之、正中、其頭狀如ニ車輪ニ旋轉而下、乃鵰也」

【旋歸】キ かへる。古詩に「客行雖レ云レ樂、不レ如ニ早旋歸ニ」

【旋毬】キウ つむじかぜ。宋褧「霓旌豹節凌ニ旋飄ニ」

【旋風筆】フウヒツ 文詞を縱橫に屬する才。方鎭編年ニ「田承嗣簽ニ治文案ニ如ニ流水ニ、吏人相謂曰、世罕レ有ニ此旋風筆ニ」

【旋乾轉坤】ケンテンコン 天地を回轉する義。威を張り武を振ひ國家を改革するにいふ。韓愈「陛下卽位以來、躬聽斷、旋レ乾轉レ坤、天戈所レ麾、莫レ不ニ寧順ニ」

【旃】

イ。旃の略字。

【旌】

セイ、ジャウ。子盈切。庚。

㊀あらはす（表示）㊁はた（旗）㊂しるす（識別）。

【旌引】イン あらはし引き上ぐ。宋書に「令曰、前太尉參軍戴顒、秉レ操幽遁守レ志不レ渝、宜レ加ニ旌引ニ以弘ニ止退ニ」

【旌別】ベツ あらはしわかつ。書經に「旌ニ別淑慝ニ、表ニ厥宅里ニ」

【旌門】モン はたにてつくりたる門。周禮に「凡祭祀各建ニ其旗ニ、會同賓客亦如レ之、置ニ旌門ニ」

【旌命】メイ ㊀賢才を章かにして能吏に任ず。晉書に「搜ニ訪賢才ニ、旌ニ命三十餘人ニ、皆顯ニ名當時ニ」㊁はた。陸機「東帛旅ニ于丘園ニ、旌命交ニ于塗巷ニ」

【旌表】ヘウ 善行を賞してあらはし示す。南史、邵榮傳に「八世同居、旌ニ表門閭ニ」

【旌竿】カン はたざを。杜牧「旌竿慓慓旗燿燿」

【旌旄】ボウ さしづばた。楊修「襍ニ虹蜺之旌旄ニ」

【旌旂】キ はたの總稱。廣雅に「凡旗之名雜レ異、旌旂爲ニ之總稱ニ」

【旌旄】ボウ はたにつける羽毛の飾。梁簡文帝「謖謖車徒邁、飄飄旌旄懸」

【旌夏】カイ 行列のしるしに用ゐる大旗。左傳に「舞師題以ニ旌夏ニ」

【旌紱】セイフツ あらはしついづ。孫綽「國無ニ遺民ニ、而賢善之流、必見ニ旌紱ニ矣」

【旌庸】セイヨウ いさををあらはす。庾信「崇レ德旌レ庸」

【旌勞】セイラウ 前に同じ。元史に「右丞相脫脫、治レ河功成、宜レ有ニ異數以旌ニ其勞ニ」

【旌揭】ケイ あらはしかかぐ。又、しるし。（表揭）。丁謂「志ニ轅門ニ而旌揭」

【旌揭】ケイ あらはしあぐ。王昂「垂ニ旌揭之期ニ、崇ニ奬勵之道ニ」

【旌鼓】コイ はたとつづみと。晉書に「陳ニ乘輿車蓋旌鼓於其殿庭ニ」

【旌蓋】ガイ はたときぬがさと。齊書に「旌蓋飄颻、遠涉ニ淮淝ニ」

【旌旗】キ はた。蘇軾「軸艫千里、旌旗蔽レ空」

【旌賞】シヤウ 功績をあらはしほむ。宋史、趙上交傳に「上交周初、遷ニ刑部侍郎ニ上言乞、自今但能雪ニ活冤獄ニ、不レ限ニ中外官ニ、竝加ニ旌賞ニ」

【旌閭】リヨ 善行の人の名を閭門にかきあらはす。唐書、張逸秀傳に「所レ居堂、產ニ芝草ニ、犬乳ニ鄰貓ニ、中宗以爲ニ孝感ニ、旌ニ其閭ニ」

【旌賢】ケン 賢人をあらはす。（表賢）。後漢書に「德以旌レ賢、爵以建レ事」

【旌麾】キ はた。江總「北宮命ニ簫鼓ニ、南館列ニ旌麾ニ」

【旌錄】ロク あらはししるす。魏志に「文皇帝旌ニ錄先賢ニ」

【旌褒】ホウ あらはしほむ。柳宗元「宜レ加ニ旌褒ニ合レ于上下ニ」

【旌簡】カン あらはしえらぶ。韋曜「博選ニ良材ニ、旌ニ簡髦俊ニ」

【旌廉】レン はた。王安石「夾レ砌陳ニ旌廉ニ、褰レ簾進ニ佩環ニ」

【旌擢】タク あらはしあぐ。北齊書、辛術傳に「未レ蒙ニ旌擢ニ」

【旌顯】ケン あらはす。唐書、朱敬則傳に「字少連、亳州永城人、以ニ孝義ニ世被ニ旌顯ニ、一門六闕相望」

【旍】

セイ。旌に同じ。

【旍旗】キ はた。梁簡文帝「風急旍旗斷、塗長鐘馬疲」

【旄】

ボウ、ニ。女氏切。紙。

㊀旌旗の風に隨ふ貌、しなやかなる貌（旊旄）㊁たなびく貌、雲の貌（旊旄）㊂盛んなる貌（旊旄）。

【族】

㊀ソク、ゾク。昨木切。屋。

㊁ゾウ、ス。千候切。宥。

㊀やから、ともがら（類）㊁むらがる（叢）、あつまる（聚）㊂やじり（矢鋒）㊃周代にて百家の稱㊄うち（姓氏）㊅一族に同じ㊆族に同じ、ふし（音樂の節奏）。

說文に「从レ旦ニ从レ矢」

【族子】ゾク 親類のこども。漢書に「嚴助、會稽吳人嚴夫子子也、或言族家子也」

【族生】セイ むらがりおふ。爾雅に「木族生爲ニ灌ニ」

【族姓】セイ ㊀同姓と異姓と。書經に「王曰、嗚呼敬レ之哉、官伯族姓」注に「族同族、姓異姓也」㊁同じやから。晉書、諸葛恢傳に「王導嘗與レ恢戲、爭ニ族姓ニ」

【族味】ミ 〔動〕鶉の異名。清異錄に「鶉捕レ之者、多論ニ綱而獲ニ、故雌雄羣子、同被ニ鼎俎ニ、世人文ニ其名ニ、爲ニ族味ニ」

【族別】ベツ ㊀親族のわかち。周禮に「掌ニ三族之別ニ」㊁種類によりて分つ。道德指歸論に「物以レ族別」

【族姻】イン むこ又はよめの家族。張華「隆禮ニ崇親戚ニ、旁施ニ協族姻ニ」

【族殺】サツ みうちを合せころす。五代史、司空瓊傳に「都虞侯張裕多ニ過失ニ、瓊屢以レ法繩レ之、瓊有レ姪在レ梁、遣ニ家奴ニ召レ之、裕擒ニ其家奴ニ、以爲レ通ニ書於梁ニ」莊宗族ニ殺之ニ」

【族望】バウ いへがらのほまれ。南史、周敷傳に「廸（周廸）素無ニ薄閥ニ、又失ニ衆心ニ、倚ニ敷族望ニ、深求ニ交結ニ」

【族滅】メツ 一族をほろぼす。

【族譜】フ 一族のけいづ。南史に「族譜合百帙、七百餘卷」

【族類】ルイ 同じやから。史記、春申君傳に「族類離散」

【族纍】ルイ 神の名。漢書、注に「巫保族纍二神名」

八畫

【旍】ダ、ナ。乃可切。哿。旎に同じ。

【旒】エン。於豔切。豔。くらぶ（比）。

【旐】テウ、デウ。治小切。篠。はた。

九畫

【旊】㊀エン。衣險切。琰。㊁エフ、オフ。於業切。葉。おほふ（掩）、かくす。

【旒】リウ、ル。力求切。尤。はたあし、たれ。

【旒旌】セイ 十二のふきながしのつきたるはた。高唐賦、注に「旒旌、謂レ建ニ太常十二旒ニ」

【旒旄】リウボウ ふきながしつきて、長さ八尺あるはた。張說「旒旄飛ニ行樹ニ、帷宮宿ニ野煙ニ」

【旒綜】リウソウ はたあし。禮記、疏に「夏后氏漸文飫注、旄竿首又有ニ旒綜ニ」

【旒旗】リウキ たれのつきたるはた。潘岳「敢託ニ旒旗ニ、爰作ニ斯誄ニ」

【旒綴】テイ はたあし。杜甫「忠貞負ニ冤恨ニ、宮闕深ニ旒綴ニ」

【旒冕】ベン 衆に玉を貫きて前後にたれたる貴人のかんむり。隋書に「穆穆旒

晃、蘊誠畢敬」

【旅】 ㊀イウ、ユ。以周切。尤。㊁エウ。餘招切。蕭。㊂伊鳥切。篠。㊃ゐはたあし(旅)㊄旗の貌。

【旃】 サウ、セウ。所交切。肴。はたあし。

十 畫

【旛】 ホン、ボン。部本切。阮。とま(舟篷)。

【旖】 イ。於宜切。支。旌旗の風に從ふ貌。

【旖旎】 ㊀旌旗の風に從ふ貌。しなやかなり。史記に「旖旎從レ風」㊁盛んなる貌。楚辭に「紛旖旎乎都房」㊂雲の貌。漢書に「乘二雲蜺之旖旎一兮」

【旄】 エン。衣檢切。琰。旌旗の貌。キ、ギ。渠宜切。支。

【旗】 ㊀しるし(表標)㊁はた㊂一の星宿㊃箕に同じ。

【旗下】 はたもと。又、はたのした。

【旗色】 はたいろ。

【旗亭】 料理店、旗を立ててしるしとす、故に名づく。集異記に「開元中、侍人王昌齡、高適、王之渙、齊レ名、一日共詣二旗亭一貰レ酒」

【旗竿】 はたざを。張正見「含冰踏二馬足一、雜雨凍二旗竿一」

【旗旂】 はた。劉攽「風霆齊二命令一、龍虎會二旗旂一」

【旗廟】 前に同じ。唐書に「戚通開藩鎮、稍復舞二破陣樂一、然舞者衣二畫甲一執旗廟一、纔十人而已」

【旗旌】 前に同じ。宋之問「和風吹二鼓角一、佳氣動二旗旌一」

【旗章】 はたじるし。晉書に「諸侯觀二天子一、各建二其旗章一」

【旗魚】 〔動〕かぢきまぐろの異名。

【旗戟】 はたぼこ。(幢戟)。韓愈「晶光蕩相射、旗戟翩以森」

【旗偵】 軍旗たふる。敗軍にいふ。呂氏春秋に「賢主之舉也、豈必旗偵將鼓、而乃知二勝敗一哉」

【旗蓋】 はたときぬがさと。潘岳「旗蓋相望、偏師作レ援」

【旗鼓】 はたとつづみと。杜甫「蜀將分二旗鼓一、羌兵助二井泉一」

【旗幟】 はた。後漢書に「旗幟蔽レ野、埃塵連レ天」

【旗獲】 はたを立てえものなかく。公羊傳、注に「旗獲、建レ旗縣レ所レ獲也」

【旗旞】 いくさのはた。宋書、武帝紀に「旗旞首レ塗則八表響震、偏師先レ路則多壘雲徹」

【旗艦】 司令長官の坐乘せる軍艦。

【旗纛】 はた。唐書に「獲二馬牛槀駝旗纛一、不レ可レ計」

十一 畫

【旟】 ㊀キ、ギ。許歸切。微。㊁コン。古本切。阮。㊂㊀はたじるし(幟)㊁うごく、うごかす(動)㊃旗の名。

十二 畫

【旞】 クワウ、ワウ。呼廣切。養。さかはた(酒家の望子)。

十三 畫

【旝】 ケン、ゲン。魚窓切。豔。しるし(證)。

【旗】 ヘウ。匹招切。蕭。ひろがへる。

十四 畫

【旟】 シ。幟に同じ。

【旛】 ヘン、ホン。孚袁切。元。㊀はたじるし㊁はた(旗)㊂はたの飛揚する貌。

【旛旂】 はた。王令「我來安知神所依、尊堂寒窄風旛旂」

十五 畫

【旟】 セン。諸延切。先。はた。

【旟】 クワイ、エ。古外切。泰。㊀さしづばた㊁いしゆみ。スキ、ズキ。徐醉切。寘。はた。

十六 畫

【旗】 ヨ。以諸切。魚。㊀あがる(揚)㊁おほし(衆)㊂はた。

【旗旟】 はた。曾鞏「君子往守東南圻、旗旟綵錯如二翔翬一」

十八 畫

【旗】 ㊀スキ、ズキ。徐醉切。寘。㊁スキ。以追切。支。㊂旟に同じ㊃はた(旌)。

无 部

部首

【无】 ㊀ブ、ム。武夫切。虞。㊁ボ、モ。莫胡切。虞。なし(亡)。易の卦の名。易經に「无妄之疾、勿レ藥有レ喜」

【无咎】 とがなし。易經に「无咎者善補レ過也」

【无聞】 きこえず。

【无疆】 かぎりなし。易經に「坤厚載レ物、德合二无疆一」

【无】 ㊀キ。居豪切。寘。㊁のどつまる㊂いきつまる。

三 畫

【吞】 シ。疾二切。寘。口の小さき貌。

六 畫

【毙】 ケイ、カイ。古詣切。霽。たま(璧)。クワイ、ケ。公回切。灰。そばだつ。

七 畫

【既】 キ、ケ。居氣切。未。㊀すでに(已)㊁もはや㊂つく、つくす(盡)㊃うしなふ(失)㊄すこしく。

【既成】 すでに。とくに。莊子に「既已爲レ矣、且得レ有レ言乎」

【既定】 すでに出來あがれり。

【既倒】 すでに定まれり。

【既得】 すでにたふれてあり。韓愈「障二百川一而東レ之、廻二狂瀾於既倒一」

【既望】 すでに取得せり。陰曆十六日。(哉生魄)。蘇軾「壬戌之秋、七月既望」

【既設】 すでに設けおかれたり。

【既廩】 毎月の給米。中庸に「既廩稱レ事、所三以勸二百工一也」

【既濟】 易の卦の名。易經に「既濟亨小、利レ貞、初吉終亂」

【既生魄】 陰曆十六日の異名。

【既往不レ咎】 すでに過ぎ去りし事はとがめ立せず。論語に「成事不レ說、既往不レ咎」

【既】 キ、ケ。既の俗字。

八 畫

【琼】 リャウ、ラウ。力讓切。漾。㊀かなしむ(悲)㊁いたむ(酸楚)㊂うすし(薄)。

九 畫

【旣】 ㊀クワ、グワ。胡果切。哿。㊁禍の古文字。㊂㊀わざはひ㊁おどろく(驚)。

日 部

部首

【日】 ジツ、ニチ。人質切。質。㊀ひ(太陽)㊁ひかげ(晷影)㊂みつ(實)㊃ひび㊄さきに(往日)㊅のちに(來日)㊆こよみ(曆數)。

【日力】 終日のはたらき。又、毎日のはたらき。孟子に「去則極二日之力一、而後宿哉」

【日子】 ひづけ。南史に「今本無二上書年月日子一」

【日夕】 ひるよる。王粲「日夕涼風發、翩翩漂二吾舟一」

【日月】 日と月と。易經に「與二日月一合二其明一」

【日中】 ㊀まひる。又、まひる前後。說苑に「壯而好學、如二日中之光一」㊁春分の日。書經、注に「日中謂二春分之日一」

【日午】 まひる。正午。柳宗元「日午獨覺無二餘聲一、山童隔レ竹敲二茶臼一」

【日日】 まいにち。漢書に「淫侈之俗、日日以長」

【日用】 ひごとにつかふ。易經に「百姓日用而不レ知」

【日出】 日出づ。又、ひので。詩經に「羔裘如レ膏、日出有レ曜」

【日母】 ひ。太陽。枚乘「流攬無窮、歸二神日母一」

【日旦】 あさ。大戴禮に「日旦就レ業、而夕自省」

【日北】 太陽北方にあり。周禮に「日南則景短多レ暑、日北則景長多レ寒」

【日刊】 日日發行する新聞。

【日永】 ひながし。薩都剌「顧二茲林塘幽一、消二此閒日永一」

【日行】 ひあし。孟浩然「冬至日行遲」

【日色】 太陽のいろ。王維「泉聲咽二奇石一、日色冷二青松一」

【日光】 ひのひかり。北史、孝文文昭皇后傳に「后高氏、幼曾夢在二堂內一、立而日光自二窗中一照レ之、灼灼而熱」

【日次】 ひなみ。北齊書に「日次月紀、方極二九州一」

【日角】 額の中央骨の隆起せる處。後漢書、光武帝紀に「光武隆準日角」

【日沒】 日入る。又、日の入り。阮籍「日沒不レ周レ西、月出二丹淵中一」

【日宦】 曆を掌る官。左傳に「天子有二日宦一、諸侯有二日御一」

【日昃】 ひぐれ。後漢書、董仲舒傳に「日昃不レ暇レ食」

【日長】 年月ながし。晉書、李密傳に「臣盡二節於陛下一、之日長」

【日東】 日本國の稱。

【日夜】 ひるとよると。賈島「歸心日夜憶二咸陽一」

【日來】 ㊀ひごろ。㊁日日に來る。董仲舒「更化則可二善治一、善治則災害日去、福祿日來」

【日削】 いきほひ日日に減ず。史記に「屈原既死之後、楚日以削」

【日軌】 太陽の通過するみちすぢ。五代史に「黃道者日軌也、九道者月軌也」

【日者】 ㊀卜筮家の稱。史記に「有二日者傳一」㊁さきのひ。史記に「日者荊王筮二有其他一」

【日食】 太陰が太陽と地球との閒に來りて太陽をおほふこと。禮記に「日食則天子素服、而修二六宦之職一」

【日南】 太陽南方にあり。周禮に「日南則景短多レ暑、日北則景長多レ寒」

【日記】 ひびの出來事を書きのす。又、その帖。新序に「周舍事二趙簡子一、曰、願爲二諤諤之臣一、墨レ筆操レ牘、隨二君之後一、司二君之過一、而書レ之、日有レ記也、月有レ効也、歲有レ得也」

【日星】 ひとほしと。岳陽樓記に「日星隱レ耀、山岳潛レ形」

【日脩】 日ながし。淮南子に「陽氣勝則日脩而夜短」注に「脩長也」

【日俸】 ひびの給料。白居易「爲レ貧逐二日俸一」

【日乘】 ㊀乘は凌ぐなり、陽氣が陰氣を凌壓する義。君の勢力强きに喩ふ。後漢書に「日乘則有二妖風一、日蒙則有二地裂一」㊁ひびの記錄。

【日移】 ひかげうつる。潘岳「酒酣徒擾、樂闋日移」

【日御】 曆を掌る官。左傳に「天子有二日宦一、諸侯有二日御一」

【日章】 ひびに明かになる。禮記に「君子之道、闇然而日章」

【日晡】 ひぐれ。白居易「但惜春將レ晚、寧愁日漸晡」

【日域】 ㊀日の照らす區域內、卽ち、天の下。魏書に「世祖太武皇帝、英叡自レ天、籠二罩日域一」

【日祭】 まひにちまつる。國語に「蔡公謀父曰、日祭月祀、時享歲貢」

【日景】 ひかげ。周禮に「正二日景一、以求二地中一」

【日晷】 前に同じ。隋書に「揆二測日晷一、求二其盈縮一」

【日程】 毎日する仕事のみつもり。元史に「考試以二論及經義詞賦一、分爲二三科一、作二三日程一」

【日進】 日毎にすすむ。謝靈運「由レ敬而信、有二日進之功一」

【日蒙】 陽氣が陰氣に蔽はるる義。臣下の勢の强きに喩ふ。後漢書に「日蒙則有二地裂一」

【日新】 日毎に進歩す。易經に「日新之謂二盛德一」

【日落】 ゆふひ。鮑照「日落嶺雲歸」

【日際】 太陽のほとり。何遜「天未レ靜二波浪一、日際斂二烟霞一」

【日曆】 日日の出來事を書きのす。大戴禮に「凡民之藏貯、以及二山川之神明一、加二于民一者、發二國功一謀、豫戒必敬、會時必節二日曆巫祝一」

【日精】 〔植〕菊の異名。藝林伐山に「菊有二兩種一、花大氣香、莖紫者、爲二甘菊花一、此日精也」

【日誌】 ひびの出來事を書きのす。又、その帖。荀子に「王者之功名、不レ可レ勝二日志一也」志は誌に同じ。

【日魂】 ㊀日の神。參同契に「陽神日魂、陰神月魄」㊁藥の名。雲笈七籤、注に「丹藥名有二丹山日魂一」

【日蝕】 太陰が太陽と地球との閒に來りて太陽をおほふこと。史記に「春秋二百四十二年之閒、日蝕三十六」

【日輪】 ひ。太陽。韓愈「中夜起下視、溟波銜二日輪一」

【日課】 ひびの仕事のきめ。陸游「老人無二日課一、有レ興卽題レ詩」

【日暮】 ひぐれ。孟浩然「日暮孤舟何處泊」

【日錄】 ひびの出來事を書きのす。又、その帖。王氏類苑に「王安石既罷相、悔二其執政日無二善狀一、乃撰二神宗日錄一、歸二過於上一、掠二美於己一」

【日興】 ひびのたのしみ。杜甫「左相日興費二萬錢一」

【日邊】 日のほとり。李白「孤帆一片日邊來」

【日本研】 日本製のすずり。宋景濂集に「日本研銘、夷而華、四海一家、此非二文明之化一邪」

【日射病】 あつさあたり。

【日不レ移レ晷】 時を經ざるにいふ。漢書に「人不レ還レ踵、日不レ移レ晷」

【日月逾邁】 逾は益、邁は行なり、年老いて死期の近づくをいふ。書經に「我心之憂、日月逾邁、若レ弗二云來一」

【日月麗レ天】 日月の天に照すをいふ。梁武帝紀に「日月麗レ天、高明所二以表レ德、山岳麗レ地、柔博所二以成レ功一」

【日出三竿】 日出でて三竿の高さに至る。午前八時頃なり。南齊書に「日出三竿、黃色赤暈」

【日亦不レ足】 終日之を爲すも、爲し盡す能はず。書經に「我聞吉人爲レ善、惟日不レ足、凶人爲二不善一、亦惟日不レ足」

【日改月化】 日に日にうつりかはる。莊子に「一晦一明、日改月化、日有レ所レ爲、而莫レ見二其功一」

【日削月割】 日に日におとろへゆく。六國論に「日削月割、以趨二於亡一」

【日陵月替】 前に同じ。眞觀政要に「日陵月替、以至二危亡一」

【日就月將】 日に日に進歩す。詩經に「維予小子、不二聰敬一、止、日就月將、學有レ緝二熙于光明一」

【日暮途遠】 期する所なほ大なるに、年已に老いたるに喩ふ。史記に「伍子胥曰、吾日暮途遠、故倒行而逆二施之一」

【日薄二西山一】 老衰して死に垂んとするをいふ。李密「但以劉日薄二西山一、

氣息奄奄、人命危淺、朝不レ慮レ夕」

【日月無ニ私照一】 公平に恩を施すないふ。禮記に「天無ニ私覆一、地無ニ私載一、日月無ニ私照一」

【日出處天子】 日本國の天子といふ意。隋書、倭國傳に「大業三年、遣レ使朝貢、其國書曰、日出處天子、致ニ書日沒處天子一、無レ恙、帝不レ悅」

【日日新又日新】 毎日毎日あらたにす。日々逐うて斷えず進歩す。大學に「苟日新、日日新又日新」

【日下五色雲見】 瑞兆のあらはるるないふ。宋史、韓琦傳に「弱冠擧ニ進士一、名在ニ第二一、方唱レ名、太史奏、日下五色雲見、左右皆賀」

【日中則昃月盈則食】 盛んなる者は必ず衰ふることあるに喩ふ。易經に「日中則昃、月盈則食、天地盈虛、與レ時消息、而況於人乎、況於鬼神一乎」

【日中則移月滿則虧】 前に同じ。史記に「日中則移、月滿則虧、物盛則衰、天地之常數也」

【日月逝矣歲不ニ我與一】 歲月の人を待たざるないふ。論語に見ゆ。

【日月欲レ明浮雲掩レ之】 人の本性の動もすれば私慾の爲に掩はるるに喩へ、又、奸臣が君の明を掩ふにも喩ふ。淮南子に見ゆ。

【日出而作日入而息】 終日勞作して、晚に休む。帝王世紀に「日出而作、日入而息、鑿レ井而飲、耕レ田而食、帝力于レ我何有哉」

【日計不レ足歲計有レ餘】 目前の利はなければ、久しくしてその益なるを見るないふ。莊子に「吾日計レ之而不レ足、歲計レ之而有レ餘、庶幾其聖人乎」

【日月不レ爲ニ一物一晦ニ其明一】 明王は一人の爲に法を枉ぐべからざる意に喩ふ。孝經、注に「日月不レ爲ニ一物一晦ニ其明一、明王不レ爲ニ一人一枉ニ其法一」

一 畫

【日】 タン。得案切。翰。
一あした(朝)二あかつき(曉)三つとに(早)四あきらか(明)五あかす。
說文に「明なり、日一の上に見はるるに从ふ、一は他なり」

【旦夕】 あしたとゆふべと。あさばん。白居易「旦夕秋風多、衰荷半傾倒」

【旦日】 あした。史記に「旦日饗ニ士卒一、爲擊ニ破沛公軍一」

【旦旦】 一あさなあさなに。毎朝。列子「月月獻ニ玉衣一、旦旦薦ニ玉食一」二あきらかなる貌。詩經に「信誓旦旦」

【旦明】 よあけがた。儀禮に「宗人曰、旦明行レ事、主人曰諾、乃退」

【旦昔】 あしたといふべと。あけくれ。管子に「旦昔從ニ事於此一」

【旦風】 あしたのかぜ。周捨「遙遲乘ニ旦風一、蕙翠揚ニ朝旭一」

【旦書】 ひるま。孟子に「旦晝之所レ爲、有レ梏ニ亡之一矣」

【旦朝】 あした。あさ。高唐賦に「旦朝視レ之如レ言、故爲立レ廟、號曰ニ朝雲一」

【旦暮】 あしたとゆふべと。又、あけくれ。顏氏家訓に「古人云、千載一聖猶ニ旦暮一也」

【旦潮】 あさしほ。鮑照「浸淫旦潮廣、瀾漫宿雲滋」

二 畫

【旨】 シ。職雉切。紙。
一よし、うつくし(美)二うまし三むね四こころばせ五こころざし。
六書正譌に「旨を俗に、旬に作るは非なり」

【旨酒】 うまきさけ。詩經に「我有ニ旨酒一、嘉賓式燕以敖」

【旨意】 かんがへ。わけ。おもむき。易經、疏に「旨意深遠」

【旨遠】 むね深遠なり。春秋、序に「言高則旨遠、辭約則義微」

【旨趣】 むね。わけ。おもむき。孝經、序に「舉ニ六家之異同一、會ニ五經之旨趣一」

【皂】 エウ。烏皎切。篠。はるか(杳)。

【早】 サウ、ソウ。子皓切。皓。
一あした(晨旦)二つとに三さきんず(先)四はや五はやし、すみやかなり(速)六柞栗の屬(阜に同じ)。

【早白】 いそぎ申す。漢書に「公不ニ早白一、與俱受レ戮矣」

【早世】 わかじに。左傳に「無祿早レ世隕レ命、寡人失レ望」

【早早】 はやばや。杜甫「南楚青春異、暄寒早早分」

【早行】 朝はやく出發す。書言故事に「早行曰ニ戴レ星而出一」

【早成】 はやくおとなぶ。蜀志、諸葛瞻傳に「亮與ニ兄瑾書一曰、瞻已八歲、聰慧可レ愛、嫌ニ其早成一、恐不レ爲ニ重器一」

【早急】 いそぐ。(火急、迅急)。

【早計】 はやまる。

【早起】 はやくおく。(蚤起、晨起)。

【早晏】 はやきとおそきと。元結「漫遊無ニ遠近一、漫樂無ニ早晏一」

【早涼】 常よりはやくすずけだつ。はやきすずけ。劉禹錫「碧梧含ニ早涼一」

【早晚】 はやきとおそきと。又、おそかれはやかれいづれ。李白「不レ知楊伯起、早晚向ニ關西一」

【早梅】 はやざきのうめ。唐太宗「榮雪臨ニ春岸一、參差開ニ早梅一」

【早速】 すぐに。すみやかに。

【早雪】 はやく降りたるゆき。

【早婚】 年わかくして結婚す。詩經、疏に「文王十五、生ニ武王一、武王有ニ兄伯邑考一、故知人君早婚所ニ以重ニ繼嗣一」

【早娶】 はやくめとる。

【早朝】 あさ。あさまだき。(早旦。昧旦)。五燈會元に「金果早朝獲摘去、玉華晚後鳳銜來」

【早開】 はやくひらく。

【早逢】 はやく出世す。呂溫「縱使他時能早逢、定知不レ作ニ黑頭人一」

【早歲】 わかきよはひ。蘇軾「早歲便懷ニ齊物志一」

【早潮】 はやしほ。陶翰「艤棹乘ニ早潮一、潮來如ニ風雨一」

【早稻】 わせいね。白居易「碧毯綠頭抽ニ早稻一」

【早熟】 はやくじゅくす。北史に「江南土熱、水田早熟」

【早曉】 よあけがた。(拂曉)。

【早學】 はやまなび。

【早穗】 わせいねのほ。范成大「早穗已垂垂、晚苗猶剪剪」

【早霜】 はやく降りたるしも。昌林に「早霜晚雲、傷レ禾害レ稼」

【早歸】 はやくかへる。李白「東方日出起、早晚向ニ關西一」

【早鴉】 あけがらす。李白「東方日出啼ニ早鴉一、城門人開掃ニ落花一」

【早出暮入】 朝ゆき日暮れてかへる。墨子に「賢者之治レ邑也、早出暮入」

【早寢晏起】 はやくいねおそくおく。禮記に「孺子早寢晏起、惟所レ欲、食無レ時」

【昭】 テウ。他調切。蕭。くらし(日晦)。

【旬】 ジュン、ジュン。詳遵切。眞。
一とをか(十日)二あまねし(徧)三ひとし(均)四みつ(滿)五均に同じ。

【旬日】 とをか、十日。南史、宋武帝紀に「爭レ之旬日乃從」

【旬年】 十年。魏志に「修レ之旬年、國富民安矣」

【旬始】 星の名。史記に「旬始出ニ於北斗旁一、狀如ニ雄雞一」

【旬朔】 十日とついたちと。又、十日間。南史に「遨ニ遊山水一、動ニ盈旬朔一」

【旭】 キョク、ゴク。許玉切。沃。
一あさひ二あきらかなり(明)三おごれる貌四自得の貌五鼓動する聲六日の旦に出づる貌。

【旭日】 あさひ。傅休奕「逸景何晃晃、旭日照ニ萬方一」

【旭旦】 朝日さす時。韋應物「開レ門臨ニ廣陌一、旭旦車馬喧」

【旭旭】 一おごれる貌。爾雅に「旭旭蹻蹻」二自得の貌。漢書「嘻嘻旭旭」三鼓

動の聲。漢書に「洶洶旭旭」

【旭旗】日の丸のはた。日章旗。

【旦】テイ、チャウ。徒鼎切。迴。むなし(空)。

三畫

【旰】㊥カン。古案切。翰。㊦居寒切。寒。
㊥一ひぐれ(晩)二くる(晩)三さかんなる貌(盛)㊦ひめぐる(日行)。
【旰旰】盛んなる貌。史記に「皓皓旰旰兮、闔廬爲河」
【旰食】勤勞しておそく食事す。左傳に「楚君大夫、其旰食乎」

【旱】㊥カン。乎旰切。翰。㊦カン、ガン。胡管切。旱。
ひでり。
【旱天】なつのそら。又、ひでり。
【旱魃】ひでり。詩經に「旱魃爲虐、如惔如焚」
【旱稻】ひでりにも害はれぬいね。齊民要術に「旱稻用二下田一、白土勝二黑土一」
【旱則資舟水則資車】ヒデリニハスナハチフネヲシシ ミヅニハスナハチクルマヲシス ひでりには舟を用意し、洪水には車を用意す、不時に備ふべきをいふ。史記に「知闘則修備、時用則知物、二者形則萬貨之情、可二得而觀一已、故歲在金穰、水毀、木饑、火旱、�旱則資舟、水則資車、物之理也」

【旲】㊥タイ、ダイ。徒來切。灰。㊦エイ、イャウ。於丙切。梗。
㊥ひかり(日光)㊦おほいなり(大)。
【昇】一こまぬく二たすく(扶)。
パウ、マウ。謨郎切。陽。
あつさ(旱熱)。
テキ、チャク。都歷切。錫。
あきらかなり(明)。
あきらかなり。隸釋魯峻碑に
【旷】コ、ク。匈于切。虞。
一あした(朝)二あさひ三おほいなり(大)。

四畫

【昔】シ、時の古文字。
【昨】ゴ、ゲ。疑古切。奚。
一あきらかなり(明)二ひざか
【晏】ピン、ミン。武巾切。眞。
一あきのそら(秋天)二そら(天空)三あはれむ(憫)。
一あきのそら。爾雅に「秋爲二
【晏天】一そら。書經に「日號二泣于晏天于父母一」
【旼】ピン、ミン。眉貧切。眞。
やはらぐ(和)。

【旽】ドン。他昆切。元。
㊦シュン、ジュン。朱閏切。震。
㊥あさひ(曙に同じ)㊦れんごろなり(懇誠)。
【昀】ドツ、ノチ。奴骨切。月。
ゆふやけ(日入色)。
ワウ。于放切。漾。
一ひかり二うるはし(美)三ひがさ(日暈)。
【旺盛】さかんなり。
【昀】キン。俞倫切。眞。
ひかり(日光)。
【昂】㊥カウ、ガウ。五岡切。陽。
㊦魚向切。漾。
(明)二たかし(高)㊦あがる五馬の行く貌(昂昂)㊦めぐみ(德)。
【昂昂】一あきらかなり。詩經に「顒顒昂昂、如圭如璋」二馬の行く貌。楚辭に「寧昂昂若二千里之駒一乎」
【昂然】自負する貌。
【昂聳】たかくそびゆ。高啓「無心昂聳上二雪漢一」
【昶】ショク、シキ。昃に同じ。
かたぶく(側)。
ショク、シキ。札色切。職。
一かたぶく二ひるすぎ(午後)。

【昈】㊥ハン、ヘン。布綰切。潸。㊦ヘン、ベン。匹見切。霰。
一おほいなり(大)二あきらかなり(明)。
ケフ、ゴフ。巨業切。葉。
【昈】かわく、かわかす(乾)。
コン。古渾切。元。
一おなじとも(同)二のち(後)三あに(兄)四あきらかなり(明)五崑に通ず㊦蜫に同じ。
【昆布】コン〔植〕海草の名。本草集解に「昆布亦名二綸布一、生二南海一、葉如二手大一、似二薄苔一、紫赤色」
【昆池】コン うみ。江總「玉軸昆池淚」
【昆夷】コン 昆吾といふ夷國。歐陽修「昆夷道遠不二復通一、世傳二切玉一誰能窮」
【昆弟】コイン あにおとうと。高允「怡怡昆弟、穆穆家庭」昆は昆に同じ。
【昆季】コン 弟をいふ。又、兄弟の義にもいふ。徐陵「孤二三昆季、方可二戴レ天被二此慈恩一」
【昆後】コン あとつぎ。子孫。蔡邕「仰二邈古一、耀二昆後一」
【昆孫】コン 來孫の子、卽ち、玄孫の孫なり。爾雅に「來孫之子爲二昆孫一」
【昆蟲】コチュウ 多くの蟲類。漢書に「草木昆蟲、咸得二其所一」
【昆吾劍】コンゴケン 昆吾國にて作りたる利刀。黃昏故事に「周穆王有二昆吾劍一、削レ鐵如レ泥」

【昔】カイ、ケイ。皆に同じ。
ショウ、ジョウ。識蒸切。蒸。
一のぼる、あがる(上)二たひら
【昇】かなり(平)三あぐ、のぼす。
【昇天】天にのぼる。後漢書、虞延傳に「延初生時、其上有レ物、若二一疋練一、遂上二昇天一、占者以爲レ吉」
【昇平】世をさまりてしづかなり。
【昇汞】〔理〕第二鹽化水銀。
【昇陟】のぼる。水經、注に「太室山丁大澤周數里、中略縝素之士、多泛レ舟昇陟、取二暢山情一」
【昇降】あがりおり。
【昇敍】官位をのぼす。元稹「文武並用、必推二其才一、久次不レ遷、則有二昇敍一」
【昇騰】たかきにのぼる。孟郊「鑿出幽隱端、氣象皆昇騰」
【昇氣】コ、ク。侯古切。麌。
一あきらかなり(明)二あかき(赤文)。
【昕】あや。赤きあや。西京賦に「絳昕昕以弘敞」
【昕昕】コン 赤きあや。分兩切。養。
【昉】ハウ、バウ。分兩切。養。
一あきらかなり(明)二まさに、たまたま(適)。
【昊】カウ、ゴウ。胡老切。皓。
一なつのそら(夏天)二そら(空)三おほいなり(大)四さかんなり。

【昊天】一なつのそら。爾雅釋に「夏爲二昊天一」二そら。周禮に「以二禋祀一祀二昊天上帝一」
【昊昊】カウカウ さかんなる貌。李巡「萬物盛壯、其氣昊昊」
【昌】シャウ、サウ。尺良切。陽。
一ひのひかり(日光)二さかんなり(盛)三よきことば(美言)四もの(物)五うつくし、狡好なる貌六あやめ(菖蒲)。
【昌乎】コシャウ さかんなる貌。
【昌平】ヘイシャウ 國運さかえて世の中しづかなり。
【昌本】シャウホン しゃうぶの根。馬融「芘蕤芸蓋、昌本深蒲」
【昌言】ゲンシャウ よきことば。書經に「帝曰、來禹、汝亦昌言」
【昌阜】シャウフ さかんなり。左傳に「韓氏其昌二阜于晉一乎」
【昌披】シャウヒ しまりなし。離騷に「何桀紂之昌披兮、夫唯捷徑以窘步」
【昌昌】シャウシャウ さかんなる貌。李商隱「春風雖二自好一、春物太昌昌」
【昌富】シャウフク さかんにとむ。易林に「充二滿帝室一、家國昌富」
【昌朝】シャウテウ 當代の朝廷。鮑照「夙富二昌朝一、早值二恩洽一」
【昌陽】シャウヤウ 〔植〕しゃうぶ。韓愈「嘗聞二醫師以二昌陽一引二年、欲レ進二其稀耆一也」

【昌運】さかんなる運勢。高啓「獻符多士歌」「昌運」。

【昌盛】さかんなり。南史、齊高帝紀に「子孫當昌盛」。

【昌樂】さかえたのしむ。史記に「寢兵休卒養馬、世世昌樂」。

【昌熾】さかんなり。說苑に「夫穀者國家所以昌熾、士女所以姣好」。

【昭】

ケン、ガン。許元切。元。あきらかなり(明)。

【明】

メイ、ミャウ。武兵切。庚。

【明】一あきらかなり二あきらかにしてまことなり。左傳に「高陽氏有才子八人、齊聖廣淵、明允篤誠、天下之民、謂之八愷」。禮記に「夏后氏尙明水」。神に供ふるみづ。

【明水】法典にあきらかに記しある文言。典引に「展放唐之明文」。

【明文】あす。あくるひ。論語に「明日予路行以告」。

【明日】

【明王】一かしこききみ。莊子に「明王之治功蓋天下、而似不自己」二〔佛〕三寶及び國土人民等を擁護する天部の神。

【明火】日光よりとりたるひ。又、あかるきひ。周禮に「凡卜以明火爇燋」。

【明月】くもりなきつき。張若虛「海上明月共潮生」。

【明旦】あくるあさ。張說「故歲今宵盡、新年明旦來」。

【明目】あきらかなるめ。又、めをあきらかにす。管子に「聰耳明目、不爲愛金財」。

【明示】あきらかにしめす。左傳に「明示百官」。

【明白】あきらかなり。莊子に「夫明白于天地之德者、此之謂大本」。

【明光】あきらかにひかる。又、あきらかなるひかり。書經に「惟公德明光于上下、勤施于四方」。

【明夷】易の卦の名。易經に「明夷利艱貞」。

【明衣】布にて作りたる衣。齋戒の時に著る。論語に「齊必有明衣、布」。

【明年】あくるとし。來年。劉廷芝「明年花開復誰在」。

【明妃】前漢元帝の妃の王昭君。杜甫「翠山萬壑赴荊門、生長明妃尙有村」。

【明妝】うるはしきよそほひ。李羣玉「小姑洲北浦雲邊、二女明妝共儼然」。

【明劭】あきらかにしてうつくし。齊書、樂志に「皇烈載挺明劭」。

【明志】志をあきらかにす。諸葛亮「非澹泊、無以明志」。

【明戒】あきらかなるいましめ。韓愈「溫存感深惠、琢切奉明戒」。

【明秀】さとくひいづ。晉書、王衍傳に「衍、神情明秀、風姿詳雅」。

【明良】君賢明に臣忠良なり。唐書に「君臣明良、志叶議從」。

【明快】あきらかにさわやかなり。蘇軾「曉窗明快夜堂深」。

【明制】私曲なき法制。申鑒に「王之政、中略五曰明制」。

【明河】あまの川。歐陽修「星月皓潔、明河在天」。

【明命】天よりのめい。(大命、休命)。書經に「顯諟天之明命」。

【明法】一おきてをあきらかにす。又、あきらかなるのり。莊子に「四時有明法、而不議」二法律を主とする科目の名。又、古、我國の大學寮にて、律令格式を修めし科。

【明果】智あきらかにして決斷よし。五代史、周世宗家人傳に「宣懿皇后苻氏爲人、明果有大志」。

【明府】縣令をいふ。類書纂要に「稱太守縣令、皆曰明府」。

【明治】あきらかになさむ。あきらかになさまる。易經に「聖人南面聽天下、嚮明而治」。

【明星】金星をいふ。詩經に「昏以爲期、明星煌煌」。

【明幽】現世と冥土と。韓愈「病眛臥林樾、分知隔明幽」。

【明宣】あきらかにしめす。崔瑗「辛尹順訪、文武明宣」。

【明者】智あきらかなる人。易經、注に「闇者求明、明者不昏于闇」。

【明度】あきらかなる才能。晉書、山濤傳に「帝手詔曰、中略君才明度、豈當介意耶」。

【明指】あきらかなる旨。あきらかなるさしづ。漢書に「願有至愚極陋之累、不足以塞厚望、應中略明指」。

【明信】一たしかなるおとづれ。朱熹「亦不得明信、令人懸心耳」二あきらかなる誠の心。左傳に「苟有明信、澗谿沼沚之毛、蘋蘩薀藻之菜、中略可薦於鬼神、可羞於王公」。

【明訓】あきらかなるをしへ。逸周書に「選官以明訓、頑民乃順」。

【明眞】あきらかなる天理。阮瑀「何患處貧苦、但當守明眞」。

【明悟】あきらかにさとる。又、さとし。晉書に「傅咸、風格峻整、復性明悟」。

【明哲】あきらかにして能く事を察す。又、その人。書經に「知之曰明哲、明哲實爲則」。

【明效】あきらかなるいさを。あきらかなるしるし。曹植「伯樂馳千里、明君致太平、任賢使能之明效也」。

【明珠】ひかるたま。蔡邕「明珠不瑩、焉發其光」。

【明神】あらたかなるかみ。左傳に「國之將興、明神降之、監其德也」。

【明時】をさまれる世。杜甫「罷歸無舊業、老去戀明時」。

【明悉】あきらかに知る。あきらかにつくす。南史に「樞博學明悉舊章」。

【明細】くはしくこまかなり。

【明章】あきらかにあらはす。禮記に「聽天下之內治、明章婦順」。

【明規】あきらかなるのり。阮瑀「傳告後代人、以此篇明規」。

【明旌】あきらかにあらはす。子華子に「明旌善類、而誅鋤醜厲」。

【明晦】あきらかなるとくらきと。賢きと愚なると。梁武帝「相去既路遠、明晦亦懸殊」。

【明淨】けがれなくきよし。晉書に「火珠皎然明淨、以瓢取吞之」。

【明淑】あきらかにしてきよし。馮衍「以明淑之德、乘大使之權」。

【明清】あきらかなり。書經に「今天相民作配在下、明清于單辭」。

【明朗】ほがらかなり。淮南子に「文彩明朗潤澤」。

【明敎】あきらかなるをしへ。又、敎をあきらかにす。史記に「魏王曰、寡人不肖、未嘗得聞明敎」。

【明敏】さとし。はしこし。北史に「唐邕少明敏、有才幹」。

【明堂】むかし、王者の諸侯を朝參せしめし殿堂の名。又、朝廷。孟子に「明堂者、王者之堂也」。

【明媚】あざやかにうつくし。(鮮媚)。李成「春山明媚、夏木繁陰」。

【明詔】あきらかなるみことのり。董仲舒「陛下發德音、下明詔」。

【明犀】角のひかるさい。洞冥記に「吠勒國貢犀四頭、狀如水兕、角表裏有光、因名明犀」。

【明智】あきらかにしてちゑあり。崔駰「求莫鄒於明智」。

【明絢】あきらかにしてあやあり。蘇軾「岡巒蔚回合、金碧爛明絢」。

【明朝】あすのあさ。高適「霜鬢明朝又一年」。

【明發】夜のあけんとするころ。詩經に「明發不寐、有懷二人」。

【明盛】道あきらかにしてさかんな

り。王融「幸哉明盛世、壯矣帝王居」

【明視】（動）うさぎの異名。禮記に「凡祭ニ宗廟一之禮、免曰ニ明視一」

【明察】あきらかに見抜く。（審察、彰察）。韓非子に「不ニ明察一、不レ能レ燭レ私」

【明解】あきらかにしる。又、あきらかにときあかす。後漢書に「練ニ達事體一、明ニ解朝章一」

【明聖】知德あきらかにさとし。又、その人。漢書に「高皇帝、明聖威武」

【明經】㊀聖賢の書をあきらめ知る。漢書、平當傳に「以ニ明經一爲ニ博士一」㊁古、我國の大學寮にて、經書を修めし科。

【明著】あきらかなり。晉書に「功勳明著、賞勸隨レ之」

【明廟】あきらかにして整ふ。南史、江革傳に「爲レ政明廟、豪彊憚レ之」

【明義】道理をあきらかにす。書經に「敦レ信明レ義、崇レ德報レ功」

【明殿】墓の側に立つるとの。五代史に「其國君死葬、則于ニ其墓側一起レ屋、謂ニ之明殿一」

【明掩】あきらかにはかる。程琳「天載悠藐、無レ容ニ明掩一」

【明愼】あきらかにしてつつしむ。易經に「君子以明愼」

【明道】あきらかなるみち。又、みちをあきらかにす。漢書に「明ニ其道一、不レ計ニ其功一」

【明滅】あかるくなり又くらくなる。杜甫「回レ首鳳翔縣、旌旗晚明滅」

【明照】あきらかなるひかり。元稹「曉日初明照」

【明辟】聰明なる君。書經に「周公拜ニ手稽首曰、朕復ニ子明辟一」

【明暉】あきらかなり。范成大「圓景明暉倚雲立」

【明聞】あらはれきこゆ。國語に「諸稽郢曰、今天王既封殖、越國以明ニ聞於天下一」注に「明、顯也」

【明徵】かすかなるをあきらかにす。禮記に「夫禮者君之柄也、所レ以別レ嫌明レ微、儐ニ鬼神一、考ニ制度一、別ニ仁義一」

【明遠】あきらかにして深遠なり。晉書に「雅量弘高、達見明遠」

【明暢】あきらかにしてのぶ。宋史に「汚言レ事、委曲敷繹、中節音吐明暢」

【明瞳】あきらかなるひとみ。元稹「波澄兩明瞳」

【明箴】あきらかなるいましめ。高允「敬承ニ嘉誨一、永佩ニ明箴一」

【明賞】あきらかにほむ。韓非子に「先王明賞以勸レ之、嚴刑以威レ之」

【明慧】あきらかにさとし。（察慧）。論衡「明慧聰善」

【明鄰】あきらかにかがやく。鸚鵡賦に「合ニ火德之明輝一」

【明毅】智あきらかにしてつよし。唐書、吐蕃傳に「性明毅、用レ兵有ニ制節一」

【明銳】あきらかにするどし。唐書、元稹傳に「稹性明銳、遇レ事輒舉」

【明德】㊀あきらかにして人道にかなひたるおこなひ。書經に「黍稷非レ馨、明德惟馨」㊁天よりうけたるくもりなき本性。大學に「大學之道、在レ明ニ明德一、在レ親レ民、在レ止ニ於至善一」

【明誼】あきらかにしてさとし。宋書、三王傳に「幼而明穎、姿顏美麗」

【明確】たしかにしてあきらかなり。

【明辨】あきらかにわきまふ。禮記に「愼思之、明辨レ之」

【明曉】あきらかなり。あきらかに通ず。南史、孔顗傳に「明ニ曉政事一」

【明器】葬式の用具。儀禮に「既夕陳ニ明器于乘車之西一」注に「明器、藏器也」

【明瞭】あきらかなり。郭熙「高遠者明瞭、深遠者細碎」

【明戀】あきらかにしてさかんなり。顏延之「蓄軫豈明戀、善遊皆聖仙」

【明闇】あきらかなるとくらきと。論衡に「明闇不レ能ニ竝知一」

【明燭】あかるきともしび。ともしびをあかるくす。拉朴子に「明燭宵擧、飛蟲撃起」

【明燦】あきらかなり。雲谷雜記に「是夕果晴、星斗明燦」

【明達】あきらかに通ず。漢書に「高祖不レ修ニ文學一、而性明達、好レ謀能聽」

【明嫥】あかりを取るあな。方鳳「天光一道燭ニ扉內一、知此明嫥從レ何穿」

【明燥】あかるくしてかわけり。左傳、疏に「以ニ所レ居下濕塵埃故一、欲レ更レ於ニ明燥之處一」

【明鮮】あきらかにあざやかなり。韋應物「夏條綠已密、朱蕚綴明鮮」

【明聰】目あきらかに耳さとし。智識すぐれたるにいふ。宋之問「天高難レ訴、遠負ニ明聰一」

【明曜】あきらかにかがやく。晉書に「明曜參ニ日月一、功化侔ニ四時一」

【明鏡】㊀ふくひかるかがみ。漢書に「清水明鏡、不レ可ニ以形逃一」㊁あきらかにす。漢書、衞姬傳に「深說ニ經義一、明ニ鏡聖法一」

【明斷】あきらかに斷ず。あきらかなる判斷。唐書に「憲宗英果明斷、欲レ治ニ僭叛一、以法度一」

【明識】あきらかにものをしる。遜遜「雅才明識、敏行能文」

【明證】あきらかなるあかし。潛夫論に「曲木惡ニ直繩一、重罰惡ニ明證一」

【明麗】あきらかにしてうつくし。碧雞漫志に「春雨始晴、景色明麗」

【明曜】あかるくひかる。述異記に「帝問ニ方朔一、何謂ニ洞穴珠一、朔曰、河底有ニ一穴一、深數百丈、中有ニ赤蜂一、蜂生ニ此珠一、徑寸、明耀絕レ世」

【明辯】あきらかなる辯舌。隋書、李子雄傳に「明辯有ニ器幹一、帝甚任レ之」

【明靈】あきらかなるみたま。玉海に「眞歲星之王氣、赫上帝之明靈」

【明顯】あきらかにあらはる。淨住子に「洞ニ達三世一、了ニ照萬有一、卓然明顯、英聖超羣」

【明鑑】あきらかなるかがみ。ふきてほん。唐書に「明鑑所ニ以照レ形、往事所ニ以知レ今」

【明驗】あきらかなるしるし。法苑珠林に「譬ニ六趣之明驗一」

【明明地】あからさまに。

【明庶風】東方よりふくかぜ。史記に「明庶風居ニ東方一、衆物盡出也」

【明礬石】〔鑛〕明礬製造の原料とする硫酸及び礬土の化合物。

【明七才子】明代に相結んで徒をつくりし七人の詩人。學山錄に「隆萬間、李于鱗、王世貞、吳國倫、徐中行、宗臣、梁有譽、謝茂秦、號ニ七才子一、見ニ錢謙益所レ記」

【明十才子】明代に相結んで徒をつくりし十人の詩人。學山錄に「李夢陽、與ニ同レ時者、何景明、徐禎卿、邊貢、顧璘、鄭善夫、陳沂、朱應登、康海、王九思、號ニ十才子一、見ニ李夢陽傳一」

【明月之珠】やみよにもひかりを發するたま。李斯「垂ニ明月之珠一、服ニ太阿之劍一」

【明月爲レ燭】あきらかなる月を以て燈火に代ふ。唐書に「陸羽嘗問、孰爲ニ往來一者、對曰、太虛爲レ室、明月爲レ燭、與ニ四海諸公一共處、未ニ嘗少別一、何有ニ往來一」

【明目張膽】奮發して事に當るにいふ。唐書、韋思謙傳に「丈夫當ニ敢言地一、須レ要ニ明目張膽以報ニ天子一、焉能祿祿保ニ妻子一耶」

【明見ニ萬里一】聰明なるに喩ふ。後漢書に「璽書既至ニ河西一、咸驚以爲ニ天子明見ニ萬里之外一」

【明明赫赫】あきらかにかがやく。詩經に「明明在レ下、赫赫在レ上」

【明眸皓齒】あきらかなるひとみと白き齒と。美人を形容するにいふ。杜甫「明眸皓齒今何在、血污遊魂歸不レ得」

【明珠闇投】あきらかなる光輝を發する珠を闇中に投ず。至寶も人に贈るに道を以てせざれば卻って怨を招く義。史記に「明月之珠、夜光之璧、以レ闇投ニ人於道路一、人無レ不ニ按レ劍相眄一者也」

【明哲保レ身】理に順ひ事を處して身を全うす。詩經に「既明且哲、以保ニ其身一」

【明窗淨几】メイサウ　あきらかなる窗の下に清きつくゑ。歐陽修「蘇子美嘗言、明窗淨几、筆硯紙墨、皆極精良、亦自是人生一樂、然能得二此樂一者甚稀」

【明察二秋毫一】メイシツガウ　眼力のするどきにいふ。秋毫は微細なり。孟子に「明足二以察二秋毫之末一」

【明鏡止水】メイキヤウシスイ　心の潔白なるにいふ。莊子に「鑑明、則塵垢不レ止、止則不レ明也」又「仲尼曰、人莫レ鑑二於流水一、而鑑二於止水一」

【明天子在レ上】メイテンシカミニアリ　聰明なる天子朝廷に在す。韓愈「爲レ我謝曰、明天子在レ上、可二以出而仕一矣」

【明珠出二老蚌一】メイシユヲロウバウイヅ　老蚌はどぶがひなり、子の父に勝るに喩ふ。北齊書、陸卬傳に「刑邵謂二其父一曰、吾以卿老蚌逢出二明珠一」

【明駝千里足】メイダセンリノアシ　健脚なる駱駝。木蘭辭に「願驤二明駝千里足一、送レ兒還レ故鄉」

【明二四目一達二四聰一】シモクヲアキラカニシシソウヲタツス　廣く事物を見聞するにいふ。書經に「詢二于四岳一、闢二四門一、明二四目一、達二四聰一」

【明主愛二一嚬一笑一】メイシユハイヲビンイツセウヲアイスム　明君は一たび顏をしかめ、一たび笑ふをもみだりにせず。羣臣の己に倣ひて意を迎へんことを力むるを以てなり。韓非子に「吾聞、明主之愛二一嚬一笑一、嚬有二爲嚬一而笑有二爲笑一、今夫袴豈特嚬笑哉」

【明鏡爲二醜婦之冤一】メイキヤウトナルシウフノアダトナル　惡人の善人ないむに喩ふ。二程全書に見ゆ。

【昏】

コン。呼昆切。元。

一ひぐれ二くらし（不明）三へる（減）四かはる（代）五つとむ（彊）六みだる（亂）七めとる（娶）八人生れて未だ命名せざる中に死ぬること九妻の父。

【昏夙】コンシユク　くれとあさと。又、終日。張養浩「勞勞簿領頭斑白、承務レ酬レ官在二養造一」

【昏忘】コンバウ　智くらくして物事を忘る。南史、劉顯傳に「昏忘不レ可レ受レ策」

【昏季】コンキ　年わかくしておろかなり。隋書、王韶傳に「臣昔在昏季、猶且用レ心、況逢二聖明一、敢不二罄竭一」

【昏明】コンメイ　くらきとあかるきと。周禮、注に「日入三刻爲レ昏、不レ盡二三刻一爲レ明」

【昏夜】コンヤ　ひぐれ。魏志に「時帝頗出遊獵、或昏夜還レ宮」

【昏昏】コンコン　くらき貌。莊子に「至道之極、昏昏默默」

【昏昧】コンマイ　くらし。くらます。宋史に「山氣遇レ夜輒昏昧、蛇鼈始明」

【昏惑】コンワク　おこたる。（豫怠、慢怠）。五代史に「世宗、南平二淮甸一、北伐二契丹一、乘其勝威一、擊二其昏惑一」

【昏姻】コンイン　夫婦の緣を結ぶ。白虎通に「昏時成レ禮、故曰レ昏、婦人因レ夫而成、故曰レ因」

【昏眊】コンバウ　目くらし。歐陽修「兩目昏眊、雖二嗟執一卷之已難一」

【昏耄】コンバウ　おいぼる。又、その人。宋史、魏咸信傳に「年已昏耄」

【昏迷】コンメイ　心みだれてくらむ。書經に「昏迷不レ恭」

【昏恣】コンシ　心くらくして氣ままなり。元結「忍行二昏恣一、獨樂二其身一」

【昏倒】コンタウ　めまひしてたふる。陸龜蒙「耗眊昏倒、不レ能レ記二子孫名字一」

【昏眩】コンゲン　くらし。目くるめく。桂海虞衡志に「疼痛日昏眩」

【昏晝】コンチウ　よるとひると。杜甫「沈吟坐二四軒一、飲食錯二昏晝一」

【昏晦】コンクワイ　くらし。馬臻「遠色變二昏晦一、卸帆依二淺沙一」

【昏愚】コング　奄人なり。詩經に「蟊賊內訌、昏愚成レ共」

【昏眸】コンボウ　くらきひとみ。樓鑰「洗二我昏眸十年病一」

【昏羸】コンヒ　つかれてよくねむる。顧況「發二當暑之清吟一、滌二通宵之昏羸一」

【昏惑】コンワク　道理にくらくまどふ（晦惑）。張衡「豈昏惑而能剖」

【昏惰】コンダ　心くらくしておこたる。宋史宋庠傳に「御史言、庠昏惰」

【昏黑】コンコク　日くれてくらし。白居易「語レ別至二昏黑一」

【昏寒】コンカン　理にくらくして事をうちすつ。書經に「昏二棄厥肆祀一弗レ答」

【昏睡】コンスイ　ねむる。南史、劉峻傳に「從レ夕達レ旦、時或昏睡、蒸二其髮一」

「昏黃」コウクワウ　たそがれ。（黃昏）。陸游「橋邊凝レ怨立二昏黃一」

【昏瞀】コンボウ　くらし。書經、傳に「天下民昏瞀塾溺、皆困二水災一」

【昏暴】コンバウ　理にくらくみだりなり。書經に「殖二有禮一覆二昏暴一」

【昏瞳】コンドウ　あきらかならぬひとみ。梅堯臣「細書刺二昏瞳一」

【昏醉】コンスイ　ふひて知覺をうしなふ。晉書に「昏醉奔退、馬陷二石渠一」

【昏墨】コンボク　いれずみ。梁武帝「殺傷有レ法、昏墨有レ刑」

【昏憊】コンバイ　つかる。列子に「晝則呻吟而卽レ事、夜則昏憊而熟寐」

【昏曉】コンケウ　夕ぐれとあかつきと。白居易「陰晴變二寒暑一、昏曉錯二星辰一」

【昏昔】コンボク　くらし。劉基「使二我一見開二昏昔一」

【昏闇】コンアン　前に同じ。後漢書、范冉傳に「吾生二於昏闇之世一、値二平淫侈之俗一」

【昏曙】コンシヨ　くらきとあかるきと。ゆふべとあしたと。楊浚「孤舟大江水、水涉無二昏曙一」

【昏禮】コンレイ　結婚の儀式。禮記に「昏禮者、將レ合二二姓之好一」

【昐】

【昐鐘】ショウ　ひぐれのかねの音。張九成「昐鐘發二林杪一」

一ほのぐらし（尙冥）二よあけ（旦明）。

【昐盱】コウキン　よあけ。幽通賦に「昐盱寤面仰思兮、心曚曚猶未レ察」

【昐爽】コウサウ　前に同じ。漢書に「昐爽」注に「師古曰、謂二日尙冥一、蓋未レ明之時也」

【勿】

【勿曰】コツワツ　コツ、コチ。昐に同じ。

【習爽】コウサウ　よあけ。漢書に「習爽闇昧」注に「習爽、早朝也」

【易】

一エキ、ヤク。羊益切。陌。

二イ。以智切。寘。

一コツ、コチ。呼骨切。月。

二ブツ、モチ。文弗切。物。

一かはる（變）二かふ三ゐもり（守宮）四うらなひ五うらなふこと六場に同じ七やすし八おこたる九あなどる（慢）、（省）十やはらぐ。

【易占】エキセン　うらなひ。雲笈七籤に「巨君傳二季山筮訣一、遂善二于易占一」

【易次】エキシ　うつりかはる。越絕書に「四時易次、寒暑失レ常」

【易易】イイ　やすき貌。禮記に「知二王道之易易一也」

【易直】イチヨク　簡易にしてなほし。周禮、考工記に「取二諸易直一也」

【易氣】エキキ　新しき氣を吸ひかふ。嵇康「練骸易レ氣、染骨柔レ筋」

【易理】エキリ　一易の理。二をさめやすし。舊唐書に「利廣而易レ求、官少而易レ理」

【易象】エキシヤウ　うらかた。

【易植】エキシヨク　ねづきよし。管子に「壤地肥饒、則桑麻易レ植也」

【易聖】エキセイ　易の道にすぐれたる人。唐書に「太經邃二於易一、人謂二之易聖一」

【易筮】エキゼイ　うらなひ。晉書、淳于智傳に「智有二思義一、能二易筮一」

【易置】エキチ　とりかへおく。史記に「趙括既代二廉頗一、悉更二約束一、易二置軍吏一」

【易レ輿】ケミシ　あたりやすし。史記、淮陰侯傳に「吾平生知二韓信爲レ人、易レ輿耳」

【易數】エキスウ　陰陽によりて吉凶をわきまふる術。宋書、陳瑾傳に「通二于易數一、言二國家大事一、後多レ驗」

【易蜴】エキエキ　（動）ゐもり。揚子方言に「守宮、秦晉西夏、謂二之守宮一、其在二澤中一者、謂二之易蜴一」

【易簀】エキサク　臥牀をとりかふ。死ぬる義にいふ。禮記に「元起易レ簀」

【易簡】エキカン　てがるなり。易經に「易簡天下之理得矣」

【易斷】エキダン　一易にて判斷す。二ちぎれやすし。陳後主「柯新攀易レ斷」

【昜轍】車の通過の道をかふ。晉書に「愛ニ昜轍之勤一、而得ニ覆車之軌一」

【昜行道】〔佛〕彌陀の弘願力によりて佛となるをいふ。雖行道の對。毘婆娑論に「菩薩求ニ阿毘跋致一、有ニ二種道一、一者雖行道、一者易行道」

【昜ル子析レ骸】子をかへて食ひ、骸をさきて食ふ。籠城して困厄するをいふ。左傳に「華元曰、敝邑易レ子而食、析レ骸以爨」

【昜之憂患】易經を作りし人の憂患ありしをいふ。歐陽修「易之憂患、詩之怨刺」

【昜ル地皆然】人その地位を換ふれば皆同じ行をなす。孟子に「禹稷顏子、易レ地則皆然」

【昜ル衣並レ食】一枚の服を相かへて著け、二三日を並せて一日の食をなす。極めて貧しき有樣をいふ。禮記に「易レ衣出、並レ日而食」

【昜ル樂多レ哀】たのしみ昜き者は哀しむことも亦多し。心のかろがろしきが故なり。文中子に「易レ樂者必多レ哀、輕レ施者必好レ奪」

【昔】

㊀セキ、シャク。倉各切。藥。

㊁一ほじし(乾肉)二ひさし(久)三さきに(前)四よる(夜)五むかし六きのふ。ろまじはる(錯)。

【昔日】むかし。さきのひ。

【昔昔】夜夜といふに同じ。列子に「精神荒散、昔昔夢爲ニ國君一」

【昔彦】前代のすぐれたる士。王融「端溪懸ニ昔彦一、測水謝ニ前修一」

【昔者】むかし。又、昨日の義にもいふ。孟子に「曰、子來幾日矣、曰昔者」

【昔時】むかし。騎賓王「昔時人已沒、今日水猶寒」

【昔然】ひさしき貌。詩經に「知而不レ已、誰昔然矣」

【昔愁】過去のうれへ。賀知章「送レ子成ニ今別一、令ニ人起ニ昔愁一」

【昔歲】こぞ。きょねん。左傳に「昔歲入レ陳、今茲入レ鄭」

【昔談】むかしばなし。顏延之「琢レ玉成レ器、無レ爽ニ昔談一」

【昕】

㊀キン、コン。許斤切。文。

ろキ。虛其切。支。

一ひので(日出)二あきらかなり(明)。ショク、シキ。戾の本字。

厖

五畫

【昜】

ヤウ。與章切。陽。

一ひらく(開)二とびあがる(飛揚)三ながし(長)四ひかり(光)五おほし(衆)。

說文に「開なり、日、一、勿に从ふ」

【星】

セイ、シャウ。先青切。青。

一ほし二ほしの光影三白き色の點點たる貌四ほとほり(二十八宿の一)五草の名六姓。

【星斗】ほし。晉書に「馳レ章獻レ號、高蓋凌レ陰、星斗呈レ祥、金陵表レ慶」

【星火】流星の火光。轉じて、事の急なるに喩ふ。李密「郡縣逼迫、催レ臣上レ道、州司臨レ門、急ニ於星火一」

【星布】ほしの如く散布す。後漢書に「屯騎雜而星布」

【星光】ほしのひかり。朱熹「微月墮ニ西嶺一、闌然衆星光」

【星行】いそぎて行く義。魏志に「晨夜星行、遠致ニ本州一」

【星次】ほしのやどり。唐書に「考ニ正星次一、爲ニ一代之制」

【星辰】ほし。(辰宿)。書經に「曆ニ象日月星辰一、敬授ニ人時一」

【星芒】ほしの光のほさき。張正見「學レ劍動ニ星芒一」

【星河】あまの川。河圖括地象に「川德布レ精、上爲ニ星河一」

【星夜】ほしある夜。晉書に「夏晝熱又兼ニ星夜一」

【星津】ほしのやどり。陳後主「星津雖レ可レ望、詎レ得似ニ人精一」

【星星】ぽつぽつと白き貌。謝靈運「戚戚感レ物歎、星星白髮垂」

【星移】年月うつりゆく。王勃「物換星移幾度秋」

【星術】天文のわざ。五代史に「周傑恥レ以ニ星術一事ニ人一」

【星座】ほしのやどり。史記に「星座有ニ尊卑一」

【星期】婚姻の期日。書言故事に「報ニ成レ婚日一、曰レ請ニ星期一」

【星宿】ほしのやどり。漢書に「晝誦ニ書傳一、夜觀ニ星宿一」

【星發】夜の中にいでたつ。

【星槎】世界をめぐる舟。宋之問「寶至星槎落、仙來月宇空」

【星馳】いそぎてはしる。潘岳「羽檄星馳、鉦鼓日戒」

【星傳】急を要する宿驛の乘馬。權德輿「星傳指ニ湘江一」

【星算】天文の術。梁書、陶弘景傳に「尤明ニ陰陽五行風角星算一」

【星漢】あまのがは。魏文帝「星漢西流夜未レ央」

【星膈】あかりとり。藝林伐山に「小者曰ニ星膈一」

【星霜】としつき。杜牧集に「經ニ幾年一、曰ニ幾換ニ星霜一」

【星營】ほし。薩都剌「露幔旌旗天接レ水、星營鼓角月連レ山」

【星羅】ほしの如くつらなる。西都賦に「列卒周匝、星羅雲布」

【星識】天文と未來書と。晉書に「禁ニ郡國一、不レ得ニ私學一星識一」

【星驚】いそぎてはしる。傅休奕「電發星驚」

【星行電征】いそぎてゆく。風俗通に「星行電征、數日歸」

【映】

㊀一あきらかなり(明)二かくる、かくす(隱)三未の時(午後二時)四うつる、うつす、てるろくらし、明かならず。

【映水】みづにうつる。みづにうつす。謝靈運「華映レ水而增レ光」

【映空】そらにうつる。杜甫「衰荷且映レ空」

【映帶】うつりあふ。王羲之「有ニ清流激湍、映ニ帶左右一」

【映發】うつりあらはる。宣和畫譜に「丘慶餘善レ畫、中鋒獨以ニ墨之淺深一映發、亦極ニ形似之妙一」

【映徹】うつりとほる。世說に「雖レ不レ能ニ休ニ明一世、足ニ以映ニ徹九原一」

【映輝】うつりひかる。陸佃「丹樓翠閣、映ニ輝湖山一」

【映籠】すだれにうつる。李商隱「映レ簾夢斷聞ニ殘語一」

【映山紅】〔植〕つつじの異名。花木考に「山躑躅、名映山紅」

【映日果】〔植〕いちじゅくの異名。

【昡】

ケン、ゲン。熒絹切。霰。ひのひかり(日光)。

【晢】

㊀ホッ、ホチ。普沒切。月。ろハイ、ヘ。普罪切。賄。なハイ、ヘ。滂佩切。隊。

なほる(晴)。

【晢晢】日出でて未だ明かならざる貌。楚辭に「時晢晢分旦日」

【昤】

レイ、リャウ。郎丁切。青。ひのひかり(日光、昤朧)。

【春】

㊀シュン。昌脣切。眞。

ろ尺尹切。軫。

一はるろおこる(作)、いだす(出)。

【春水】はるのみづ。顧愷之「春水滿ニ四澤一、夏雲多ニ奇峯一」

【春分】啓蟄の次に來る氣節、三月二十日頃。晝夜平分の時なり。晉書に「以ニ春分之夕一見ニ於丁一、以ニ秋分之夕一見ニ於丙一」

【春光】はるのけしき。春宴錄に「春光且莫レ去、留與ニ醉人一看」

【春江】はるのかは。蘇軾「春江水暖鴨先知」

【春坊】皇太子の御殿。又、皇太子。(東宮)。宮傅儲要に「太子宮曰ニ春坊一」

【春服】はるぎ。論語に「暮春者、春服既成」

【春官】禮法・祭祀のことを掌る官。周禮に「春官宗伯曰ニ禮官之屬一」

【春約】シヤクン はるのまつり。禮記に「天子諸侯宗廟之祭、春曰レ約」

【春社】シヤクシヤ 春の社日。禮記に「夏約秋嘗冬烝春社」

【春雨】シヤクウ はるさめ。陸游「深巷明朝賣杏花、小樓一夜聽春雨」

【春芳】シヤクハウ はるのにほひ草。梁元帝「處處春芳動、日日春禽變」

【春信】シヤクシン はるのたより。劉克莊「春信分明到草廬」

【春首】シヤクシユ はるのはじめ。韓愈「去歲冬間、雨雪頗多、今年春首、宿麥未レ滋」

【春祈】シヤクキ はるのいのり。論衡に「春祈穀雨、秋祈穀實」

【春眠】シヤクミン はるの夜のねむり。孟浩然「春眠不レ覺レ曉、處處聞ニ啼鳥一」

【春宮】シヤクキウ 皇太子の御殿。又、皇太子。（儲宮）。竹書紀年に「周穆王居ニ春宮一」我國にて「トウグウ」と訓す。

【春宵】シヤクセウ はるのゆふべ。張喬「春宵多ニ旅夢一、夏閨遠ニ秋期一」

【春草】シヤクサウ はるくさ。謝靈運「萋萋春草生、王孫游有レ情」

【春陰】シヤクイン 花ぐもり。常建「晴天無ニ纖翳一、郊野浮ニ春陰一」

【春陽】シヤクヤウ はる。晉書に「經ニ春陽一而自喜、遇ニ秋彫一而不レ悅」

【春暄】シヤクケン はるのあたたかさ。詩經、疏に「人遇ニ春暄一、則四體舒泰」

【春愈】シヤクイ はるの長閑なる心ばへ。杜甫「碧草遠ニ春愈一、沅湘萬里秋」

【春祺】シヤクキ はるのさいはひ。漢書、樂志に「惟春之祺」

【春裝】シヤクサウ はるのよそほひ。王士熙「海邊候吏促ニ春裝一」

【春葩】シヤクハ はるのはな。（芳葩）。桓譚「春花含レ日似レ笑」

【春夢】シヤクム はるのゆめ。物事のはかなきに借りていふ語。侯鯖錄に「內翰昔日宮貴、一場春夢」

【春禊】シヤクケイ はる上巳の節に行ふみそぎ。王維「故事修ニ春禊一」

【春盤】シヤクバン 立春の日に、食物を盤に盛ること。四時寶鑑に「立春日、唐人作ニ春餅生菜一號ニ春盤一」

【春霖】シヤクリン はるのながあめ。韓崦「咫尺東郊路、春霖絕未レ通」

【春餘】シヤクヨ はるのすゑ。任昉「麗景屬ニ春餘一、清陰澄ニ夏首一」

【春莽】シヤクモウ はる生するなづな。陸游「春莽忽已花、老箏欲レ成レ竹」

【春醪】シヤクラウ はるつくりのさけ。孟貫「石泉春釀レ酒、松火夜煎レ茶」

【春秋高】シヤクシウカウ 年老いたるをいふ。新序に「孟嘗曰、先生老矣、春秋高矣、何以教レ之」

【春秋富】シヤクシウトム 年わかきものをいふ。書言故事に「少年曰レ富ニ春秋一」

【春鶯囀】シヤクヰンテン 樂曲の名。唐敦坊記に「春鶯囀、高宗曉ニ聲律一、晨坐聞ニ鶯聲一、命ニ樂工白明達一寫レ之、遂有ニ此曲一」

【春山如レ笑】シヤクサンジヨレシヤウ 春の山の溫雅なる形容。郭熙「春山淡冶而如レ笑」

【春王正月】シヤクワウシヤウグワツ 春正月に同じ。王の字は王者の天下なる義を表はす。春秋に「隱公元年、春王正月」

【春秋鼎盛】シヤクシウテイセイ 年齡方に壯なり。漢書に「天子春秋鼎盛」

【春蚓秋蛇】シヤクインシウダ 文字の細く曲れるにいふ。晉書に「于雲近世擅ニ名江表一、僅得レ成レ書、無ニ丈夫之氣一、行行如レ蒙ニ春蚓一、字字如レ綰ニ秋蛇一」

【春蒐秋獮】シヤクシウシユセン 春の狩と秋の狩と。左傳に「臧僖伯曰、春蒐夏苗、秋獮冬狩」

【春蘭秋菊俱不レ可レ廢】シヤンランシウキクトモニハイスベカラズ 各特色ありていづれも棄てがたきにいふ。事文類聚に「裴子餘、補ニ鄠縣尉一、時同列李朝隱、程行諶、皆以ニ文法一著稱、子餘獨以ニ文學一知レ名、或問ニ長史陳崇業三子優劣一、崇業曰、春蘭秋菊、俱不レ可レ廢也」

【昧】

㊥バイ、メ。莫佩切。隊。

一やみ、よる（晦冥）二くらし（闇）三くらます 四むさぼる（貪）五樂の名、東夷の樂。

【昧旦】マイタン あさまだき。未明。詩經に「女曰ニ雞鳴一、士曰ニ昧旦一」

【昧死】マイシ 上書に用ゐる語。言ふ所不當ならば死を以て謝すといふより起る。漢書に「昧死再拜、言ニ大王陛下一」

【昧谷】マイコク 日の入るところ。書經に「宅レ西曰ニ昧谷一」

【昧昧】マイマイ くらき貌。楚辭に「進路北次兮、日昧昧其將レ暮」

【昧茫】マイバウ くらし。陶宗儀「或雨而或晴、至レ晚天昧茫」

【昧爽】マイサウ あけぼの。書經に「先王昧爽、丕顯坐以待レ旦」

【昧蒙】マイモウ くらし。（蒙昧）。

【昧鄙】マイヒ くらくいやし。盧綸「翦齡誠昧鄙、遇レ盛惟求レ止」

【昧瞀】マイボウ くらし。權德輿「疎愚昧瞀」

【昨】

㊥一サク、ザク。在各切。藥。

一きのふ（前日）二さきに。

【昨日】サクジツ きのふ。江淹「送レ君如ニ昨日一、檐前露已團」

【昨今】サクコン きのふけふ。ちかごろ。

【昨晚】サクバン きのふのくれ。崔顥「昨晚南行レ楚、今朝北泝レ河」

【昨夢】サクム 昨夜のゆめ。又、過去のことにいふ。陸游「化レ蝶飛時嗟ニ昨夢一」

【昨朝】サクテウ きのふのあさ。高適「靜然顧ニ遺塵一、千載如ニ昨朝一」

【昧】

バツ、マチ。莫撥切。曷。

一くらし二星。

【昇】

ヘン、ベン。皮變切。霰。

一よろこびたのしむ貌二ひのひかり（日光）三あきらかなり（明）。

【昶】

㊥タン。儻旱切。旱。

ろタン、ダン。徒案切。翰。

あきらかなり（明）。

【昫】

㊥ク、コ。火于切。虞。

ろキヨウ、ク。詡拱切。腫。

昫に同じ、あたたむ（溫）ろ旦明に五たび鼓をうつこと。

【昫嫗】クウ あたたむ。禮記に「昫ニ嫗覆ニ育萬物一」

【昏】

コン。昏に同じ。

【昏札】コンサツ 人生れて未だ命名せざる內に死ぬること。國語に「無ニ夭昏札瘥之憂一、而無ニ飢寒乏匱之患一」

【昭】

㊥セウ。之遙切。蕭。

ろ照の省字。

一あきらかに（明）二みる（見）三ひかるヽ光ノ四あらはる（著）五廟の坐次にて上位の姓。

【昭示】セウシ あきらかにしめす。張衡「昭示萬嗣、永永不レ朽」

【昭代】セウダイ よく治まる御代。崔塗「不レ擬逢ニ昭代一、悠悠過ニ此生一」

【昭回】セウクワイ ひかり天に隨ひてめぐる。詩經に「倬彼雲漢、昭ニ回于天一」

【昭光】セウクワウ あきらかなるひかり。漢書、揚雄傳に「昭光振耀」

【昭明】セウメイ あきらかなり。禮記に「其氣發ニ揚于上一、爲ニ昭明一」

【昭晉】セウコン あきらかなるとくらきと。老子に「俗人昭昭、我獨若レ昏」

【昭昭】セウセウ あきらかなる貌。詩經に「其馬蹻蹻、其音昭昭」

【昭前】セウゼン 古昔の事實に對し名譽ありて光輝を放つこと。劉廙「在昔既無ニ堂構一、昭前之績、中レ規不レ密、明神弗レ祐」

【昭祖】セウソ せんぞの功をあらはす。晉書に「昭ニ祖揚レ禰、封禪爲レ首」

【昭敎】セウケウ をしへをあきらかにす。又、あきらかなるをしへ。蔡邕「昭ニ敎於辟雍一、命レ公作ニ三老一」

【昭然】セウゼン あきらかなる貌。漢書に「至德昭然、施ニ于方外一」

【昭著】セウチヨ あきらかなり。いちじるし。南史に「驗レ往揆レ今、若レ斯昭著」

【昭煥】セウクワン 前に同じ。宋史に「宗祀延洪、史策昭煥」

【昭穆】セウボク 祖廟の順序の名。昭は一世、穆は二世なり。禮記に「夫祭有ニ昭穆一」

【昭應】セウオウ あきらかにこたふ。顏延之「晷緯昭應、山瀆效靈」

【昭燿】セウエウ ひかりかがやく。傅毅「球翠的皪而昭燿」

【昭蘇】セウソ よみがへる。禮記に「蟄蟲昭蘇」注に「昭、曉也」

【昭顯】 あきらかにあらはる。晉記總論に「昔周之興也、后稷生二於姜嫄一、而天命昭顯」。

【是】 ㋐シ。承紙切。紙。㋑テイ、ダイ。田黎切。齊。㋒セ。慣用音。㋓一ただし(正)、なほし(直)、よし二この、これ、ここに(此)ろほとり(邊)。

【是正】 ただし。ただす。後漢書、安帝紀に「詔二五經博士一、是二正文字一」

【是非】 よしあし。禮記に「明二是非一」

【是認】 よしとみとむ。又、承知す。

【是非心】 善を是とし惡を非とするこころ。關尹子に「賢愚心愈明、則友不レ交、是非心愈明、則事不レ成」

【是耶非耶】 是非に惑ひて決し難き意。史記に「余甚惑焉、儻所謂天道是耶非耶」又、梅堯臣「覺而無レ物、泣涕漣如、是歟非歟」

【昱】 ㋐イク、ヨク。余六切。屋。㋑あくるひ(明日)二あきらか(明)三ひかり(日光)。

【昱昱】 あきらかなる貌。傅休奕「渙渙昱昱、而奪二人目精一」

【昳】 テツ、デチ。徒結切。屑。ひかたむく(日厓)。

【昳麗】 容貌のうるはしき貌。戰國策に「鄒忌、修八尺有餘、而形貌昳麗」

【昴】 バウ、メウ。莫飽切。巧。すばる(二十八宿の一)。

【昴宿】 星の名。漢書に「趙地昴宿之分野」

【昳】 ㋐ヒ、芳末切。未。ろ芳微切。微。なフン、ホン。芳問切。問。ハフ、パチ。普活切。曷。

【昵】 ㋐ジツ、ニチ。尼質切。質。ろジツ、ニチ。入質切。質。はテイ、ナイ。乃禮切。齊。にショク、シキ。質力切。ろ一ちかづく(近)二したしむ(親)三むつぶ(睦)四したしみふかき者はなきちち(亡父)ほ一にかは(膠)二のり(糊)。

【昵比】 したしみちかづく。書經に「播二棄犂老一、昵二比罪人一」

【昵狎】 なれしたしむ。北史、齊後帝紀に「自レ非二寵私昵狎一、未二嘗交レ語一」

【昵近】 したしみちかづく。韓非子に「鼎俎爲二庖宰一、昵近習親」

【昵戲】 ちかづきたはむる。宋書、蔡興宗傳に「蔡尚書常免二昵戲一」

【昶】 ㋐一ひなが(永)かよふ(通)四ひさし(久)ろ一のぶ(暢に同じ、舒)二いたる、およぶ(達)。チン。烏渾切。元。

【昌】 ケイ、キャウ。古奚切。青。あきらか(明)。

六 畫

【晄】 テウ。他了切。篠。あきらか(明)。

【晁】 テウ。朝の古文字。

【時】 シ、ジ。辰之切。支。一とき(春・夏・秋・冬)二なり(期)三よ(世)四辰(一日間の區分)五あたる(當)六よし(善)七これ(是)八中九ここに十うかがふ(伺)十一れぐら(塒)。

【時人】 そのときの人。南史、陸慧曉傳に「慧曉三子、中辭辭並雅麗、時人歎服」

【時下】 このごろ。このせつ。

【時文】 今時の文。古文の對。歐陽修「是時天下學者楊劉之作、號爲二時文一、戲者取二科第一、擅二聲名一、以誇レ衆」

【時中】 時に隨ってその宜しきを得。中庸に「君子之中庸也、君子而時中」

【時日】 つきひ。盧思道「開年簡二時日一、上辛稱二大吉一」

【時代】 ときと年代と。又、そのころ。當時。禮記、疏に「上代以來至二於今世一、時代運轉」

【時世】 そのとき。そのなり。書經、傳に「度二時世所レ宜、訓、作二贖刑一、以治二天下四方之民一」

【時令】 年中の行事。後漢書に「百僚師尹、其勉修二厥職一、順二行時令一」

【時乎】 今はよき時なりと嗟歎する語。史記に「功者難レ成而易レ敗、時者難レ得而易レ失也、時乎、時不二再來一」

【時好】 はやり。新論に「非二苟違レ性、隨二時好一也」

【時辰】 とけい。

【時局】 その時の事情。

【時事】 そのときに起る世事。史記に「表二六國時事一」

【時雨】 ㋐一ふるべき時にふる雨。禮記に「天降二時雨一、山川出レ雲」二我國にて、秋冬の際に、降りみ降らずみする雨。しぐれ。

【時政】 その時のまつりごと。後漢書に「仰レ古俯視、以佐二時政一」

【時服】 その時時の服。大學衍義補に「五代舊制、每歲諸臣、皆賜二時服一」

【時宜】 程よきころ。ころあひ。漢書に「動欲レ慕レ古、不レ度二時宜一」

【時効】 ㋐〔法〕一定の期間、ある事實の繼續するによりて、權利を取得し、又は消滅せしむるをいふ。

【時祀】 四時のまつり。周禮に「凡時祀之牲、必用二牲物一」

【時俗】 ときのならはし。風俗。「何時俗之工巧分」

【時哉】 今はよき時なりと嗟歎する語。論語に「山梁雌雉、時哉時哉、子路共レ之、三嗅而作」

【時英】 〔植〕梅の異名。

【時病】 そのときの弊害。宋史、陳騤傳に「駁疏三十條、皆切二於時病一」

【時節】 時節の名。立春の後。國語に「及レ寒擊レ草除レ田、以待二時耕一」

【時務】 その時のつとめ。蜀志に「儒生俗士、豈識二時務一、識二時務一者在二俊傑一」

【時氣】 じこう。後漢書に「務順二時氣一、無使二煩擾一」

【時時】 ときどき。をりをり。傳燈錄に「心如二明鏡臺一、時時勤拂拭」

【時習】 ときどき復習す。論語に「學而時習レ之、不二亦說一乎」

【時鳥】 ㋐一時節に應じて鳴く鳥。蘇軾「候蟲時鳥自鳴、自己何足レ爲二損益一」二〔動〕我國にて、ほととぎすの異名。

【時異】 そのときをことにす。漢書に「勞逸異者、所レ遇之時異也」

【時忠】 その時の世の中のわづらひ。元結「不レ能レ救二其時忠一」

【時教】 時を以て教ふるをしへ。又、そのときのをしへ。禮記に「時教必有二正業一」

【時牌】 ときを示すふだ。ときのふだ。王禹偁「壁上時牌催二晝夜一」

【時俗】 當代の人望。王儉「貽厥之寄、久屬二時望一」

【時畿】 なり。ばづみ。書經に「帝庸作レ歌曰、勑二天之命一、惟時惟幾」

【時運】 ときのうん。班彪「諒時運之所レ爲兮」

【時揖】 兩手を胸と平かにする敬禮。周禮に「時揖異姓、天揖同姓」

【時雍】 民やはらぎてやすし。錢起「漢家無事樂二時雍一」

【時勢】 ときのもやう。戰國策に「無二憑藉一、倍二時勢一、而能事成者寡矣」

【時禁】 時刻にあらずして出入するなどとがめ。周禮に「辨二外內一、而時禁」

【時會】 ときを定めて會合す。周禮に「時會以發二四方之禁一」

【時歲】 とき。潘岳「時歲忽其遺盡」

【時金】 時にあへるとり。朱熹「時禽悅二新陽一、潛魚躍二輕冰一」

【時節】 そのとき。そのなり。杜甫「落花時節又逢レ君」

【時態】 そのときのさま。鄭谷「時態懶二隨レ人上下一」

【時豪】 そのときの豪傑。晉書に「爲二時豪所レ抑」

【時弊】 その時代のよからぬならはし。晉書に「省二非急之費一、以救二時弊一」

【時論】 そのときの論議。魏志に「時論以二林節操清峻一、欲レ致二之公輔一」

【時價】 ときの相場。名山藏に「有司市二供レ祀牲犧一、但準二洪武時價一」

【時機】なり。はづみ。魏徵「應二時機一以鼓レ之、總二羣策一以決レ之」

【時懋】つとむ。書經に「杏禹汝平二水土一、惟時懋哉」

【時世粧】流行のよそほひ。白居易「時世粧、時世粧、自出二城中一傳二四方一」

【時不レ可レ失】よきなりの逃すべからざるをいふ。戰國策に「敵不レ可レ易、時不レ可レ失」

【時雨之化】教化の普く及ぶをいふ。成語考に「學業感二師之造成一、曰二仰沾二時雨之化一、云云」

【時殊風異】時節が違へば、風俗も亦從って異なり。宋書に「一國之事、本二之一人一、雖二世代不レ同、時殊風異、至二於主運臣贊一、古今一揆」

【時羞之奠】その時節の食物を神前に供ふ。韓愈「使レ建中遠具二時羞之奠一、告レ汝十二郎之靈上」

【時異事異】時節が違へば、人の行事も亦從って異なり。漢書に「使二秦儀與レ僕並生二於今之世一、曾不レ得二掌故一、安敢望二常侍郎一乎、故曰時異事異」

【時難レ得而易レ失】よきなりの逃すべからざるをいふ。史記に「夫功者難レ成而易レ敗、時者難レ得而易レ失也」

晃

クワウ、ワウ。胡廣切。養。

一あきらか(明)二ひかる、ひかり(光)三かがやく(耀)四てる。

【晃昱】ひかりかがやく。拾遺記に「仙宮則晃昱明粲也」

【晃晃】かがやく貌。鑾池賦に「光日晃晃以晃晃」

【晃曜】かがやく。曹植「光采晃曜、酡二彼朝日一」

晄

クワウ、ワウ。晃に同じ。

晞

クワイ、ケ。苦回切。灰。わかる、わる(別)。ケウ。古了切。篠。或は、皎に作る。

晈

一あきらか二しろし。

【晈晈】あきらかなる貌。楚辭に「夜晈晈兮既明」

晉

一シン。卽刃切。震。二セン。子賤切。霰。

一すすむ(進)二さしはさむ(插)三おさふ(抑)四長さ六尺六寸ある鼓の名五水の名。いしづき六易の卦の名。

【晉鼓】長さ六尺六寸ある兩面のつづみ。元史に「路鼓一在二枕之東南一、晉鼓一在二其後一」

晊

シツ、シチ。之日切。質。

一あきらか(明)二おほいなり。

晉

シン、セン。晉の俗字。

晌

シャウ、サウ。始兩切。養。まひる(正午)。

昭

ベイ、ミャウ。母迴切。迴。

一くらし(暗)二あげぼの。

晢

一シン。許驗切。豔。二ケン、ゴン。許驗切。豔。三許嚴切。豔。

さまたぐ(妨)。

晄

一カウ、ガウ。呼浪切。漾。二ワウ、ワウ。呼晃切。養。三バウ、マウ。誤郎切。陽。

一あつし(熱)二ひでり(旱)。

晌

ドウ、ジン。童に同じ。

晊

タウ、トウ。他刀切。豪。

一かがやく二あかし。サフ。楚洽切。洽。

晏

一てらす(照)二うつらふ。カン。各汗切。翰。かわく(乾)。なまび(半乾)。

旰

一アン、エン。烏澣切。諫。三アン。於旰切。翰。

晏

一そらきよし(天清)二くもなし(雲散)三くる(暮)四あざやかにして明かなる貌五おそし(晚)六やはらぐ(和)七やすし(安)八たがふ(忒)。

【晏兮】あきらかなる貌。詩經に「羔裘晏兮、三英粲兮」

【晏如】おちつきて平氣なり。高適「四時常晏如、百日無二饑年一」

【晏息】やすんじいこふ。詩經に「嗟爾君子、無二恆晏息一」

【晏眠】朝おそくまで寢むる。王逢「橫草無レ功日晏眠」

【晏起】おそくおく。禮記に「孺子早寢晏起」

【晏晏】やはらぐ貌。詩經に「總角之宴、言笑晏晏」

【晏清】やすらかにして靜かなり。雲仙雜記に「每レ生二神芝一、則天下晏清」

【晏朝】やすらかになさまれる朝廷。杜甫「海內久戎服、京師今晏朝」

【晏然】やすらかなる貌。漢書に「天下晏然、刑罰罕用」

【晏駕】天子の崩御をいふ。戰國策に「秦王老矣、一日晏駕、雖レ有二子異人一、不レ足二以結レ秦」

【晏子之御者】齊の相晏子（名は嬰）の御者が、晏子の馬を御し意氣揚揚たるを見て、妻去らんことを乞ひしより、御者自ら恥ぢてその後大いに抑損せしといふ故事。史記に見ゆ。

【晏嬰之狐裘】極めて節儉なるをいふ。齊の晏嬰が一枚の狐裘を三十年間着用せし故事。禮記に「有若曰、晏子一狐裘三十年、晏子焉知レ禮」

晊

カイ。古哀切。灰。

一かぬ(兼)二みな(咸)三そなふ(備)。

昺

キャウ、カウ。香兩切。養。あきらか(明)。

晊

カウ、キャウ。古杏切。梗。

一ひのひかり(日光)二ひたかし(日高)。

晛

カン、ケン。戶版切。潸。日出づる貌、ひので。

一ラウ。朗宕切。漾。二里薦切。養。

一あきらす(暴)二あきらか(明)。シュン。子峻切。震。

晛

一はやし(早)二あきらか(明)。

晚

一ベン、モン。無遠切。阮。二ゆふべ。慣用音。

ひぐれ(暮)三おくる、おそし(後)。

【晚禾】おくてのいね。劉長卿「黃雀啾啾爭二晚禾一」

【晚年】老いたるよはひ。高適「晚年學二垂綸一」

【晚光】ゆふひのひかり。董思恭「梁前朝影出、橋上晚光舒」

【晚成】おそく成り遂ぐ。韓非子に「大器晚成、大音希聲」

【晚花】おそ咲きのはな。梁簡文帝「晚花興二蕭風一俱落」

【晚苗】おそきなへ。范成大「早穗已垂垂、晚苗猶剪剪」

【晚風】ゆふつかたのかぜ。李白「蓮舟鷗二晚風一」

【晚春】はるのすゑ。梁元帝纂要に「三月曰二末春晚春一」

【晚秋】あきのすゑ。朱熹「風高木落晚秋時」

【晚雷】ゆふぐれに鳴るかみなり。杜審言「日氣含二殘雨一、雲陰送二晚雷一」

【晚烏】ゆふぐれのからす。歐陽修「晚烏繞レ柳棲二晚照一」

【晚夏】なつのすゑ。駱賓王「荷香銷二晚夏一、菊氣入二清秋一」

【晚借】おくれてさとる。蘇軾「飛鳶悔二前失一、黃犬悲二晚悟一」

【晚酌】夕方のさかもり。白居易「朝睡足始起、晚酌醉卽休」

【晚笛】ゆふぐれのふえの音。元好問「一聲驚二晚笛一、數點入二秋雲一」

【晚登】一日くれて高きにのぼる。高適「晚登臨滄觀、惻愴懷古情」二時おくれてみのる。鍾會「早植晚登、君子德也」

【晚陽】ゆふひ。錢起「微雨侵二晚陽一」

【晚景】ゆふぐれのけしき。張何「晚景鮮秀、晴江轉春」

【晚飯】ばんめし、顧瑛「人家溪樹裏、晚飯柁樓前」

【晚燼】ゆふげのけむり。ゆふがすみ。唐太宗「晚燼含二樹色一」

【晚照】ゆふひ。ゆふやけ。王勃「浦樓低二晚照一、鄉路隔二風塵一」

【晚照】おそく暖氣を帶ぶ。張廷瑛

「秋則早寒、春則晩煦」

【晩暉】（バン）ゆふぐれの日のひかり。劉筠「霞天湛二晩暉一」

【晩歲】（サイ）老いたるよはひ。北史に「荷有二良田一、何憂二晩歲一」

【晩翠】（スイ）冬枯の時にも變らざるみどり。劉滄「一庭楊柳春光煖、三逕煙蘿晩翠深」

【晩節】（セツ）老年の義。唐書に「晩節偃蹇、爲二姦臣所一擠」

【晩稼】（カ）おそくうゑたるいね。張翥「猶及二秋田晩稼青一」

【晩稻】（トウ）おくてのいね。薛逢「晩稻何妨爲一客春一」

【晩潮】（チウ）ゆふしほ。戴叔倫「關外逢二秋月一、天涯過二晩潮一」

【晩熟】（ジユク）おそくみのる。禮記に「仲夏行二春令一、則五穀晩熟」

【晩暮】（ボン）ゆふぐれ。轉じて、老年の義。李尤「年歲晩暮時已斜」

【晩餉】（シヤウ）ばんめし。陸游「野店谿橋供二晩餉一」

【晩鶏】（ケイ）ゆふぐれのからす。周權「流水殘雲帶二晩鶏一」

【晩學】（ガク）年老いて學を修む。顔氏家訓に「孔子五十學一易、曾子七十、荀卿五十不一愧二學之晩一」

【晩餐】（サン）ばんめし。何景明「茗葉松花進二晩餐一」

【晩禮】（ライ）晩酌のさけ。陸游「殽酪供二晩禮一」

【晩鶯】（アウ）晩春のうぐひす。柳宗元「晩鶯啼二遠林一」

【晩鐘】（シヤウ）ゆふぐれのもや。黄庭堅「晩鐘横卷、觀一之歎息一」

【晩食當肉】（ニクニアタル）おそく食事すると、空腹の爲に粗食も美肉の如くうまきをいふ。戰國策に「晩食以當一肉、安歩以當一車一」

【晛】（ケン）ゲン、ゲン。形甸切。霰。（ケン）ゲン、ゲン。奴甸切。霰。（ケン）ゲ（ケン）ひあらん。胡典切。銑。

【晝】（チウ）ひる（日見）ひかり（日光）あきらか（明）訓義に同じ。

【晝日】（ジツ）ひるま（日中）。ひるま。又、日輪。後漢書、邊韶傳に「韶晝寢日假臥」

【晝夜】（ヤ）ひるとよると。論語に「逝者如一斯夫、不一舍二晝夜一」

【晝宵】（セウ）前に同じ。淮南子に「喜怒與二晝宵寒暑一並明」

【晝寢】（シン）ひるね。論語に「宰予晝寢」

【晝錦】（キン）富貴にして故郷にかへるをいふ。北史、毛遐傳に「遐字鴻遠、北地三原人也、弟鴻賓、中興明帝改二北地郡一爲二雍州一、鴻賓爲二刺史一、詔曰、此以二晝錦一榮一鄉一」

【晝如一錦】（ヒルニシキ）花の咲きそろへる形容。李白「咸陽三月時、千花晝如一錦一」

【晞】（キ）かわく（乾）ひのでの（旦）あく（明）さらす（暴）。

【晟】（セイ）シヤウ。承正切。敬。時征切。庚。杏盈切。庚。めしびつ（飯匱）訓義に同じ。あきらかなるひかり（精光）。

【晡】（ホ）ブ。奔模切。虞。さるのとき（申刻）ゆふべ。ゆふかた。神女賦に「晡夕之後、精神恍惚、若一有一所一喜一」

【晡時】（ジ）午後四時頃。淮南子に「日至二於悲谷一、是謂二晡時一」

【晢】（セツ）セツ、セチ。旨熱切。屑。セイ。征例切。霽。

あきらかなり（明）てらす（照）ほしのひかり（星光）。

【晢晢】（セイ）星のひかる貌。詩經に「昏以爲一期、明星晢晢」

【晰】セツ、セチ。晢に同じ。セイ。

【晤】ゴ、ゲ。五故切。遇。あきらか（明）あふ（遇）むかふ（對）とく（解）。

【晤歌】（コ）相面してうたふ。詩經に「彼美淑姬、可二與晤歌一」

【晤對】（ゴイ）面會す。張説浩「何時晤對安心竟」

【晤語】（ゴ）相對してかたる。儲光羲「愉悅來晤語」

【晥】クワン、ゲン。合版切。潸。あきらかなる貌。

【晫】（ハイ）ヘ。蒲昧切。隊。ホツ、ボチ。蒲沒切。月。くらし（暗）。

【晦】クワイ、ケ。呼對切。隊。つごもり（月盡）、みそか（月終）くらし（昏）かすかなり（微）よる（夜）きり（霧）幾ばくもなく、しばらく。名をくらます、かくす。

【晦名】（メイ）服素冠、晦一名匿一位」

【晦盲】（クワイ）目くらし。荀子に「闇乎天下之晦盲也」

【晦夜】（ヤ）やみよ。十洲記に「晦夜卽見一此山一」

【晦明】（メイ）夜と晝と。五色線に「人有不一識二晦明一者」

【晦昧】（マイ）くらし。やみ。禮記、疏に「萬物衰老、取二晦昧之義一也」

【晦朔】（サク）つごもりとついたち。莊子に「朝菌不一知二晦朔一」

【晦冥】（メイ）くらし。漢書、高帝紀に「是時雷電晦冥、父大公往視」

【晦晦】（クワイ）くらき貌。莊子に「媒媒晦晦、無心而不一可二與謀一、彼何人哉」

【晦晦】（クワイ）くらます。魯鈍の風をなす。

【晦匿】（トク）隋書に「高祖甚懼、深自晦匿」

【晦惑】（クワク）理にくらくまどふ。（昏惑）。

蔡邕「藏二晦惑之罪一」

【晦澀】（シツ）文字の意味明かならず。

【晦藏】（ザウ）くらましかくす。歐陽修「爲一人剛簡不二矜飾一、能自晦藏」

【晦顯】（ケン）くらますとあらはるると。歐陽修「其世次晦顯、徒遷不一常」

【晧】（カウ）ゴウ。胡老切。皓。

古老切。皓。

【晨】一つ、あした、あさ（早旦）ひのでの（日出）しろし（白）あきらかなり（明）。

シン。食鄰切。眞。

一つと、あした、あさ（早旦）ひきあけ、よあけ（昧爽）あしたす（明）あきらかなり（明）房星のぶ（伸）

異名也。鶉に通じ用ゐる。

【晨旦】（シン）あした。梅堯臣「應二當激一猛毅一、豈獨專二晨旦一」

【晨牝】（ヒン）婦女子が政に與るをいふ。陸機「如何晨牝、穢二我朝聽一」

【晨光】（クワウ）あさひのひかり。景福殿賦に「晨光內照、流景外延」

【晨行】（カウ）あしたにゆく。周禮に「禦二晨行者一、禁二宵行者一」夜遊者」

【晨明】（メイ）あけがた。（黎明）。淮南子に「日出二于暘谷一、浴二于咸池一、拂二於扶桑一、是謂二晨明一」

【晨炊】（スイ）あさはやくかしぐ。漢書、韓信傳に「亭長之妻苦一之、晨炊蓐食、食時信往、不二爲具一食」

【晨門】（モン）もんばん。門番。論語に「晨門曰、奚自」

【晨風】（フウ）あさかぜ。唐太宗「過二朝露一而逾馥、帶二晨風一而更輕」（動）はやぶさ。詩經に「鴥彼晨風、鬱彼北林」

【晨星】（セイ）あけがたのほし。物のすくなきに喩ふ。（曙星、曉星、朝星）。韋應物「絲竹促二飛觴一、夜醼達二晨星一」

【晨起】（シン）あさはやくおく。溫庭筠「晨起動二征鐸一、客行悲二故鄉一」

【晨暑】（シン）あしたの日光。謝莊「晨暑促二夕漏一」

【晨朝】（シン）あした。夏侯湛「冒二晨朝一分入二大谷一」

【晨煙】シン あさげのけぶり。あさがすみ。顔延之「晨煙暮靄、春照秋陰」

【晨照】シン あさのひかり。あさやけ。宋孝武帝「俟二玉羊之晨照一」

【晨禽】シン あさのとり。鮑照「飢猿莫二下食一、晨禽不二敢飛一」

【晨暉】シン あさひのひかり。高閭「重光麗レ天、晨暉疊レ日」

【晨暮】シン ボ あしたといふべと。又、あけくれ。日日の義。杜甫「風浪無二晨暮一」

【晨潮】シン チウ あさしほ。番禺記に「晨潮下、晩潮上」

【晨暾】シン トン あさひ。朱熹「千嵐蔽二夕陰一、百峰明二晨暾一」

【晨餐】シン サン あさめし。東晳「馨二爾夕膳一、潔二爾晨餐一」

【晨霞】シン カ あしたのかすみ。吳均「羽蓋凌二晨霞一」

【晨霜】シン サウ あしたのしも。王融「亭亭雙月流、皪皪晨霜結」

【晨飆】シン ヘウ あさかぜ。温庭筠「彩亂晨飆急、香多夜雨晴」

【晨霧】シン ム あけがたのきり。(曉霧)。梁簡文帝「雜二霏霏之晨霧一」

【晨入夜出】シン ニフ ヤシユツ あさはやく入り夜おそくいづ。神仙傳に「淮南王劉安、每二宴見、談二說得失一、及獻二諸賦頌一、晨入夜出」

【晨入夜歸】シン ニフ ヤキ 朝に官舍に入り夜に至りて家に歸る。韓愈「凡執事之擇二於愈一者、非レ爲二其能晨入夜歸一也」

【晨星落落】シン セイ ラクラク あけがたのそらに星の僅に二三點見ゆるが如く、友人の次第に少くなるをいふ。劉禹錫「所レ謂同年之友、當二其盛時一、連レ轡擧レ鑣、互絕二九衢一、今年落落、如二晨星相望一」

八畫

【晫】タク、トク。竹角切。覺。あきらか(明)、あきらかにさかんなる貌。

【晬】サイ、セ。子對切。隊。まるひととせ(周年)、ひとまはり。

【晡】ヒ。符非切。微。はなる(離)。

【晉】一ホ、フ。滂古切。麌。一くらし二ひろし(博)三おほいなり(大)四あまれしあまれし(徧)。

【普及】フ キフ あまれし。一般に。魏書に「內外百寮、普汎加二一級一」

【普汎】フ ハン あまれくつぐ。(播告、敷告)。

【普告】フ コク あまれくつぐ。(播告、敷告)。魏書、節閔帝紀に「詔曰、中黨予今稱レ帝、己爲レ褒矣、可二普告令一知」

【普衍】フ エン ひろくわたる。潘岳「偉二玄澤之普衍一、嘉二植物之竝敷一」

【普施】フ シ あまれくほどこす。史記に「高辛普施利レ物、不レ於二其身一」

【普恩】フ オン あまれきめぐみ。薛逢「欲レ識二普恩無二遠近一」

【普現】フ ゲン あまれくあらはる。范成大「兜羅世界網、普現無二邊際一」

【普覃】フ タン あまれく及ぶ。常衮「德音頻降、霈澤普覃」

【普徧】フ ヘン あまれし。(徧普)。

【普請】フ シン 「佛」一あまれく同志を請來して共に事を爲す。二諸人に寄附を請ひて建築するをいふ、轉じて、建築の義とす。釋氏要覽に「佛令レ鳴二犍稚一、抱集共爲レ之、此普請之始也」

【普賚】フ ライ あまれくたまふ。梁書に「辛丑至二修陵一、普賚二內外一」

【普賢】フ ゲン 〔佛〕菩薩の普く衆生を濟度するもの。大日經疏に「普是遍二一切處一義、賢最勝妙善義」

【普化僧】フ クワ ソウ 一に、虛无僧(コムソウ)といふ。普化禪師嘗て遊歩せし時、風來りて杖を鳴らし忽然大悟せしより、笛を吹きて佛事を修せしに起る。我國にては、法燈國師を開祖とす。

【普天之下率土之濱】フテンノモトソツトノヒン 國土廣く、臣民の多きをいふ。詩經に「普天之下、莫レ非二王土一、率土之濱、莫レ非二王臣一」

【昺】ヘイ、ヒン。居影切。梗。

【景】一ケイ、キヤウ。居影切。梗。二エイ、ヤウ。於丙切。梗。一ひかり(光)二さかひ(境)三あきらかなり(明)四おほいなり(大)五しろし

(白)六あふぐ(仰)七したふ(慕)八かたち(像)九けしき、おもむき十うはぎ(上衣)十一星の名十二うつくし(韶)十三南方より吹く風十四かげ(影)。

【景天】ケイ テン 〔動〕ほたるの異名。古今註に「螢火、一名耀夜、一名景天」

【景行】ケイ カウ 大いなる道。詩經に「高山仰止、景行行止」

【景仰】ケイ ギヤウ あふぎしたふ。貫奎「嗟我重二景仰一、老大將二何爲一」

【景色】ケイ シヨク 風景。宋之問「岑壑景色佳」

【景光】ケイ クワウ 一ひかり。又、めぐみ。後漢書に「垂二景光一、致二休祥一」二年月。蘇武「隋時愛二景光一」

【景物】ケイ ブツ けしき。杜審言「三春景物滋」

【景刻】ケイ コク とき。謝靈運「愛レ客不レ告レ疲、飲讌遺二景刻一」

【景況】ケイ キヤウ ありさま。やうす。

【景星】ケイ セイ めでたきほし。(瑞星)。史記に「天精而見二景星一」

【景風】ケイ フウ みなみかぜ。史記、律書に「南方景風夏至至」

【景祚】ケイ ソ おほいなるさいはひ。晉書に「流二景祚一、顯二萬世一」

【景致】ケイ チ けしき。(風致)。

【景倒】ケイ タウ 影さかしまに水中にうつる。杜甫「忽風翻而景倒」

【景迹】ケイ セキ 一おこなひ。行跡。夏侯湛「遙遙景迹、君子攸レ欽」二蠅の一種の名。歐陽修「尤忌二赤頭一、號爲二景迹一」

【景雲】ケイ ウン めでたきくも。(慶雲)。易經、疏に「龍吟則景雲出」

【景禴】ケイ ヤク よきさいはひ。詩經に「以享以祀、以介二景禴一」

【景墓】ケイ ボ したふ。柳宗元「凝情空景墓」

【景徵】ケイ チウ めでたきしるし。(休徵、瑞徵)。謝靈運「龜筮元謀、符瑞景徵」

【景曜】ケイ エウ ひかり。晉書に「揆二天行一而序二景曜一」

【景初曆】ケイ シヨ レキ 魏の明帝の時、撰みたるこよみ。晉書、武帝紀に「改二景初曆一、爲二太始曆一」

【㥄】コツ、コチ。㤅に同じ。

【㤅】フツ、モチ。㤅に同じ。

【晰】セキ、シヤク。先的切。錫。あきらか(明)。

【晢】セキ、シヤク。思積切。陌。あきらか。

【晣】セキ、シヤク。思積切。陌。五經文字に「晣は白に从ふ、相承くること多く、日に从ふは非なり」正韻に「晢、本、白に从ふ、論孟史記に、皆譌して日に从ふ、今改むべからず、故に收入す」正字通に「按するに、白に从ふ者は白色の晢となし、日に从ふ者は明辨の晢となす、二字は義各異なり」

【晢】セン。失冉切。琰。

【晢】エウ。弋照切。嘯。

【晴】セイ。ひかり(電)。

【晴】セイ。はる(思など)二散らし消す、はらす三はれ(天晴、晴著)。

【晴川】セイ セン はれたる川づら。崔顥「晴川歷歷漢陽樹」

【晴天】セイ テン はれたるそら。杜牧「欲レ開末レ開花、半雨半晴天」

【晴旦】セイ タン はれたるあした。朱德潤「明朝烟雨開二晴旦一」

【晴旭】セイ キヨク ほがらかなるあさひ。宋仁宗「晴旭輝輝禁籞開」

【晴昊】セイ カウ あをぞら。(蒼昊)。方岳「三峰倚二晴昊一」

【晴和】セイ ワ のどかなり。(暄和)。白居易「晴和日出レ天」

【晴空】セイ クウ はれたるそら。李白「回レ溪十六度、碧嶂盡二晴空一」

【晴雨】セイ ウ はれたると雨ふると。

【晴春】セイ シユン ほがらかなるはる。鄭谷「山城多二曉瘴一、澤國少二晴春一」

【晴朗】セイ ラウ ほがらかなり。世說に「天甚晴朗、祖參軍如レ從二屋漏中一來」

【晴晝】はれたるひる。蘇軾「玉淵神龍遊、雨霍亂ニ晴晝ニ」

【晴嵐】はれたる山氣。宣和畫譜に「御府所レ藏、有ニ李成夏景晴嵐圖ニ」

【晴霄】はれたるそら。陳愷「白塔界ニ晴霄ニ」

【晷】

㊥ケイ、カイ。康禮切。薺。

㊦ケン。輕甸切。霰。

雨ふりて晝はるる(霽)。

【晶】セイ、シャウ。子盈切。庚。

㊀ひかる(光)㊁あきらか㊂すゐしゃう(水晶)。

【晶光】シンクワウ きらめくひかり。韓愈「晶光蕩相射、旗戟翩以森」

【晶晶】シンシヤク 光る貌。方岳「江樹曉晶晶」

【晶熒】シンケイ あきらかにひかる貌。韓愈「堆金疊玉光晶熒」

【晶耀】シンエウ あきらかにひかる。宋之問「晶耀目何在」

【晐】

ワ。鄙果切。罵。

あきらか(明)。

キヤ、ク。去仲切。迲。

かわかす(乾)。

【晛】

テイ、チャウ。知領切。梗。

日初めて出づる貌。

【晷】

キ。古委切。紙。

㊀ひかげ(日景)㊁はしらかげ(柱景)㊂はかる(度)。

【晷刻】キコク とき。梁書に「常移ニ晷刻ニ」

【智】

チ。知義切。寘。

㊀しる(知)㊁さとる㊂ちゑ㊃ちゑ。

【智力】チリヨク かしこきひと(賢人)㊄はかりごと。

【智嵐】チラン はれたる山氣。宣和畫譜に「御府所レ藏、有ニ李成夏景晴嵐圖ニ」

【智巧】チカウ ちゑのはたらき。魏志、太祖記に「吾任ニ天下之智力ニ、以レ道御レ之、無レ所ニ不可ニ」

【智故】チコ さかしきたくみ。史記に「豈可ニ以ニ智巧ニ得ニ哉」

【智邪】チジヤ こころのはたらき。蜀志に「奇邪、智故萌生」

【智者】チシヤ ちゑある人。史記に「愚者闇ニ成事ニ、智者覩ニ未形ニ」

【智計】チケイ さかしきはかりごと。晉書に「當ニ以ニ歲月智計ニ擒ニ之」

【智能】チノウ ちゑはたらき。史記に「故李牧得レ盡ニ其智能ニ」

【智略】チリヤク ちゑすぐれたるはかりごと。魏志に「長大勇健、智略絶レ衆」

【智術】チジユツ ちゑはかりごと。蜀志に「欲レ信ニ大義于天下ニ、而智術淺短」

【智將】チシヤウ 智謀ある大將。東軒雜錄に「魏公曰、智將不レ如ニ編將ニ」

【智算】チサン ちゑすぐれたるはかりごと。晉書に「深沈有ニ智算ニ」

【智意】チイ ちゑ。魏志に「智意所レ及、有レ若ニ成人之智ニ」

【智慧】チケイ さとし。孟子に「雖レ有ニ智慧ニ、不レ如レ乘レ勢」

【智慮】チリヨ ちゑあるかんがへ。(知慮)。

【智數】チスウ はたらきありて謀に長ず。又智ある謀。魏志、文德郭后傳に「后有ニ智數ニ、時時有レ所ニ獻納ニ」

【智謀】チボウ さときはかりごと。漢書に「忠信質直、智謀有レ餘」

【智器】チキ 才智ある者。(才器)。王肇「華表子簡字奉駿、有ニ智器文藻ニ」

【智識】チシキ ちゑかんがへ。宋史、李庭芝傳に「智識恆出ニ長老之上ニ」

【智鑒】チカン さとくして物事をみしる。南史に「聰明有ニ智鑒ニ」

【智藪】チソウ ちゑ多き人。史記に「樗里子名疾、秦惠王之弟、滑稽多智、秦人號曰ニ智藪ニ」

【智仁勇】チジンユウ 智と仁と勇と。中庸に「知仁勇三者、天下之達德也」

【智勇兼】チユウケン 智識と勇氣とをあはせもつ。史記に「智勇可レ謂レ兼レ之矣」

【智慧劍】チケンヱ 鋭利なる智力の劍を以て妄想を截斷するといふに用ゐる語。維摩經に「以ニ智慧劍ニ、破ニ煩惱網ニ」

【智者一失】チシヤイツシツ 智者も時には過誤あるにいふ。史記に「廣武君曰、智者千慮、必有ニ一失ニ、愚者千慮、必有ニ一得ニ」

【智過ニ萬人】チクワヤウニン ちゑの非凡なるをいふ。淮南子に「知過ニ萬人ニ者謂ニ之英ニ、千人者謂ニ之俊ニ、百人者謂ニ之豪ニ、十人者謂ニ之傑ニ」

【智謀短淺】チボウタンセン ちゑあさし。漢書、孔光傳に「臣光智謀短淺、犬馬齒戮、誠恐一旦顚仆、無ニ以報稱ニ」

【智小而謀大】チセウニシテボウカリゴトダイナリ 小智の人徒に大謀を爲すをいふ。易經に「知小而謀大、力小而任重」

【智者見ニ未萌ニ】チシヤハビボウニミル 事の未だ起らざる前に知るをいふ。戰國策に「愚者暗ニ於成事ニ、智者見ニ於未萌ニ」

【晐】

コン。古鈍切。願。

ひのひかり(日光)。

セイ。晰に同じ。

あきらか。

【晻】

㊥アン、オン。烏感切。感。

㊦エン。衣倫切。琰。

㊀くらし(暗)㊁ささふ(障)㊂日に光なし、くらし。

【晻晻】アンアン くらき貌。楚辭に「日晻晻而下頹」

【晻昧】アンイ くらし。(暗昧)。漢書に「深惟ニ其故ニ而反晻昧」

【晻曀】アンエイ 空くらし。姚希孟「自ニ晻曀而見ニ曜、又鑿而玲瓏」

【晻藹】アンアイ 樹木のしげれる貌。王安石「峯巒碧參差、木樹青晻藹」

【晻靄】アンアイ 霧たちこむ。徐陵「山澤晻靄、松竹參差」

【晬】

㊥ソウ。子兩切。養。

㊦キヤウ、ガウ。具放切。漾。

㊀うるはし、うつくし、光り美し㊁めぐみ(德)㊂よし(是)㊃ひかり(日光)。

【晬】リヨク、ロク。力玉切。沃。

日に光なし、くらし。

【晥】エン、チン。於阮切。阮。

ひかげかたむく(景昳)。

【晥晚】エンベン 日くる。楚辭に「白日晥晚其將レ入兮」

【晥晥】エンエン 日のかたぶく貌。儲光羲「暫過伊闕間、晥晥三伏時」

【晛】リン。力尋切。侵。

知らんと欲する貌。

【晛晛】リンリン 知らんと欲する貌。淮南子に「乃始昧昧晛晛」

【晾】リヤウ。力讓切。漾。

さらす(曬暴)。

【晷】コン、ゴン。呼昆切。元。

くらし(闇)。

九畫

【暄】ケン、クワン。況袁切。元。

㊀あたたか(溫)㊁はるのすゑ(春晩)。

【暄和】ケンクワ あたたかし。のどかなり。隋書に「春日暄和、氣力何似」

【暄風】ケンフウ あたたかきかぜ。梁元帝纂要に「春風曰ニ暄風陽風ニ」

【暄暖】ケンダン あたたかなり。あたたかさ。

【暄暖】ケンダン 春寺尋ニ暄暖ニ」

【暄燠】ケンイク 前に同じ。溫庭筠「言成ニ調誤ニ、信比ニ暄燠ニ」

【暅】

㊥ケン、クワン。況晩切。阮。

㊦コウ。居郢切。徑。

㊀かわく、かわかす(乾)㊁さらす(曝)。

イ。弋支切。支。

㊀ひめぐる㊁地の名。

カ、ゲ。胡駕切。禡。

【暇】

又、假に同じ。

㊀いとま、ひま(閑)、やすみ㊁さかんなり、おほいなり(壯大)。

【暇日】カジツ ひまのひ。孟子に「壯者以ニ暇日ニ、修ニ其孝弟忠信ニ」

【暇逸】カイツ ひまにてやすらかなり。戴表元「寧來共喧嗷、不レ許私暇逸」

【暇餘】カヨ いとま。ひまひま。

【暇隙】カヨ いとま。謝靈運「臥レ疾豐ニ暇隙ニ、翰墨時間作」

【暈】

ウン、チン。王問切。問。

㊀かさ、ひがさ、つきがさ㊁めまひ、くらむ(眩)。

【暈圍】ウンキ 日月のまはりに生ずるかさ。韓非子に「日月暈ニ圍於外ニ」

キ。許歸切。微。

又、輝に作る。

【暉】

㊀ひかる(光)㊁てる㊂かがやく。

【暉芒】キバウ ひかり。新論に「太白暉芒、雞必夜鳴」

【暉煜】キイク ひかりかがやく。梁簡文帝「暉煜金鑑、陸離寶勒」

〔日部〕智暅暠暻暭暱暱暱

〔日部〕 暉暝暋暉暝暋暉暝暋

【曛】サウ。四溟切。漾。ほす、かわかす。アウ。於溟切。漾。日に光なし、くらし。

【曖】ゆチウ、ヲ。鄭孔切。董。

【暰】ろオウ。慣用音。一日明かならず二くらし、くもる。

【暢】チャウ、ダウ。丑亮切。漾。一のぶ二とほる(通達)三みつ(充)四ながし(長)五琴の曲。

【暢月】十一月の異名。呂氏春秋に「仲冬之月、日在レ斗、中略命レ之曰二暢月一」長じて盛んなり。漢書に「陰陽不レ變、物不二暢茂一」

【暢達】のびやかにしてとどこほらず。吳越春秋に「孰知二其非一暢達之兆一」

【暢適】のびやかに心にかなふ。(舒適)。陸游「讀書取二暢適一、性靈不二必終一卷」

【暉】キ、ケ。丘既切。未。日の氣。

【暴】ゆケン。呼典切。銑。ろカフ、ゴフ。鄂合切。合。五キン、ゴン。渠飲切。旱。一すくなし(微)二たへ(微妙)三あらはる(著)四ひかる(光)五まゆ(繭)六頭の明飾七衆多のものの明かなること八衆口の貌。

【暸】カウ、ゴウ。胡老切。皓。一きよし二あきらか(皓旰)。

十一畫

【曛】ヘウ。匹妙切。嘯。一さらす(曝)二ほす、かわかす(乾)。

【曚】カウ、ゴウ。胡刀切。豪。もとる(戾)。

【曚】ボン、モン。母本切。阮。くらし(暗)。

【暫】ザン、ゾン。藏濫切。勘。一しばし(須臾)二わづかのあひだ三にはかに(卒)。

【暫且】しばらく。

【暫時】前に同じ。

【暫遊】しばらくあそぶ。李中「絶頂松堂喜二暫遊一、一宵玄論接二浮丘一」

【暫】ゆセツ、セチ。私列切。屑。ろデフ、ネフ。諾叶切。葉。一なれあなどる(狎慢)二くらし(晦)。

【暫御】なれあなどる。詩經に「曾我暫御、漸漸日瘁」

【暐】カウ、ゴウ。胡老切。皓。一きよし二あきらか(皓旰)。

【暠】ホウ、ウ。於候切。宥。あたたか(暖)。サウ、ソウ。財勞切。豪。ひのひかり(日光)。ボ、ム。莫故切。遇。一くる、日沒して冥くなる二ひぐれ、ゆふべ三おそし四夜。

【暮】カウ、ゴウ。胡刀切。豪。もとる(戾)。ボン、モン。母本切。阮。くらし(暗)。

約入秦無二暴掠一」

【暴虐】あまざらしとなる。韓詩外傳に「召伯暴二虐遠野一」

【暴恣】あらくほしいままなり。蘇軾「古人雖二暴恣一作事今世驚」

【暴富】にはかに財産家となる。瑯嬛記に「王豐爲二穀城令一治民有法民多暴富」

【暴智】ちゑあることをあらはにす。後漢書に「暴智耀世、因以干祿」

【暴貴】にはかにたふとし。那侗「自笑年來身暴貴」

【暴飲】むやみにのむ。

【暴落】にはかに下落す。

【暴溢】みなぎる。南史に「淮渚暴溢、漂二沒舟乘一」

【暴著】めだちてあらはる。唐書に「政績暴著、善治二律令一」

【暴豪】あらくつよし。史記に「令下與二暴豪之徒一同上類」

【暴漲】みなぎる。宋史に「每二汾水暴漲一州民輒憂擾」

【暴暴】にはかに起る貌。荀子に「貨財暴暴如二水源一」

【暴慢】あらあらしくして人をあなどる。論語に「動二容貌一斯遠二暴慢一矣」

【暴蔑】あなどりないがしろにす。左傳に「暴二蔑其君一而去二其親一」

【暴酷】あらくはげし。宋史に「秦人諺曰、寧逢二乳虎一莫レ逢二玉汝一其暴酷如レ此」

【暴敵】あらきかたき。魏書に「暴敵輕侵、則設二防固一以禦レ之」

【暴横】あらあらしくしてきままなり。後漢書、馮異傳に「今諸將皆壯士、輻起多二暴横一」

【暴露】あらはる。又、風雨にさらさる。戰國策に「是故終身、暴二露於外一」

【暴二天物一】天の生ぜるものをあらす。禮記に「無レ事而不レ田、曰二不敬一田不レ以レ禮、曰二暴天物一」

【暴虎馮河】虎を手打ちにし、河を徒涉す。無謀なるをいふ。論語に「子曰、暴虎馮河、死而無レ悔者、吾不レ與也」

【暵】カン。呼旱切。旱。

一かわく、かわかす(乾)二あつし(熱)三さらす(曝)四しほむ(菸)。

【暖】セン、ゼン。旬宣切。翰。

一あきらかなり(明)二うるはしき貌。

十二畫

【暸】レウ。憐蕭切。蕭。

あきらかなり(明)。

センソン。息廉切。鹽。

ひのぼる(日光升)、ひので。

タン、ダン。徒案切。翰。

あきらかなり(明)。

【暹】

【暺】

【暸】ソク。蘇谷切。屋。

一かわく(燥)二さらす(暴)。

ケイ、キャウ。俱永切。梗。

あきらかなり(明)。

テツ、デチ。敕列切。屑。

あきらかなり(明)。

キフ、コフ。迄及切。緝。

日の物を乾すにいふ。

クツ、コチ。許勿切。物。

あきらかならざる貌。

トン。他昆切。元。

あさひ(旭)、ひので(日出)。

カン、コン。苦濫切。勘。

日の出づる貌。

【暾】

【暾】

【暾】

不二相曉悟一」

【曉烏】ケウ あけがらす。羅鄴「夢斷南窗啼二曉烏一」

【曉梵】ケウボン あさの讀經のこゑ。陸龜蒙「曉梵陽烏當二石磬一」

【曉習】ケウシフ あきらかにまなぶ。後漢書に「每存二憂濟一、又曉二習邊事一」

【曉雪】ケウセツ よあけのゆき。(曙雪)。温庭筠「繰讀參差殘二曉雪一」

【曉敎】ケウケウ さとしをしふ。埤雅に「故鵪鳴一二、以曉二敎之一」

【曉達】ケウタツ あきらかに通ず。南史に「曉二達吏事一、自强不レ息」

【曉喻】ケウユ さとす。漢書に「欲二以曉一喻衆庶一、不二亦難一乎」

【曉鼓】ケウコ あかつきのつづみのおと。李咸用「曉鼓軍容肅」

【曉暇】ケウカ あさの間のひま。王勃「酌二丹墀之曉暇一、候二青禁之宵餘一」

【曉解】ケウカイ さとり知る。あきらかにしる。左傳、疏に「明者達也、曉二解事務一、照二見幽微一也」

【曉飯】ケウハン あさめし。岑參「夜眠楚煙濕、曉飯湖山寒」

【曉鴉】ケウアク あけがらす。蘇軾「吹笛墮二秋葉一、讀書圍二曉鴉一」

【曉暾】ケウトン あさひ。劉宰「要レ上二扶桑一看曉暾」

【曉霞】ケウカ あかつきのかすみ。劉敞「舞衣新繡曉霞鮮」

【曉霜】ケウサウ あかつきのしも。(晨霜)。王安石「初疑宿雨泫、稍怪曉霜稠」

【曉霧】ケウム よあけのきり。(晨霧)。陶弘景「曉霧將レ歇、猿鳥亂鳴」

【曉霞】ケウセン あかつきのあられ。梁簡文帝「曉霞飛二銀鏁一、浮雲暗未レ開」

【曉露】ケウロ あかつきのつゆ。謝朓「惜二曉露之方晞一」

【曉瞥】ケウヒツ あきらかにさとす。後漢書に「曉二瞥曲直一、退無二怨者一」

【曉鐵】ケウアイ あさぎり。徐彦伯「青潭曉鐵籠二仙蹕一」

十三畫

【曄】エキ、ヤク。夷益切。陌。ひかり(光)。

【𤇾】(キャウ、カウ。許兩切。養。(ヨウ、サウ。書兩切。養。一あきらか(明)二さきに(往)。イク、ボク。乙六切。屋。あつし(熱)。ケウ。吉了切。篠。カウ、ゴウ。下老切。皓。一あきらか(明)二しろし(皎)。ケイ、ギャウ。渠敬切。敬。一あきらか(明)二かわく(乾)。タン、ゲン。蕩旱切。旱。くる、くれ(暝)。

【暾】タイ、デ。徒對切。隊。しげる(茂)。

【暭】ジュ、ニュ。日朱切。虞。ひのいろ(日色)。

【暭昧】ジュマイ こころくらし。舊唐書に「曲學所レ習、暭昧所レ守」

【暯】キフ、コフ。去急切。緝。一さらす(曝)二かわかさんとす。

【嗑】アイ。於蓋切。泰。ひのいろ(日色)。ショ、ゾ。常恕切。御。

【曙】一あかつき(曉)、あけぼの二あした(旦)三あきらか(明)。あけぼのの太陽。あさひ。王

褒「平湖開二曙日一、細柳發二新春一」

【曙月】ショゲツ よあけのつき。王維「曙月孤驚鵲、空山五柳春」

【曙光】ショクワウ あけぼののひかり。あさひ。岑參「雞鳴紫陌曙光寒」

【曙後】ショゴ よあけののち。方干「曙後月華猶冷濕」

【曙風】ショフウ よあけのかぜ。(曉風)。江淹「戾戾曙風急」

【曙烏】ショウ あけがらす。梁簡文帝「曉葉藏二棲鳳一、朝花拂二曙烏一」

【曙野】ショヤ よあけのの。王勃「憐二曙野之絳氣一、愛二晴天之碧雲一」

【曙雪】ショセツ よあけのゆき。項斯「積雲開二去路一、曙雪疊二前峯一」

【曙鴉】アショ あけがらす。楊巨源「唯有二懷鄉客一、東飛羨二曙鴉一」

【曙鐘】ショショウ よあけのかねのね。駱賓王「星月懸二雲漢一、風霜入二曙鐘一」

【曙颯】ショヘウ よあけのかぜ。劉永之「雪色征袍拂二曙颯一」

【曙蔗】ギショ あさひかげ。(朝蔗)。陳沂「天門開二曙蔗一」

【曙鶯】ショアウ よあけになくうぐひす。李頎「東林曙鶯滿」

【曝】バ、マ。亡果切。暮。ボウ、モウ。日くもる。

【曚】ボウ、モウ。謨蓬切。東。くらし。

【曚昧】モウマイ くらし。蜀志に「昔在洪荒、曚昧肇初」

【曖】ワク。鬱縛切。藥。いさましき貌。クン、コン。許云切。文。一たそがれ(黃昏)二ひぐれ三くる(暮)いりひ。

【曛】ゆふひ。謝靈運「夕慮曉月流、朝忌曛日馳」

【曛黃】クワウ たそがれ。南史に「昇起二宅東陂一、中路酣二飲其中一、每迫二曛黃一」

【曜】エウ。弋照切。嘯。一かがやき、ひのひかり(日光)二てる(照)三かがやく、ひかる(〔 〕四日・月・星の稱。

【曜威】エウ 威光をかがやかす。東京賦に「三農之隙、曜二威中原一」

【曜野】エウヤ のにかがやく。王粲「揚レ輝吐レ火、曜レ野蔽レ澤」

【曜煜】エウイク ひかりかがやく。(炳煜)。梁簡文帝「雛粲紛曜煜」

【曜魄】エウハク 北斗星。尚書大全に「北辰謂二曜魄一」

【曜魄】ひ。太陽。楚辭に「角宿未旦、曜靈安藏」

十五畫

【曦】レウ。良涉切。葉。日入らんとする時、ひぐれ。

【曝】ハウ、ボウ。ハク、ボク。暴の俗字。裏誰鳴レ磬、沙頭自曝レ衣」

【曝衣】ハイ 衣を日光にさらす。項斯「船

【曝】ハク、ホク。北角切。覺。あきらか(華)。

【曼】テフ、デフ。疊に同じ。

【曠】クワウ、ワウ。苦謗切。濮。一あきらか(明)二むなし(空)三すつ、すたる(廢)四おほいなり(大)五とほし(遠)六ひさし(久)七ひろし(豁)。

【曠夫】クワウフ 妻なき者、卽ち、獨身の男。孟子に「內無二怨女一、外無二曠夫一」

【曠夷】クワウイ ひろくしてたひらかなり。唐書に「賀智章性曠夷、善二談說一」

【曠年】クワウネン ひさしき歲月。東晳「曠年累稔、不レ墮二其志一」

【曠快】クワウクワイ ひろくして心よし。陸游「耳目差曠快」

【曠放】クワウハウ きままなり。晉書に「向秀曰、稽意遠而疎、呂心曠而放」

【曠衍】クワウエン ひろし。劉歆「高巒峻阻、臨眺曠衍」

【曠度】クワウド ひろき度量。梁蕭「融融和風、綽綽曠度」

【曠官】クワウクワン 官に居りながらその務をつくさず。韓愈「曠官之刺興」

【曠恩】クワウオン 廣大なるめぐみ。鄧潤甫

「宜ㇾ罩ニ曠恩ニ、徧暨ニ羣品ニ」

【曠海】クワイ ひろきうみ。薛能「唯思曠海無ニ休處ニ」

【曠原】ゲン ひろびろしたるはら。穆天子傳ニ「自ニ西王母之邦ニ、北至ニ于曠原之野ニ、飛鳥之所ㇾ解、其羽千有九百里」

【曠野】ヤ 前に同じ。詩經に「匪ㇾ兕匪ㇾ虎、率ニ彼曠野ニ」

【曠敗】ハイ むなしくなりやぶる。宋史ニ「仗ニ陛下威靈ニ、苟逸ニ曠敗ニ耳」

【曠廓】クワクワク むなしく大いなり。白居易「曠廓了如ㇾ空」

【曠絕】ゼツ むなしくたゆ。史記ニ「禪封用希曠絕」

【曠望】バウ ひろきながめ。島適「遥遥溟海際、曠望滄波開」

【曠歲】サイ 年月をむなしく過ごす。朱熹「曠歲一登歷」

【曠廢】ハイ すたる。宋史、禮志ニ「太宗尚ニ儒雅ニ、勤ニ於政事ニ、修ニ明典章ニ、大抵曠廢畢矣」

【曠澹】タン ひろやかにして淡泊なり。武少儀「怡心曠澹、篤志厚直」

【曠達】タツ ひろくとほる。北史ニ「意識深遠、曠達不羈」

【曠逸】イツ ひろくとほし。楊炯「佇ニ閒庭之曠逸ニ」

【曠職】シヨク 役に居りながらその務をつとめず。北史ニ「設ㇾ官分ㇾ職、本ニ康時務ニ、苟非ニ其人ニ、不ㇾ如ニ曠職ニ」

【曠曠】クワクワク ひろびろしたる貌。史記に「天地曠曠、物之熙熙」

【曠懷】クワイ ひろき思。杜甫「曠ㇾ懷拂ニ氣豁ニ」

【曠日持久】クワウジツ ながくもちこたふ。漢書に「曠ㇾ日持ㇾ久、士卒勞倦」

【曠日彌久】ビクウジウ 事のながびくないふ。(積日累久)。史記に「太傅之計、曠日彌久、心惛然、恐不ㇾ能ニ須臾ニ」

【曠世之度】クワウセイ 我より勝れたるものなしと一世をかろんずる態。晉書、郗超傳に「卓犖不羈、有ニ曠世之度ニ」

十六畫

【曨】ロウ、ル。盧紅切。東。(一)ひので(日出)(二)あきらか(明)

【曨曨】ロウ ほのぐらし(曚曨)。

【曨曨】ロウ うすぐらき貌。劉孝成「曨曨隔ニ淺紗ニ、的的見ニ床華ニ」

【曦】ヒ エン。於旬切。(一)日の出て雲なし。(二)あたたか(煖)。(三)曦に同じ。

【曦】ヒ あきらか(明)。

【曦】ヒ 藥。

【曦】ヒ 魚。

【曦】ヒ 力魚切。魚。(一)日の色(二)日照る、かがやく、てる。

【曦】ギ キ、ギ。虛宜切。支。(一)ひのいろ(日色)(二)ひのひかり(日光)(三)あさひ(朝日)。

【曦光】キクワ あさひのひかり。韓愈「曦光霽ニ曙物ニ、景耀鏁ニ宵殺ニ」

十七畫

【曩】ダウ、ナウ。奴朗切。養。(一)さきに(二)むかし(既往)(三)ひさし(久)。

【曩日】ジツ さきのひ。さきごろ。(曩日)。梁簡文帝「北冀無ㇾ山、豈自高ニ于曩日ニ」

【曩昔】セキ 前に同じ。思舊賦に「追ニ思曩昔遊宴之好ニ、感ㇾ恩而嘆」

【曩者】シヤ 前に同じ。(昔者)。左傳に「曩者志ㇾ入而已」

【曩動】ドウ さきにたてたるいさを。陸機「知ニ曩動之可ㇾ矜」

十八畫

【曨】ロウ、ル。盧紅切。東。(一)ひので(日出)(二)あきらか(明)

【曨曨】ロウ うすぐらき貌。劉孝成「曨曨隔ニ淺紗ニ、的的見ニ床華ニ」

十八畫

【曨】デフ、ネフ。尼輒切。葉。あたたか(爆に同じ、煖)。

十九畫

【曬】ラ。朗可切。哿。くもる、日に光なし。

【曭】ラン。落官切。寒。(一)バン、メン。謨還切。刪。(二)レン。郎甸切。霰。

【曬】シ。所寄切。紙。(一)サイ、セ。所賣切。卦。(二)サ、セ。所嫁切。禡。(三)チ。抽知切。支。(四)さらす(暴)(五)のぶ(舒)。

二十畫

【曭】ワク。鑊縛切。藥。あきらか(明)。

【曭】タウ。他朗切。養。くらし。

【曭】ガン、ゴン。五犯切。豏。ひのめぐり(日行)。

二十一畫

【曭】ショク、ソク。朱欲切。沃。てらす(照)。

二十四畫

【曭】レイ、リヤウ。郎丁切。青。ひかり、かがやく(聆に同じ)。

曰部

首

【曰】エツ、チチ。王伐切。月。(一)いふ、いはく(二)のたまふ、のたまはく(三)まをす、まをさく(四)となふ(稱)(五)ここに。說文に「詞なり、口に从ふ乙の聲、亦口气の出づるに象る」

【曰若】ニコ 發語の辭。書經に「曰若稽ニ古帝堯ニ」

【曰難ㇾ言】ガンシイヒ 答へていはく、たやすく口にて述べがたしと。孟子に「敢問、何謂ニ浩然之氣ニ、曰、難ㇾ言也」とあるを俗用して單に、容易に言ひがたしといふ義とす。

二畫

【曲】キヨク、ギヨク。丘玉切。沃。(一)まがる、まがむ(二)かがまる、ゆがむ(三)よこしま(四)つぶさに、ことわけかたはし、こわけ(六)す(簿)(七)えびら(八)ふし(音樂・歌謠の調節又は段節)(九)くま、すみ。

【曲士】シヨク よこしまなる人。莊子に「曲士不可以語ニ于道ニ者、束ニ于教ニ也」

【曲下】カ ふしひくし。陸機「徒悅ㇾ目而偶ㇾ俗、固聲高而曲下」

【曲尺】シヤク かねざし。四書大全辨大學序に「句股之術、如ニ今木匠曲尺ニ」

【曲木】ボク まがれる木。說苑に「樹ニ曲木者、惡得ニ直景ニ」

【曲成】セイ ひとつびとつになす。易經に「曲ニ成萬物ニ、而不ㇾ遺」

【曲全】ゼン よくまがりて後にまったき全、道ㇾ退」

【曲庇】ヒ 理をまげてかばふ。宋史に「納ニ厚賂ニ、曲ニ庇之ニ」

【曲折】セツ (一)くはしきことがら。漢書、灌夫傳に「吾益知ニ吳壁中曲折ニ」(二)なれまがる。

【曲知】チ 大道に通ぜざる人。荀子に「曲知三人、觀ニ於道之一隅ニ」

【曲彔】ロク 椅子の一種。

【曲直】チヨク まがれるとなほきと。書經、傳に「木可ニ以揉ニ曲直ニ」

【曲眉】ビ まがりたるまゆ。みかづきなりのまゆ。韓愈「曲眉而豐頰、清聲而便體」

【曲浦】ホ まがれる入江。薛道衡「曲浦騰ニ煙霧ニ、深溟駭ニ鯨鯢ニ」

【曲筆】ヒツ 事實をまげて書く。後漢書に「晏嬰不ㇾ降ニ志于白刃ニ、南史不ニ曲ㇾ筆以求ㇾ存」

【曲踊】ヨウ をどる。陸龜蒙「匹夫能ニ曲踊ニ、萬騎可ニ橫行ニ」

【曲解】カイ 事實をまげてときあかす。

【曲靈】レイ こまごまとときほむ。北史、王昕傳に「摹ニ擬傖楚ニ、曲ニ靈風制ニ」

【曲說】セツ まげていひとく。又、まがりたる言說。管子に「可ニ以曲說ニ」

【曲當】タウ ことごとくあたる。荀子に「其餘雖ニ曲當ニ、猶將ニ無益ニ也」

【曲解】カイ よこしまにしてかたよる。

【曲磴】トウ まがりくねりたる石段。何景明「鉤ㇾ雲盤ニ曲磴ニ、沿ㇾ月迴ニ廻溪ニ」

【曲繩】 のりなまぐ。晉書、熊遠傳に「姫公不レ曲二繩于天倫一」

【曲禮】 こまかなる禮式。禮記、釋文に「曲禮、委曲說二禮之事一」

【曲藝】 ㊀小さき技能。元稹「曲藝爭二工巧一」㊁さまざま目先の變りたることをなす藝。

【曲聽】 まげて人のことばに從ふ。漢書に「夜見二仇家一、仇家曲聽」

【曲水流觴】 屈曲せる水流に盃を泛べて飲む、三月三日のさかもり。永和九年三月三日、王羲之宴を會稽山陰の蘭亭に開きたるに始まる。その集序に「此地有二崇山峻嶺茂林脩竹一、又有二清流激湍一、映二帶左右一、引以爲二流觴曲水一」

【曲肱之樂】 貧しき中にてなほ樂むなり。論語に「子曰、飯二疏食一飲レ水、曲レ肱而枕之、樂亦在二其中一矣」

【曲突徙薪】 火災の豫防の爲に、煙突をまげ、薪を他へ移す。わざはひを未發に防ぐ義に用ゐる。漢書、霍光傳に「曲レ突徙レ薪亡二恩澤一、焦レ頭爛レ額爲二上客一耶」

【曲學阿世】 邪曲の學問をして、世の中におもねる。史記に「轅固之徵也、薛人公孫宏亦徵、側レ目而視レ固、固曰、公孫子務二正學一以言、無二曲學以阿レ世」

【曳】

エイ。以制切。霽。

㊀ひく(引)㊁のばす(延)。

【曳牛】 うしをひく。北史、伊馥傳に「馥少勇健、走及二奔馬一、善射、力曳レ牛卻行」

【曳白】 紙筆を手にするも、終に文章を作ることを能はざるをいふ。事類全書に「唐玄宗朝、選人入レ等者六十四人、上召面試レ之、張奭手持レ紙、終日不レ成二一字一、時人謂二之曳白一」

【曳杖】 つゑをひく。禮記に「孔子蚤作、負レ手曳レ杖、消二搖于門一」

【曳裾】 もすそを地にひく。鄴陽「曳長裾、飛二廣袖一、奮二長纓一」

【曳尾塗中】 仕官の束縛を受くるよりは、貧賤にしても鄉里にて、安全を謀りたしとの意。莊子に「莊子釣二於濮水一、楚王使二大夫二人往先一焉、曰、願以二竟內一累矣、莊子持レ竿不レ顧曰、吾聞、楚有二神龜一、死已三千歲矣、王巾笥而藏二之廟堂之上一、此龜者寧其死爲二留レ骨而貴一乎、寧其生而曳二尾於塗中一乎、二大夫曰、寧生而曳二尾塗中一、莊子曰、往矣、吾將レ曳二尾塗中一」

【更】

カウ、キャウ。古行切。庚。

㊀かふ㊁かはる(變)㊂つぐ(續)㊃つぐのふ(償)㊄ふ(歷)㊅かはるがはる㊆さらに㊇夜間の時刻のかはりめ。

【更正】 あらためなほす。

【更生】 死にたるものがさらにいきかへる。拾遺記に「仙人寧封、食二飛魚一、而死二百年更生一」

【更衣】 ㊀著物をきかふ。高啓「更レ衣直二夜房一」㊁我國にて、女御の次ぎの女官。

【更次】 かはるがはるになる。國語に「今命レ臣更次二於外一」

【更始】 あらためはじむ。又、あらたまりてはじまる。晉書に「天地更始、萬物權輿」

【更迭】 いりかはる。詩經、疏に「終歲列宿更迭而見、不レ止二於心喉一也」

【更新】 あらためあらたにす。唐書に「亦與二天下一更二新辭一也」

【更筆】 改めてうらなふ。禮記、疏に「前卜不レ吉則止、不レ得レ因二更筆一」

【更遞】 かはる。易經、疏に「剛柔共相切摩、更遞變化也」

【更端】 事のこぐちをかふ。禮記に「君子問更レ端、則起而對」

【更籌】 夜の時を計る器。とけい。庾肩吾「燒香知二夜漏一、刻燭驗二更籌一」

【更僕未レ可レ終】 應對の事多くして擯相(傳命者)をかふるも言ひ盡しえず。禮記に「遽數之、不レ能レ終二其物一、悉數レ之乃留、更レ僕未レ可レ終」

四 畫

【曶】

コツ、コチ。忽に同じ。

五 畫

【曷】

㊀カツ、カチ。何葛切。曷。㊁アツ、アチ。阿葛切。曷。

㊀㊁いづくんぞ(盍)、なんぞ(何)㊂とどむ(止)㊃おふ(逐)㊄おそる(怖)㊅鶡に同じ㊆蝎に同じ㊇およぶ(逮)。

六 畫

【書】

ショ、ソ。傷魚切。魚。

㊀かく㊁しるす(記)㊂もじ(文字)㊃かきかた(書法)㊄ふみ(經史、册籍)㊅てがみ㊆戒命、勅詔。

說文に「蓍に作る著なり、聿に从ひ、者に从ふ、隸には省きて書に作る」

【書刀】 古支那にては竹を編みて文字を書きしを以て、之を書き改むるときその竹を削るに用ゐし小さき刀。東觀漢記に「建初中、以二書刀一賜二馬嚴一」

【書口】 書籍の紙の折り曲げたるところ。古今祕苑に「釘書十約、齊線要レ看二書口黑線一、前後百餘葉、只如二一葉一、勿レ得二或上或下一」

【書札】 ふみのふだ。又、てがみ。李白「白雁上林飛、空傳二一書札一」

【書生】 もの學びする人。後漢書に「要レ人同行、見二一書生一」

【書目】 書物の分類したる名。姚合「就レ架題二書目一、尋レ欄記二藥窠一」

【書式】 かきかた。

【書佐】 かきやく。後漢書に「召二郡國書佐、使レ讀二律令一」

【書帙】 書册を包むおほひ。拾遺記に「剝二樹皮一、編以爲二書帙一」

【書法】 ㊀文章のかき方。左傳に「董狐古之良史也、書法不レ隱」㊁文字のかき方。唐書に「出二禁中書法一、以授レ之」

【書社】 廿五家を一里とし、之に一社を立て戶口と田數とを書きたるものを藏む。故に廿五家の地を書社といふ。史記に「楚昭王將レ以二書社地一封二孔子一」

【書林】 書物を多く集めたる處。又、ほんや。後漢書に「覽二書林一、閱二篇籍一」

【書香】 學問する氣風あるもの。傳家寶に「無レ論二書香子弟與二村童一、因レ材教導」

【書架】 書物だな。梅堯臣「重眠雪花方漫漫、宿廳書架自層層」

【書屋】 書物をいるるいへ。李商隱「陶令棄レ官後、仰二眠書屋中一」

【書信】 てがみのたより。元稹「老去心情隨レ日減、遠來書信隔レ年聞」

【書紳】 ㊀書をかくひと。張籍「書客多呈レ帖、琴僧與合レ絃」㊁(植)つくしの異名。三柳軒雜識に「土筆爲二書客一」

【書契】 支那太古の文字。易經に「上古結繩而治、後世聖人、易レ之以二書契一、百官以治、萬民一」

【書圃】 書物の多くあるところ。上林賦に「修二容乎禮圃一、翱二翔乎書圃一」

【書案】 つくゑ。南史に「棄之爲二新安太守一、在レ郡、作二書案一枚、去レ官留以付レ庫」

【書卷】 しょもつ。古は卷物としたるより卷といふ。后山談叢に「古書皆卷、而唐始有二葉子一、今稱二書册一是也」

【書笈】 書物を入れたるおひばこ。陸游「大兒挈二藥囊一、小兒負二書笈一」

【書院】 唐以來の學校の稱。玉海に「唐明皇置二麗正書院一、聚二文學之士一」

【書記】 ㊀かきしるす。又、かきもの。後漢書、仲長統傳に「少好レ學博涉二書記一」㊁かきやく。白居易「青衫書記何年去、紅旆將軍昨日歸」

【書庫】 書物を入れおくくら。宋史に「太宗分二三館書萬餘卷一、別爲二書庫一」

【書術】 文字をかくわざ。唐書に「有二大志一、通二眞書術一」

【書眼】 書物を見るまなこ。皮日休「書眼看二溟霧一、酒腸如二漏巵一」

【書紳】 忘れざるやう大帶に書きしるす。論語に「子張書二諸紳一」

【書帷】 讀書室のとばり。白居易「夜

雪有二佳趣一、幽人出二書帷一」

【書畫】もじとゑと。五代史に「煜爲レ人仁孝、善屬レ文、工二書畫一」

【書棚】しょもつだな。皮日休「餓烏窺二食案一、鬬鼠落二書棚一」

【書肆】書物を賣るみせ。揚子法言に「好レ書而不レ要二諸仲尼一、書肆也」

【書意】ふみのこころ。竇臮「漢王童年、自得二書意一」

【書聖】書道の達人。抱朴子に「衛協張墨、號二書聖一」

【書牒】字をかくふだ。急就篇に「竹簡以爲二書牒一」

【書淫】讀書にふける人。晉の皇甫謐の故事より出づ。晉書に「謐耽二玩典籍、忘二寢與レ食、時人謂二之書淫一」

【書幃】書齋のとばり。杜甫「高軒當二灑頿一、潤色靜二書幃一」

【書種】學問に從事する者。陸游「子弟才分有レ限、無二如レ之何一、但書種不レ絶足矣」

【書劍】書物とつるぎと。書生のさまをいふに用ゐる。陳子昂「平生聞二高義一、書劍百夫雄」

【書廚】書籍を藏むる器。博學にして實用をなさざる者を嘲ることば。齊書に「讀易三年、不レ解二文義一、欲レ攜二宋書一不レ成、王儉戲レ之曰、陸公書廚也」

【書箱】書物ばこ。ふばこ。晉書、王祥傳に「置二書箱鏡奩之具一」

【書餞】前に同じ。張渭「不レ用開二書餞一、偏宜レ上二酒樓一」

【書翰】しょもつ。晉書、張華傳に「雅愛二書籍一、嘗徙レ居、載レ書三十乘」

【書體】文字のさま。北史に「書體與二孔子一相類、卽前代之古文矣」

【書蠹】書物蟲に食はる。ほんのしみ。趙抃「雨久藏書蠹、風高老屋斜」

【書不レ盡レ言】文字にては十分に意の通ぜざるをいふ。易經に「書不レ盡レ言、言不レ盡レ意」

【書足レ記二姓名一】學は深く學ぶに足らずとの意。史記に「籍曰、書足レ記二姓名一而已、劍一人敵、不レ足レ學、學二萬人敵一」

【書者心畫也】書を見てその人物を知るべきをいふ。揚子方言に「書者心畫也、書法形、君子小人見矣」

七 曹

サウ、ゾウ。財勞切。豪。

【曹】①ともがら(輩)②たぐひ(偶)③むれ(羣)④おほし(衆)⑤獄事を治むるつかさ⑥つぼね、やくしょ。

【曹偶】ともだち。むれ。漢書、黥布傳に「布率二其曹偶一、亡之二江中一爲レ盜」

【曹人刺】君主のその位に堪へざる者をそしるにいふ。昔曹國の人、詩經の候人の章を作りて刺りしに起る。晉書に「博擧二天下儁德茂材獨行君子一、以答二曹人之刺一」

曼

バン、マン。無販切。願。

【曼】①ひろし(廣)②ながし(長)③きめこまかし④かろし(輕)⑤ひく(引)⑥うつくし(美)⑦つく(突)⑧のぶ(延)⑨なし(無)⑩はてなし、極り無し(曼衍)⑪分別なき貌⑫變に通ず。

【曼目】とほくみわたす。屈平「曼二余目一以流觀兮」

【曼帛】おりめのこまかききぬ。淮南子に「綈綿曼帛、溫二煖于身一」

【曼衍】はてなし。かぎりなし。莊子に「因以二曼衍一、所二以窮レ年一」

【曼曼】ながき貌。離騷に「路曼曼其修遠兮」

【曼然】前に同じ。

【曼焉】前に同じ。

【曼煖】かろくあたたかなり。鄱陽「衣裳則雜遝曼煖」

【曼膚】つやあるはだへ。楚辭に「平脇曼膚、何以肥レ之」

【曼漶】分別なし。「圖書已曼漶、猶復訪二僑鄭一」

【曼聲】長きこゑ。列子に「秦青曰、昔韓娥爲二曼聲長歌一」

【曼頰】きめこまかなるかほ。淮南子に「曼頰皓齒、形夸骨佳」

【曼辭】うつくしきことば。漢書、司馬遷傳に「曼辭以自解」

【曼陀羅】(梵語 *Mandala.*)①種種雜多の色。②「佛」淨土實相の圖。③「植」蓮の花。④「植」きちがひなすび。

【曼珠沙華】〔植〕しびとばな。

八 曾

ソウ、ゾウ。昨稜切。蒸。

【曾】①かつて(經)②すなはち(乃、則)③かさぬ、かさなる(層)④あぐ⑤あがる(擧)⑥すゑ(末)⑦檜に同じ⑧增に同じ⑨ひぢち、又、ひまご。

【曾臣】末臣。左傳に「曾臣彪將レ率二諸侯一以討レ之」

【曾城】二階以上かさなりたるしろ。後漢書に「登二閬風之曾城一兮」

【曾益】ましふやす。孟子に「曾二益其所レ不レ能」

【曾陪】むかし陪隨す。蘇軾「他日曾陪探二禹穴一、白頭重見賦二南山一」

【曾遊】まへかたあそぶ。

【曾孫】ひまご。爾雅に「孫之子爲二曾孫一」

【曾祖父】ひぢぢ。

【曾祖母】ひばば。

【曾閔儒】曾參と閔損とに等しき孝行の人。元稹「昔公孝二父母一、行與二曾閔一儒」

替

テイ、タイ。他計切。霽。

【替】①かはる、かふ(代)②すつ、すたる(廢)③ほろぶ(滅)④やむ(止)⑤まつ(待)⑥ゆるむ(弛)。

【替衰】すたれおとろふ。

【替換】かふ。又、かはる。(易換、代換)。楊萬里「新舊年頭將二替換一、去留花眼貪二商量一」

【替懈】やめおこたる。北夢瑣言に「世之干レ祿、先資二名第一、既得レ之後、鮮不二替懈一」

最

サイ、セ。祖外切。泰。

【最】①とる(取)②あつむ(聚)③きはむ(極)④第一、極點⑤よきこと⑥すべて⑦むらがる(叢)⑧かなめ(要)⑨と、とのふ(齊)⑩おもに、もっとも、いとも。

說文に「本、曰に从ひ、俗に、曰に从ふ」

【最小】もっともちひさし。劉向新序に「延陵季子昆弟四人、季子最小」

【最大】もっともおほいなり。

【最上】もっともうへ。唐國史補に「蘇州進レ藕、其最上者、名曰二傷荷藕一」

【最下】もっともした。

【最中】もなか。まんなか。

【最少】もっともすくなし。

【最初】はじめ。

【最多】もっともおほし。南史に「東海之何子朗最多」

【最終】サイシュウ なほり。
【最期】サイゴ しにざは。臨終。
【最鉅】サイカヨ もっとも大いなり。韓愈「海於天地間、爲物最鉅」
【最愛】サイアイ もっとも大切にす。陸龜蒙「最愛笙調聞北里、漸看星澹失南箕」
【最惠國】サイケイコク 國際通商等に於て、他國よりも最も利ある條約を締結せる國。

【㬎】㊀サン、ソン。七感切。鹽。㊁かつて、すなはち(曾)㊂かる(僭に同じ、假)。

九 畫

【會】㊀クワイ、エ。黃外切。泰。㊂カツ、カチ。戶活切。曷。
一あふ(合)二あつまる(集)三なり(機)四さとる(理解)五一歲の計算、計算、又、その帳簿をむれ、くみ七かならず(決定の意)八たまたま九いろどる(繪に通ず)十ふた(蓋)㊂もとどり(會髻)。
【會了】クワイレウ よくわかる。
【會友】クワイイウ 友を集む。論語に「曾子曰、君子以文會友、以友輔仁」
【會心】クワイシン 心によく適ふ。世說に「會心處不必在遠」
【會立】クワイリフ あつまりたつ。集め立つ。史記に「三公九卿盡會立」
【會同】クワイドウ 一會とは時見卽ち常期なく事あれば來朝するをいひ、同とは殷見卽ち衆見をいふ。詩經に「赤芾金舄、會同有繹」二流の水合して一となる。書經に「雷夏既澤、灉沮會同」
【會所】クワイシヨ あつまり場所。南史に「至會所賜饌」
【會面】クワイメン であふ。面會。晁補之「官達故人稀會面」
【會政】クワイセイ 政事の結果を考ふ。周禮に「令六鄉之吏、皆會政致事」
【會食】クワイシヨク あつまりて食ふ。蘇軾「高堂會食羅三千夫」
【會計】クワイケイ 出納を計算す。孟子に「孔子嘗爲委吏、曰、會計當而已矣」
【會悟】クワイゴ さとる。南史に「會悟多通」
【會得】エトク 心にさとりしる。がてんす。十國春秋に「宋太宗時、或言劉昌言閩語、恐奏對難會、太宗曰、我自會得」
【會萃】クワイスヰ あつむ。宋史に「令禮官會萃古今典範、爲五禮書」
【會集】クワイシフ あつまりつどふ。春渚紀聞に「子弟每會集」
【會盟】クワイメイ 會合してちかひをなす。左傳に「有事而會、不協而盟」
【會葬】クワイサウ はうむりにあつまる。史記に「趙肅侯卒、秦楚燕齊魏、出銳師各萬人、來會葬」
【會遇】クワイグウ めぐりあふ。史記に「以會遇之禮相見」
【會意】クワイイ 一心にあふ。晉書に「每有會意、欣然忘食」二六書の一、字と字とを會合せしめて一つの意義をあらはすもの、卽ち、人言を信とし、日月を明としたる類。
【會賦】クワイフ 數を計りてその稅を賦す。淮南子に「財用稟于會賦」
【會聚】クワイシユ よりあつまる。よせあつむ。公羊傳に「古者諸侯、必有會聚之事」
【會談】クワイダン あつまりて話す。
【會密】クワイチ あつまりて密なり。張華「會密固、絕際無間」
【會戰】クワイセン 出合ひてたたかふ。孫子に「知戰之地、知戰之日、則可千里而會戰」
【會議】クワイギ あつまりて相談す。獨斷に「凡表章皆啓封、其有疑事、公卿百官會議」
【會釋】エシヤク うなづく。あいさつ。
【會讀】クワイドク あつまりて讀書す。
【會者定離】エシヤヂヤウリ 〔佛〕萬有は無常にして會ふものは、亦必ず別るることあり。遺教經に「世皆無常、會必有離」
【會稽之恥】クワイケイノハヂ 戰敗の恥辱をいふ。越王勾踐の父、吳王闔閭に破らる、勾踐依りて闔閭を破る、闔閭の子夫差、又、勾踐を攻めて之を會稽山に圍む。勾踐勢つきて遂に和を乞ふ、之を會稽の恥といふ、その後、越王は范蠡を謀臣となし、遂に又、夫差を敗りて會稽の恥を雪ぎたり。史記に「勾踐十年國富、報三强兵、以會稽之恥」
【㬎】トウ、ツ。他東切。東。遠く聞ゆる鼓の聲。

十 畫

【㬎】イン。羊進切。震。こつづみ(小鼓)。說文に「申に从ひ、東の聲」
【㬎】㊀ケツ、ケチ。丘傑切。屑。㊂丘竭切。屑。
【㬎來】ケツライ 去ると來ると。張衡「廌志竭來從二玄謀一」

十一 畫

【㬎】㊀デイ、ニャウ。冀丁切。青。㊂ゲ、ニ。女夷切。支。つぐ(告)。

十二 畫

【㬎】テイ、タイ。替に同じ。
【㬎】テン、トン。他兼切。鹽。ます(益)。

十七 畫

【㬎】ヒ。婢支切。支。ます(益)。

月 部

部首

【月】ゲツ、ゲッチ。魚厥切。月。
一つき二つきかげ(太陰の光影)三一歲を十二分したる一。
【月夕】ゲツセキ つきのあるゆふべ。謝靈運「新明弦月夕」
【月下】ゲツカ 月の光のさすところ。又、月くだる。王勃「景沈西嶠、月下東濱」
【月旦】ゲツタン 一朔日。二許劭の故事より人物の批評をいふ。後漢書に「初劭與二從兄靖一俱有二高名一、共覈二論鄉黨人物一、每月輒更二其品題一、故汝南俗有二月旦評一」
【月光】ゲツクワウ つきのひかり。李白「牀前看二月光一、疑是地上霜」
【月次】ゲツジ 一つきなみ。二月やどる。陸倕「歲躔閼茂、月次姑洗」
【月姉】ゲツシ 月の異名。司空圖「月姉殷勤留不レ住」
【月夜】ゲツヤ つきよ。舊唐書に「常于二客舍一、月夜獨吟」
【月季】ゲツキ 〔植〕かうしんばらの異名。張耒「月季慙二天上物一」
【月蝕】ゲツシヨク 月蝕に同じ。易經に「日中則昃、月盈則食」
【月面】ゲツメン つきの如くうるはしき顏。宋濂「歌扇但疑遮二月面一」
【月計】ゲツケイ 一箇月の勘定。經鉏堂雜志に「有二月計一、然後歲計可レ知」
【月兎】ゲツト 月の異名。(蟾兎、銀兎)。唐明皇「月兎落二高殿一、星狼下二急箭一」
【月桂】ゲツケイ 一つきかげ。月中に桂樹ありといふ傳說より月光をつきのかつらといふ。二科第に登るをいふ。避暑錄に「世以二登科一爲二折桂一、其後以二月中有レ桂、故以謂二之月桂一」三今 *laurel* を月桂といひて勝利の象徵とするは泰西の思想なり。
【月朔】ゲツサク つきのはじめ。書經に「季秋月朔、辰弗集二于房一」
【月俸】ゲツボウ 月月の給料。宋史に「眞宗、辟符年間、加二文武職官月俸一」
【月宮】ゲツキユウ つきのみやこ。韋莊「瑤池宴罷歸來醉、笑說君王在二月宮一」
【月域】ゲツキ 西のはて。遠きくに。齊書に「月域來賓、日際奉土」
【月晦】ゲツクワイ つごもり。三十日。劉長卿「月晦逢二休澣一、年光逐レ宴移」
【月陰】ゲツイン つきかげ。江淹「戾戾曙風急、團團明月陰」
【月將】ゲツシヤウ 月月に進步す。詩經に「維予小子、不二聰敬一止、日就月將、學有レ緝二熙于光明一」
【月梅】ゲツバイ つきにてらさるるうめの花。陳與義「月梅疎影夜香聞」
【月華】ゲツクワ つきのひかり。梁元帝「共向二

江頭ニ眺ニ月華ニ」

【月卿】 執政の大臣。馬祖當「行觀謠俗期ニ星使ニ歸奏蕃釐拜ニ月卿ニ」

【月暈】 つきのかさ。庾信「星芒一丈餘、月暈七重輪」

【月蝕】 地球が日と月との間に挾まりて、日の光を遮さる爲に、月影の隱るること。宋書に「朔則交會、望則月蝕」

【月柳】 つき見のうてな。顏延之「風觀要ニ春景ニ、月榭迎ニ秋光ニ」

【月窟】 〔植〕ぜんまい。爾雅に「蕨、月窟」

【月魄】 月の異名。梁簡文帝「珠生ニ月魄ニ、鐘應ニ秋霜ニ」

【月輪】 つきのわ。杜甫「翩然紫塞翮、下拂明月輪」

【月廬】 月月にあてがふ扶持米。元史に「畝ニ予近郊ニ、命ニ宿衛ニ受ニ月廬ニ」

【月露】 つきよのつゆ。李白「山明月露白、夜靜松風歇」

【月彎】 つき弓なりになる。蘇軾「茫茫夜潭靜、皎皎秋月彎」

【月靈】 月の異名。齊書、樂志に「月靈誕レ慶、雲瑞開レ祥」

【月下老】 緣結びの神。續幽怪錄に「韋固旅ニ次宋城ニ、遇ニ老人ニ、向レ月檢レ書、因問ニ囊中赤繩ニ云、繫ニ夫婦之足ニ、雖ニ仇家異域ニ、此繩不レ可レ易」

【月窟水】 月の中の巖窟中より湧き出づといふ水。李白「渴飲ニ月窟水ニ、飢餐ニ天上雪ニ」

【月白風清】 月はしろく風はきよし。蘇軾「月白風清、如ニ此良夜ニ何」

【月明星稀】 蜀先主の奔走を譏れる魏の武帝の句にて、その短歌行に「月明星稀、烏鵲南飛、繞レ樹三匝、無ニ枝可レ依」

【月章星句】 文章のよきを稱贊していふ語。許有孚「博得ニ月章星句ニ」

【月盈則食】 盛んなるものは必ず衰ふることあるに喩ふ。易經に「日中則昃、月盈則食」

【月滿則虧】 前に同じ。史記に「語曰、日中則移、月滿則虧、物盛則衰、天地之常數也」

【月麗ニ于畢】 月、畢星にかかる。雨ふる兆といふ。詩經に「月麗ニ于畢ニ、俾ニ滂沱ニ矣」

【月麗ニ于箕】 月、箕星にかかる。風吹く兆といふ。詩經に「月麗ニ于箕ニ、風揚レ砂矣」

【月落烏啼霜滿レ天】 曙天のさまを歌へる句。張繼「月落烏啼霜滿レ天、江楓漁火對ニ愁眠ニ」

【有】

㊀イウ、ウ。云久切。宥。

㊁ある。あり ㊂實在 ㊃くに(州國)㊄はたす(果)㊅う(得)㊆とる(取)㊇ただす(質)㊈あきらか(案)㊉たもつ(保)㊊また(又に通ず)。

説文に「月に从ひ、又の聲」又、九經字樣に「月に从ふ、月に从ふは譌なり」

【有力】 ㊀うでぢからあり。史記に「秦武王有レ力好レ戲」㊁勢力あり。韓愈「有力者哀ニ其窮ニ、而運ニ轉之ニ」

【有土】 國をたもつ。又、國君。書經に「達ニ于上下ニ、敬哉有土」

【有口】 くちがまし。漢書に「呂后欲レ王ニ諸呂ニ、畏ニ大臣有レ口者ニ」

【有北】 極北の地。詩經に「投ニ畀有北ニ」疏に「有北太陰之鄉」

【有功】 いさをあり。漢書に「彊勉行レ道則德日起、而大有レ功」

【有年】 五穀よく熟す。詩經に「我取ニ其陳ニ、食ニ我農人ニ、自レ古有レ年」

【有司】 やくにん。書經に「文王罔攸レ兼ニ于庶言庶獄庶愼ニ、惟有司之牧夫、是訓用違」

【有光】 ひかりあり。ほまれあり。書經に「予レ湯有レ光」

【有名】 名高し。韓愈「愈也道不レ加レ修、而文日益有レ名」

【有初】 はじめあり。詩經に「靡レ不レ有レ初、鮮ニ克有レ終」

【有私】 公平ならぬ心あり。後漢書、

第五倫傳に「或問レ倫曰、公有レ私乎」

【有形】 かたちあり。文子に「有レ形則有レ聲、無レ形則無レ聲」

【有志】 こころざしあり。禮記に「孔子曰、大道之行也、與ニ三代之英ニ、丘未ニ之逮ニ也、而有レ志焉」

【有事】 せはしきことあり。平生と變りたることあり。論語に「有レ事弟子服ニ其勞ニ」

【有苗】 南方の蠻族。書經に「惟時有苗弗レ率」

【有秋】 よき收穫あり。白居易「海內時無レ事、江南歲有レ秋」

【有限】 かぎりあり。徐陵「散ニ有限之微財ニ、供ニ無期之久客ニ」

【有信】 まことあり。漢書、高帝紀に「上曰、稀常爲ニ吾使ニ、甚有レ信」

【有毒】 害をなす。左傳に「臧文仲曰、君無レ謂ニ邾小ニ、蜂蠆有レ毒、況國君乎」

【有益】 えきあり。漢書に「日有レ益、月有レ功」

【有害】 がいあり。漢書に「通レ渠有ニ三利ニ、不レ通有ニ三害ニ」

【有章】 文飾あり。詩經に「其容不レ改、出レ言有レ章」

【有終】 結尾あり。詩經に「靡レ不レ有レ初、鮮ニ克有レ終」

【有頃】 しばらくして。戰國策に「居有レ頃、倚レ柱彈ニ其劍ニ」

【有情】 こころあり。莊子に「夫道有情有信、無爲無形」

【有無】 あるとなきと。晉書に「均ニ勞逸ニ、通ニ有無ニ」

【有爲】 ㊀うでまへあり。孟子に「將ニ大有レ爲之君、必有ニ所レ不レ召之臣ニ」㊁業務あり。李白「莫レ戀漁樵興、人生各有レ爲」

【有閒】 ㊀しばらくして。東京賦に「憮然有レ閒、乃莞爾而笑」㊁疾の癒ゆる義。左傳に「晉侯有レ閒」

【有鄰】 同類のもの集り來る義。論語に「子曰、德不レ孤、必有レ鄰」

【有意】 こころあり。史記、蘇秦傳に「今乃有レ意ニ西面而事レ秦」

【有罪】 つみあるもの。宋史に「毋レ縱ニ有罪ニ」

【有道】 道德あり。又、道德ある人。論語に「就ニ有道ニ而正焉」

【有數】 數ふるばかりなり。少なし。白居易「如ニ我與ニ君心ニ、相知應ニ有數ニ」

【有隙】 二人の間仲惡し。漢書に「曹參與ニ蕭何ニ、善、及爲レ相有レ隙」

【有漏】 〔佛〕世俗の凡夫の稱。金剛經註に「終是有漏之因、而无ニ解脫之理ニ」

【有餘】 ありあまる。あまり。北史に「武有レ餘、文不レ足」

【有趣】 おもむきあり。孟浩然「沿洄自有レ趣、何必五湖中」

【有德】 道によりて行ふ人。管子に「授ニ有德ニ、則國安」

【有機】 〔理〕動植物の如く生活死枯の變りあるもの。

【有蟜】 古の諸侯の名。國語に「少典娶ニ于有蟜氏ニ」

【有職】 ㊀つかさどるところあり。荀子に「治レ國有レ道、人主有レ職」㊁我國にて、故實をしらぶるわざ。又、その人。

【有識】 學者。ものしり。見識ある人。桓溫「斯有識之所レ悼レ心」

【有力者】 いきほひある人。呂氏春秋に「有力者賢、暴傲者尊」

【有頂天】 〔佛〕九天中の最も高き處。法華經に「從ニ阿鼻獄ニ、上至ニ有頂ニ」

【有蓋僧】 〔佛〕未だ得道せざる僧。大智度論に「持戒不レ破、身口清淨、能別ニ好醜ニ、未レ得レ道、是名ニ有蓋僧ニ」

【有髮僧】 かみをそらざる僧。客越志に「寺屋盡傾、惟一有髮僧在」

【有レ慙レ德】 德の人に及ばざるをはづ。書經に「成湯放ニ桀南巢ニ、惟有レ慙レ德」

【有識哂】 見識ある人のあざけり。隋書、蘇夔傳に「頗爲ニ有識所レ哂」

【有名無レ實】 名前のみ美にして實質のこれに伴はざるにいふ。漢書、黃霸傳に「淺淳散樸、竝行偽貌、有レ名無レ實」

【有二何面目一】 人にあはす面目なし。漢書、趙充國傳に「食レ祿而避レ難、殺レ母以全レ義、有二何面目一立二于天下一」

【有卦無卦】 陰陽師のいふ幸運の年まはりに當ると當らざると。

【有レ始無レ終】 著手すれども成功せざるにいふ。晉書に「小人有レ始無レ終、不レ能レ如二貴高之流一也」

【有待之身】 ㊀後來事を爲さんと時機を待つ身。禮記に「愛二其死一、以レ有レ待也、養二其身一、以レ爲レ也」㊁〔佛〕凡夫の身。法華經科註に「初心有待、若得二供養一、所レ修事成」

【有象無象】 宇宙間に存する有形無形の物の總稱。萬物。

【有脚陽春】 行く處として恩を施さざるなきにいふ。開元遺事に「宋璟愛レ民恤レ物、時人咸謂二有脚陽春一」

【有爲轉變】 〔佛〕うきよの事物のうつりかはり易きをいふ。

【有道之士】 道ある人。列子に「列禦寇、蓋有道之士也」

【有識之士】 事理に明かなる人。元倉子に「有識之士、行レ危而色不レ疎、言疎而理不レ拔」

【有レ生者必有レ死】 生きたるものは必ず死す。揚子法言に「有レ生者必有レ死、有レ始者必有レ終、自然之道也」

【有レ志者事竟成】 志あらば事遂に成就すべし。後漢書に帝（光武）謂二耿弇一曰、當以爲落落難レ合、有レ志者事竟成也」

【有レ朋自二遠方一來】 學問の道が達すれば名自ら顯れ、服なた遠方よりたづね來る。論語に「有朋自二遠方一來、不二亦樂一乎」

【有レ始者必有レ終】 事物には必ず終極あり。揚子法言に出づ。

【有二治人一無二治法一】 法の活用は人による意。荀子に「有二亂君一無二亂國一、有二治人一無二治法一」

【有レ數存二于其間一】 理の存するにいふ。莊子に「得二之于手一、應二之于心一、口不レ能レ言、有レ數存二焉于其間一」

【有レ德者必有レ言】 內に德ある者は、よく言ふことあるものなり。論語に「子曰、有レ德者、必有レ言、有レ言者、不二必有レ德一」

【有二是父一斯有二是子一】 子の賢その父に似るをいふ。孔叢子に「子思曰、有二此父一斯有二此子一、道之常也」

【有二文事一者必有二武備一】 治に居て亂を忘れざるにいふ。孔子の言。史記に出づ。

【有レ病不レ治恆得二中醫一】 病をそのままに爲し置くは、中等の醫を得るにひとし。庸醫の病に害あるをいふ。漢書、藝文志に出づ。

【有二陰德一者必有二陽報一】 かげにて德行ある者は必ず陽に善果を得るなり。淮南子に「有二陰德一者、必有二陽報一、有二隱行一者、必有二昭名一」

【有智無智校三十里】 智ある者と智なき者との差の甚だしきをいふ。世說に「魏武嘗過二曹娥碑下一、楊修從、碑背上題作二黃絹幼婦、外孫虀臼八字一、魏武問二修解一、不レ答、曰解、魏武曰、卿未可レ言、待二我思一之、行三十里、魏武曰、吾已得、令二修別記一所レ名、修曰、中略魏武之記與レ修同、歎曰、我才不レ及レ卿、乃覺二三十里一」

【有二機事一者必有二機心一】 機巧の事を爲すものは機巧心あり。莊子に「有二機械一者、必有二機事一、有二機事一者、必有二機心一」

【有二羅紈一者必有二麻蔴一】 榮華の永くつづかざるにいふ。淮南子に「有二榮華一者必有二憔悴一、有二羅紈一者必有二麻蔴一」

【有二死之心一而無二生之氣一】 死を決し生を希はざるにいふ。戰國策に「將軍有二死之心一、而士卒無二生之氣一」

【有二非常之事一然後立二非常之功一】 無事の世には功を立てがたき意。司馬相如「蓋世必有二非常之人一、然後有二非常之事一、有二非常之事一、然後立二非常之功一」

四畫

【朋】 ゲン、ゲウン。虞遠切。阮。月のひかりかすかなり。

【朋】 ホウ、ボウ。步崩切。蒸。㊀とも（同門、學友）㊁なかま（與）㊂むれ（羣）㊃たぐひ（比類）㊄つゐのたる（兩尊）㊅ふたつの貝（古、錢貨單位の二百十六倍）。

【朋友】 ともだち。（友朋）。詩經に「朋友攸レ攝、攝以二威儀一」

【朋比】 かたよりくみす。唐書に「楊虞卿兄弟、朋二比貴勢一」

【朋知】 ともだち。謝靈運「再與二朋知一辭」

【朋徒】 なかま。後漢書、儒林傳に「朋徒相視怠散」

【朋曹】 ともがら。なかま。何遜「樞機愼二僕隸一、媒孽畏二朋曹一」

【朋義】 ともだちのみち。韓維「尤見二朋義敦一」

【朋會】 ともだちのつどひ。梅堯臣「飲酒衆所レ嗜、未若二朋會樂一」

【朋愛】 いつくしむとも。張說「斗酒貽二朋愛一、踟躕出二御溝一」

【朋儔】 ともだち。（侶儔）。蘇軾「我年二十無二朋儔一、當時四海一子由」

【朋儕】 前に同じ。（同儕、等儕）。元稹「銀翰屈二朋儕一」

【朋舊】 前に同じ。張說「常時好二閒獨一、朋舊少二相過一」

【朋類】 前に同じ。魏志に「鄧艾心懷二至忠一而性剛急、不レ能レ協二同朋類一」

【朋黨】 なかまを結べる團體。歐陽修「朋黨之說、自古有レ之」

【朋友講習】 同志の相須って學識を進むるをいふ。易經に「麗澤兌、君子以朋友講習」

【肋】 ギク、ノク。女六切。屋。ついたちに月の東方に見るること（縮朒）。

【肝】 ゴ。阮古切。麌。あきらか（明）。ハン、ヘン。逋還切。先。頒に通ず。わかつ。テン、ドン。直遠切。阮。月落ちて後、なほ光明の殘れること。

【肬】

【服】 ㊀フク、ボク。房六切。屋。㊁ハク、ホク。弼角切。覺。㊂（一）きもの（衣服）（二）に同じ。㊃おこなふ（行）㊄つかさどる（職）㊅おもふ（思）㊆なさむ（治）㊇もちひる（用）㊈佩ぶ、著る㊉えびら（矢服）㊊ことば（事）㊋ならふ（習）㊌ふくろふ（鴞）㊍周代の王畿の外の區域の稱㊎なきさけぶ。

【服玉】 かんむりをかざるたま。周禮、注に「服玉冠飾二十二玉一」

【服用】 身に著けもちゐる。禮記に「獻二其上一、而后敢服二用其次一也」

【服田】 耕作に從ふ。書經に「若二農服レ田力レ穡、乃亦有レ秋」

【服色】 著物のいろあひ。禮記に「改二正朔一、易二服色一」

【服役】 やくにつく。韓愈「服役不レ辱言不レ譏」

【服兵】 兵隊をそろふ。國語に「中夜乃令レ服レ兵振レ甲、係二馬舌一出中火竈上」

【服忌】 ぶくといみと。

【服事】 ㊀事につく。管子に「服レ事任レ官」㊁歸服しつかふ。論語に「三二分天下一、有二其二一、以服二事殷一」

【服制】 上下の衣服に關するきまり。書經、傳に「觀二示法象之服制一」

【服知】 しれる所を身にとり行ふ。莊子に「孔子勤レ志服レ知」

【服采】 やくにん。書經に「矧惟爾事、服休服采」

【服物】 すべて衣服となるべきもの の稱。禮記に「以具二服物一、以修二宮室一」

【服念】 おもふ。書經に「要囚服念、五六日至二于旬時一」

【服約】 おさへつけられてのびず。

【服秩】 衣裝と食祿と。晉書に「僕射服秩印綬與レ今同」

【服馬】 公用のうま。隋煬帝「服馬顯、

而不能行」

【服御】 衣服馬車の類。戰國策に「無非大王之服御」

【服誓】 上命にしたがふ。宋史に「軍不服誓」三也」

【服章】 衣裝のかざり。後漢書、注に「漢明帝備其服章」

【服務】 つとめにつく。

【服從】 したがふ。(率從、適從)。禮記に「明君在上、則諸臣服從」

【服義】 正道に從ひよる。孔子家語に「長天而敬人、服義而行信」

【服飾】 衣服のかざり。漢書、王莽傳に「服飾甚偉」

【服罪】 つみにおつ。蜀志に「服罪輸情者、雖重必釋」

【服裝】 みなり。よそほひ。

【服劍】 つるぎを佩ぶ。淮南子に「服劍者期予銛利」

【服翼】 (動)かうもりの異名。揚子方言に「蝙蝠自關而東、謂之服翼」

【服膺】 胸に著く。記憶して忘れざるにいふ。禮記に「得一善、則拳拳服膺」

【服藥】 くすりを飲む。唐書に「服藥以求長年」

【服屬】 ㊀したがふ。漢書に「諸侯兵皆服屬楚」者、以布數以少敗衆也」 ㊁忌服のかかるみより。漢書、注に「安于天子」服屬、爲從父叔父」

五畫

【胷】 レイ、リャウ。郎丁切。青。あきらか(明)。

【朏】 ㊀ヒ。妃尾切。尾。㊁ハイ、ヘ。滂佩切。隙。㊂ホツ、ボチ。普沒切。みかづき(三日月)。

【朐】 ク、ゴ。其俱切。虞。くびき(車軛)。

六畫

【朕】 コウ、ク。虎孔切。董。月の明かならざること。

【朕】 ㊀ついたちづき ㊁しじまる。ザク、ニク。女六切。屋。

【朓】 ㊀みそかづき ㊁かたむく(側)。サク、ソク。色角切。覺。

【朔】 ㊀ついたち ㊁きた(北) ㊂つくづく ㊃はじめ(始)。

【朔方】 北の方。書經に「宅朔方」曰朔方」

【朔日】 ついたち。詩經に「十月之交、朔日辛卯日」

【朔旦】 ついたちのあさ。史記に「朔旦冬至、與黃帝時一等」

【朔地】 北方のえびすの地。

【朔風】 きたかぜ。杜甫「黃葉鶯山樹、呼兒問朔風」

【朔氣】 北方の氣。李建勳「南國春寒朔氣廻」

【朔望】 ついたちと十五日と。宋史に「朔望設祭其家」

【朔晦】 ついたちとみそかと。漢書に「朔晦正終始、弦爲繩墨」

【朔屬】 北むきのまど。陸雲「闢南窗而蒙暑兮、啓朔屬而履霜」

【朔漠】 北方流沙の土地。雪賦に「河海生雲、朔漠飛沙」

【朔邊】 かたよりたる北方の地。張正見「將軍定朔邊」

【朔颿】 あらききたかぜ。何遜「朔颿吹宿莽」

【朕】 ㊀チン、ヂン。直稔切。嶙。㊁丈忍切。軫。㊀われ(古は上下貴賤の別なく自稱に用ゐしが秦の始皇の二十六年以來特に天子の自稱となせり) ㊁きざし(兆)。かはのこしらへ(革制)。

【胶】 カウ、ケウ。古肴切。肴。日の軌道と月の軌道と交る處。

七畫

【朗】 ラウ。盧黨切。養。朗の本字。あきらか(明)。

【朗】 ラウ。里黨切。養。あきらか。ほがらか。あきらかなるつき。南史に

「臨清風對朗月」

【朗旭】 ほがらかなるあさひ。王徽「憂隨積霧密、慨因朗旭彰」

【朗吟】 ほがらかにうたふ。鄭谷「惟有朗吟償晚景」

【朗抱】 くもりなきこころ。李羣玉「朗抱雲開月、高情鶴見秋」

【朗朗】 ほがらかなる貌。韓愈「朗朗開街鼓、晨起似朝時」

【朗悟】 さとし。(敏悟)。宋史、高宗紀に「資性朗悟、博學强記」

【朗笛】 ほがらかなるふえの音。陸機「眞鼓密而含響、朗笛疎而吐音」

【朗然】 ほがらかなる貌。晉書に「若明珠之在側、朗然照人」

【朗詠】 ㊀ほがらかにうたふ。陸龜蒙「清晨整冠坐、朗詠三百言」 ㊁我國にては特に、漢詩文の秀句を訓讀に和げて謠ふ節をいふ。

【朗達】 ほがらかにしてひろし。晉書に「神情朗達、常有世外之懷」

【朗照】 ほがらかにひかる。雲笈七籤に「三光朗照、五神澄清」

【朗暢】 ほがらかにのびやかなり。文賦に「論精微而朗暢」

【朗曦】 ほがらかにうたふ。王績「高吟朗曦、挈榼攜壺」

【朗讀】 聲ほがらかによむ。眞奎「閉門謝塵鞅、展卷自朗讀」

【胶】 センン。子全切。先。しじまる、ちぢむ(縮)。メイ、ミャウ。明の古文字。

【朋】 ㊀クワウ、ワウ。呼光切。陽。㊁バウ、マウ。莫耶切。陽。

【萌】 ㊀あす(翌)㊁にばか(遽)。㊀バウ、マウ。無放切。漾。㊁武方切。陽。

【望】 ㊀のぞむ ㊁のぞみ ㊂やうす(外貌) ㊃きぬけ、失意の貌 ㊄はづかし、慚愧の貌 ㊅うかがふ(覘) ㊆もち(陰曆十五日の夜) ㊇祭の名。

【望子】 酒家の目標。廣韻に「青帘、酒家望子」帘は旗の一種なり。

【望月】 ㊀もちづき。滿月。十五夜の月。 ㊁月をながむ。韋應物「聞道欲來相問訊、西樓望月幾回圓」

【望外】 おもひのほか。

【望羊】 遠くみる。史記に「其爲人、黯然而黑、幾然而長、眼如望羊」

【望色】 顏色をながめ見る。史記、扁鵲傳に「越人之爲方也、不待切脈、望色聽聲」

【望見】 のぞみみる。漢書に「天子自望見焉」

【望見】 ほがらかにうたふ。王維「高帷中望見、柴を燔きて山川をまつる。史記、秦始皇紀に「至雲夢、望祀虞舜於九疑山」

【望秩】 前に同じ。漢書に「禱祀神祇、望秩山川」

【望洋】 あてもなき貌。又、大洋をのぞむ。吳萊「寄言滄圖叟、此去眞望洋」

【望氣】 空中の氣を見て吉凶を占ふ。史記に「趙人新垣平以望氣見」

【望望】 ㊀失意の貌。禮記に「望望焉、如有從而弗及」 ㊁慙愧の貌。又、去りて顧みざる貌。孟子に「望望然去之」

【望祭】 山川のまつりをなす。書經、傳に「九州名山、大川五嶽、四瀆之屬、皆一時望祭之」

【望魚】 (動)たちのうを。太刀魚。

【望蜀】 利を貪りて足ることを知らざるをいふ。今、足る上にもなほ足らんことを求むる義に用ゐる。魏志に「司馬懿言於曹操曰、今克漢中、益州震動、進兵臨之、勢必瓦解、操曰、人苦無足、既得隴復望蜀」

【望舒】 月の馭者。楚辭に「前望舒使先驅」

【望鄉】 ふるさとをおもふ。(思鄉)。韋莊「帶雨晚駝鳴遠戍、望鄉孤客倚高樓」

【望達】 出世をのぞむ。陳子昂「臣本蜀之匹夫、官不望達」

【望遠】 とほきをのぞむ。韓愈「窮居而野處、升高而望遠」

【望塵】 ㊀ちりの起るを見る。五代史

に「周德威勇而多智、能望塵知敵數」㊁客の來るを待つ義。晉書に「石崇與潘岳、諂事賈謐、廣成君、每出崇降車路左、望塵而拜」

【望霓】ゲイ 渇望する意。孟子に「民望之、若大旱之望雲霓」也」

【望履】リ 長上の人に謁せんことを願ふ義。先づその面を拜するないはずして履を望まんといふなり。陸游「釉詩」叩東府、再拜求望履」

【望樓】ロウ ものみやぐら。邵謁「唯有望樓對明月」

【望墓】ボウ のぞみしたふ。劉楨「望墓結不解、貽爾新詩文」

【望櫓】ロ ものみやぐら。左傳、注に「樓車、車上望櫓」

【望夫石】ボウフセキ 遠方に行く夫の離別を悲み、遙にその後姿を望み、立ちたるまま死にて化成せりといふ石。神異經に「武昌貞婦望夫、化而爲石」

【望雲之情】ボウウンノジヤウ 子の親を思ふこころ。唐書に「仁傑登太山、反顧、白雲似飛、謂左右曰、吾親舍其下」

【朕】

カウ、ゴウ。浩に同じ。

脖

八畫

トン。他昆切。元。つきのひかり(月光)。

【朝】

テウ。陟遙切。蕭。㊀つと(早)㊁あした㊂あさ㊃めす(召)㊄とふ(訪)㊅あつまる㊆やくしょ(官廳)㊇我が君主の治下㊈一人の君主在位間の稱。

說文に「旦なり、倉に从ふ、舟の聲」

【朝士】テウシ ㊀周代の官名。周禮に「朝士掌建邦外朝之灋」㊁朝廷に仕官せる士。劉禹錫「休唱貞元供奉曲、當年朝士已無多」

【朝夕】テウセキ あさゆふ。韓愈「惟朝夕芻米僕賃之資、是急」

【朝升】テウシヨウ あしたにのぼる。張耒「終身軒冕亦何賴、況有朝升而暮黜」

【朝化】テウクワ 朝廷の教化。隋書に「申國威于萬里、宣朝化于一隅」

【朝右】テウイウ 朝廷の高官。南史、何承天傳に「性剛愎、不能屈意朝右」

【朝市】テウシ ㊀官府と市場と。㊁午前の市。周禮に「朝市朝時而市、商賈爲主」

【朝旭】テウキヨク あさひ。(初旭)。韋承慶「春露融融、于朝旭」

【朝光】テウクワウ あさひのひかり。宋史に「鷂唱詞朝光發、萬戶開羣臣謁」

【朝列】テウレツ 朝廷にて百官の列位。儲光羲「想像南幽下、恬然謝朝列」

【朝次】テウジ 朝廷の席次。後漢書に「修身行義、應在朝次」

【朝衣】テウイ 朝廷に出づる制服。岑參「北山疎雨點朝衣」

【朝廷】テウテイ 一國の大政の出づる所。禮記に「朝廷之美、濟濟翔翔」

【朝事】テウジ 早朝の祭事。禮記に「建設朝事、燔燎羶薌」

【朝社】テウシヤ 朝廷と社稷と。王微「壯情抃驅馳、猛氣捍朝社」

【朝命】テウメイ 朝廷の命令。耶律楚材「奉表遵朝命、尊王建義旗」

【朝服】テウフク 朝廷に出づるきもの。論語に「吉月必朝服而朝」

【朝宗】テウソウ ㊀諸侯の天子に謁見する義。㊁轉じて、河水の海にあつまり注ぐをいふ。書經に「江漢朝宗于海」

【朝來】テウライ あさはやくより。晉書に「四山朝來、致有爽氣」

【朝威】テウ 天子の威光。後漢書、趙岐傳贊に「邪臣出疆、專命朝威」

【朝宴】テウエン 朝廷のさかもり。顏延之「陪廁廻天顧、朝宴習聖情」

【朝柄】テウヘイ 政の權力。漢書に「常掌國事、世執朝柄」

【朝恩】テウオン 朝廷のめぐみ。舊唐書、李元通傳に「吾荷朝恩、作藩東夏、當守臣節、以忠報國」

【朝直】テウチヨク 朝廷にまゐる。鄭谷「朝直明居省閣閒」

【朝冢】テウカ 帝王のいへ。戴復古「朝冢遣使殿祀典」

【朝班】ハン 朝廷にての席次。會要に「景龍三年左臺御史崔湜、彈朝班不肅」

【朝座】ザ 前に同じ。宗文昶「東棗羞朝座、西桃獻夜宮」

【朝晡】ホ あさの膳。陳子昂「朝晡夕膳、候色承歡」

【朝飢】キ あさうう。李白「他筵不下箸、此席忘朝飢」

【朝規】キ 朝廷ののり。沈約「必能孚朝規于邊鄙」

【朝眷】ケン 朝廷のめぐみ。魏書に「荷朝眷、未敢仰從」

【朝野】ヤ 朝廷と民間と。張協「昔在西京、時、朝野多歡娛」

【朝寀】サイ 朝廷のやくにん。沈佺期「天人開祖席、朝寀候征麾」

【朝堂】ダウ 一國の大政の出づる所。後漢書、黃瓊傳に「瓊練達官曹、爭議朝堂、莫能抗奪」

【朝務】ム 朝廷のつとめ。又、まつりごと。南史、齊豫章王嶷傳に「嶷不參朝務、而言事、密謀多見信納」

【朝寄】キ 朝廷よりの委任。晉書、謝安傳に「安雖受朝寄、然東山之志、始末不渝」

【朝從】ジユウ 朝見と從行と。史記、淮陰侯傳に「信知漢王畏憑其能、常稱病不朝從」

【朝晡】ホ あしたとゆふべと。白居易「朝晡頒餌、寒暑賜衣裳」

【朝聘】ヘイ 天子の機嫌をうかがふ。左傳に「襄公八年春、公如晉、朝且聽朝聘之數」

【朝朝】テウテウ まいあさ。梁簡文帝「綠葉朝朝黃、紅顏日日異」

【朝雲】ウン あさのくも。高唐賦に「旦爲朝雲、暮爲行雨」

【朝飧】ソン あさめし。杜甫「朝飧是草根、暮食乃樹皮」

【朝陽】ヤウ あさひ。(旭陽)。詩經に「梧桐生矣、于彼朝陽」

【朝會】クワイ 朝廷にあつまる。晉書に「元熙元年、改元不朝會」

【朝暉】キ あさひのひかり。(晨暉)。杜甫「千家山郭靜朝暉」

【朝綱】カウ 朝廷ののり。薛能「練紙應無用、朝綱自在倫」

【朝敵】テキ 天子に敵するもの。

【朝憲】ケン 朝廷ののり。梁書、謝幾卿傳に「性通脫、會意便行、不拘朝憲」

【朝鳥】テウ 鳥あさなく。禽經に「山鳥朝嘲、水鳥夜啾」

【朝儀】ギ 朝廷に於ける儀式。周禮に「正朝儀之位、辨其貴賤之等」

【朝謁】エツ 朝廷に至りて謁見す。杜甫「權門頻朝謁、何如隱書眠」

【朝暾】トン あさひ。(晨暾、曉暾)。張九齡「餘滋含宿霧、衆妍在朝暾」

【朝隱】イン 隱退の心にて官に仕ふ。揚子法言に「或問、柳下惠非朝隱者歟」

【朝隮】セイ あしたに雲氣上る。詩經に「蓍兮蓍兮、南山朝隮」

【朝霜】サウ あさのしも。左思「秋風何烈烈、白露爲朝霜」

【朝覲】キン 天子にまみゆ。孟子に「朝覲訟獄者、不之益、而之啓」

【朝彝】イ 朝廷ののり。(皇彝)。武后「上不汨於朝彝、下無招於官謗」

【朝謨】ボ 朝廷のはかりごと。沈約「朝謨謹蕭、宰略遐震」

【朝閑】ケツ 帝王の居所。李中「慷慨辭朝闕、迢遙涉路塵」

【朝霧】ム あさのきり。(曉霧)。七命に「踐朝霧、越春衢」

【朝議】ギ 朝廷の相談。歐陽修「前年辭諫署、朝議不容乞」

【朝鐘】ショウ あさのかねの音。王褒「空林鳴暮雨、虛谷應朝鐘」

【朝露】ロ あさのつゆ。漢書に「人生如朝露、何久自苦如此」

【朝曦】ギ あさひ。李德裕「含輕煙於夕景、泫零露于朝曦」

【朝權】ケン まつりごとの權力。(政權)。晉書、陶侃傳に「侃李年懷止足之分、不與朝權」

【朝氣】アイ あさのもや。江淹「朝議方卷、鄣氣已廓」

【朝夕池】チウセキ うみ。山海經に「朝夕池、一名天池」

【朝生壽】チウセイ ノジユ 朝生は木槿なり、朝榮え夕に死す。人の短命なるに喩ふ。戰國策に「君危二於累卵一、而不レ壽二於朝生一」

【朝宿邑】テウシユク イフ 天子より諸侯の大功ある者に對し、入朝する時、宿泊する爲に賜はる采地。公羊傳に「天子之郊、諸侯皆有二朝宿邑一」

【朝三暮四】テウサン ボシ 宋の狙公が狙をだましたる故事より、詐術を用ゐて人を欺き愚弄するをいふ。列子に「宋有二狙公者一愛レ狙養レ之、成レ羣、能解二狙之意一、狙亦得二公之心一、將レ限二其食一、先誑レ之曰、與二若芧一、朝三而暮四足乎、衆狙皆起而怒、俄而曰、與二若芧一、朝四而暮三足乎、衆狙皆伏而喜、物之以二能鄙一相籠、皆猶レ此也、聖人以レ智籠二衆狙一也、名實不レ虧、使二其喜怒一哉」

【朝不レ謀レ夕】アシタヲバカラズ 事急にして考ふるに暇なきをいふ。戰國策に「朝不レ謀レ夕、無二一日之積一」又、陳情表に「人命危淺、朝不レ慮レ夕」

【朝名市利】テウメイシリ 名を爭ふは朝廷に於てし、利を爭ふは市上に於てする意。戰國策に「張儀曰、臣聞、爭レ名者於レ朝、爭レ利者於レ市、今三川周室、天下之市朝也」

【朝令暮改】テウレイボカイ 朝に令を下して、夕に改む。晉書、周處傳に「處入レ吳尋二二陸一、時、朝令而暮改」 早く任用せらるるをいふ。唐書に「布衣之人、懷レ奇抱レ策、而望二朝奏夕召一、豈易レ得哉」

【朝奏夕召】テウソウセキセウ 住所の定らざるをいふ。晁補之「托二生理于四方一、固朝秦而暮楚」

【朝聞夕改】テウブンセキカイ 朝に過を聞けば、夕に改む。晉書、周處傳に「處入レ吳尋二二陸一、中略雲曰、古人貴二朝聞夕改一、君前途尚可、且患二志之不レ立、何憂二名之不レ彰」

【朝種暮穫】テウシユボククワク あさうゑてくれにとり入る。事の方針定らず、短時間にかはり成らざるをいふ。晉書、祖納傳に「朝種暮穫、善惡未レ定矣」

【朝歌夜絃】テウカヤゲン 朝となく夜となく樂を奏するをいふ。杜牧「朝歌夜絃、爲二秦宮人一」

【朝蠅暮蚊】テウヨウボブン 朝には蠅あつまり、暮には蚊さわぐ。韓愈「朝蠅不レ須驅、暮蚊不レ可レ拍」

【朝薨暮鑣】テウコウボヘウ 朝にはなづなを食ひ、暮には鑣をなむ。困窮の生活をいふ。韓愈「大學四年、朝薨暮鑣」

【朝聞レ道夕死可】アシタニミチヲキカバユフベシストモカナリ 人朝に一たび先王の道を聞ふれば、夕に死すとも悔なし。論語に「子曰、朝聞レ道、夕死可矣」

朞

【朞】キ。居之切。支。
一めぐる(匝)二期に通ず。ひとめぐり。

【朞匝】キサフ

【朞年】キネン 滿一箇年。晉書、周處傳に「志存二義烈一、言必二忠信一、克レ己朞年」

期

【期】キ、ギ。渠之切。支。
一あふ(會)二もとむ(要)三あつ(當)四かならず(必)五なほる(卒)六まつ(待)七とき、をり八ちぎる(約)九かぎる(限)十まこと(信)十一どもる(口吃)十二さだむ 朞に同じ、ひとまはり。

【期日】キジツ 日を定む。又、定めたる日。周禮に「令二萬民時斬レ材、有二期日一」

【期月】キゲツ 滿一箇月。論語に「苟有二用レ我者一、期月而已可也」

【期内】キナイ 一定の時限内。周禮に「期内之治聽、期外不レ聽」

【期年】キネン 滿一箇年。史記に「不二期年一、千里馬至者三」

【期成】キセイ 必ず成さんことを目的とす。

【期服】キフク 一箇年の喪。

【期門】キモン 勇士の稱。又、軍門をいふ。後漢書に「帝始作二期門一、數爲二微行一」

【期限】キゲン かぎり。劉孝威「乘レ障無二期限一、思歸安可レ論」

【期約】キヤク やくそく。詩經、疏に「男子之初、與二婦人一有二期約一矣」

【期待】キタイ あてにしてまつ。王禕「际レ余猶二弟兄一、往往過二期待一」

【期望】キボウ あてにしのぞむ。劉浩「期望秋風回、一掃無二餘孽一」

【期會】キクワイ 時を約して集る。又、をり。史記、項羽紀に「期會而擊レ楚」

【期節】キセツ をり。とき。(季節)。

【期頤】キイ 百歲の齡。禮記に「百年曰二期頤一」又、李華「抱和全默、皆享二期頤一」

【期期艾艾】キイキガイガイ 口の訥なるをいふ。書言故事に「口訥曰二期期艾艾一」漢書に「周昌爭レ高帝廢二太子一之事、怒曰、臣期期不レ奉レ詔」世說に「魏、鄧艾口訥、常自稱二艾艾一」

九畫

【朊】クワン。呼官切。寒。
闖兒は、四凶の名。

【朘】ソウ、ス。祖叢切。東。
一いたる(至)二船ゆかず。

十畫

【朝】テウ。朝の本字。
說文に「舟に从ふ、舟を變じて月に作るは本字に非ざるなり」

【望】バウ、マウ。巫放切。漾。望に通ず。
もちづき。
說文に「月に从ひ、臣に从ひ、壬に从ふ」

十一畫

【朕】チン、ゼン。徐兗切。銑。
みじかし(短)、ちひさし(小)。
デン、ネン。奴見切。霰。
つきいづ(月出)。

十二畫

【朗】ロウ、ル。盧東切。東。
つきのひかり(月光)。
トン。他昆切。元。或は、脣に作る。
コツ、ゴチ。胡骨切。月。
けがる(垢)、にごる(濁)。
トウ、ヅ。徒東切。東。
一つきのでしほ(月初出)二月

【朦】モウ。
あきらかならんとす。
おぼろなる貌。陶翰「湖色濃蕩漾、海光漸朦朧」

【朦朧】モウロウ 月のおぼろなる貌。李羣玉「浮雲捲盡看二朦朧一」

【膌】キツ、キチ。厥聿切。質。
月の乙(東北)にあること。

十四畫

【朦】モウ。
月のうごく貌。

【朦】モウ。
慣用音。肉部朦の字と異なり。
ほのか、おぼろ、月の入り。

【朦朧】モウロウ おぼろなる貌。

【朧】ロウ。前に同じ。潘岳「月朧朧以含光兮、露淒清以凝レ冷」

十六畫

【朧】ロウ、ル。盧東切。東。
つきのひかり。おぼろ。
おぼろづき。范成大「紙窗弄レ色如二朧月一、又了浮生一夜眠」

【朧月】ロウゲツ

【朧明】ロウメイ おぼろなる貌。元稹「仍對檐南滿山樹、野花撩亂月朧明」

【朧朧】ロウロウ 前に同じ。吳融「非レ明非レ暗朧朧月、不レ煖不レ寒縵縵風」

二十畫

【朧】タウ。他鼎切。漾。
月あきらかならず、おぼろ。

木 部

部首

【木】ボク、モク。莫卜切。屋。
一き二おかす(冒)三ふる(觸)四すなほ(質樸)五柔和ならざる貌。

【木丹】ボクタン 〔植〕くちなしの異名。本草に「梔子、一名木丹」

【木公】モクコウ 〔植〕松の異名。夷堅志に「木公、松也」

【木王】モクワウ 〔植〕あづさの異名。古今註に「梓爲二木王一」

【木主】 ねはい。位牌。史記に「爲二文王木主一、載以レ車爲二中軍一」

【木母】 ㊀〔植〕梅の異名。夷堅志に「木母、梅也」㊁母の木像。通鑑に「始居二文太后憂一、依二丁蘭一作二木母一」

【木奴】 〔植〕柑橘の異名。玉堂閑話に「柑號二木奴一、橘亦曰二木奴一」

【木石】 ㊀木と石と。孟子に「與二木石一居、與二鹿豕一游」㊁情なきものをいふ。

【木本】 きのねもと。國語に「伐レ木不レ自二其本一、必復生」

【木瓜】 〔植〕ぼけ。詩經に「投レ我以二木瓜一、報レ之以二瓊琚一」

【木桃】 〔植〕さんざし。詩經に「投レ我以二木桃一、報レ之以二瓊瑤一」

【木匠】 だいく。清異錄に「木匠總號二運斤之藝一」

【木耳】 〔植〕きくらげ。本草に「木耳生二于朽木之上一、無二枝葉一、乃濕熱餘氣所レ生」

【木豆】 きづくりのたかつき。爾雅に「木豆謂二之豆一、竹豆謂二之籩一」

【木狗】 くろ犬に似たるけもの。冀越集に「木狗生二廣東左右江山中一、形如二黑狗一、能登レ木」

【木柿】 こっぱ。晉書に「詔修二戰艦一、木柿蔽レ江而下」

【木星】 太陽系中の第九位にある遊星。平均直經約三萬六千里にして、五個の衞星を有し、十一年と三一四・八日にて太陽を一週す。

【木客】 ㊀きこり。玉壺遐覽に「神仙傳有二木客一、斲二於山中一」㊁〔動〕山に棲む怪獸。又、狒狒。

【木屐】 足駄の類。後漢書に「廷熹中京都長者、皆著二木屐一」

【木理】 木材にある年輪。もくめ。酉陽雜俎に「房怪二其木理成形一、問レ之」

【木斛】 〔植〕木の名。本草に「木斛中虛如レ木、長尺餘、但色深黃光澤耳」

【木訥】 身飾りけなく言にぶし。論語に「剛毅木訥近レ仁」

【木魚】 〔佛〕讀經する時、たたき鳴す佛具。北史に「隋大業十年、殞二木魚符於京官一」

【木偶】 でく。人形。史記に「見レ木偶人一、相與語ふ」

【木通】 〔植〕あけびの異名。

【木筆】 ㊀〔植〕こぶしの異名。本草に「辛夷初發如レ筆、北人呼爲二木筆一」㊁ふで。唐書に「以レ木爲レ筆、玉爲レ印」

【木戟】 〔植〕くちなしの異名。

【木犀】 〔植〕もくせい。楊萬里「覺來籬外木犀風」

【木強】 素樸にしてかざりなし。史記に「勃爲レ人、木強敦厚」強は又、彊に作る。

【木賊】 〔植〕とくさ。

【木蜜】 〔植〕なつめの異名。本草に「枳椇一名木蜜、其木皮溫無レ毒」

【木黐】 かるわざ。淮南子に「木黐者非二眇勤一」

【木像】 木にて作りたる似姿。葛長庚「木像入レ廟、而汗流」

【木蓮】 〔植〕ふようの異名。木芙蓉。花木志に「木蓮、葉似二芙夷一、花類レ蓮」

【木槿】 〔植〕むくげ。禮記に「仲夏之月、木槿榮」

【木劍】 木にて作れるつるぎ。通鑑に「取二朝服木劍一以進」

【木蔭】 こかげ。(樹陰)。玉澗雜書に「木蔭聽二鳥聲一」

【木魅】 老木の精。洞天清錄に「山精木魅之能爲レ祟者」

【木罌】 木にて作れる瓶。史記に「以二木罌瓶一渡レ軍」

【木燧】 木の火きり。白虎通に「鑽二木燧一取レ火教レ民」

【木闌】 〔植〕一種の香草。又、もくれんげ。屈平「朝搴二阰之木闌一兮」

【木鐸】 木の舌を有する鈴なり。振りて衆をいましめしより、教を施して一世を指導する人にたとふ。論語に「天將レ以二夫子一爲レ木鐸ふ」

【木乃伊】 ㊀ *Mummy*. 支那にて、木乃伊(モイ)と誤譯せしものの轉訛。葯を塗りて腐敗を防ぎたる死體。(死體)。報耕錄に「回回地、有レ年七十八歲老人、自願二捨レ身濟レ衆者一、絕不二飲食一、惟澡レ身啖レ蜜、經レ月便溺、皆蜜、既死、國人殮以二石棺一、乃滿用レ蜜沒、鐫二志歲月於棺蓋一、瘞之、俟二百年後一啓レ封、則蜜劑也、凡人損二折肢體一、食二少許一、立愈、雖二彼中一亦不二多得一、俗曰二蜜人一、番言二木乃伊一」㊁轉じて、生物體の化石。

【木天蓼】 〔植〕またたび。本草集解に「木天蓼所在皆有、生二山谷中一」

【木居士】 木にて造れる神像。韓愈「火燒波穿不レ計レ春、根如二頭面一、軀如レ身、偶然題作二木居士一、便有二無窮求レ福人一」

【木長官】 松の異名。潛牧嶺上に古松一本あり、盤錯して奇怪なり、嘗て兄弟あり、牆に鬩ぎ、有司に訴へんと欲し、夜行きてその下に憩ふ、遲明色を辨ず、相視れば乃ち伯仲なり、遂に各悔い咎め、爭を息めて還る、因りて松を名づけて木長官と爲す云云。杭州志に見ゆ。

【木芙蓉】 〔植〕ふように同じ。王安石「水邊無數木芙蓉、露滴胭脂色未レ濃」

【木患子】 〔植〕むくろじの實。

【木梗患】 客死してかへらざるをいふ。說苑に「孟嘗君將二西入一レ秦、有レ客入曰、臣之來也、過二于淄水上一、見レ一土偶人與二木梗一人一語上、木梗謂二土偶人一曰、子先土也、持レ子以爲二偶人一、偶天大雨、水潦並至、子必沮壞、應曰、我沮乃反二吾眞一耳、今子東圍之桃也、刻レ子以爲レ梗、遇二天大雨水潦並至一、必浮レ子泛乎不レ知レ所レ止、今秦四塞之國也、有二虎狼之心一、恐其有二木梗之患一、子レ是孟嘗卒不二敢西嚮一レ秦」

【木假山】 木を以て山の形を作りしもの。又、箱庭の義とす。五雜俎に「余在二德平一、葛尙寶園中、見二木假山一一座一」又、蘇洵に木假山記あり。

【木樾樹】 〔植〕むくろじに同じ。

【木珊瑚】 女丈夫木蘭が男子に扮して徵兵に應じ、戰を畢へて悉なく鄉里へ歸りたることを敍べたる七言古詩なり。滄浪詩話に「木蘭歌最古、然朔氣傳二金柝一、寒光照二鐵衣一之類、已似二太白一矣」

【木人石心】 感情なき人をいふ。晉書、夏統傳に「此吳兒、是木人石心」

【木牛流馬】 その形牛馬に象り、機械仕掛にて運行する車、兵糧運搬の用に供す。諸葛亮の創製にかかる。

【木石爲レ徒】 世に求むる心なく、僻地にわびずまひするをいふ。柳宗元「用レ是更樂二瘠默一、與二木石一爲レ徒、不二復致レ意」

【木强則折】 木の强きものは、風雪などに折れ易し。淮南子に「兵强則滅、木强則折、革固則裂、齒堅二於舌一、而先レ之敝」

【木從レ繩則正】 曲れる木も墨繩をあてて削れば、正しく成る。書經に「木從レ繩則正、君從レ諫則聖」

【木實繁者披二其枝一】 その臣强き者は、その主をあやふくするに喩ふ。史記に「木實繁者披二其枝一、披者傷二其心一」

【朮】

ヒン、ビン。匹刃切。震。あさざれ(麻片)。

一畫

【未】

ビ、ミ。無沸切。未。

㊀ひつじ(十二支の一、時刻にては午後二時、方角にては西南)㊁くらし(昧)㊂いまだ、いまだし、㊃あらず、ず(不)㊄いまだ…ず㊅いな(否)㊆將來。

【未了】 まだなほらず。李白「江上相逢借二問君一、語聲未了風吹斷」

【未月】 六月の異名。

【未央】 いまだなかばに至らず。詩經に「夜如何、其夜未レ央」

【未成】 いまだ出來あがらず。史記に「毛羽未レ成、不レ可二以高蜚一」

【未決】 いまだきまらず。

【未完】 いまだをはらず。

【未知】 いまだしらず。
【未定】 いまだ定まらず。尹文子に「雄兒在レ野、衆人逐レ之、分未レ定也」
【未返】 いまだかへらず。駱賓王「逝將レ歸而未レ返」
【未來】 現在の後に來るべき時。又、後生。（將來、當來）。求心錄に「未來心不レ可レ得」
【未明】 よあけ。（黎明）。
【未炊】 いまだかしがず。楊炯「夫軍并未レ達、如レ臨二盥水之源一、軍竈未レ炊、似レ對二嗟來之食一」
【未湯】 いまだしほまず。陸游「秋葉紅未レ湯」
【未衰】 いまだおとろへず。蘇軾「當年我作二表忠碑一、坐覺江山氣未レ衰」
【未婚】 いまだ結婚せず。杜甫「昔別君未レ婚、兒女忽成レ行」
【未敢】 いまだあへてせず。左傳に「季孫宿曰、寡君猶未レ敢、況下臣君之隸也」
【未萌】 變故いまだ生ぜず。漢書に「所ア以安二社稷一、絕中未萌ォ也」
【未然】 いまだ然らず。いまだ到來せず。漢書に「明者起二福于一無形一、消二患于一未然一」
【未開】 ㊀いまだ開けず。㊁いまだ開かず。元稹「丁寧採二芳侶一、須レ識未開叢」
【未發】 いまだ外に發せず。いまだ事起らず。
【未詳】 いまだつまびらかならず。
【未遂】 いまだ成しとげず。劉淦「東西未レ遂歸田計、海上青山久廢レ耕」
【未聞】 いまだきかたることなし。
【未然】 ㊀いまだみのらず。禮記に「五穀不レ時、果實未レ然」㊁修業のたらざること。
【未練】 ㊀いまだなれず。㊁心殘り。
【未滿】 いまだ或一定の數にみたず。
【未濟】 易の卦の名。易經に「未濟亨、小狐汔濟、濡二其尾一、无レ攸レ利」
【未了因】 〔佛〕前世の因緣を現世に於て、未だ結びつくさざる意。蘇軾「與君世世爲二兄弟一、更結來生未了因」
【未亡人】 寡婦の自稱。左傳に「夫人聞レ之、泣曰、先君以二是舞一也、習二戎備一也、今令尹不レ尋二諸仇讐一、而於二未亡人之側一、不二亦異一乎」
【未死心】 死後なほ忠義奉公の心の存する義。馬子才「可レ怜一片西湖土、埋卻英雄未死心」
【未見書】 いまだ見たることなき書物。五雜俎に「讀ァ未二曾見一之書ュ、歷ァ未二曾到一之山水ュ、如ァ獲二至寶一、嘗中異味ュ、一段奇快、難二以語一人也」
【未曾有】 昔より絕えてなし。觀无量壽經に「歎二未曾有一、郭然大悟」
【未敷蓮】 〔佛〕全く開かざる蓮花。和密念佛抄に「觀音手執二未敷蓮一、作二開敷勢一、卽此表示也」
【未雨綢繆】 禍を未萌に防ぐをいふ。詩經に「迨二天之未一陰雨一、徹二彼桑土一、綢二繆牖戶一」
【未能免俗】 いまだ世俗と緣を絕つこと能はず。晉書に「未レ能レ免レ俗、聊復爾爾」
【未測深淺】 ㊀事情の測り知り難きをいふ。吳質「卽以二五日一到レ官、初至承レ前、未レ知二深淺一、然觀二地形一、察二土宜一、西帶二恆山一、連二岡平代一、北鄰二柏人一、乃高帝之所レ忌也」㊁人の心底の測り知るべからざるをいふ。北史、魏高陽王雍傳に「少俶儻不レ恆、孝文曰、吾亦未レ能レ測二此兒之淺深一」
【未繘羸瓶】 事成らんとして失敗するに喩ふ。易經に「汔至亦未繘、井羸二其瓶一、凶」
【未離欲者】 〔佛〕三界の見惑のみを斷じ、欲界の思惑を斷じ得ざるもの。
【未嘗入城府】 僻地に居住して未だ嘗て城下に行きたることなし。後漢書に「龐公者、南郡襄陽人也、居二峴山之南一、未二嘗入一城府一」
【未レ知鹿死誰手】 權力の誰が手に歸するかを知らずといふ義。北史に「若遇二光武一、當レ並驅中原一、未レ知二鹿死一誰手一」

【未】 バツ、マチ。莫撥切。曷。
㊀すゑ、こすゑ（梢）㊁ほし（端）㊂いただき（頭）㊃くづ、こな（屑）㊄なし（無）㊅よわし（弱）㊆とほきこと（遠）㊇つひに（終）㊈なかれ（勿）㊉うすし（薄）、あさし（淺）㊊ひくし（低）、いやし（賤）。
【末民】 工商のたみ。漢書に「官富實、而末民困」
【末利】 すゑの利の義、商工の利得をいふ。後漢書に「理レ國之道、擧二本業一、而抑二末利一」
【末世】 道德の頹廢せる時代。又、滅亡に近き時代。（淺季世）。左傳に「叔向曰、齊其如何、晏子曰、末世也」
【末代】 のちの世。
【末臣】 身分卑き家來。崔瑗「惟我末臣、頑蔽無レ聞」
【末寺】 本山より分れたるてら。
【末作】 商工等の業。昔は農業を以て本となしし、が故なり。晉書に「農夫苦二其業一、而末作不レ可レ禁也」
【末技】 用に立つこと少きわざ。漢書に「穎川之民、好二末技一、不二田作一」
【末言】 あさはかなる言葉。
【末尾】 すゑ。大尾。
【末季】 すゑの時。曹植「子生二末季一、沈二溺流俗一」
【末社】 本社につきたる小社。
【末法】 〔佛〕佛滅後の時期に立てたる三名目の一、正法五百年、像法千年の後、一萬年の間の稱。末法燈明記に「於二末法中一、但有二言教一、而无二行證一」
【末宮】 いやしき役。高適「盛時慙二阮步一、末宮知二周防一」
【末派】 すゑのながれ。羅隱「正憂末派淪二滄海一」
【末流】 子孫。又、末派。人物志に「末流之質、不レ可二勝論一」
【末俗】 あしき事に染みたるならはし。漢書に「今末俗之弊、致事煩多」
【末孫】 遠き子孫。大戴禮に「禹崩、十世乃有二末孫桀一、武丁後九世、乃有二末孫紂一」
【末書】 注釋の書。
【末班】 すゑの位次。元稹「觀象樓前奉二末班一」
【末座】 しもざ。すゑの座席。章碣「小儒末座頻傾レ目」
【末席】 前に同じ。姚康「自慙陪二末席一、便與二九霄一通」
【末疾】 手足のやまひ。左傳に「風淫末疾、雨淫腹疾」
【末造】 ㊀末代に爲したる事柄。㊁すゑの世。禮記に「諸侯之有二冠禮一、夏之末造也」
【末產】 商工の產業をいふ。管子に「故末產不レ禁、則野不レ辟」
【末路】 生涯の終。又、物事のなれのはて。漢書に「秦保二曲臺之宮一、懸二衡天下一、至二其晚節末路一、張耳陳勝、連二從兵一以叩二函谷一、咸陽塗危」
【末明】 しにさきは。いまはのきは。
【末減】 末は薄、減は輕なり、刑罰を寬にして輕くする義。左傳に「仲尼曰、叔向古之遺直也、中略三數二叔魚之惡一、不二爲末減一」
【末歲】 としのくれ。鄭谷「令終歸二故里一、末歲道如レ初」
【末裔】 子孫。（後胤）。急就篇、注に「楚左史倚相、末裔爲二左氏一」
【末葉】 すゑの世。又、後胤をいふ。盧思道「周方末葉、仍値二辟王一」
【末僚】 下級の官吏。朱瑒「早造二末僚一、預參二下席一」
【末端】 はし。
【末節】 枝葉のことがら。禮記に「鋪二筵席一、陳二尊俎一、列二籩豆一、以二升降一爲レ禮者、禮之末節也」
【末摩】 〔佛〕（梵語 *Marman.*）斷末摩の略、命の終らんとするとき、多く斷末摩苦受に逼られ、別物あることなきをいふ。翻譯名義集に「梵語末摩此云二死穴一、或云二死節一、以二病觸一此處一有レ問二絕生一、故難レ死而心頭熱也、緣二第八識一未レ捨故」
【末輩】 下につくやから。
【末學】 未熟なる學問。陳書に「沈不

害上書曰、臣末學小生、詞無レ足レ算」

【末藝】 つまらぬわざ。王僧孺「章句小才、蟲篆末藝」

【末大必折】 枝葉大なれば本根折る。以て支族大にして本家を亡すにいふ。左傳に「末大必折、尾大不レ掉」

【本】

ホン、ボン。布忖切。阮。

(始)㊀もと、もとづく(原)㊁はじめ(始)㊂むかし(舊)。

説文に「木下を本といふ、木一その下に在るに从ふ」

【本分】 本來の分限。荀子に「見レ端不レ如レ見二本分一」

【本心】 まごころ。孟子に「此之謂レ失二其本心一」

【本支】 もととすると。李白「七葉運二皇化一、千齡光二本支一」

【本末】 もととすると。はじめとをはりと。史記に「本末相順、終始相應」

【本位】 基本とする標準。

【本色】 固より有せるいろ。きぢ。文心雕龍に「雖レ論二本色一、不レ能二復化一」

【本旨】 本來のむね。蔡邕「前儒特爲二章句一者、皆用二其意一、傳非二其本旨一」

【本邦】 わがくに。

【本志】 もとよりのこころざし。韓愈「悼二本志之變化一、中夜涕洟交レ頤」

【本性】 もとよりのうまれつき。詩經、疏に「言二后妃之本性一也」

【本初】 はじめ。(太初)。

【本來】 もとより。

【本始】 はじめ。史記に「從臣嘉觀原念二休烈一、追二誦本始一」

【本門】 〔佛〕衆生本有の妙理を明す法門。法華經科註に「本門破二執レ近之情一、生二本地深信一」

【本俗】 昔よりのならはし。

【本則】 おほもとの規則。

【本指】 本來のむね。史記、張耳傳に「具道二本指一」

【本紀】 歴史の中にて帝王のことを紀したる部分。史記に十二本紀・十表・八書・三十世家・七十列傳と分ちたるに始まる。

【本事】 〔佛〕佛又は菩薩の本傳本紀をいふ。法華經に「或説修多羅伽陀及本事」

【本悟】 眞正なるさとり。(眞悟)。楞嚴經に「所レ得二密言一、遂同二本悟一」

【本祖】 せんぞなもとをとす。禮記に「萬物本二乎天一、人本二乎祖一」

【本根】 おほもと。舊唐書に「本根一搖、憂患不レ淺」

【本能】 〔哲〕*Instinct.* 生來自然に有する一定の性向。

【本眞】 本來のまこと。漢書、揚雄傳に「事有二本眞一、陳二施於億一」

【本貫】 原籍地。十六國春秋に「韓熙戰本貫齊州、隱二居嵩嶽一」

【本務】 必ずつとむべきつとめ。隋書、序に「夫孝三皇五帝之本務、萬事之紀綱也」

【本國】 わがくに。己のうまれたるくに。(鄉國)。

【本教】 人の基となるをしへ。禮記に「衆之本教曰レ孝」

【本然】 もとより然るべき意にいふ。

【本惡】 わるものかしら。(元惡)。禮記、疏に「雖レ禍二刑禁一、而非二其本惡一」

【本朝】 わが朝廷。又、わがくに。(皇朝、國朝)。漢書に「望之雅意在二本朝一」

【本統】 もと。宋史に「所レ以一二本統一、明レ尊レ尊也」

【本幹】 ねもと。史記に「彊二本幹一、弱二枝葉一、之勢也」

【本源】 もと。おほもと。杜甫「乘レ心識二本源一、於レ事少二滯礙一」

【本業】 農業。後漢書に「修二神農之本業一、分、採二軒轅之奇策一」

【本意】 まことのこころ。後漢書に「孔子垂二經典一、皋陶造二法律一、原二其本意一、皆欲レ禁二民爲一非也」

【本義】 ㊀まことの意義。宋史に「朱熹易本義十二卷」㊁義にもとづく。荀子に「禹湯本レ義勝レ信、而天下治」

【本綱】 もとのすべくくり。韓非子に「吏者民之本綱也」

【本領】 ㊀舊よりの領地。㊁その人の得意とするところ。

【本態】 もとのすがた。白居易「奸蛍黑白失二本態一」

【本論】 おほもとの議論。

【本趣】 もとのおもひ。晉書に「此亦籍之胸懷本趣也」

【本錢】 もときん。舊唐書に「各與二本錢一千貫一」

【本據】 よりどころ。(根據)。後漢書に「利既難レ要、將レ失二本據一」

【本懷】 本來ののぞみ。ほんまう。

【本願】 もとのねがひ。晉書に「今日之舉、非二本願一也」

【本草學】 支那、古代の植物學。

【本支百世】 宗族の永遠に繁榮する義。詩經に「文王孫子、本支百世」

【本地垂跡】 〔佛〕日本の神も、天竺なる本地の佛の跡をこの地に垂れて出現せるものとし、天照太神を天竺の阿彌陀佛の垂跡とし、八幡太神を觀世音なりなど唱ふる佛家の説。兩部神道の説もこれより起れり。

【本來面目】 口に説く能はざる心の眞性。傳燈錄に「道明求二法于六祖一、六祖曰、那箇是明上座、本來面目」

【本來無一物】 心虛無にして、一物なも存せざる義。傳燈錄に「菩提本非レ樹、明鏡亦非レ臺、本來無二一物一、何處惹二塵埃一」

【本然之性氣質之性】 本然の性は、純然たる天より附與せられたる性にして、氣質の性は、血氣混融して後、生ずる性なりと説く程朱學派の説。朱子語類に「有二天地之性一、有二氣質之性一、天地之性、則太極本然之妙、萬殊而一本也、氣質之性、則二氣交運而生、一本而萬殊也」

【札】

㊀サツ、サチ。側八切。黠。㊁アツ、エチ。一黠切。黠。

㊀一ふだ(薄く小さき木簡)㊁わかきもの、ふみ(文書)㊂わかじに(夭死)㊃かい(癘)㊄さね(甲葉)㊅はやりやみ(疫癘)㊆やぶる(敗)㊇物の聲㊈むくい(報)。

【札札】 物のこころの形容。爾雅に「其鳴無レ韻、但札札然」

【札牒】 てがみ。

【札厲】 あらあらしくはげし。列子に「士氣和無二札厲一」

【札翰】 てがみ。かきもの。魏書に「聞習二尺牘札翰一」

【札牘】 物かけるふだ。柳宗元「冥二特札牘一兮、搖二動禍機一」

【札瘥夭昏】 札は大疫にて死ぬること、瘥は小疫なり、夭はわかじになり、昏は生れて未だ三月に滿たずして死ぬるなり。左傳に「鄭國不天寡君之二三臣、札瘥夭昏」

【朮】

㊀シュツ、ジュツ。食律切。質。㊁ヂュツ、チュチ。直律切。質。㊂もちあは(黏粟)㊃やまあざみ、をけら、うけら。

二畫

【朱】

シュ、ス。鍾韓切。虞。

㊀あか、あけ㊁あかし㊂あかいろの塗料㊃あかいろのもの㊄赤心木(松柏の屬)㊅株に通ず。

【朱口】 なんなの口。古詞に「朱口發二豔歌一、玉指弄二嬌絃一」

【朱干】 赤くぬりたるたて。禮記に「朱干玉戚、冕而舞二大武一」

【朱天】 西南の天。淮南子に「西南方曰二朱天一」

【朱光】 ㊀赤きひかり。曹植「揮羽邀二清風一、悍目發二朱光一」㊁太陽。謝朓「朱光既夕、涼雲始浮」

【朱朱】 〔動〕雞の異名。風俗通に「雞本朱氏翁所レ化、故呼レ雞曰二朱朱一」

【朱汗】 血のいろなせるあせ。勞する甚だしきなり。杜甫「馬驚朱汗落、胡舞白題斜」

【朱明】 夏の異名。漢書に「朱明盛長、敷二與萬物一」

【朱砂】 しゅとするすな。南史に「給二黃金朱砂曾青雄黃等一」

【朱紫】 赤色のこな。五代史に「免レ冠

更施ニ朱粉一」

【朱紘】シュクワウ 赤き冠のかざり。禮記に「冕而朱紘、躬秉レ耒」

【朱陛】シュヘイ 朝廷のきざはし。赤く塗れるよりいふ。梅堯臣「大檀爛爛、朱陛煌煌」

【朱夏】シュカ なつ。李羣玉「氣吹ニ朱夏一轉、聲掃ニ碧霄一寒」

【朱宮】シュキウ 赤ぬりのごてん。楚辭に「魚鱗屋兮龍堂、紫貝闕兮朱宮」

【朱桷】シュカク 赤ぬりのたるき。魏都賦に「朱桷森布而支離」

【朱鳥】シュテウ 南方の星宿の名。淮南子に「南方火也、其獸朱鳥」

【朱組】シュソ 赤きくみひも。禮記に「玄冠朱組纓、天子之服也」

【朱殷】シュアン あかぐろし。左傳に「余折以御ニ左輪朱殷一」

【朱華】シュクワ 赤き色のはな。曹植「朱華冒ニ綠池一」

【朱綾】シュズヰ 赤きかんむりのひも。柳宗元「纓以ニ朱綾一」

【朱路】シュロ 帝王乘用の車。禮記に「左个乘ニ朱路一駕ニ赤駒一」

【朱提】シュ もと地名なれども、その地銀を出だすによりて、銀の異名として用ゐらる。五雜俎に「今人銀槩謂ニ之朱提一、按漢書地理注、朱提出レ銀」

【朱韓】シュ 赤き色のとばり。陶潛「褰ニ朱韓一而正坐」

【朱墨】シュボク ㊀物事の異なるに借り用ゐる。魏志、注に「更爲作ニ朱墨別異一」㊁朱と墨にて帳簿にしるす、轉じて、官務を執ることにいふ。劉禹錫傳に「吾觀ニ蘇令綽一、朱墨一何工」㊂詩文の推敲添削をいふ。蘇軾「末路益可レ羞、朱墨手自研」

【朱綈】シュセツ 赤きうすもの。韓愈「朱綈數幅垂ニ中堂一」

【朱楊】シュヤウ 赤き壁のかはやなぎ。孫楚「俯依ニ青川一、仰翳ニ朱楊一」

【朱殿】シュデン 赤ぬりのとの。梅堯臣「石樓朱殿藏ニ林中一」

【朱蓼】シュガタ 赤きはなぶさ。王勃「趨レ庭洽訓、共歆ニ朱蓼之篇一」

【朱鞍】シュアン 赤きたづな。薛昭蘊「花色融レ人競賞、靈是綉鞍朱鞍」

【朱蓋】シュガイ 赤ききぬがさ。王鑒「絳旗若レ吐レ電、朱蓋如レ振レ霞」

【朱髦】シュバウ あか馬のたてがみ。魏略に「大秦多ニ白馬朱髦一」

【朱篆】シュテン 赤くぬりたる轅(ながえ)。詩經、疏に「所レ乘之車、以ニ朱篆一約ニ其長轂之輒一」

【朱樓】シュロウ 赤ぬりのうてな。後漢書に「伏ニ朱樓一而四望兮」

【朱樹】シュジュ 〔植〕あかまつ。山海經に「崑崙山上有ニ朱樹一」

【朱槿】シュキン 〔植〕小形にして色火の如きたちばな。梁元帝「三色黃柑、千戶朱橘」

【朱櫃】シュキ 赤ぬりのひつ。雲笈七籤に「發ニ元天之朱櫃一」

【朱檻】シュカン 赤ぬりのてすり。白居易「朱檻在ニ空虛一、涼風八月初」

【朱顏】シュガン あかきかほ。李端「勿レ以ニ朱顏好一、而忘レ白髮侵一」

【朱闕】シュケツ 赤ぬりの宮門。吳都賦に「朱闕雙立、馳道如レ砥」

【朱鄂】シュクワク 赤ぬりのつくりがは。詩經に「載驅薄薄、簟茀朱鄂」

【朱櫻】シュアウ 〔植〕あかきゆすらうめ。唐本草に「熟時深紅者、謂ニ之朱櫻一」

【朱曦】シュギ 夏のあさひ。夏は太陽の威盛んにして、朝日の色殊に赤し、故にいふ。朱熹「新竹壓レ簷桑四圍、小齋幽敞明ニ朱曦一」

【朱欄】シュラン 赤ぬりのてすり。李建勳「擺レ觴遊レ客遶ニ朱欄一、腸斷殘春送ニ牡丹一」

【朱顥】シュカウ 夏の熱風。抱朴子に「朱顥鑠レ金、不レ能離ニ蕭丘之木一」

【朱子學】シュシガク 宋の朱熹の唱へし儒學。その主張は理氣心性の研究にありて、人の本然は善なれば、皆學びて聖人に至る說を立て、道學も亦性に基く理を證するにあり。

【朱衣吏】シイリ 嚮導をなす官吏。唐書、賈餗傳に「拜ニ常州刺史一、舊制兩省官出使、得ニ朱衣吏一前導、餗赴レ州猶用レ之、觀察使李德裕敕吏、還快快爲レ憾」

【朱門家】シュモンノイヘ 門扉を赤ぬりにしたる家。又、地位高き人のいへ。杜甫「出入朱門家、華屋列ニ蛟螭一」

【朱陳好】シュチンノヨシミ 兩家婚姻を通ずるをいふ。白居易「徐州古澄縣、有レ村曰ニ朱陳一、去レ縣百餘里、桑麻青氣氳、一村惟兩姓、世世爲ニ婚姻一」

【朱錠子】シヤウジ 朱すみ。

【朱絲欄】シュシラン あかいろの界紙。南畿志に「勾容縣崇明寺大藏經五千函、皆繭紙朱絲欄書、函在ニ輪藏殿一」

【朱衣象笏】シヤクコイ あかきころもと象牙のこつと。唐の制に、侍御史、國家に大事あれば、朱衣緋裳を著く。又、五品以上の官吏は象牙の笏を執るなり。韓愈「殷侯侑自ニ太常博士一、遷ニ尚書虞部員外郎一、兼ニ侍御史一、朱衣象笏、承レ命以行」

【朱衣點頭】シイテン 試驗に應じたる文章が選に中るをいふ。侯鯖錄に「歐陽公知ニ貢舉一、每遇レ考ニ試卷一、坐後嘗覺ニ一朱衣人時復點頭一、然後其文入レ格、始疑ニ侍史一、及レ回ニ視之一、無レ所レ見、因語ニ其事於同列一、爲レ之一歎」

【朱脣皓齒】シュシン カウシ あかきくちびるとしろきはと。美人の容貌。楚辭に「朱脣皓齒、豐肉微骨」

【朱輪華轂】シュリン クワコク 漢の制、高貴の位になれば、馬車の輪を赤ぬりにして、轂をはなやかに飾る。漢書に「王氏一姓、乘ニ朱輪華轂一者三十三人」

【朴】

㊀ハク、ホク。匹角切。覺。㊁ボク、ホク。匹各切。藥。㊂ホウ、フ。匹候切。宥。㊃ボク、ホク。普木切。尤。㊄ヒウ、フ。披尤切。尤。㊅ボク。慣用音。

㊀ほゝなる(離)㊁未だ腊とならざる鼠の肉㊂樸に同じ㊃もと(本)㊄人の姓。

【朴忠】チウチウ かざりなく誠實なり。漢書に「上以ニ式朴忠一、拜爲ニ齊王大傅一」

【朴直】ボクチヨク かざりけなく正直なり。杜甫「磊落眞觀事、致レ君朴直詞」

【朴墮】ボクロウ かざりなくいやし。尙書故實に「朴墮人不レ生レ敬」

【朴茂】ボクボウ かざりけなくすぐる。宋書に「士以ニ純明朴茂一爲ニ美一」

【朴素】ボクソ かざりなし。飾らざるきぢ。後漢書に「車騎朴素、無ニ金銀之飾一」

【朴野】ボクヤ かざりけなくいやしげなり。

【朴硝】ボクセウ えんせう。(火硝)。

【朴實】ボクジツ かざりけなく愚なり。宋史に

【朴魯】ボクロ かざりげなし。(樸實)。

「朴魯純直、甚者失ニ之帶固一」

【朶】

㊀タ。都果切。哿。㊁したたる㊂うごかす(動)㊃とらふ(捉)㊄ひく(引)㊅えだ。

【朶朶】ダダ 樹木の垂るる貌。說文に「樹木垂朶朶」

【朶】

㊀タ。朶に同じ。㊁ダ。慣用音。

【朶朶】ダダ おほくのえだ。又、枝のたるる貌。趙師使「解語花枝嬌朶朶」

【朶雲】ダウン 人のてがみの敬稱。唐書に「唐韋陟以ニ五朶牋一爲ニ書記一、使ニ侍妾主ニ之一、其牋答受ニ意而已、皆有ニ楷法一、陟唯署ニ名、自謂所レ書陟字、若ニ五朶雲一、時人慕レ之、號ニ郁公五雲體一」

【朶頤】イダ 物を食はんと欲する貌。易經に「觀レ我朶頤」

【朸】

㊀ジョウ、ニョウ。而證切。徑。㊁ジ、ニ。人之切。支。㊂一車に上る㊃車を止むる木㊄木の名

【朸】

㊀タウ、トウ。都勞切。豪。㊁デウ、デウ。田聊切。蕭。㊂ボク、モク。莫卜切。屋。㊃木の心㊄枝落つ㊅桑を切る刀。

【朸】

㊀リョク、リキ。林直切。職。㊁キョク、コキ。渠力切。職。㊂もくめ(木理)㊃いへのすみ(屋隅)㊄漢の侯國の名。固讀あふこ。

【朴】

㊀キウ、グ。渠尤切。尤。㊁蓋の古文字。㊂あた、かたき(仇)。㊃さんさし㊄あた、かたき(仇)。㊅キ。居履切。紙。㊆ゲイ、ガイ。牛吠切。隊。㊇つくゑ(几に通ず)㊈さるなし㊉くはのみ(椹)。

【机木】〔植〕にれに似たる木、さるなし。山海經に「單狐之山多二机木一」注に「狀如レ榆、可二燒以糞レ田」

【机案】つくゑ。(几案)。

【杙】

ヒ。補履切。紙。さじ(匕)。

【朽】

キウ、ク。許久切。有。

(殘に同じ、臭)。

【朽木】くちたる木。轉じて、無用の人ないふ。論語に「宰予晝寢、子曰、朽木不レ可レ雕也、糞土之牆、不レ可レ杇也、於レ予與何誅」

【朽折】くちて折る。白居易「畫梁朽折紅窗破」

【朽老】年とりて氣力おとろふ。又、その者。(衰老)。南史に「朽老筋力盡、徒步還二南門一」

【朽釘】くちたるくぎ。寺塔記に「藉二一物一、如二朽釘一」

【朽索】くちたる繩。書經に「臨レ民凜乎、若二朽索之馭二六馬一」

【朽株】くちたるかぶ。司馬相如「枯木朽株、盡爲レ害矣」

【朽骨】くちたるほね。晉書に「生二繁華于枯荑一、育二豐肌于朽骨一」

【朽條】くちたるなは。易林に「朽條腐索、不レ堪二施用一」

【朽敗】くさりくづる。後漢書、劉平等傳に「器物取二朽敗者一」

【朽散】くさりちる。宋書、後廢帝紀に「都水材官朽散、十不二一存一」

【朽滅】くちほろぶ。李白「豐功利二生人一、天地同二朽滅一」

【朽腐】くちやぶる。易林に「冬藪朽腐、當二風于道一」

【朽穢】くちけがる。韓愈「今無レ故取二朽穢之物一」

【朽弊】くちやぶる。易林に「山石朽弊、稍崩墮落」

【朽樹】くさりたる木。陳興義「空中朽樹抱二孤條一」

【朽檜】くちたるひのき。李建勳「朽檜枝斜綠蔓垂」

【朽壞】くちやぶる。晉書に「軍旅樂器在レ庫、遂至二朽壞一」

【朽壤】くづれたる土。國語に「山有二朽壤一而自崩」

【朽斷】くちてきる。歐陽修「惟尋舊讀書、簡編多朽斷」

【朽爛】くちただる。通典に「沈レ水者朽爛、而心節獨生」

【朾】

(ダウ、ヂャウ。除耕切。庚。

(サウ、シャウ。中埜切。庚。(ヂ二うつ(撞)。

(テイ、ヂャウ。唐丁切。青。

ウ。都挺切。迥。

一ほこだて(楔)。(地の名)木を伐るこ(丁に同じ)(からざを(棺)。

【束】

シ。七賜切。實。束に異なり。はり、のぎ(草木の芒)。

三畫

【杆】

セン。親然切。先。ぶだうがき。

ウ、チ。羽俱切。麌。

一みづのみ、ゆのみ(飲水器)二自ら足れりとせる貌三ゆあみだらひ(浴器)四ひく(牽)。

【杆杆】自ら足れりとせる貌。荀子に「杆杆富人、豈不二貧而富一哉」

【杆】

カン。居案切。翰。

一居寒切。寒。

一せんだん(檀)二やまぐは(柘)一て、こ(梃)二たて(盾)三儻れたる木。

【杇】

チ、ウ。汪胡切。虞。(烏故切。遇。コ、ク。洪孤切。虞。

こて(泥鏝)。

【杈】

サ、セ。初加切。麻。サイ、セ。初佳切。佳。サ、セ。楚嫁切。禡。

(岐枝)二やす(捕魚具)一さらへ(農器)二えだ(枝)一木枝の衢、やらひ二あじか(草を收むる具)。

【杉】

サン、セン。所銜切。咸。すぎ。

セウ。子了切。篠。

【杣】

木の相高きにいふ、きたかし。

【枷】

シュン。松倫切。眞。

鉏の柄に用ゐる一種の木。

【杌】

一ヘン、ホン。扶嚴切。鹽。

ハン、ホン。甫凡切。咸。

木の名、俗に、この木の皮を水桴木といふ。

【杭】

一ゴツ、ゴチ。五忽切。月。

ゲツ、ゲチ。魚厥切。月。

一枝なきこと二木の短く出づる貌三安からざる貌、あやふしさりかぶ。

【杭陘】安からざる貌。あやふし。書經に「邦之杭陘、曰由二一人一」

【杼】

リ。李の古文字。

【李】

リ。良士切。紙。

●すもも(果樹)二理に通ず三星の名。

【李父】〔動〕虎の異名。揚雄「陳魏閒謂レ虎爲二李父一、江淮謂二之李耳一」

【李耳】前に同じ。風俗通に「俗說虎本南郡李氏翁所レ化、呼二李耳一則喜、呼レ斑則怒」

【李杜】一後漢の李固と杜喬と。二後漢の杜密と李膺と。三唐の李白と杜甫と。

【李花】すもものはな。劉詵「北窗晴雨裏、一樹李花明」

【李唐】王朝の名、單に唐といふ、李唐とは、君主の姓、李なるが故なり。二十世、二百八十九年にして滅ぶ。

【李梅】すももとうめと。鹽鐵論に「李梅多レ實者、來年爲レ之衰」

【李下之冠】うたがひを受くるをいふ。古樂府に「瓜田不レ納レ履、李下不レ整レ冠」

【李杜韓柳】四人共に唐代の文學者にして、李白と杜甫とは詩に長じ、韓愈と柳宗元とは文に長ぜり。

【杏】

カウ、キャウ。何梗切。梗。

【杏仁】あんず(果樹)。

【杏花】あんずのたね。藥用とす。

あんずのはな。高士談「一簇紅雨杏花風」

【杏林】董奉の故事により、醫家をいふ。神仙傳に「董奉居二廬山一、爲レ人治レ病、重者種二杏五株一、輕者種二一株一、號二董仙杏林一」

【杏壇】學問所をいふ。莊子に「孔子遊二於緇帷之林一、休坐乎杏壇之上一、弟子讀レ書、孔子弦歌鼓レ琴」

【呆】

バイ、マイ。眯に同じ。

俗に、癡獃の獃となすは誤。

【材】

國訓あきる。

サイ、ザイ。昨哉切。灰。

一ぼう、まるた(木梃)二木の實(榛、栗の屬)三はたらき、ちゑ(才に同じ)四たから(財に通ず)五うまれつき(性質)六だうぐ(具)七もと、しろ(原料)八はかる(度に通ず)。

【材士】體格のすぐれてつよき者。史記、秦始皇紀に「盡徵二其材士五萬人一、爲レ屯二衛咸陽一」

【材木】建築又は製作等に用ゐる木。孟子に「材木不レ可二勝用一也」

【材本】もと。もとで。

【材臣】はたらきある家來。管子に「豪傑材臣、不レ務レ竭レ能」

【材伎】はたらき。荀子に「材伎之士」

【材物】しろもの。史記に「水火材物」

【材官】材力ありてよく強弓をひく官。漢書に「以二材官蹶張一、從二高帝一擊二項籍一」

【材勇】はたらきと勇氣と。晉書に「世賞賢以二材勇一、得二幸于河閒王顒一」

【材料】物を作るたね。宋史に「曰二營造一、曰二材料一」

【材幹】はたらき。きりゃう。後漢書に「程烏李育以レ有二材幹一、皆擢二用之一」

【材器】前に同じ。漢書に「材器名稱、稍不レ能レ及レ父」

【材藝】ちゑ。とわざと。五代史に「多二材藝一、能射二錢中孔一」藝は又、藝に作る。

【材大難レ用】才あれども不遇なり。杜甫「志士幽人莫二怨嗟一、古來材大難レ爲レ用」

【村】

ソン。此尊切。元。

一むら(聚)二ゐなか(聚落)。

【村甲】（カフ）村長。しゃうや。（里正）。
【村老】（リウラウ）ゐなかのとしより。
【村坊】（バウ）むらざと。唐書に「書二于縣門村坊一、與レ衆知レ之」
【村巷】（カウ）むら。又、むらのみち。白居易「四風入二村巷一、清涼八月天」
【村俗】（ゾク）ゐなかのならはし。
【村娃】（アイ）ゐなかの美女。陸龜蒙「海俗蘆編レ室、村娃練束レ衣」
【村書】（シヨ）つまらぬ書籍。陸游「授二罷村書一閉二門睡一」
【村氣】（キ）ゐなかふう。隋唐嘉話に「薛駙馬有二村氣一」
【村茗】（メイ）ゐなかの茶。ばんちゃ。
【村野】（ヤ）ゐなか。杜甫「指揮過無レ禮、未レ覺村野醜」
【村童】（ドウ）ゐなかのこども。杜甫「築レ場憐二蟻穴一、拾レ穗許二村童一」
【村嫗】（オウ）ゐなかのばばあ。
【村落】（ラク）むらざと。人家の集れるところ。唐詩に「西落東村秋一色」
【村塢】（ブ）前に同じ。杜甫「谿行盡日無二村塢一」
【村園】（エン）ゐなかの家のその。雍陶「村園門巷多相似、處處春風棣蕚花」
【村墟】（キヨ）むらざと。杜甫「繫レ舟壁井絡、卜レ宅楚村墟」
【村學】（ガク）ゐなかの學校。盧全「莫レ學村學生、粗氣强叫吼」
【村釀】（ジヤウ）ゐなかにて造りたる酒。陸游「細傾二村釀一聽二新蛙一」
【村夫子】（フウシ）ゐなかの先生。陸游「今朝偶遇二村夫子一、借二得齊民一卷書一」
【村學究】（ガクキウ）ゐなかの學者。瑯琊代醉編に「楊用修曰、杭州有二杜拾遺廟一、有二村學究一、題爲二杜十姨一、遂作二女像一、以配二劉伶一」

【朷】

ゐジン、ニン。而振切。震。

【杓】

ゐシ、ニ。人之切。支。
ゐ木の名（或は柶に作る）ゐ小車の樊。
ゐヘウ。甫遙切。蕭。ゐテキ、チャク。丁歷切。錫。ゐシャク、ジヤク。市若切。藥。
柄）二星の名三ひく（引）、つなぐ（繫）ゐまと（標的）ゐひしゃく。

【杓宦】

鷙鳥の總稱。遼史に「杓宦、鷙鳥之總名、以爲二印紐一」

【杙】

ゐタク、チャク。陟格切。陌。
ゐタク。闌各切。藥。
ゐとがた（拼）二酒を盜す具（杙櫨）ゐうつぎ（杙櫨）。

【杖】

ゐテイ、ダイ。大計切。霽。
ゐ木獨生す、木さかんなりゐ船尾の小木、かぢ。

【杖】

ゐチャウ、ヂャウ。直兩切。養。
ゐ一つゐ二てこ（木梃）三つゐつく四ほこのえ（戈戟の柄）五うつ、たたくゐ一とる、もつ（仗に同じ、持）二よる（憑倚）。ほこをつゐつく。史記に「沛公遽雪レ足杖レ矛曰、延レ客入」
【杖竹】（チク）たけをつゐつく。水經、注に「有レ人、著二大冠絳單衣一、杖レ竹」
【杖扶】（フ）つゐつく。たすく。杜甫「緩步仍須二竹杖扶一」
【杖家】（カ）五十歲をいふ。禮記に「五十杖二于家一」
【杖殺】（サツ）つゐにてうちころす。（梃殺、捶殺）。唐書、重潤傳に「或譖二重潤竊議一、后怒杖二殺之一」
【杖國】（コク）七十歲をいふ。禮記に「七十杖二於國一」
【杖朝】（チウ）八十歲をいふ。禮記に「八十杖二于朝一」
【杖節】（セツ）たけづゐをつく。又、つゐ。韓偓「一手攜レ書一杖レ節」
【杖策】（サク）むちをつゐつく。又、つゐ。むち。後漢書に「禹杖二策軍門一、說二上延一攬英雄一」
【杖鄉】（キヤウ）六十歲をいふ。禮記に「六十杖二于鄉一」
【杖罪】（ザイ）つゐにて打つ刑に當るつみ。宋史、太宗紀に「杖罪釋レ之」
【杖鉞】（エツ）まさかりをつゐつく。漢書に「把レ旄杖レ鉞、誓二士衆一、抗二威武一」
【杖罰】（バツ）つゐにて打つつみ。北史に「逢加二杖罰一、令二其致レ死一」
【杖劍】（ケン）ただ一劍をたよりとす。他に頼るべき者なきをいふ。
【杖撻】（タツ）むちうつ。（朴撻）。列子に「敝罵杖撻、無レ不レ至也」
【杖擊】（ゲキ）むちうつ。（笞擊、捶擊）。晉書、陶侃傳に「聞者以レ杖擊レ之」
【杖錫】（シヤク）錫杖をつゐつく。柳宗元「杖錫東顧、振レ衣晨征」
【杖纛】（トウ）あかざの莖をつゐつく。杜甫「明日看レ雲還杖レ纛」

【宋】

ゐむなぎ（棟）二うつばり（梁）。
バウ、マウ。無方切。陽。
サツ、セチ。殺に同じ。
サイ、セ。
チ。丑利切。寘。

【柔】

わくのえ（篰柄）。
ヨク、イキ。逸職切。職。

【尿】

一くひ（橛）二とじきみ（門縻）。
ゐコツ、コチ。古忽切。月。

【杙】

ゐ一たひらかなり（平）二する（摩）。
ト、ヂ。動五切。麌。

【杜】

一あまなし（甘棠）二ふさぐ（塞）。
二しぶる（澀）四草木の根。【國語】もり。
【杜口】（コウ）口をふさぐ。史記に「杜レ口裹レ足、莫二肯嚮一秦耳」
【杜多】（ダ）（佛）（梵語 Dhuta-anga. の略）僧の行く行く食を乞ひて修行するをいふ。又、その僧にいふ。名義集に「我說二彼人一、名爲二杜多一、今訛稱二頭陀一」
【杜宇】（ト）（動）ほととぎすの異名。禽經に「江左曰二子規一、蜀右曰二杜宇一」
【杜門】（モン）もんをふさぐ。史記に「公子虔杜門不レ出、已八年矣」
【杜狗】（コウ）（動）けらの異名。揚雄「蠦姑、南楚謂二之杜狗一」
【杜若】（ジヤク）（植）やぶめうがの異名。今、かきつばたに用ゐる。李中「鷓鴣啼二竹樹一、杜若媚二汀洲一」
【杜康】（カウ）古代に酒を作りし人の名。轉じて、酒の異名とす。魏武帝「對レ酒當レ歌、人生幾何、譬如二朝露一、去日苦多、慨當二以慷一、憂思難レ忘、何以解レ憂、唯有二杜康一」
【杜絕】（ゼツ）ふさがりたゆ。ふさがたつ。後漢書に「杜二絕邪僞請託之原一」
【杜塞】（ソク）ふさぐ。ふさがる。吳越春秋に「賞無レ所、愆、羣邪杜塞」
【杜蘅】（ケイ）（植）かんあふひの異名。
【杜蓮】（レン）（植）かきつばたの異名。本草に「杜若、一名杜蓮」
【杜撰】（サン）著作に誤多きをいふ。野客叢談に「杜默爲レ詩、多不二合一律、故言レ事不二合一格者、爲二杜撰一」
【杜魄】（ハク）（動）ほととぎすの異名。武元衡「望郲臺上秦人在、學射山中杜魄哀」
【杜衡】（カウ）（植）かんあふひの異名。
【杜蠶】（ヂツ）ふさざしりぞく。後漢書に「杜二蠶忠功一、以疑二衆望一」
【杜鵑】（ケン）（動）ほととぎすの異名。邵氏聞見錄に「散二步天津橋上一、聞二杜鵑聲一」
【杜父魚】（フギヨ）（動）いしぶし。
【杜鵑花】（クヮ）（植）つつじの一種。さつき。古今詩話に「潤州鶴林寺杜鵑花、相傳唐貞觀中、外國僧種二之鉢盂中一、自二天台一攜來、每春末開時、有二朱裳女子一、來遊二花下一、俗傳花神也」
【杜穀樹】（コク）（植）楠の異名。

【杞】

ゐチ。池爾切。紙。ゐリ。鄭知切。支。ゐイ。七之切。支。ゐ一ダ。吐邏切。薺。
二おつ（落）三さく（析）ゐ離に同じ杞木の名、白椿に一種の車。

【杞】

ゐキ。墟里切。紙。ゐシ。象齒切。紙。ゐカイ、ガイ。下楷切。蟹。
ゐ一く二かはやなぎ三一種の喬木ゐ一椙に同じ、すき、又、土を運搬する器二つちぐるまゐすき（舌）。
【杞梓】（シ）二木の名、共に良材なり、杞は樹柳の如く、葉麤にして白色、梓は楸に似たる喬木。南史、庾域傳に「梁文帝爲二郢州一、辟爲二主簿一、歎二美其才一、曰、荊南杞梓其在レ斯乎」
【杞棘】（キヨク）くこといばらと。詩經に「湛湛露斯、在二彼杞棘一」
【杞憂】（キユウ）とりこしくらう。列子に「杞

國有一人憂二天崩墜身無一所レ寄廢二寢食一者、又有一憂二彼之所レ憂者一因往曉レ之曰、天積氣耳、中者奈何憂二崩墜一乎、其人曰、天果積氣、日月星宿、不レ當レ墜邪、曉レ之者曰、日月星宿、亦積氣中之有二光耀一者、只使レ墜、又不レ能レ有レ所二中傷一、其人曰、奈二地壞一何、曉者曰、地積塊耳、中者奈何憂二其壞一、其人舍然大喜、曉レ之者亦舍然大喜」

【束】 ㊥ショク、ソク。書玉切。沃。

㊐シュ、ス。春遇切。遇。

㊀一しばる(縛)㊁たばぬ、つかぬ㊂布帛五疋㊃矢五十本一説に、百本㊄ちぎる、ちぎり(約)㊅脯十脡㊆たば㊇つなぐ(紲)㊈縮まる、迫る㊉斂まる、聚まる㊊謹み戒む㊋布帛五疋。

康熙字典に「木に从ひ、口に从ふ、束と別なり」

【束手】㊀手をつかぬ。史記に「父子老弱、係レ脰束レ手」㊁歸服す。晉書に「所レ過城邑、莫レ不レ束レ手」

【束矢】やをつかぬ。つかねたるや。詩經に「角弓其觩、束矢其搜」

【束阨】雞儀におとしいる。魏都賦に「由二重山之束阨一、因二長川之巨勢一」

【束帛】絹布十端を一束とせるもの。史記に「天子使二使束帛加レ璧、安車駟馬迎二申公一」

【束芻】まぐさをつかぬ。つかねたる秣。詩經に「綢繆束レ芻、三星在レ隅」

【束馬】馬をつなぐ。左傳に「士皆釋レ甲束レ馬、而飲レ酒且觀レ優」

【束帶】冠を著け帶をむすぶ。威儀をととのふる義。論語に「赤也束帶立二於朝一、可レ使レ與二賓客一言一」

【束修】約束修整の略、品行を慎む。後漢書、鄧后紀に「后詔二從兄康等一曰、先公既以二武功一、書二之竹帛一、兼以二文德一教二化子孫一、故能束修不レ觸二羅網一」

㊀つかれたる脯。進物に用ゐる。禮記に「束脩之間、不レ出レ竟」㊁始めて師に見ゆる時の贈物。論語に「自レ行二束脩一以上、吾未二嘗無一誨焉一」

【束絛】つかれたる組み紐。都穆「黄衣束絛、儼乎如レ生」

【束裝】よそほひを著く。陸游「客枕何時穩、匆匆又束裝」

【束髮】始めて冠するをいふ。(結髮)。漢書に「束髮修レ學、僭列二名臣一」

【束縛】しばる。かせ。史記に「誘進以二仁義一、束縛以二刑罰一」

【束篠】つかれたるしの竹。魚孟威「雜二束篠一爲レ堰、開二散木一爲レ門」

【束之高閣】たかき棚の上に上げ置く。晉書、庾翼傳に「殷浩才名冠レ世、翼弗二之重一、也語レ人曰、此輩宜レ束二之高閣一」

【杠】 ㊥カウ、コウ。古雙切。江。

㊐コウ、グ。沽紅切。東。

㊀はたさを(旗竿)㊁こばし(小橋)㊂あぐ(舉)㊃星の名㊄牀の前の横木㊅地の名。

【杣】 〔國字〕そま。

【杢】 〔國字〕もく。

四畫

【杪】 ㊥ベウ、メウ。彌沼切。篠。

㊐サウ、セウ。楚教切。效。

㊀こずゑ(梢)㊁いただき、はし㊂としのすゑ(歲末)㊃すゑ、細小なる貌。

【杪冬】ふゆのすゑ。梁元帝纂要に「冬曰二杪冬一」

【杪杪】細小なる貌。涼武昭王「杪杪余躬、迢迢西邦」

【杪春】はるのすゑ。李端「江上花開盡、南行見二杪春一」

【杪秋】あきのすゑ。魏徵「首夏別二京輔一、杪秋滯二三河一」

【杪歲】としのすゑ。晉書に「交二霜雪於杪歲一、晦二風雨於將晨一」

【杪頭】こずゑ。傅咸「未レ升レ半而九息、何時達二乎杪頭一」

【杜】 ㊥シ。斯義切。眞。

㊐渚市切。紙。

㊀ゆまないた(肉机)㊁一榿に同じ㊂しきいた(應板)。

【杯】 ㊥ゲン、ゲワン。遇袁切。元。

㊐クワン、ゲン。五患切。諫。

㊀一種の喬木㊁ふちもどき(草の名)㊂もむ(按摩)㊃くはのみ(棋)。

【杭】 カウ、ガウ。胡剛切。陽。

㊀ふなわたし(航に同じ)㊁葬に用ゐる器。

【杯】 ㊥ハイ。芳廢切。隊。

㊐ビ、ミ。無未切。未。

㊀ハイ。普蓋切。泰。

㊁一きふだ(木牘)㊂こっぱ(木片)㊃木の盛んに生ずる貌。

【柿】 ハイ。杯に同じ。

康熙字典に「俗に、果名に作り、音の士なるものは非なり」

【杯】 ハイ、へ。晡枚切。灰。

㊀さかづき(飲酒器)㊁ほとぎ。

【杯心】さかづきのまなか。陳造「晴日倒レ紅生二笑頰一、煙梧搖レ綠漲二杯心一」

【杯水】さかづきのみづ。僅かなるにいふ。孟子に「猶レ以二一杯水一救二一車薪之火一也」

【杯池】さかづきの如き小さきいけ。李賀「杯池白魚小」

【杯酒】さかづきのさけ。漢書に「未レ嘗衛二杯酒一、接二慇勤之歡一」

【杯酌】さかもり。

【杯觴】さかづき。劉禹錫「白家惟有二杯觴興一」

【杯中蛇影】うたがひまどふこと。にいふ喩。樂廣、河南の尹に遷る、嘗て親客あり、久闊また來らず、廣その故を問ふ、答へて曰く、前に座にありて酒を賜ふことを蒙る、飲むに方りて忽ち盃中に蛇あるを見て、意甚だ之を惡む、既に飲みて疾むと、時に河南の廳事の壁上に角弓あり、漆畫もて蛇を作る、廣意ふ、盃中の蛇は卽ち角弓ならんと、また前處に置酒し、客に謂ひて曰く、盃中また見る所ありや不やと、答へて曰く、見る所初の如しと、廣乃ちその所以を告ぐ、客豁然として意解け、沈痾頓に愈ゆ云云。晉書、樂廣傳に見ゆ。

【杯盤狼藉】宴席上に、酒杯・器皿などの取り亂されたるにいふ。蘇軾「肴核既盡、杯盤狼藉、相與枕二藉乎舟中一、不レ知二東方之既白一」

【杰】 ケツ、ケチ。渠列切。屑。

人の名、俗に借りて、豪傑の傑の字となす。

【東】 トウ、ツ。德紅切。東。

㊀ひがし㊁はる(春)㊂ひがしす(東行)㊃うごく(動)。

【東司】(佛)禪家にて、かはやをいふ。

【東旦】ひがしの天明く。支遁「圓光朗二東旦一、金姿豔二春晴一」

【東北】うしとらの方位。易經に「東北喪レ明、乃終有レ慶」

【東后】諸侯をいふ。史記に「柴望二秩于山川一、遂覲二東后一」

【東君】㊀日の異名。史記、注に「東君、日也」㊁春の神。

【東作】農作をいふ。書經、傳に「歲起二於東一、而始就レ耕、謂二之東作一」

【東牀】むすめのむこをいふ。太尉郗鑒、門生をして女壻を王導の家に求めしむ、王氏の子弟みな自ら矜持す、唯一人坦腹して臥し、旁に人無きが若し、郗太尉曰く、東牀坦腹の者、佳壻なりと、訪問すれば乃ち羲之なり、遂に女を以てこれに妻はす云云。晉書、王羲之傳に見ゆ。

【東岱】岱は泰山なり、泰山は五嶽の中にて、東方にあり、故に東岱といふ。後漢書に「鳥鼠至二于東岱一」

【東宛】ことの異名。道篇に「箏、一名東宛」

【東風】ひがしかぜ。こち。禮記に「東風解レ凍」

【東皇】春の神。又、春。尚書緯に「春爲二東皇一、又爲二青帝一」

【東家】㊀雇人よりその主人をいふ語。㊁ひがしのいへ。李賀「東家蝴蝶四家飛」

【東流】㊀ひがしにながるるかは。又支那の川はみな東流するを以て、單に、川の稱とす。莊子に「海不レ辭二東流一、大

之至也」㊀〔佛〕東方に弘まる。翻譯名義集に「大法東流、爲二日諒久一、雖二風移政變一、而弘レ之不レ易」

【東宮】 皇太子をいふ。（青宮、春宮）。禮記に「太子宮曰二東宮一」

【東雲】 ひがしのくも。しののめ。盧照隣「東雲千呂、南風入レ絃」

【東榮】 いへの東にあるのき。禮記に「洗二當東榮一、主人之所二以自絜一、而以事レ賓也」疏に「榮、屋翼也」

【東漸】 東方にすすむ。書經に「東漸二于海一、西被二于流沙一」

【東遷】 東方にうつる。左傳に「周之東遷、晉鄭焉依」

【東儲】 皇太子をいふ。南齊書に「太子曰二東儲一」

【東璧】 文章を司る二星の名。轉じて、文學といふ意に用ゐる。晉書に「東璧二星、主二文章一、天下圖書之祕府也」

【東瀛】 ひがしのうみ。王融「汚彼流水趨二東瀛一」

【東闈】 東宮の門。白居易「從容下二南山一、顧盼入二東闈一」

【東籬】 菊の異名。晉の陶淵明が菊を東籬に植ゑたるに起る。陶潛「采二菊東籬下一、悠然見二南山一」

【東觀】 漢代の祕書監。後漢書、竇章傳に「鄧康閭二其名一薦入二東觀一、爲二校書郎一」

【東家丘】 孔子の西隣に住せしものが、孔子の聖人たることを知らずして、東家の丘と呼びしなり、丘は孔子の名。孔子家語に「魯人不レ知二孔子聖人一、乃曰、東家丘者知レ之矣」

【東道主】 主人となりて來客の世話するをいふ。左傳に「燭之武、見二秦伯一、曰、若舍レ鄭、以爲二東道主一、行李之往來、共二其困乏一、君亦無レ所レ害」

【東去西來】 東に去り西より來る。出入りの多きをいふ。

【東行西走】 いそがはしく東西に奔走す。（南行北走）。易林に「東行西走、喪二其犬馬一」

【東奔西走】 前に同じ。韋莊「忽隨二川浪一、去東奔」漢書に「西走數十日、至二大宛一」

【東垣執戟】 〔動〕れすみの異名。

【東海夫人】 〔植〕淡榮の異名。

【東華童子】 馬兜鈴（クダサ）の根。

【東海揚塵】 海の陸に變ずるをいふ。神仙傳に「麻姑謂二王方平一、曰、自二接待一、以來、見二東海三變爲二桑田一、向到二蓬萊一、水乃淺於往者、略半也、豈復爲二陵陸一乎、方平乃曰、東海行復揚レ塵耳」

【東瞻西望】 あちこちみまはす。庾信「傾レ首東瞻、山河千里」元稹「白頭西望憶二何人一」

【東西南北人】 前に同じ。韋莊「忽隨二川浪一、去東奔」漢書に「西走數十日、至二大宛一」

【杲】 ㊀あきらか（明）㊁たかし（高）。あきらかなる貌。儲光羲「杲杲初景出、油油鮮雲卷」

【杲杲】

【杳】

エウ。伊鳥切。篠。

㊀くらし（冥）㊁ふかし、ひろし、とほし。

【杳乎】 ふかくして廣き貌。管子に「杳乎如レ入二於淵一」

【杳杳】 前に同じ。班彪「飛二雲霧之杳杳一、涉二積雪之皚皚一」

【杳冥】 遠くしてくらし。楚辭に「杳冥兮晝晦」

【杳然】 ほるかなる貌。李白「桃花流水杳然去」

【杳渺】 前に同じ。白居易「拳石苔蒼翠、尺波烟杳渺」

【杳窱】 ふかくして遠き貌。權德輿「舊壑窮二杳窱一、新潭漾二淪漣一」

【杴】

ケン、コン。虛嚴切。鹽。

㊀すき（鍬屬）㊁このみ（好）㊂水を澄す器。ショ、ゾ。昌與切。語。

【杵】

㊀きね㊁つち（槌）。

【杵臼】 ㊀きね㊁とうすと。王粲「竹間杵臼相敲擊」㊂星の名。史記に「杵臼四星在二危南一」

るものをいふ。禮記に「今丘也東西南北人也」又、杜甫「甫也東西南北人」

【杶】

チュン。敕倫切。眞。うるしに似たる一種の木。

【杶幹】 〔植〕漆に似て、古昔多く琴の材に用ゐし木。書經に「杶幹栝柏、礪砥砮丹」

【杷】

㊀ハ、ヒ。蒲巴切。麻。

㊁ハイ、ヘ。傍卦切。卦。

㊂さらひ（農器）㊃樂器㊄うまぐは（田器）㊅え（櫂に同じ、柄）。

【枒】

㊀エン。俞絹切。霰。

㊁エイ、エ。俞芮切。霽。

㊂木の名㊃うごく（動）。

【枆】

㊀シュ、ス。市朱切。虞。

㊁タイ、デ。都外切。泰。

㊂ほこ（軍士の執る殳）㊃木の名。

【枕】

ケツ、ケチ。古穴切。屑。

㊁ヘン。扁蘚切。霰。

㊂わん（椀）㊃小盂。クワ、ケ。火跨切。禡。

【枇】

木の名。シン。息林切。侵。

㊁木の名㊂車鉤の心木。

㊃シウ、シュ。齒九切。有。

【杻】

㊀チウ、ニュ。女久切。有。

㊁てかせ（手械）㊃もちのき（櫶）。

㊄チョ、ト。直呂切。語。㊅ショ、ソ。常恕切。御。㊆神與切。語。

【杼】

㊀ひ（織機の具）㊁うすし（薄）㊂そぐ（剜）㊃ながし（長）㊄どんぐり（栗の屬）㊅なけ㊆くむ㊇つるばみ（栩）。

【杼梭】 なさとひと。はたを織ること。梅堯臣「應レ莫レ勸二蠶織一、生計非二杼梭一」

【杼機】 ひとはたこと。はたを織るに用ゐる具。はたをおること。郭泰「寒女難二妙巧一、不レ得レ乘二杼機一」

【杼軸】 チウ。杻に同じ。

【松】

ショウ、シュ。詳容切。冬。

まつ。

【松子】 まつの實。

【松下】 まつの木のした。王維「月明松下房櫳靜、日出雲中雞犬喧」

【松逃】 まつふぐり。まつがさ。

【松毬】 前に同じ。

【松明】 たいまつ。陸游「朝甑米空烹二芋粥一、夜缸油盡點二松明一」

【松炬】 前に同じ。蘇軾「更然二松炬一照二幽深一」

【松黃】 まつのはな。本草に「松花名二松黃一、服レ之輕レ身」

【松筠】 まつとたけと。儲光羲「特逢翰二珪璋一、節操方二松筠一」

【松腴】 〔植〕ぶくりゃう。松根に生じ藥劑に用ゐる。蘇軾「結二茅窮山一、啖二松腴一」

【松菊】 まつときくと。王維「松菊荒三徑一、圖書共二五車一」

【松煙】 すす。曹松「墨出二青松煙一、筆出二狡兎翰一」

【松煤】 まつを焚きて得るすす。洞天清錄に「漆煙松煤夾和爲レ之」

【松翠】 まつのみどりいろ。朱慶餘「山深松翠冷、潭靜菊花秋」

【松蕈】 〔植〕まつたけ。本草集解に「松蕈生二松陰一、采無レ時、凡物松出、無二不レ可レ愛者一」

【松籟】 まつかぜのおと。元晦「松籟韻宮商、鶯囀勢翔迴」

【松濤】 前に同じ。歐陽脩「翰長晝閑來啜レ茗、下レ簾危坐聽二松濤一」

【松韻】 前に同じ。白居易「松韻徒煩レ聽、桃夭不レ足レ觀」

【松蘿】 〔植〕つたの一種。本草に「松蘿、一名女蘿」

【松竹梅】 まつたけうめ。之を歲寒の三友といふ。李邕「醉裏呼レ童展レ畫、笑題二松竹梅花一」

【松柏操】 松柏の四時その色を變ぜざるに比して、人の堅固なる操にいふ。南史、樂預傳に「與二松柏一比レ操、風霜等レ烈、豈不レ美耶」

【松蘇利】 すすりの異名。

【松江之鱸】 〔植〕ぶくりゃう。松根に生じ藥劑に用ゐる。蘇軾「結二茅窮山一、啖二松腴一」

【松菊】 まつときくと。王維「松菊荒三徑一、圖書共二五車一」

【松樹千年終是朽】 松は常綠

樹なれども、千年の後には枯れて朽ち果つ。以て天下の物皆死せざるものなきに喩ふ。白居易「泰山不レ要レ欺二毫末一、顔子無レ心レ羨二老彭一、松樹千年終是朽、槿花一日自爲レ榮、何須二戀レ世常憂レ死、亦莫二嫌レ身漫厭レ世、生去死來都是幻、幻人哀樂繫二何情一」

【桑】 ショウ、シュ。松に同じ。

【板】 ハン、ヘン。布綰切。潸。一いた、はんぎ（片木）二ふだ（判、籍）三みゝとのり（詔書）四ふみ（書牘）五そむく（反側）六辭令書。

【板刻】ハンコク 書籍を版にきざむ。（刊刻、版刻）。輟耕錄に「開亭甲集十二刻內有二定武板刻一」

【板魚】ゲハンギョ 〔動〕ひらめ。北戸錄に「比日魚、南越志謂二之板魚一」

【板榜】ハンバウ いたのふだ。張祜「重廊標二板榜一、高殿銷二金環一」

【板餘】ハンカン ついぢを支ふる柱。柳宗元「斬二板餘一礱二柱礎一」

【板蕩】ハンタウ 世みだれうごく。亂世。詩經、序に「天下板蕩、無二綱紀文章一」

【极】 ケフ、ゴフ。極葉切。葉。一にぐら二すき（舌）。

【枒】 一むく、樹の皮を去る二柱頭の木ろ

【枒】 シン。卽刃切。震。ろツン。羽粉切。吻。ゆイン。羊進切。軫。

【枸】 コウ、ク。古侯切。尤。一かうぞ（楮に同じ、楮）二まがる（曲）。

【耗】 バウ、モウ。莫袍切。豪。ふゆもも（冬桃）。

【枇】 ヒ。毗至切。寘。ろ類脂切。支。ばヘイ。駢迷切。齊。ゆ杞に同じ。

【枇】 一こまかきくし（細櫛）二ならぶ（比）三つぐ（次）ろ一びは（枇杷）

【枇杷】ビハ 〔植〕果樹の名。（盧橘）。杜甫「櫟柳枝枝弱、枇杷樹樹香」

【柴】 ヒ。枇に同じ。

【枉】 ワウ。廻徃切。養。一まがる、まぐ（屈）二しへたげ（冤罪）、又、しへたげにあへる者三よこしま（邪曲）、又、その者。

【枉己】ワウキ 己の身をただしくせず。孟子に「未聞二枉己而正レ人者一」

【枉矢】ワウシ 一火射に用ゐるや。二星の名。漢書に「枉矢狀類二大流星一、蛇行而倉黑、望如レ有二毛目一然」

【枉曲】ワウキョク まぐ。後漢書に「鄉亭吏部亦有レ任二決斷一者、而類多二枉曲一」

【枉步】ワウホ 步をまぐ。唐書、朱敬則傳に「兄仁軌常誨二子弟一曰、終身讓レ路、不レ枉二百步一、終身讓レ畔、不レ失二一段一」

【枉法】ワウハフ おきてをまげ用ゐる。南史、循吏傳に「未嘗枉レ法申レ恩」

【枉屈】ワウクツ 身を卑下して、來り臨むといふ義。諸葛亮「猥自枉屈、三顧臣於草廬之中」

【枉案】ワウアン 事をまげみだる。李嶠「清河二天直、繩二糾其枉案一」

【枉欲】ワウヨク むさぼりをおさふ。後漢書に「人能枉レ欲從レ禮者、則福歸レ之」

【枉道】ワウダウ まがりたるみち。杜甫「枉道祇從入、吟レ詩計二更過一」

【枉罪】ワウザイ むじつのつみ。

【枉戮】ワウリク おきてをまげてころす。魏志に「豈可レ慮二其謗一已、而枉レ戮善人乎哉」

【枉奪】ワウダツ おびやかしうばふ。（剽奪、劫奪）。後漢書に「帝召レ憲切責曰、今貴主尙見二枉奪一、何況小人哉」

【枉駕】ワウガ のりものをまぐ。訪ひ來ることの敬稱。蜀志に「將軍宜二枉レ駕顧レ之」

【枉顧】ワウコ まげてかへりみる。袁士元「枉顧問勞長者車」

【枉レ尺直レ尋】シヤクヲマゲテジンヲナホクス 小を屈して大を伸ぶるをいふ。孟子に「志曰、枉レ尺而直レ尋、宜レ若レ可レ爲也」

【柳】 ガウ。魚淚切。漾。一かたし（堅）二馬を繫ぐ柱。

【枋】 ハウ、バウ。分房切。陽。ろヘイ、ヒャウ。陂病切。敬。ゆバウ。甫妄切。漾。ゆ一ふしづけ二車の材に適する一種の木ろ柄に同じゆふなのり（舟師）。

【枋筩】ハウ ふねといかだと。後漢書に「乘二枋筩一下二江關一」注に「枋卽舫字」

【柢】 シ、ジ。是支切。支。からうすのさな（碓衡）。

【枌】 フン、ブン。符分切。文。一にれ（楡）二棼に通ず。

【枌楡】フユ そぎ。〔植〕にれ。禮記に「堇荁枌楡」

【柝】 エイ、アイ。壹計切。霽。

【枎】 木の名。フ。馮無切。虞。一枝葉の四邊に布くにいふ二はなぶさ（華蕚）三木の名。

【枏】 ゆダン、ナン。那含切。覃。ろゼン、ネン。如占切。鹽。一うめ（梅）二ゆづりは（交讓木）。

【析】 ゆセキ、シャク。先擊切。錫。ろシ。相支切。支。一さく、わる（破）、わかつ、わかる（分）二とく（解）ろ一ゐぶくろ二草の名。

【析別】セキベツ わかれはなる。後漢書に「太后感二析別之懷一、各賜二王赤綬一」

【析二秋毫一】セキシウガウヲ いふことの委曲詳細なるをいふ。史記に「三人言レ利、事析二秋毫一矣」

【柢】 コ、ゲ。胡故切。遇。一かき、やらい（遮闌）二こまよせ、うまどめ（行馬）。

【枅】 ゆガ、ゲ。牛加切。麻。ろヤ。余遮切。麻。一やし（椰に同じ）二おほわ（車輞）ろ木の名。

【科】 ゆシュ、ス。之庾切。虞。ろトウ、ツ。當口切。有。一ひしゃく（杓）ろますがた。

【枕】 ゆシン。章荏切。寢。ろチン、ヂン。直深切。侵。一まくら二まくらす三寢ること四車後の横木五魚の腦中の骨六のぞむろ一牛を繫ぐくひ二くろたぶ。

【枕戈】チンクワ ほこをまくらとす。非常な戒むる義。五代史に「常披レ甲枕レ戈而臥」

【枕肱】チンコウ ひぢをまくらとす。論語に「飯二疏食一飲レ水、曲レ肱而枕レ之、樂亦在二其中一矣」

【枕席】チンセキ まくらとしとれと。左傳に「魏美人曰、臣幸得レ拂二枕席一」

【枕畔】チンハン まくらもと。蘇舜欽「枕畔冷香通二醉夢一」

【枕邊】チンペン まくらのほとり。劉子翬「馬上新詩猶憶レ友、枕邊幽夢不レ離レ家」

【枕簟】チンテン まくらとたかむしろと。蕭穎士「淵聲連二枕簟一、峰勢入二堦軒一」

【枕藉】チンシヤ 互にまくらしてよりかかる。蘇軾「相與枕二藉乎舟中一」

【枕レ流漱レ石】チンリウニマクラシテイシニクチススグ まけ惜みの強き意に用ゐる。孫楚少き時、王濟に謂つて、當に石に枕し流に漱がんと欲すといふべきを誤つて、枕レ流漱レ石といふ、濟その誤りたるをいへば、枕レ流は耳を洗ふ所以、漱レ石は齒を礪く所以なりと答へたり云云。晉書、孫楚傳に見ゆ。楚の答さすがに巧なりといふより、我國にては、流石の二字を「サスガ」と訓ず。

【枕レ經藉レ書】チンケイシヤクシヨ 深く讀書にふけるをいふ。班固「徒樂二枕レ經藉レ書紆二體衡門一」

【杭】 シン。チン、ヂン。枕の俗字。イウ、ウ。羽求切。尤。樟の屬、一說に、梓に同じ。

【枕】 ゆエウ。於喬切。蕭。ろ於兆切。篠。

【枕】 ゆ木の稚くして盛んなる貌ろ木の華さき茂るにいふ。ハイ、ヘ。普卦切。卦。一はな（葩の總名）二あさ（麻）。リン。犂針切。侵。一はやし二樹木三盛んなる貌四おほし（衆）五野外。

【林】 カリン はやしのもと。王維「客來深巷中、大吠寒林下」

【林木】リンボク はやしをなせる木。庾信「霜天林木燥、秋氣風雲高」

【林立】リンリツ はやしの如くむらがり立つ。

【林林】リンリン むらがる貌。柳宗元「總總而生、林林而羣」

【林府】リンフ 物の多く集るところ。陸機「遊二文章之林府一、嘉二麗藻之彬彬一」

【林泉】リンセン つくりたるには。賀知章「主人不二相識一、偶坐爲二林泉一」

【林垌】リンケイ 林の周りの地。杜甫「朝儀限二霄漢一、客思迴二林垌一」

【林莽】リンマウ 草木の深く繁茂せるもの。揚雄「羅二千乘于林莽一、列二萬騎于山隅一」

【林間】カンリン はやしのあひだ。白居易「林間暎レ酒燒二紅葉一」

【林園】リンエン 樹木の茂りたるその。舊唐書に「子恕私第、有二佳林園一」

【林塘】リンタウ はやしとつつみと。趙嘏「數畝林塘繞二一家一」

【林殿】リンデン はやしの中にあるいへ。庾肩吾「峰樓雲早發、林殿日先曛」

【林樾】リンエツ はやしのこかげ。王勃「途披二林樾一、道陟二殿隰一」

【林霏】リンヒ はやしにこもれるもや。何夢桂「雙臺絕壁鎖二林霏一」

【林檎】リンゴ 〔植〕果物の名。東京夢華錄に「銀杏栗子林檎之類」

【林薄】リンハク むらがりしげる。しげみ。四京賦に「蕩二川澤一、簇二林薄一」

【林叢】リンソウ やぶ。草木のむらがり。

【林麓】リンロク はやしのふもと。禮記に「林麓川澤、以レ時入而不レ禁」

【林藪】リンソウ はやしとやぶと。晉書に「江思悛之嘯二詠林藪一」

【林鐘】リンショウ 一に、百鐘ともいふ、音律の名、六月に配す。禮記に「律中二林鐘一」注に「季夏至氣、則林鐘之律應」

【林鐵】リンテツ はやしにかかれるもや。韋應物「朗月分二林鐵一」

【林中多二疾風一】リンチウタシツフウオホシ 鹽鐵論に「林中多二疾風一、富貴多二諛言一」

【林中不レ賣レ薪】リンチウフバイタキギヲウラズ 物は需用ある所に用ゐるべしとの義。淮南子に「林中不レ賣レ薪、湖上不レ鬻レ魚、所レ有レ餘也」

【林深則鳥棲】ハヤシフカケレバトリスム 人仁義をつめば、萬物招かずして歸趨するに喩ふ。貞觀政要に「林深則鳥棲、水廣則魚游、仁義積則物自歸レ之」

【枘】

㊀ゼイ、ネ。儒稅切。霽。

㊁ドン、ノン。奴困切。願。

㊂ほぞ㊃はしら(柱)㊄草の初めて生ずる貌。

【梱】

㊀クワン、グワン。古玩切。翰。㊁裸に通ず。

㊂ほつ、はたす(決)㊃はたして㊄いさみ(勇敢)㊅をはり㊆はては、つひに㊇あく(厄)㊈裸に通ず㊉蝶に通ず㊊はんべる(姝に同じ)㊋亂の一種㊌裸に通ず㊍あかはだか(赤體)。

【果木】クワボク くだものなる木。謝靈運「果木有二舊行一、壞石無二遠延一」

【果刑】クワケイ 罪あるものを必ず罰にす。沈

亞之「果刑信賞、國之筋絡也」

【果決】クワケツ とりきむる力あり。潘岳「逮二子嬰之果決一、敢討レ賊以紓レ禍」

【果宗】クワソウ 〔植〕梨子の異名。

【果勁】クワケイ 思ひ切りて行ふ力つよし。魏書に「北兵數衆、而果勁不レ及レ南」

【果勇】クワユウ つよくして屈せず。晉書に「隱性果勇、其鬬到レ死乃止」

【果悍】カクワン 決斷ありていさましし。漢書に「蕭子果悍、卽引レ斧椎二壞之一」

【果敢】カクワン 決斷にすばやし。王安石「果敢之氣、剛正之節」

【果報】クワハウ むくい。因果の應報。北史に「齊國富强、皆爲レ有二佛法一、遂說以二因緣果報之理一」

【果然】クワゼン ㊀飽く貌。莊子に「腹猶果然」㊁〔動〕ながさる。宋國史補に「揚州取二果然一、數十果然可レ得」㊂まちまうけたるが如し。

【果毅】クワギ 思ひ切りつよし。書經に「爾衆士、其尙迪二果毅一、以登二乃辟一」

【果銳】クワエイ 意氣するどく思ひ切りよし。蜀志に「孫德果銳、偉南篤常」

【果蓏】クワラ 木の實と瓜類と。周禮に「樹二之果蓏珍異之物一」

【果斷】クワダン 思ひ切りよし。決行にすばやし。書經に「惟克果斷、乃罔二後艱一」

【果躁】クワサウ あらあらしくかるはづみなり。吳志に「輕佻果躁、隕レ身致レ敗」

【果蠃】クワラ 〔植〕からすうりの異名。急就篇、注に「果蠃、一名王瓜」

【枝】

㊀シ。章移切。支。

㊁キ。翹移切。支。

㊂㊀えだ㊁てあし(體肢)㊂ふし(關節)㊃わかる(分)㊄ちる(散)㊅ささふ(支)㊆つつかひばしら(支柱)㊇十二支㊈むつゆび(多指)。

【枝杪】シベウ えだとこずゑと。羅讓「葉光閒二汎灑一、枝杪靜二氛氳一」

【枝指】シキ えだゆび。卽ち、六指ある類。莊子に「駢拇枝指、出二乎性一哉」

【枝柯】シカ えだ。晉書に「嘗以二珊瑚樹一賜レ之、高二尺許一、枝柯扶疎、世所二罕比一」

【枝捂】シゴ ささふ。さからふ。捂は又、梧に作る。(支吾)。史記、項羽紀に「諸將皆慴服、無二敢枝捂一」

【枝胤】シイン わかれのちすぢ。牛僧孺「枝胤茂秩、累累而賢」

【枝流】シリウ えだ河。(支流)。

【枝楠】シセウ えだとこずゑと。白居易「枝楠竊二青翠一、韻若二風中絃一」

【枝戚】シセキ わかれや。別家。沈炯「皇家枝戚、莫レ不二榮寵一」

【枝幹】シカン ㊀十干と十二支と。後漢書に「作二甲乙一以名レ日、謂二之幹一、作二子丑一以名レ日、謂二之枝一」㊁えだとみきと。世說に「枝幹扶疎」㊂手足と軀幹と。釋名に「五行屬レ木、故其體狀有二枝幹一也」

【枝葉】シエフ ㊀えだとはと。國語に「人之有レ學、猶三木之有二枝葉一也」㊁轉じて、事のすゑ。又、子孫の義にいふ。左傳に「公族公室枝之葉也、若去レ之、則本根無レ所二庇蔭一矣」

【枝族】シゾク わかれ出でたるやから。(分族)。魏志、三少帝紀評に「必參二枝族一、終二于曹爽一」

【枝解】シカイ 四肢を切りはなす刑。史記に「功已成矣、而卒枝解」

【枝頭】シトウ えだのさき。朱熹「好鳥枝頭亦朋友、落花水面皆文章」

【枅】

〔國字〕ます。

【枠】

〔國字〕わく。

五畫

【枯】

㊀セン、ソン。思廉切。鹽。

㊁チン。知林切。侵。

㊂木の名㊃あて、だい(椹に同じ)。コ、ク。空胡切。虞。

【枯】

㊀かる、かわく、つかる㊁からす㊂おとろふ(衰)㊃かれき。

【枯木】コボク かれたる木。又、葉落ちたる木の形容。漢書に「有二人先游一、則枯木朽株、樹レ功不レ忘」

【枯池】コチ 水のかわきたるいけ。李白「窮魚守二枯池一」

うらなひ(占)㊄鐘の乳㊅物を數ふるにいふ㊆口に橫にふくみて、鐘にて項にむすび聲を發するを防ぐもの。

【枚卜】バイボク かぞへうらなふ。書經に「枚卜功臣、惟告之從」

【枚筮】バイゼイ ひろく吉凶をうらなふ。左傳に「歎二南蒯枚筮之遇一」

【枚枚】バイバイ こまかき貌。詩經に「閟宮有レ侐、實實枚枚」

【枚數】バイスウ かぞ。左傳に「臣左驂迫還二于門中一、識二其枚數一」

【枚舉】マイキヨ かぞへあぐ。書經、傳に「因二其先後次第一、而枚二舉之一、辭也」

【枛】

サウ、セウ。阻敎切。效。はり、とげ(木刺)。セキ、シャク。析に同じ。

【枒】

㊀クワ。古火切。哿。㊁ヲ。烏果切。哿。㊂ラ。魯火切。哿。㊃クワン、グワン。古玩切。翰。㊄裸に通ず。

㊅くだもの、このみ(木實)㊆かつ(勝)㊇はつ、はたす(決)㊈はたして㊉いさみ(勇敢)㊋をはり㊌はては、つひに㊍あく(厄)㊎裸に通ず㊏蝶に通ず㊐はんべる(姝に同じ)㊑亂の一種㊒裸に通ず㊓あかはだか(赤體)。

【果木】クワボク くだものなる木。謝靈運「果木有二舊行一、壞石無二遠延一」

【果刑】クワケイ 罪あるものを必ず罰にす。沈

【枯朽】コキウ かれくつ。後漢書に「雖レ含二牛氣一、實同二枯朽一」

【枯宅】コタク さかえざる地位をいふ。阮籍「灰心寄二枯宅一、曷顧二人間姿一」

【枯死】コシ かる。かれて死ぬ。

【枯旱】カン はなはだしくひでりす。又、ひでり。漢書、于定國傳に「太守論殺二孝婦一、郡中枯旱」

【枯吻】フン 詩文の容易に口に浮び出でざるにいふ。(燥吻)。顧瑛「坐來詩句生二枯吻一」

【枯林】リン 葉のかれ落ちたるはやし。杜甫「大鼓霜雪幹、歲久爲二枯林一」

【枯松】ショウ かれたるまつ。皇甫曾「石狀埋二積雪一、山路倒二枯松一」

【枯柴】サイ かれたるしば。元好問「孟郊老作二枯柴一立」

【枯冢】チコウ あれはてたるはか。杜甫「濟世敢嫌時、斯人各枯冢」

【枯株】シュ かれたるかぶ。事文類聚に「風雷昨夜破二枯株一、借問天公有レ意無」

【枯條】デウ かれたるえだ。陶潛「寒風拂二枯條一、落葉掩二長陌一」

【枯凋】チウ かれしぼむ。轉じて、物事の衰へたるにいふ。孟郊「執レ手復執レ手、惟言無二枯凋一」

【枯骨】コツ かれたるほね。蜀志に「冢中枯骨、何足レ介レ意」

【枯參】パタ かれたるむぎ。杜甫「老雁忍二春饑一、哀號待二枯參一」

【枯魚】ギョ ほしたるうを。孔子家語に「枯魚銜レ索、幾何不レ蠹」

【枯荻】テキ かれたるをぎ。北史に「塗二戰船一、以レ黃、輿二枯荻一同レ色」

【枯荷】カ かれたるはちす。梅堯臣「枯荷復送レ雨、度雁寧知レ數」

【枯淡】タン 素朴にして澹泊なり。宋史、鄭樵傳に「平生甘二枯淡一、樂二施與一」

【枯澗】カン 水かわく。謝靈運「饑婆煙不レ興、渴汲水枯澗」

【枯焦】ショウ かれかわく。搜神記に「萬物枯焦、百姓喝喝」

【枯硯】ケン 用ゐからしたるすずり。陳與義「獨題懷古句、枯硯生二明珠一」

【枯幹】カン かれたるみき。梁書に「大風一振、枯幹必摧」

【枯腸】チャウ 虛になりたるはらわた。盧仝「三椀搜二枯腸一、惟有二文字五千卷一」

【枯落】ラク かれおつ。中論に「草木猶有二枯落而興一、時謂者一」

【枯榮】エイ かるるとしげると。衰ふると盛んなると。李白「如何同枝葉、各自有二枯榮一」

【枯竭】ケツ かれつく。南史に「腥臂無二完皮一、血脈枯竭」

【枯蓬】ホウ かれたるよもぎ。駱文盛「不レ勝二清淚濕一枯蓬一」

【枯蔓】マン かれたるつる。戴復古「春風不レ到處、枯蔓挂二疎籬一」

【枯廢】ハイ すたれて物の用にたたず。徐陵「風患彌留、半體枯廢」

【枯樹】ジュ かれたるき。晉書に「觀二其字勢一、疎瘦如二隆冬之枯樹一」

【枯燥】サウ かわく。放翁題跋に「地枯燥不レ可レ耕」

【枯篠】タク かれたる竹の皮。鮑照「君不レ見枯篠走二階庭一」

【枯鱗】リン ほしたるうを。隋書に「咳唾足二以活一枯鱗一、吹噓可二用飛一窮羽一」

【枯槁士】コウシ おちぶれたる士。莊子に「兵革之士樂レ戰、枯槁之士宿レ名」

【枯木華開】コボククワカイ 心願の屆きたるに喩ふ。博物志に「昔有レ人好レ道、而不レ知二求レ道之方一、唯每朝拜跪向二一枯木一、不レ倦、枯木一旦、忽然生レ華」

【枯木發レ榮】コボクエイ 死を起して生に回す義。七啓に「辯言之豔、能使二窮澤生レ流、枯木發レ榮」

【枯楊生レ稊】シヤウテイ かれたる柳より復ひこばえを生ず。老夫、少妻を得て、よく生育の功をなすに喩へいふ。易經に「枯楊生レ稊、老夫得二其妻女一」又、易經に「枯楊生レ華、老婦得二其士夫一」

【枰】ヘイ ピャウ。蒲兵切。庚。

一板を以て作りその體平正なるものの稱。二ごばん、すごろくばん(博局)。三槨に同じ。

【枅】ケイ シ。胥里切。紙。あさ(廊)。

【枴】ヤシ。諸氏切。紙。ろキ。居紙切。紙。

一からたち、きこく。二また(股)。三そこなふ(害)。

【枸櫞】ダン (植)けんぼなし。

【枸殼】コク (植)からたちの木。雍陶「處處春風枸殼花」

【枸棘】キヨク (植)前に同じ。後漢書に「枸棘非二鸞鳳所レ棲、百里豈大賢之路」

【枴】ヤカイ、ケ。古買切。蟹。ろタイ、デ。直駭切。蟹。

ヤクワ、ゲ。古瓦切。馬。つゑ(杖)。

【枴】ケウ。虛嬌切。蕭。

一むなし(虛)。二へる(饑耗)。

【枴然】ゼン おほいなる貌。文選、注に「枴然、大貌」

【枴腹】フク うう。饑餓す。范成大「匏瓜謾枴腹、蒲柳無二真姿一」

【架】カ、ケ。居訝切。禡。

一くひ(杙)。二ころもかけ、いかう(衣架)。三たな(棚)。四のき、やれ(屋宇)。五かく。六鳥の聲。七組み立つ。

【架上】ジヤウ たなのうへ。

【架空】クウ そらにかけ渡す。唐太宗「飛簷迴架レ空」

【架架】カカ 鳥のころの形容。荊楚歲時記に「有レ鳥如レ烏、先レ雞而鳴、架架格格」

【架設】セツ かけわたす。

【架築】チク 橋をかけ堤をきづく。徐賢妃「非レ無二架築之勞一」

【架橋】ケウ はしをかけわたす。陸游「架レ橋築レ道村翁事」

【枷】カ、ケ。居牙切。麻。

ろ架に通ず。

一からざを。二くびかせ(項械)。

【枷脰】トウ くびかせをつく。韓愈「取二之江中一、枷レ脰械レ手」

【枸】コウ、ク。居侯切。尤。ろ古后切。有。ク。舉朱切。虞。

ゴ。俱羽切。麌。

一からたち(枸櫞)。ろくこ。一わだかまる(盤錯)。二きりかぶ(斷木)。三車のおほひのほね(枸篋)。四木の名。

【枸檢】コウケン しめくくり。後漢書に「虛誕者獲レ譽、枸檢者難レ毀」

【枹】フ。芳無切。虞。ろフウ、ブ。房尤切。尤。

ろたい。このばち。むらがり。ふるの。ふるのばち。

【枹鼓】コ ふるを。ふるつづみと。國語に「執二枹鼓于軍門一、使二百姓加レ勇焉」

【枺】ハツ、マチ。莫葛切。曷。

一ほしら(柱)。二たうばぜ(魬)。

【枻】エイ。以制切。霽。

ろセツ、セチ。細列切。屑。

ゆかい、かぢ(楫)。ろゆだめ。

【柴】ヤエフ。弋涉切。葉。ろサフ、ソフ。蘇合切。合。

ろ一けたのき(榻)。二うすし(薄)。

【柿】シ、ジ。鉏里切。紙。かき。

集韻に「俗に、柿に作るは非なり」シ、柿の俗字。

【柿】ケツ、ゲチ。魚列切。屑。

ろカツ、ガチ。五葛切。曷。

きりかぶ、ひこばえ(蘖に同じ)。

【柁】タ、ダ。徒可切。哿。ろ待可切。

哿。唐何切。歌。

一かぢ(舵に同じ)。ろかたし。おつ。

【柁樓】ロウ 船のかぢある處に構へたるやぐら。劉子翬「路窺二煙渚一靜、山入二柁樓一青」

【柂】イ。余知切。支。ろリ。鄭知切。支。

ばだつきのひつぎ。酒の名(柯柂)。

【柂禮】エイ ふれのかぢ。拾遺記に「以二蜚文桂一爲二柂禮一」

【柃】レイ、リャウ。郎丁切。青。

ひさかき(榊拾、染料とす)。

【柄】ヘイ、ビャウ。陂病切。敬。

ろヒャウ、ハウ。必漾切。漾。

一え、とって。二もと(本)。三ちから、いきほひ(權力)。

國訓 ほこ。

【柄用】ヘイヨウ おもく用ゐる。唐書、裴垍傳

に「士大夫不レ以二垢年少柄用一爲レ嫌」

【柄臣】〔シイ〕 權力をにぎれる家來。漢書、朱雲傳に「賤人圖二柄臣一」

【枻】 ㊀キョク、コク。拘玉切。沃。ろキク、コク。居六切。屋。㊁コウ。栲に同じ。

【梶】 ㊀ザ、ニ。女履切。紙。ろザツ、ニチ。尼質切。質。㊁チ。丑利切。質。㊀一その實は梨の如き一種の木二車を止むる木三茂りて盛んなる貌四みる(察)五いとまきのあしろとどむ(止)㊁いとわくのえ(篗柄)。

【梶梶】〔ザザ〕 茂りて盛んなる貌。左思「總望梶梶、亳葉蓁蓁」

【椪】 ラフ、ロフ。落合切。合。拉に同じ。 國訓くひ。クワ、ケツ。胡戈切。歌。ひつぎのくち(棺頭)。

【柾】 ㊀ハン、バン。薄官切。寒。ろ普半切。翰。

【桿】 ㊀たらひ(槃に同じ)ろ木の名。シュウ、シュ。之戎切。東。

【柊】 一ひひらぎ二つち(椎)。タイ、デ。待戴切。隊。かひこのすのはしら(蠶槌)。シ。詳兹切。支。

【柴】 一かまのえ(竈柄)二枱に同じ。ショ、ソ。 梳に同じ。

【柑】 ㊀カン、コン。沽三切。覃。ろ餡に同じ。 ㊁みかん。シッ、ジチ。親吉切。質。一漆の俗字二木の名三ななつ。ピン、ネン。而瑛切。瑛。

【柒】

【柏】 一このでがしは二おほいなり(伯に通ず)三せまる(迫に通ず)。 國訓かしは。

【柏車】〔ハクシャ〕 山にて用ゐる大車。周禮に「車人柏車、轂長一柯」

【柏白皮】〔ハクヒ〕 このでがしはの根の皮。

【柏舟操】〔ハクシウノミサホ〕 夫死にて婦節を守るをいふ。詩經、序に「柏舟共姜自誓也、衞世子共柏蚤死、其妻守レ義、父母欲二奪而嫁レ之、誓而弗レ許、故作二是詩一、以絶レ之」

【柏梁臺】〔ハクリヤウダイ〕 元鼎二年に漢の武帝の築きたる臺の名。漢武舊事に「柏梁臺以二香柏一爲レ臺、香聞數十里」

【柏梁體】〔ハクリヤウタイ〕 詩體の名、七言にして毎句に韻を押すもの。古文苑に「武帝作二柏梁臺一、詔羣臣二千石一、有レ能爲二七言詩一者上、乃得二上座一」

【柏葉酒】〔ハクエフシユ〕 柏酒ともいふ、之を飲めば邪氣をはらふといふ。庾肩吾「聯開柏葉酒、試奠五辛盤」

【柏葉壽】〔ハクエフジユ〕 柏の葉は枯れ落ちざるを以て、借りて長命の義に用ゐる。武平一「願持二柏葉壽一、長奉二萬年歡一」

【某】 ㊀ボウ、ム。莫後切。有。㊁それ、それがし一自己の稱二かく。かくの事、しかじかの事。康熙字典に「甘、もと目に作る、當に某に爲るべし、俗に、某に作るは非なり」

【柑】 ㊀カン、コン。沽三切。覃。ろ餡に同じ。 ㊁みかん。シッ、ジチ。親吉切。質。一漆の俗字二木の名三ななつ。ピン、ネン。而瑛切。瑛。

【柒】

【染】 一そむ二そむること、しみ三しむ、ひたす四けがす五やはらぐ(柔)。

【染工】〔センコウ〕 そめものや。北史に「染工王神歡者、以レ賂自進」

【染化】〔センクワ〕 德にしみうつる。轉じて、政をほどこすにいふ。晉書に「蜀染化日久、風教遂成」

【染色】〔センショク〕 いろをつく。そめたるいろ。呂氏春秋に「丹漆染色不レ眞」

【染汚】〔センヲ〕 よごす。(汚染)。

【染指】〔センシ〕 指を物の中に入る、卽ち、その物の味を試むる義。左傳に「子公怒染指于鼎、嘗レ之而出」

【染料】〔センレウ〕 物をそむる原料。そめくさ。

【染草】〔センサウ〕 そめくさ。周禮に「掌レ以二春秋一斂二染草之物一」

【染習】〔センシフ〕 ならはし。宋史に「亦猶レ人意之善惡、以二染習一而成レ也」

【染畫】〔センクワ〕 ゑをかく。梁簡文帝「漢軍染畫、猶高二寶彪一」

【染筆】〔センヒツ〕 書畫を書く。

【染愛】〔センアイ〕 心のふかきいつくしみ。白居易「張蒼何爲者、染愛浩無レ際」

【染感】〔センカン〕 そまる。しみこむ。

【染蒨】〔センセン〕 あかれの色をそむ。詩經、注に「今人染レ蒨者、乃假二蘇方木一」

【染緣】〔センリヨク〕 みどりにそむ。梁元帝「露沾疑レ染レ綠」

【染蕭】〔センクン〕 うつりが。又、かをりをそむ。梁簡文帝「傍レ玉流溫、依レ闌染蕭」

【染濡】〔センジユ〕 色にそまる。柳貫「雲霞樓觀互鑒見、花竹羽毛工二染濡一」

【柔】

㊀ジウ、ニュ。耳由切。尤。ろニウ。慣用音。一やはらか(剛の對)二やはらぐ三やすんず(安)四したがふ(服)五わかめ。

【柔日】〔ジウジツ〕 十干のうち、乙・丁・己・辛・癸にあたる日。剛日の對。禮記に「外事用二剛日一、內事用二柔日一」

【柔毛】〔ジウマウ〕 一やはらかなるけ。列子に「一朝盧以二柔毛綈幕一」二羊の異名。禮記に「凡祭二宗廟一之禮、羊曰二柔毛一」

【柔和】〔ニウワ〕 やさし。おだやかなり。史記、張釋之傳に「賴二吾馬柔和一」

【柔金】〔ジウキン〕 金をやはらかにす。書經、疏に「錫所二以柔一金也」

【柔脆】〔ジウビイ〕 よわくしてもろし。老子に「萬物草木之生也柔脆」

【柔婉】〔ジウエン〕 やさしくしてすなほなり。北史、賓宣皇后傳に「后性柔婉不二妬忌一、嬪御等、咸愛而仰レ之」

【柔訓】〔ジウクン〕 女のをしへ。章表闡「各稟二柔訓一、常貽二話言一」

【柔弱】〔ジウジヤク〕 よわし。(懦弱、軟弱)文中子に「柔弱者生之幹也、堅强者死之徒也」

【柔輪】〔ジウリン〕 やはらかにして體色純なり。殷淡「神鑒孔昭、嘉二是柔輪一」

【柔荑】〔ジウテイ〕 やはらかなるつばな。手の白く美しきに喩ていふ。詩經に「手如二柔荑一、膚如二凝脂一」

【柔毫】〔ジウガウ〕 やはらかなるけ。洞冥記に「因名二柔毫筆一」

【柔淑】〔ジウシユク〕 すなほなり。化書に「有二柔淑之態一、則荊莩可二以行一婦道一」

【柔情】〔ジウジヤウ〕 やさしきこころ。洛神賦に「柔情綽態、媚二于語言一」

【柔媚】〔ジウビ〕 こびへつらふ。(曲媚)。唐書、庾準傳に「準無二學術一、以二柔媚一自進」

【柔惰】〔ジウダ〕 よわくしておこたる。

【柔毳】〔ジウセイ〕 やはらかなる細き毛。又、やはらかなり。獅子賦に「蕤拳柔以被二勁鬣一、柔毳以爲レ裳」

【柔順】〔ジウジユン〕 すなほなり。易經に「柔順利レ貞、君子攸レ行」

【柔滑】〔ジウクワツ〕 やはらかになめらかなり。(軟滑)。西京雜記に「肌膚柔滑如レ脂」

【柔暖】〔ジウケン〕 やはらかなり。埤雅に「鵝毛柔暖而性冷」

【柔瑟】〔ジウシツ〕 やはらかなる音のすること。李白「含レ情弄二柔瑟一、彈作陌上桑」

【柔嫩】〔ジウドン〕 やはらかなり。圖畫寶鑑に「筆意柔嫩、實少年好奇耳」

【柔懦】〔ジウダ〕 やさしきかたち。李山甫「强扶二柔懦一酒難レ醒」

【柔遠】〔ジウエン〕 遠地にある者をやはらげなつく。書經に「柔レ遠能邇、惠二康小民一」

【柔撫】〔ジウブ〕 やはらげ安んず。宋書、高麗國傳に「柔二撫四封一」

【柔範】〔ジウハン〕 婦女のをしへ。晉書に「肅二尊儀一、而修二四德一、體二柔範一、而弘二六義一」

【柔輭】〔ジウヒン〕 やはらかなり。南史に「其後身體柔輭、顏色如レ恆」

【柔懦】〔ジウダ〕 よわく臆病なり。國史補に「李吉甫任二相國一八年、多智柔懦」

【柔濡】〔ジウジユ〕 やはらかにしてうるほふ。劉禹錫「剔二去剛正一、納二之柔濡一」

【柔膩】〔ジウジ〕 やはらかにあぶらぎりたり。諸寺奇物記に「柔膩如二芭蕉一」

【柔糯】〔ジウロク〕 おもむろに漬ぐ糯。僧洪惠

「夢隨二柔櫓一到二西興一」

【柔能制剛】（ジウヨウセイガウ）弱きものの強きものに勝つないふ。三略に「柔能制剛、弱能制強」

【柔亦不茹剛亦不吐】（ジウエキフジョカウエキフトハズ）弱きものをも侮らず、強きものをも畏れざるにいふ。詩經に「維仲山甫、柔亦不茹、剛亦不吐、不侮二矜寡一、不畏二彊禦一」

【招】（ヤセウ、ゼウ。時饒切。蕭。ろ市沼切。篠。）（ヤ一樹木の搖く貌）二まと（的）ろゆあみの牀。

【松】（ショウ、シュ。）松に同じ。

【柘】（ヤシャ、セ。之夜切。禡。ろソ、ゾ。之怒切。遇。）一くは、やまぐは二さたうきび（甘蔗）。

【柙】（ヤカフ、ケフ。轄甲切。洽。ろアフ、エフ。烏匣切。洽。）一をり（檻）二おさふ、とどむ三木の名四はこ。

【柚】（ヤイウ、ユ。余救切。宥。ろチク、トク。仲六切。屋。）ゆずろたてまき。

【桓】（ヤキョ、コ。句許切。語。ろグ、ゴ。果羽切。虞。）一けやき二みづため。

【柏】（ヤシ。詳里切。紙。ろイ。盈之切。支。）（ヤ一すき（酒）二てぐるまろゆとり、あかとり。

【柝】（タク、チャク。圜各切。藥。）一ひゃうしぎ二ひゃうしぎを擊ちて警備すること。

【柞】（ヤサク、ジャク。疾各切。藥。ろ側格切。陌。ヤサ、セ。仕下切。馬。）（ヤはは）そろ一かろ、きる（伐）二ぜまし（陋）三かむ（齧）ヤきる（樸に同じ）。

【柞樸】（レキ）（植）はは。陸機「栩、今柞樸也、徐州謂樸爲杼、或謂之爲栩」

【柄】（ヤダン、ナン。那含切。覃。ろセン、モン。而琰切。琰。）

【柠】（チョ、ト。）楮に同じ。

【柢】（デイ、タイ。都禮切。薺。）一れ（根）二もとづく。

【柣】（ヤチツ、ヂチ。直實切。質。ろセツ、セチ。千結切。屑。）ヤテツ、デ（ヤろ一しきみ二みぎり（砌）三くろがね（鐵）ヤ一二名（桔梗）三山の名（梶嶺）。

【柤】（ヤサ、セ。莊加切。麻。ろショ、ソ。）（ヤ一）鋸於切。魚。ヤ俎に同じ。

【查】（サ、セ。莊加切。麻。）一いかだ、うきき（槎に同じ、浮木）二みろ、かんがふ、しらぶ（考察）三祖に同じ。

【查滓】（サ）かす。張憲「無レ因レ淨二查滓一、來共上二堂鐘一」

【查定】（サテイ）しらべさだむ。

【柤】（タン、ダン。徒旱切。旱。）木の器、檄に似て足なし。コ、ゲ。古胡切。虞。かど（觚に同じ）。

【柩】（キウ、ゲ。巨救切。宥。）一ひつぎ二ひさし（久）三きはまる（究）。

【柩車】（キウシャ）ひつぎを載するくるま。

【枒】（アウ、エウ。於交切。肴。）まがりき（曲木）。

【枯】（キョ、コ。去魚切。魚。）にぐら、くら（极）。

【枯】（ヤフツ、ホチ。數勿切。物。ろヒツ、ビチ。蒲窓切。質。）からざを（連枷）。

【柬】（ヤカン、ケン。賈限切。潸。）ろ棟に同じ。ゆえらぶ（簡に同じ、擇）

【枝】（ヤハツ、バチ。北末切。曷。ろフツ、ホチ。數勿切。物。ヤハツ、バチ。蒲撥切。曷。ヤハイ、ベ。蒲昧切。隊。ヤヘツ、ヘチ。必列切。屑。）ろからざを（連枷）ヤやじり（矢末）ヤ木の柯葉を生ずヤあをぎり（梧）。

【柵】（ヤトツ、ナチ。女滑切。月。ろヂュツ、ニュチ。女律切。質。ヤト

ツ、トチ。當沒切。月。ヤサツ、サチ。蹠活切。曷。ヤゴツ、ゴチ。五忽切。月。）ろたつ（斷）ヤほだ、きりかぶ（榾柮）ヤ柱の端の木ヤ樹の枝なきにいふ。

【柯】（カ。居何切。歌。）一なのえ（斧柄）二えだ（枝）三くき（莖）四わん（盂）五三尺の長さの稱六木の名。

【柯條】（カデウ）えだ。詩經、疏に「松木雖レ生二高山一、而柯條枯槁」

【柯葉】（カエフ）えだとはと。陶潛「柯葉自摧折、根株浮二滄海一」

【柰】（ダイ、ナイ。乃代切。隊。）一なに、なんぞ、いかん（那に同じ）二からなし（果名）。

【柰何】（イカ）どのやうに。どれほど。九辨に「君不レ知兮、可二柰何一」又、司空圖「春色年年柰レ我何」

【柱】（ヤチュ、ヂュ。直主切。虞。ろシュ、ス。株遇切。遇。ヤチュウ。慣用音。）（ヤ一）はしら二ことぢ（琴柱）ろ一さす（刺）二つかさどる（掌）三ささふ（支）、したがふ（隨）。

【柱石】（チュウセキ）いしずゑ。轉じて、重要なるものにいふ。漢書、霍光傳に「田延年曰、將軍爲二國柱石一」

【柱槨】（チュウクワク）はしらとたるきと。

【柱梁】（チュウリャウ）はしらとうつばりと。淮南子に「大者以爲二舟航柱梁一」

【柱櫨】（チュウロ）はしらとむれと。

【柱屏】（チュウヒ）はしらととびらと。

【柱礎】（チュウソ）はしらの下におくいし。晉書に「琉璃爲二牆壁一、水精爲二柱礎一」

【柱下史】（チュウカシ）老子をいふ。漢書、張湯傳に「老子爲二柱下史一、卽藏室之柱下、因以爲二官名一」

【柱石臣】（チュウセキシン）はしらともいしずゑと相一國家柱石臣也」

【柱石寄】（チュウセキキ）おもきやくめ。朱浮「委以二大郡一、任以二威武事一、有二柱石之寄一」

【柲】（ヤヒ。兵媚切。寘。ろヒツ、ビチ。）蒲必切。實。ヤヘツ、ベチ。蒲結切。）一ほこのえ（戟柄）二ぬの（槃）ろたぐひ（偶）ヤえ（柄）。

【柳】（リウ、リュ。力九切。宥。）一やなぎ二しだれやなぎ三ぬりこ（二十八宿の一）。

【柳色】（リウシキ）やなぎのかすむ色。劉長卿「柳色孤城裏、鶯聲細雨中」

【柳花】（リウクワ）やなぎのはな。白居易「誰能更學二兒童戲一、尋二逐春風一提二柳花一」

【柳眉】（リウビ）美人のまゆ。白居易「芙蓉如レ面柳如レ眉」

【柳條】（リウデウ）やなぎのえだ。梁簡文帝「柳條恆著レ地、楊花好上レ衣」

【柳眼】（リウガン）やなぎの新芽。歲華紀麗に「闌芽吐レ玉、柳眼挑レ金」

【柳陰】（リウイン）やなぎのかげ。司空圖「柳陰路曲、流鶯比鄰」

【柳隄】（リウテイ）やなぎの木のあるつつみ。溫庭筠「不レ語垂鞭上二柳隄一」

【柳絲】（リウシ）やなぎの枝のしだりたる形容。駱賓王「梅花如レ雪柳如レ絲」

【柳絮】（リウジョ）やなぎのわた。臨乘に「柳花與二柳絮一、迥然不レ同、中唐其實之熟、亂飛如レ綿者絮也」

【柳葉】（リウエフ）やなぎのは。戰國策に「楚有二養由基者一、善射、去二柳葉一者、百步而射レ之、百發百中」

【柳塘】（リウタウ）やなぎの木のあるつつみ。陳基「柳塘水暖鴛鴦浴、花徑風酣蛺蝶飛」

【柳腰】（リウエウ）しなやかなるこし。美人の形容。溫庭筠「轉盼如レ波眼、娉婷似レ柳腰」

【柳態】（リウタイ）やなぎの枝ぶり。轉じて、しなやかなるすがた。柳淡「似レ逐春風知二柳態一、如レ隨啼鳥識二花情一」

【柳邊】（リウヘン）やなぎのきのほとり。杜甫「退朝花底散、歸院柳邊迷」

【柳營】（リウエイ）幕府の異稱。漢の將軍周勃、細柳に軍して、胡に備へたる故事による。李庾「依二榆關一以作レ鎭、拒二柳營一而開レ壁」

【柳暗花明】（リウアンクワメイ）柳の下かげくらく、花の色あきらかなり、春のけしきをいふ。陸游「山重水復疑レ無レ路、柳暗花明又一村」又、王維「柳暗百花明、春深五風城」

〔柳緣花紅〕 春の美しきけしきをいふ。蘇軾「柳緣花紅眞面目」

【柴】 ㊥サイ、セ。鉏佳切。佳。㊦サ、セ。鋤加切。麻。㊤シ。子智切。寘。㊤扶宜切。支。 ㊥一しば(小木、散材)二ふさぐ(塞)三まもる(護)四まがき(籬)五しばを燔きて天を祭ること。㊦しば一つむ(積)二頻なはらふ㊤かたたがひ。

〔柴戶〕 しばにて造れる戶。顧非熊「鹿跡入柴戶、樹身穿草亭」

〔柴火〕 そだの火。

〔柴車〕 かざりせざる車。通鑑綱目集覽に「柴車、車之不裝飾者、卽棧車也」

〔柴門〕 しばにて造れる門。姚孝錫「柴門客至鳥先啼」

〔柴荊〕 いばらなどの雜木。轉じて、あばらや。陸游「時聞剝啄叩柴荊」

〔柴望〕 しば木を焚く祭の名。書經に「柴望秩于山川」

〔柴扉〕 しばの戶びら。王維「山中相送罷、日暮掩柴扉」

〔柴轂〕 かざりせざる車。後漢書に「輜軿柴轂、塡接街陌」

〔柴薪〕 まき。そだ。

〔柴毀〕 頻やせおつ。晉書に「柴毀骨立、杖而能起」

〔柴壇〕 天を祭る時に柴薪を焚くには。宋書に「大祝令自レ案奉玉璧牲牘諸饌物、登柴壇」

【柵】 ㊥サク、シャク。測革切。陌。㊦セキ、シャク。測戟切。陌。㊤サン、セン。所晏切。諫。 ㊥一やらひ二ませがき三しがらみ四とりで(砦)五かけはし(棧梁)㊦やらひ㊤やらひ、ませがき(籬柵)。

〔柵門〕 さくを結ひたるもん。

〔柵壘〕 木の柵をたてたるとりで。北史に「士衆勞疲、柵壘未安」

【栖】 ㊥セイ、サイ。先齊切。齊。㊦思計切。霽。 ㊥一すむ二すみか三いこふ、やすむ四忙しき貌㊦れぐら、とや。

〔栖泊〕 とまる。高適「漁樵屢栖泊」

〔栖息〕 やどりすむ。何遜「栖息同蝎舍、出入共荊扉」

〔栖栖〕 いそがはしき貌。(皇皇)。論語に「何爲是栖栖者歟」

〔栖烏〕 ねぐらにかへるからす。李賀「栖烏上井梁」

〔栖鶻〕 〔動〕くまたか。

【栗】 ㊥リツ、リチ。力質切。質。 ㊦レツ、レチ。力蔗切。屑。 ㊥一くり二つつしむ(謹敬)三かたし(堅)四おごそか(威嚴)五おそる、なのく(戰)六さむし(寒)七しじむ(蹙)八くしけづる九おほし(衆)十穀實の實入りよきこと㊦わる、さく(破裂)。

【桂】 ㊥サク、シャク。測革切。陌。㊦セキ、シャク。測戟切。陌。㊤サン、セン。所晏切。諫。 ㊥一やらひ二ませがき三しがらみ四とりで(砦)五かけはし(棧梁)㊦やらひ㊤やらひ、ませがき(籬柵)。

【柜】 樂器の名。

〔柜〕 ハイ、ヘ。拋裴切。灰。

〔柜〕 得ざるを恨む(柾治)。

〔柜〕 〔國字〕一に、枋に作る。とち。

〔柜〕 〔國字〕とが。

〔柜〕 〔國字〕まさ、まさめ。

六畫

シュン。聲允切。軫。鐘磬を懸くる横木。

㊥セン。所員切。先。㊦サン、セン。敎還切。刪。㊤セン。所眷切。㊥一きのくぎ(木釘)二つらぬく(貫)三わん(盂)㊦きのくぎ㊤とかき、ますかき(槩)。

【桧】 ㊥カフ、ケフ。胡甲切。洽。㊦ゲフ、ゴフ。訖業切。業。㊤カフ、コフ。曷閤切。合。 ㊥かたなば こ(劍匣)㊤ねむのき。

【梨】 ㊥ケイ、カイ。去計切。霽。 ㊦ケツ、ケチ。詰結切。屑。 ㊥きざむ(刻)㊦一たつ(絕)二かく(缺)三うれふ(憂)。

【栖】 ㊥セイ、サイ。先齊切。齊。 ㊦思計切。霽。 ㊥一すむ二すみか三いこふ、やすむ四忙しき貌㊦れぐら、とや。

〔栖泊〕 とまる。高適「漁樵屢栖泊」

〔栖息〕 やどりすむ。何遜「栖息同蝎舍、出入共荊扉」

〔栖栖〕 いそがはしき貌。(皇皇)。論語に「何爲是栖栖者歟」

〔栖烏〕 ねぐらにかへるからす。李賀「栖烏上井梁」

〔栖鶻〕 〔動〕くまたか。

【栗】 ㊥リツ、リチ。力質切。質。 ㊦レツ、レチ。力蔗切。屑。 ㊥一くり二つつしむ(謹敬)三かたし(堅)四おごそか(威嚴)五おそる、なのく(戰)六さむし(寒)七しじむ(蹙)八くしけづる九おほし(衆)十穀實の實入りよきこと㊦わる、さく(破裂)。

〔栗子〕 くりの實。

〔栗刺〕 くりのいが。

〔栗栗〕 一おほき貌。詩經に「獲之桎桎、積之栗栗」二おそるる貌。漢書、元帝紀に「朕戰戰栗栗、日夜思過失」

〔栗烈〕 さむさきびしき貌。詩經に「一之日觱發、二之日栗烈」

〔栗扶〕 くりの實のしぶかは。

〔栗階〕 等を超ゆ。階を躍む。儀禮に「栗階、不レ過二二等」

〔栗殼〕 くりのかは。神異經に「東方荒中有レ木、名曰レ栗、其殼徑三尺三寸」

〔栗鼠〕 〔動〕きねずみ。埤雅に「鼠狼、一名鼬、今栗鼠似レ之」

【栫】 ㊥イ。余之切。支。 ㊦ケイ。玄圭切。齊。 にはうめ(棠棣)。

〔栫柳〕 〔植〕かはやなぎの異名。

〔栫楊〕 〔植〕柳の一種、葉のまろきもの。しでやなぎ。古今註に「栫楊亦曰二栫柳、亦曰二蒲栫一」

【桵】 カウ、コウ。湖江切。江。 一船のほ(雙)二帆未だ張らず。 チン。直荏切。寢。 一蠶簿の横木二とちしば。 タク、チャク。莎革切。陌。

【栉】 蠶簿の横木。 レイ、ライ。郎計切。霽。

【柷】 その果枇杷に似たる木の名。

くりの實。

一やがらに用ゐる木二松の一種(嵌松)。

〔植〕木の名。南史に「庾沙彌母亡、晝夜號二痛墓一、忽生二嵌松一百餘株」

【栫】 ㊥ハイ、ヘ。匹卦切。卦。 ㊦ハ、ヘ。必駕切。禍 ㊥藤の屬㊦ちぎり(緣)。

【棟】 ㊥セキ、シャク。色責切。陌。㊦ソク。蘇谷切。屋。㊤シ。七賜切。 寘。㊥㊦さねぶとなつめ(挾)㊤楣の屬。

【栝】 ㊥テン。他念切。豔。㊦クワツ、クワチ。古活切。曷。㊤ソワイ、ケ。古外切。泰。 ㊥一たきざ(孫に同じ)二つる(火杖)㊦一ひのき、びゃくしん(檜に同じ)二ためぎ、たむぎゃくしん。

〔栝樓〕 〔植〕さからすうり。黃烏瓜。

【栞】 ㊥カン。丘寒切。寒。 ㊦ケン。稽延切。先。 しをり、みちしるべ、しをる。

〔栞木〕 木を折りて路しるべとす。淮南子に「禹乘二四載一、隨レ山栞レ木、平二治水土一」

【栟】 ㊥ケイ、カイ。堅奚切。齊。 ㊦ケン。經天切。先。 ますがた、けた(屋櫨)。

【栟】 ケイ、カイ。栟の俗字。

【校】 ㊥カウ、ケウ。古孝切。效。㊦何交切。肴。㊤吉巧切。巧。 ㊥一かせ(木囚)二きそふ(角)三むくゆ(報)四かんがふ(考)五しらぶ(檢)六かぞふ(計)七くらぶ(比)八ただす(正)九とどむ十たたかふ(交戰)十一まなびどころ(學宮)十二てすり(欄格)㊦え(枋)㊤一すみやか(疾)二あし(几足)。

〔校力〕 力をくらぶ。晉書に「雞二與校レ力、當二以レ計破レ之一」

〔校比〕 かんがへくらぶ。周禮に「以二歲時一涖、校比」

〔校正〕 くらべ合せて正す。主に寫本又は印刷物の誤謬を正すにいふ。

〔校合〕 前に同じ。

〔校次〕 かんがへて順序をさだむ。周禮、注に「校二次其人之在否一」

〔校武〕 軍の道をくらべかんがふ。揚雄「簡二力狡獸一、校二武票禽一」

〔校序〕 がくかう。(庠序)。邢邵「列二校序于鄉黨一」

〔校舍〕 前に同じ。後漢書に「別立二校舍一、搜二選高能一、以授二其業一」

〔校定〕 書物をくらべ合せて正す。(讐定)。唐書、韋述傳に「述著レ書萬卷、皆手校定」

〔校訂〕 前に同じ。

〔校度〕 かんがへはかる。(稽度)。柳宗元「勞二析是非一、校二度古今一」

【校書】㊀書物をくらべ合せて正す。蜀志に「向朗年踰二八十一、猶手自校レ書、刊二定謬誤一」㊁舞妓の異稱。事文類聚に「元微之、元和中使レ蜀、籍妓薛濤者有二才色一、府公嚴司空知レ之、遣レ濤往侍焉、嘗辭爲二校書一」

【校理】かんがへただす。漢書に「陳二發祕籍一、校二理舊文一」

【校習】かんがへ學ぶ。吳志に「宜レ講二修術學一、校二習射御一、以周二世務一」

【校試】しけん。唐書に「校試不レ以レ實者、皆有レ罰」

【校閲】しらべけみす。魏書に「巡二行諸州一、校閲守宰一」

【校勘】くらべ合せてかぞふ。

【校學】諸侯の國に設立せる學校。漢書に「校學置二經師一人一」

【校籍】こよみをしらぶ。晉書に「不二先定一校曆之本法一」

【校戰】力をくらべたたかふ。李昂「羽林練士試二金甲一、將軍校戰畫二玉堂一」

【校獵】埒をつくりて禽獸をかる。漢書に「從二胡客一、大校獵」

【校競】たくらべきそふ。北史、獨孤羅傳に「亦不レ與二諸弟一校競一」

【校覽】しらべ見る。北史に「帝臨二白登一、躬自校覽」

【校讎】かんがへしらぶ。宋史、鄭樵傳に「聚二書數千卷一、皆自校讎」

【校書如レ掃塵】書物をしらべ合する困難なるをいふ。宋宣獸、博學喜みて異書を藏す、皆手自ら仇校す、常にいふ、書を校するは塵を掃ふが如し、一面掃へば一面生ず、毎に三四校猶ほ脫誤あり云云。事文類聚に見ゆ。

【栢】ハク、ヒャク。柏の俗字。

【槐】エイ。セツ、セチ。禮に同じ。

【栻】㊀セツ、セチ。子結切。屑。㊁シ、ジ。七賜切。寘。

【栩】㊀ク、コ。虛羽切。麌。㊁カ。主矩切。麌。

【株】㊀チュ。陟輸切。虞。㊁シュ。鐘韡切。虞。㊂かぶ㊃もと（幹）㊄きりかぶ（斷木）㊅誅に通ず㊆駐に同じ。又、會社等にて出資者の權利）。

【株守】何時までも一事を守りて變らざるものを嘲りていふ語。昔、宋に一農夫ありて、たまたま兎の株にふれ死にしを見、以後耕作を罷めて專ら株を守り兎を得んと欲せし故事に出づ。王緯「乃知兎株守、殊勝虎穴探」

【株栒】かれ木のきりかぶ。

【株戮】みなごろしにす。唐書に「株二戮舶商一、沒二其財數百萬一」

【株櫪】くひ。かぶ。列子に「吾處若二株櫪拘拘一」

【栫】㊀ソン。徂悶切。願。㊁セン。才殿切。霰。

【栞】㊀ふさぐ㊁たてしば（魚を捕ふる具）㊂まがき（籬）㊃かこひ（圍）。

【梵】㊀キヤク、ク。渠尤切。尤。㊁オウ、ウ。烏侯切。尤。㊂荊楚の亭の名㊃地の名㊄おどろ。セイ、セ。祖禹切。霽。くひ、小さき杙。國訓もみぢ。ジ、ニ。人之切。支。

【梔】㊀ますがた（斗栱）㊁しばぐり（栗の屬）㊂きのこ（芝の屬）。ジ、ニ。忍止切。紙。きくらげ。

【栫】㊀キク、チク。乙六切。屋。㊁イウ、ユ。云九切。有。㊂にはうめ㊃木の名。レツ、レチ。力輟切。屑。あしきき（惡木）。

【栫】ヘツ、ベチ。房越切。月。いかだ（筏に同じ）。

【栫】キョウ、ク。古勇切。腫。㊀おほいなるくひ（大杙）㊁ますかた、とがた（科栱）。

【栫栫】ますがた。蘇軾「忽行二榕木中一、跨レ空飛二栫栫一」

【栞】㊀キョウ、ク。古勇切。腫。㊁キク、コク。居六切。屋。㊂ケン。古倦切。霰。㊃とらふ（拘）。㊄てかし、てかせ（械）㊅とらふ（拘）。

【栲】㊀カウ、コウ。苦浩切。皓。㊁丘刀切。豪。或は、掘に作る。あふち（山樗）。

【栲栳】やなぎを曲げて作り、物を盛る器。盧延讓「栲栳量レ金買二斷春一」

【栫樔】〔楠〕あふち。陸璣詩疏に「或謂二之栫樔一」

【栳】ラウ、ロウ。魯皓切。皓。やなぎこり（栲栳）。

【栫】セン。諸延切。先。香木の名。

【栫檀】〔楠〕香木の名。觀佛三昧經に「栫檀根芽、漸漸生長、纖欲レ成レ樹、香氣昌盛」

【栫】セン。蘇典切。銑。なつめ。

【栫】㊀レツ、レチ。良薛切。屑。㊁レイ、ライ。力制切。霽。

【栫】㊀びやくしん（栢）㊁ささぐり（茅栗）㊂ますがた（樹）㊃つらなるき。㊄セイ、サイ。思計切。霽。

【栫】シン。息晉切。震。㊀山の名（楠陽）㊁なさ（篋）。

【栫】ヤウ。餘章切。陽。㊁シャウ、ザウ。徐羊切。陽。㊂サウ。茲郎切。かひこのすばしら。

【栫】㊀カク、ギャク。下革切。陌。㊁コク、ゴク。胡德切。職。㊂カイ、ケイ。古哀切。灰。㊃日漑切。隊。㊄コツ、ゴツ。月。

【核】㊀このみのさね（果中核）㊁きびし（深刻）㊂くだもの㊃すぶ、かぬ（綜）㊄ただす、きはむ㊅まこと、ただし㊆木皮にて造りたる饌㊇のき（檐）㊈さね。

【核桃】〔楠〕くるみの異名。

【根】コン。古痕切。元。㊀ね、もと（木株）㊁はじめ（始）㊂れさす（根生）。もと。ねもと。陸贄「王業根本於レ是在焉」

【根本】もとをきはむ。宋无「根究嬰兒後、參同混沌初」

【根究】

【根系】もとの血統。晉書に「舜後姚虞陳田、本同二根系一」

【根治】どこまでもしらべ正す。又、もとまでなほす。宋史に「手詔提二刑司一根治」

【根底】おくそこ。ねもと。

【根柢】ねざしもとづく。ねざし。阮籍「枝葉托二根柢一、生死同二盛衰一」

【根株】ねもと。基本。唐書に「德行文學爲二根株一」

【根幹】ねもと。（本幹）。詩經、疏に「以二適子一比二根幹一、庶子比二支孽一」

【根源】おほもと。詩經、疏に「有レ理二微細一、窮二根源一者」

【根葉】ねとはと。もととすると。江淹「華實各名、根葉異レ辭」

【根毀】そしる。唐書に「太平安樂公主、各立レ黨相根毀」

【根種】おほもと。元包經に「其不變之一、爲二天地之一柔一剛一、物之根種也」

【根帶】ねもと。陶潛「人生無二根蔕一、飄如二陌上塵一」

【根據】よる。よりどころ。漢書に「自二昭帝時一、光寵親連レ體、根二據于朝廷一、光秉二持萬機一、及二上卽レ位、乃歸レ政」

【根證】道理のもととなる證據と。唐書に「通二貫文史一、善二議論一、根證該審」

【根蘖】木のねとひこばえと。事のもと。鄭解「一剗二其根蘖一、而都二絕之一」

【栺】㊀ケイ、カイ。研計切。霽。㊁シ。旨夷切。支。

【栻】㊀木の名㊁はしら（柱）。㊂チョク、チキ。蓄力切。職。㊃ショク、シキ。設職切。職。吉凶を占ふに用ゐる楓子棗の心木にて作りたる具。㊄カク、キャク。古柏切。陌。㊅古落切。藥。㊆タク、リャク。歷各切。藥。㊇いたる（至）㊈きた

〔木部〕 栻桑栫栬栩桾栫栩栫栩栫栩栫栩

ろ（來）三とほる（感通）四かはる（變革）五きはむ（窮究）六のり（法）七ただす（正）八のぼろ（登）九さからふ十ころす（殺）十一あぐ（舉）十二たな（庋架）十三あたる（敵）十四とらふ（捕）十五めあて（標準）十六さだめ（格例）十七はかる（度）十八うつ十九しな（階段）二十鳥の聲 ㊀一きのえだ（樹枝）二やむ（廢）三はばむ（阻）四すまふ（角戲）五くひ（杙）六やらひ（離落）。

【格子】 細く四角なる木を縱横に組みたるもの。かうし。

【格五】 五目ならべ。漢書、吾丘壽王傳に「以レ善ニ格五一召待レ詔」

【格心】 ただしきこころ。禮記に「教レ之以レ德、齊レ之以レ禮、則民有ニ格心一」

【格令】 のり。きそく。唐書に「詔合ニ格令一可乎」

【格外】 なみほづれ。南史に「格外之官、便今日爲レ重」

【格式】 のり。きそく。舊唐書に「麟德二年、刪ニ緝格式一」

【格言】 道にかなひて行の戒となることば。（金言）。魏志に「此周孔之格言、二經之明義」

【格虎】 とらなてうちにす。（暴虎）。唐書、豬亮傳に「高祖獵親格レ虎」

【格的】 めあて。まと。（貫的）。淮南子に「夫射儀度不レ得、則格的不レ中」

【格格】 鳥の聲の形容。荊楚歲時記に「有レ鳥如レ烏、先レ雞而鳴、架架格格」

【格殺】 うちころす。後漢書に「叱レ奴下レ車、因格ニ殺之一」

【格訓】 ただしきをしへ。梁武帝「用ニ天之道一、分ニ地之利一、蓋先聖之格訓也」

【格詔】 みことのりを遵行せず。漢書に「格ニ朗詔一」

【格範】 てほん。參同契に「司レ天者、立レ表測レ影、以爲ニ格範一」

【格戰】 うち合ひたたかふ。華陽國志に「衣ニ總服一格戰」

【格擊】 うちあふ。漢書に「良等格擊、或死或傷」

【格獸】 けものを手うちにす。魏志に「膂力過レ人、手格ニ猛獸一」

【格鬬】 うち合ひたたかふ。北齊書に「親兵格鬬、終莫ニ肯從一」

【格物致知】 事物の理をきはめて、我知を致しきはむ。大學に「欲レ誠ニ其意一者、先致ニ其知一、致レ知在レ格レ物」

【格ニ君心之非一】 君主の非を正す。孟子に「惟大人爲ヨ能格ニ君心之非一」

【栽】

㊀サイ、ザイ。祖才切。灰。

㊀一うう（植）㊁わかめ、ひこばえ（稈芽）㊂くひ（長杙）㊃ついぢいた（桀板）。

【栽培】 うゑつちかふ。中庸に「栽者培レ之、傾者覆レ之」

【栽植】 草木を植う。元稹「太子知ニ栽植一、神王守ニ要衝一」

【桀】

ラン。欄の俗字。

【栿】

フク、ボク。房六切。屋。うつばり（梁）。

【桀】

ケツ、ケチ。巨列切。屑。

㊀あらし、わるもの（凶暴）㊁になふ（擔）㊂ひいづ（秀）㊃ねぐら。

【桀石】 石をになふ。左傳に「齊高國、桀ニ石以投レ人」

【桀步】 〔動〕かにの異名。備要に「蟹名ニ桀步一」

【桀紂】 夏の桀王と殷の紂王と。共に名高き暴君なり。

【桀桀】 おごる貌。詩經に「無田甫田、維莠桀桀」傳に「桀桀猛驁驁一也」

【桀惡】 わるづよし。（獷惡）。晉書に「并州之胡、本實匈奴桀惡之寇也」

【桀豎】 すぐれ立つ。水經、注に「山峯之上、立石數百丈、亭亭桀豎、競レ勢爭レ高」

【桀黠】 わるがしこし。史記に「桀黠奴人之所レ患也」

【桀驁】 わるづよし。唐書に「魏青龍中部酋比能、稍桀驁」

【桀之狗吠レ堯】 その仕ふる所の主に忠を盡すをいふ。（跖之狗吠レ堯）。鄒陽「桀之犬可レ使レ吠レ堯、而蹠之客可レ使レ刺レ由」

【桁】

㊀カウ、キャウ。何庚切。庚。㊁カウ、ガウ。胡郎切。陽。㊂合浪切。漾。

㊀一けた（屋横木）㊁一かせ（械）㊂一うきはし（航に同じ、浮橋）㊃ころもかけ（衣架）。

【桁上】 ころもかけのうへ。古樂府に「還ニ視桁上一無ニ懸衣一」

【桁楊】 刑械を加へらるる者。莊子に「桁楊者相推也、刑戮者相望也」

【桂】

ケイ、ケ。古惠切。霽。かつら。

【桂月】 つきの異名。王起「蘋風已歇、桂月初臨」

【桂竹】 〔植〕桂陽縣に產する竹。竹譜に「有ニ桂竹一甚毒、傷レ人必死」

【桂花】 もくせいの花。王建「冷露無レ聲濕ニ桂花一」

【桂秋】 秋の稱。もくせいの咲く時なるが故にいふ。李郢「石室煙含古桂秋」

【桂芝】 〔植〕靈芝の異名。

【桂戚】 皇后のみうち。蔡邕「有ニ椒房桂戚之託一」

【桂魄】 つきの異名。王維「桂魄初生秋露微」

【桂蠹】 臣の不忠にして祿を食むに喩ふ。楚辭に「桂蠹不レ知レ所ニ淹留一兮」

【桂玉之艱】 他國にて、桂よりも貴き薪と玉よりも貴き食とにて生活するなやみ。戰國策に「蘇秦曰、楚國之食貴ニ於玉一、薪貴ニ於桂一、今臣食レ玉炊レ桂、中略今臣食レ玉炊レ桂、中略不ニ亦難一乎」

【桂林一枝】 才子なかまの第一人。晉書、郗詵傳に「詵對策上レ第、武帝曰、卿自以爲ニ如何一、詵對曰、臣舉ニ賢良一、對策爲ニ天下第一一、猶ニ桂林之一枝、崑山之片玉一」

【桃】

㊀タウ、ドウ。徒刀切。豪。㊁テウ、デウ。直紹切。篠。

㊀一ももの木とあしの穗と。不辨なをはらふに用ゐる。韓愈「巫祝不レ先、桃茢不レ用」

【桃康】 神の名。黃庭內景經、注に「桃康、下神名」

【桃梟】 ももの實の冬にいたりてなほ枝にあるもの。本草に「桃實已乾著ニ木上一、經レ冬不レ落者名ニ桃梟一」

【桃符】 神符をいふ。桃の木にて作るが故なり。山海經に「海中有ニ鬱壘山一、山有ニ桃木一、桃下有ニ二神一、能啖ニ百鬼一、故今元日設ニ桃符於門一」

【桃雀】 〔動〕みそさざいの異名。易林に「桃雀竊レ脂、巢ニ于小枝一」

【桃蕚】 ももの實のつけたるもの。禮記、疏に「王肅云、桃茢梅蕚」

【桃源】 世間を離れたる別天地をいふ。仙境。桃花源記に「晉太元中、武陵人、捕レ魚爲レ業、緣レ溪行、忽逢ニ桃花林一、林盡水源得ニ一山一、有ニ小口一、從レ口入、行數十步、豁然開朗、其間男女、怡然自樂、見ニ漁人一、乃大驚、自云、先世避ニ秦亂一、來ニ此絕境一、問今是何世、乃不レ知レ有レ漢、無レ論ニ魏晉一、聞皆歎惋、停數日辭去、及ニ郡下一、詣ニ太守一、說、太守卽遣ニ人隨往一、逢迷不ニ復得レ路」

【桃葉】 ももの木のゆみ。災をはらふに用ゐる。左傳に「唯是桃弧棘矢、以共禦ニ王事一」

【桃弧】 れだい。眠牀。

【桃牀】 〔動〕ねずみ。

【桃鼠】 ももの木とあしの穗と。不辨なをはらふに用ゐる。韓愈「巫祝不レ先、桃茢不レ用」

【桃仁】 ももの實。王維「桃仁同レ板」

【桃夭】 嫁期にあたるをいふ。詩經に「桃之夭夭、灼灼其華、之子于歸、宜ニ其室家一」

【桃氏】 かたなかぢ。刀匠。周禮に「段氏爲ニ鎛器一、桃氏爲レ刃」

【桃李】 ㊀ももとすももと。詩經に「何彼穠矣、華如ニ桃李一」㊁薦舉せる賢士。又、門弟子の義にもいふ。事文類聚に「唐狄仁傑、薦ニ姚崇・桓彥範・敬暉數人一、率爲ニ知臣一、或謂ニ仁傑一曰、天下桃李、盡在ニ公門一、仁傑曰、薦レ賢爲レ國、非レ爲ニ私也一」

【桃膠】 前に同じ。廣雅に「虎鳭生二地中一、初時如二桃膠一」

【桃蟲】 〔動〕みそさざいの異名。爾雅に「桃蟲、鷦」

【桃花水】 桃の花の咲く頃、河冰融解して流るる水。杜甫「春岸桃花水、雲帆楓樹林」

【桃花酒】 桃花を漬したる酒。之を飲めば百病を除き、色を好くすといふ。

【桃花面】 うすべに色の顔。

【桃花臉】 前に同じ。

【桃花粉】 べに。雲麓漫鈔に「燕脂以二紅藍汁一、掘爲レ之、宮人塗レ之、號二桃花紛一」

【桃花馬】 〔動〕白毛にして、紅點ある馬。杜審言「桃花馬上石榴裙」

【桃林處士】 〔動〕牛の異名。史記に「武王已克レ殷、縱二馬於華山之陽一、放二牛於桃林之虛一、偃二干戈一、振二兵釋レ旅、示ニ天下不二復用一也」又、事類全書に「寧因假二宿大僚莊南山下一、月夜有レ叩レ關、稱二桃林班特處士因訪一、繼而南山班寅將軍來謁、因爲置酒、及レ明視、門外唯牛蹄虎跡而已」

【桃李不レ言下自成レ蹊】 ある人は辯舌を用ゐずして人自ら歸服するに喩ふ。史記、李將軍傳に「太史公曰、傳曰、其身正、不レ令而行、其身不レ正、雖レ令不レ從、其李將軍之謂也、余睹二李將軍一、悛悛如二鄙人一、口不レ能二道辭一、及二死之日一、天下知與レ不レ知、皆爲盡哀、彼其忠實心、誠信二於士大夫一也、諺曰、桃李不レ言、下自成レ蹊、此言雖レ小、可二以喩一大也」

【桃】 ㊀クワウ、ワウ。古曠切。漾。㊁姑黃切。陽。㊂機機の横木㊃一ふなばたに一みつ(充)㊄くろつげ(桃根)。

【桃】 ㊀キ。過委切。紙。㊁クワイ、ゲ。魚回切。灰。

【桅】 ㊀ほこ(短矛)㊁木の名㊂ほばしら。キヤウ、カウ。曲王切。陽。

【框】 ひつぎのかどかまち(棺門)。アン。烏旰切。翰。

【案】 ㊀つくゑ(几屬)㊁わん、こばち(食器)㊂さかひ(界)㊃ついで(次第)㊄かんがふ(考)㊅なづ(撫)㊆よる(據)㊇おさふ(按)㊈おもむく(頓)㊉おさふ(按)㊊しらべがき、したがき。つくゑ。丘爲「扣レ闕無二僮僕一、案凡」かんがへくらぶ。後漢書に「窺レ室惟案比」かんがへくらぶ。傳燈錄「毎レ至二歲時一、縣當二案比一」㊀文章を作らんとして考慮す。又、作りてある文章を考ふ。梁書に「案レ文讀レ之、無レ有二滯礙一」㊁したがきの文書。てからの有無を考へただす。

【案凡】 しらべ。

【案文】 しらべ。

【案比】 くじのかでう。訴訟事件。

【案件】 平かならぬ貌。司馬相如「其南則有二平原廣澤一、登降陁靡、案衍壇曼」

【案衍】 工夫しはかる。後漢書に「案畫以求二諸律一、無レ不二知レ數而應一者上」

【案畫】 吟味ししらぶ。

【案察】 つみをしらぶ。

【案罪】 なで又おさふ。漢書に「嗚呼孝哉、案二撫戎國一」

【案撫】 なでさする。もみれうぢ。素問に「經絡不レ通、病生二于不仁一、治レ之以二案摩一」

【案摩】 しらぶ。隋書、房陵王勇傳に「以二山東民多二流冗一、遣レ使案檢」

【案檢】 こせきをしらぶ。後漢書に「追二惟動烈一、按圖案レ籍」

【案籍】 しらぶ。漢書、丙吉傳に「終無レ所二案驗一」

【案驗】 かかし。鳥おどし。傳燈錄に「僧問、孤迥迥、峭山巍巍時、如何、師曰、孤迥峭巍巍、僧曰、不レ會、師曰、面前案山子、也不レ會」

【案山子】 アン。烏旰切。翰。わん。

【桉】 ㊀ケン。古倦切。霰。㊁驅甸切。先。

【桊】 ㊀はなぎ㊁小ばち、わん。

【梶】 ㊀イ。延知切。支。㊁さねぶとなつめ㊂めぐば。

【桎】 ㊀シツ、シチ。質日切。質。㊁チ。展几切。紙。㊀一あしかせ(足械)㊁ふさぐ(塞)、さす(刺)㊂くさび(楔)㊃さはり(礙)。

【桎梏】 足かせと手かせと。拘束の義にいふ。孟子に「桎梏死者、非二正命一也」

【桎檻】 足かせして獄にいる。抱朴子に「夷吾桎檻、而建二匡合之績一」

【桷】 キヨウ、ク。渠容切。冬。こぶやなぎ(柜柳)。

【桐】 ㊀きり㊁のがる、輕く脱する貌㊂草木の通途して生ずるにいふ。トウ、ヅ。徒東切。東。

【桑】 サウ。蘇郎切。陽。くは。貧人は桑を以て戸とす、故に桑戸といふ。戰國策に「蘇秦特窮巷掘門、桑戸棬樞之士耳」

【桑田】 くはばたけ。神仙傳に「東海三爲二桑田一」

【桑耳】 くはの木に生ずる茸。木草に「桑耳、一名桑蛾」

【桑門】 よすて人。僧侶。王安石「地僻來客少、幽興祇桑門」

【桑飛】 〔動〕みそさざいの異名。揚子方言に「桑飛謂二鷦鷯一也」

【桒】 〔植〕やまぐは。禮記に「命二野虞一、伐二桑柘一」くはの木のゆみ。禮記に「射人以二桑弧六蓬矢六一、射二天地四方一」

【桒弧】 くはの葉をつむ女。列子に「道見二採桒婦一、悅而與言」

【桒婦】 〔動〕いかるがの異名。斑鳩。詩經に「交交桒扈、有二鶯其羽一」

【桒扈】 ひがしの方。淮南子に「日至二於桒野一、是謂二晏食一」

【桒野】 くはとあづさと。故郷の義。

【桒梓】 古は墻下に桑と梓とを栽う、子孫より見れば、その父祖の栽うる所なるが故なり。詩經に「維桑與梓、必恭敬止、靡二瞻匪一父、靡二依匪一母」

【桒業】 蠶をかふわざ。晉書に「衛國有二田疇不一闢、桒業不一修者一」

【桒榆】 夕ぐれの日かげ。日暮。轉じて、老人の死期に迫れるにもいふ。後漢書に「失二之東隅一、收二之桒榆一」

【桒稼】 こがひと田つくりと。後漢書に「詔二百姓、勉二務桒稼一、以備二災害一」

【桒樞】 貧しき人のいへ。莊子に「原憲蓬戸不レ完、桒以爲レ樞、甕以爲レ牖、上漏下濕、坐而絃歌」

【桒繭】 〔動〕かひこの異名。爾雅に「蠶桒繭」疏に「食二桒葉一、作レ繭者名レ蠶、卽今蠶也」

【桒蠶】 〔動〕くはのきくひ蟲。爾雅に「蝎桒蠶」注に「卽蛣蜫」

【桒麻交】 田園に閒居して農夫に等しき交を爲すをいふ。杜甫「雖レ作二尙書郎一、不レ及村野人、蕩蕩桒麻交、公侯爲二等倫一」

【桒濮音】 淫亂の聲。昔衛君が濮水の上、桑林の閒に聞ききといふ琴の音。禮記に「鄭衛之音、亂世之音也、比二於慢一矣、桒閒濮上之音、亡國之音也」

【桒土綢繆】 患難を未發に防ぐにいふ。詩經に「迨二天之未一陰雨一、徹二彼桒土一、綢二繆牖戶一、今女下民、或敢侮レ予」

【桒田碧海】 桒田變じて碧海となる、時勢の變遷の甚だしきにいふ。劉廷芝「已見松柏摧爲レ薪、更聞桒田變成レ海」又、儲光羲「滄海成二桒田一」

【桒蓬之志】 男子四方に遠遊する志。禮記に「男子生桒弧六、蓬矢六、以射二天地四方一、天地四方者、男子之所レ有レ事也」

【菜】 サウ。桒の俗字。

【桓】 クワン、ゲワン。胡官切。寒。㊀たけし(武)㊁しゅくのしるし(郵亭の表)㊂進み難き貌㊃木の名。長さ九寸の圭。周禮に「公執二桓圭一、侯執二信圭一」

【桓表】 先祖の爲に立つる木のはしら。鳥居。